#### 「新会堂感謝記念講演会」の講演集の刊行にあたって

#### 大野キリスト教会宣教牧師 中澤啓介

大野キリスト教会は、神様から新会堂が与えられたことを感謝し、たくさんの記念行事を企画している。音楽会、バザー、朗読劇、バンド演奏会、日本キリスト教史の講演会、原発問題学習会など、実に多彩である。教会員が皆、自分のしたいことを申し出て、自由に行ってよいという、何ともユニークな企画である。「記念行事」などという古臭い言い方ではなく、「ウエルカム・フェス」と呼ぶ。面白い教会だ。

企画委員会は、その中に3回シリーズの「神学講演会」をも加えてくださった。2時間たっぷりの講演と、その後2時間の神学的ディベートというプログラムである。4月16日(水)を皮切りに、4月23日、5月7日の3回にわたる講演会である。

信徒を対象に、教会で神学講演会や神学セミナーが開かれるというのは、ちょっと珍しいのではないかと思う。神学は神学校や学会で論じられるもの、一般にはそんなふうに考えられている。でもそれは違う。20世紀最大の神学者カール・バルトは、自分の神学をわざわざ「教会教義学」と名づけた。神学は、教会が教会のためになされるものと考えてのことである。そのような意図にもかかわらず、バルト神学は、大学の神学部や神学校で論じられただけで、教会のレベルにまで降りてくることはなかった。とても皮肉なことである。

神学は本来、神学校や学会で研究されるようなものではない。牧師や司祭たちが、教役者の資格を得るため 学ぶようなものでもない。本当は、一人一人のキリスト者が、毎日の歩みを真剣に送っている中で生まれ、育まれ てくるものである。ヨブは、「人とは何者なのでしょう。あなたがこれを尊び、これに御心を留められるとは」と叫んだ (ヨブ 7:17)。同じ叫びを詩篇の作者も発している。

人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。 人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。(詩篇 8:3、144:3)

「人とはいったい何者なのか。」 我々は、人生のいろいろな場面で、このような哲学的な問いにぶつかる。この 深遠な問いかけが神に向かうとき、それは神学となる。 神学とは、このような問いかけから始まる。 しかもそれは、 やがて、自分の生き方を根底から変えてしまうものとなる。 いってみれば、神学とは、この世界に他に類例を見ない、極めてラディカルな学問なのである。

先日(2014年1月29日)の国会で、ある野党党首が、国の集団的自衛権を巡る論議の中で、「私は神学論争をする気はない」と演説していた。数年前も、当時の日本の総理が、「私は無駄な神学論争のようなことはしたくはない」と述べていた。なぜ彼らは、「神学論争」という言葉を、神学とは無関係な話題の中で好んで使うのか。「神学」のしの字も知らないくせにと言いたいところだが、ちょっと冷静になって考えねばならない。一般の日本人にとっては、神学は「無駄な論議」の代名詞なのである。いったい何時頃から、この世界は神学を「無用の長物」と見なすようになったのか、神学に関心をもつ者は、厳しく問わなければならない。

キリスト教神学者の多くは、なぜか神学のゲットーに閉じこもっている。哲学者や科学者、文学者や評論家、政治家や企業人の方々と対話ができない。この世界に起こっている諸問題に関われないのである。学者だからといえば聞こえはよい。だが、皆、専門分野主義から抜け出せないだけなのだ。旧約学だ、新約学だ、福音書研究だ、宣教学だ、教会史だ、などと別れていて、一般社会とのレレバンシー(relevancy)をもてないのだ。牧師や司祭なども、伝統的な教義や宗教的儀式に固守するのに精いっぱいで、社会に発言することはほとんどない。たとえ発言していても、キリスト教村社会の内部に対してのみである。キリスト教会には有能な若い人々がたくさんいる。それだけに、とても残念である。

2011年3月、東日本大震災が起こった。それは、未曽有の被害をもたらした。被災地には、親しい仲間の牧師

たちがたくさんいる。少なくとも 50 人ほどの牧師には、エホバの証人問題のことでこれまでお世話になった。JPC 時代からの、40 年以上お付き合いしている友人牧師も 10 人ほどいた。教会堂が流され、仮設住宅に住むことを余儀なくされた牧師家族も数人いた。悲惨の極みである。

私自身は、地震や津波、原発事故などの直接の被害者ではなかった。だが、私の信仰と神学は、この震災によって完全に打ちのめされた。これまで奉じてきたキリスト教神学では、このような自然災害に対処する術(すべ)はない。西欧の伝統的キリスト教神学は、自然災害を(究極的には)人間の罪に起因すると考える。これでは、災害多発国日本に生きるキリスト者にとっては、到底承服できない。自分の神学に、認知的不協和が爆発してしまった。認知的不協和を抱いたまま信仰をもち続けることは、私にはできなかった。

何らかの解決策が必要だった。その道は、一つしかない。神学のパラダイムシフトを試みることである。信仰のパラダイムシフトではない。神学の、である。自然災害を包含できる神学へとパラダイムシフトしない限り、私自身は、自分のキリスト信仰を貫くことはできない。こんなせっぱつまった思いで、被災地を訪問し続けた。

「被造物管理の神学」は、そんな危機意識から生じたものである。この神学によって、自然災害の問題を解決できた、などと言うつもりはない。ただ、私の頭の中でうずいていた認知的不協和は、徐々に、本当に徐々にではあるが、解消されていった。この「被造物管理の神学」が他の人々にも役立つのか、実は今でも分からない。ただ、私はそれで納得した。そして、私を納得させてくれる神学は、今のところ他にはない。もし誰かが、他の神学を提示して私を納得させてくれるなら、今すぐにでもその神学にパラダイムシフトする。躊躇することなど、一つもない。

そんなふうに思いながら、機会あるごとに、この神学を分かち合ってきた。東北教役者会をはじめ、さまざまな教派の牧師会、超教派団体の学習会、シンポジウム、あるいはいくつかの神学校から、お招きをいただいた。どこに行っても、私の証として、この神学を語らせていただいている。

今までのところ、多くの方々から好意的に受け止められているようだ(私のところに入ってくる情報なのだから、当たり前のことではあるのだが)。でも、とにかく、ほっとしている。私の提唱する神学が認められつつあるから、というのではない。それはまだ、やっと話題に上り始めたという程度である。そうではなく、同じような問題意識をもっているキリスト者がたくさんおられるのを知ったことである。そのような方々は、自分の直面している問題に真正面から取り組んでいる。私流の言い方になってしまうが、彼らこそ、被造物管理の神学に生きている人々である。

これまで私は、宇宙に関して7つの講演をしてきた(これは、2冊の小冊子にまとめられている)。それとは別に、キリスト者の歩みについて8つの講演をしてきた(これらもまた、別の2冊の小冊子にまとめられている)。本小冊子の3つの講演を含め、これらの講演原稿はすべて、近いうちに「大野キリスト教会のホームページ」に掲載されるはずである。自由にダウンロードし、用いていただきたいと思う。個人は言うに及ばず、教会であっても、学校であっても、その他どのようなところであっても、お役にたてばこれほどうれしいことはない。踏み台でも、捨て石でも、何でも構わない。もし、何らかのレスポンスをいただければ、私にとっては大きな励ましになる。辛口の批判こそ、大歓迎である。私には、どうしてもそれが必要である。

これまで講演原稿を小冊子にまとめるにあたっては、たくさんの教会の方々の協力をいただいている。お名前を挙げて感謝を表したいのだが、皆さんそれぞれが、ただ自分の賜物を生かして主にお仕えしているだけだとおっしゃる。マタイの福音書6章3-4節の言葉を覚えて、そうしないでおく。神様が豊かな報いを用意してくださいますように・・・。その中の一人、10年来の信仰の友、小堀洋志兄が、教会の機関誌に次のような一文を寄せてくれた。私の意図をとてもよく代弁してくれている。紹介させていただきたいと思う。

#### 教育セミナー傍聴記(今なぜPS64神学なのか?)

2013 年の大野教会の教育セミナー"被造物の管理の神学講演3(A-3)"は、場所を相模大野駅ビルのボーノの会議室に移して11月30日に行われた。少し遅れて会場に着くと、すでに用意された椅子はほぼ満席。大野教会の方々の熱心さと期待感がひしひしと感じられる。

受付で、カラフルな表紙の厚い講演集を受け取る。被造物管理の神学=自然1, 2, 3編。A1古代の宇宙観、A2中世・近代の宇宙観、A3宇宙の始まりとある。

2011年、あの東日本大震災の数カ月後に行われた神学セミナーにおいて、中澤先生は大震災がもたらした 被災の悲惨な状況に加え、ある種の神学的な問=なぜ神は?との問いに答える必要があると話された。従来の キリスト教神学ではこの問いには堪えられないとして、この被造物管理の神学の重要性を説いた。

あれから、僕らはこの無謀ともいえる冒険的神学の旅にほうりこまれている。

被造物管理の神学では長すぎるということもあり、僕は勝手にこの神学をPS64と呼ばせて頂いている。(PS追記を参照ください)

#### 大震災からの問いかけ、

東日本大震災では、巨大津波が多くの壊滅的被害と犠牲者をもたらした。そして、あってはならないはずの原発事故が追い打ちをかけた。震災から2年と9カ月が経つ今となると、原発事故さえなかったら復旧、復興はもっと早く進めることが出来たであろうという思いが強くなる。想定外という言葉が何回も使われた。この年の流行語大賞であるかのように。

震災のあとキリスト教団体はいち早く海外からも救援、復旧・復興にかけつけた。勿論国内からも幅広い支援。 相模原からも、そして中澤先生個人も何回も足を運び救援物資を届け、被災された人々や、牧師先生、教会を助けて来られた。

それでも、クリスチャン故のなぜ?という問いは僕たちの間で、決して答えのない呻きとして発し続けられたように思う。しかし、ある意味、これは実に不思議なクリスチャン故の問いと言えよう。

けせん語訳聖書で有名な山浦さんは、被災地ではこのような無意味な問いを呟いている人は皆無とまで言っている。

#### 近年驚異的な発展を遂げる科学からの挑戦的な問いかけ

一方、科学とキリスト教の問題は将来の教会、伝道を考える上で避けて通ってはならない課題である。今までの神学セミナーで僕らは、リスボン大地震の時のキリスト教の災害への対応を学んだ。啓蒙主義の時代に自然災害を回避した神学は、その後の科学の目覚ましい発展に対して目を閉じ、耳をふさいできたようである。

福音派の聖書信仰もいつしか聖書に書かれていることは神のことばとしてどんな科学的な事実をも超越する真理として絶対化してきた。

21 世紀の現代に生きていながら、18 世紀、いな 15 世紀的な科学レベルの世界に住んでいるクリスチャンが多いのではないのかとPS64は鋭く問いかける。

短い(若い)地球を信じ、進化を頭から否定してきた神学、信仰をこの先いつまでも続けられるとは思えないのも事実である。一方で毎日の実生活においては、太陽は東から西へ動き、地球は平らだとして生活しているのも事実である。実生活に於いては、僕らは間違いなく天動説の世界、平らな地球を生きているのである。

自然科学と信仰との関係では、躓きや拒否的反応が一番強く起こるのは、やはり進化論に関してであろう。地動説、宇宙の始まり(創造)、宇宙の膨張、それはなんとか乗り越える。だけれど進化論はあり得ないというクリスチャンはごちごちの創造論者でなくても多いのではないだろうか?

PS64神学はこの問題をも正面から取り上げていく。

#### なぜという問い

僕たちは、なぜ神は?と問うことよりはキリストの贖いにより罪から救われ、永遠の命を授かり、ともに相続権を与えられたキリスト者としてはなにが出来るか?という問いに変えられる必要がありそうである。

そして、一人ひとりが悩み、考え抜く先に何かが見えてくるのではないか? 誰か偉い人や、教派、教団の教えをそのまま個人の信仰の中心に置くのでなくあくまで個人の責任で。

それゆえ、PS64の中澤神学にたいしても、それを鵜のみにすべきものではないことを肝に命ずる必要がある。

#### さあ、一歩を踏み出そう

PS64の第一歩である自然1~3が突然というかやっとというべきか、僕らの前に姿を現わした。中澤先生に言わせれば、遺言(のようなもの)とのこと。しかし、僕はむしろ先生からの挑戦状として受け止めよう。

トータルで64篇にもなるというPS64. これからの歩みに付き合うためには、それなりの覚悟が必要であろう。M 兄弟はこのPS64勉強会をすでにたちあげたと伝え聞いている。いずれは、インターネット上の検索で膨大なヒットがくるようなものに化けるかも知れない。多いに議論し、意見を交換していきたいものである。

僕はというと、まっしぐらに疾走する先生のあとから、のこのこ付いて行くサンチョ・パンサであり続けたいと思っているのかもしれないが。

PS(追記):PS64とは、現代のキリスト教はパラダイム・シフト(PS)が必要であるという中澤神学で、8x8=64編に分かれている膨大な神学のこと。読みかたは、PS64(ピーエスシックスティフォー)と読む。

この傍聴記は、私が考えていることを見事に見透かしている。気味が悪いほどだ。本音で神学を論じ合える友は、生涯の宝物である。私には、そう言い得る教会員がたくさんいる。だから、いつも世界一幸せな牧師だと思っている(私の知っている牧師のほとんどが、皆そう思っているようなので、ちょっと残念だが-笑-)。

さて、この小冊子は、被造物管理の神学の三冊目である。ここには、3 つの講演原稿が収録されている。

一つ目は、「世界はどのように造られたのか」という(4月16日の)講演である。これは、神が創世記1章をとおして示された「世界創造」の記録を、一句一句追いかけて解説している。ああ、創世記1章か、これまで何度も読んだ、もう読まなくても分かっている、そんなふうに感じるキリスト者は少なくないと思う。でも、そのようには言わないでいただきたい。この講演では、これまで他のどこにおいても聞くことのできなかった解釈を提供する。創世記1章は、現代に生きる我々を含む全キリスト者のために(for)書かれたものである。しかし、我々に向かって(to)書かれたものではない。古代中近東の文化圏に生きた、最初の読者たちに向かって書かれたものである。このような確信から、すべてを丁寧に解説している。あなたの信仰の歩みに、宇宙の創造者が深く関わってくださっていることを実感するはずである。

二つ目は、「宇宙創造の全貌に迫る」という(4月23日の)講演である。創世記1章の講演を基にしながら、聖書全巻から「宇宙創造」の奥義に迫っていく。特に、古代中近東の文献と比較しながら、新たなパースペクティブの下に、聖書的宇宙論を展開する。従来の研究は、聖書の出来事に類似した記録(例えば、創世神話とか、洪水伝説、バベルの塔の話)を古代中近東の文献に見出すと、すぐ両者の依存関係を問題にした。しかし、古代中近東の文献と聖書のメッセージは全く異なっている。両者の依存関係はほとんどない。だが、とても不思議なことだが、両者には共通事項がたくさんある。なぜか。両者の読者層が共通の文化的背景に生きていたからである。このような見方をすると、聖書のメッセージは、従来の読み方よりはるかに鮮明に浮かび上がってくる。

三番目は、「聖書の正しい理解を求めて」という(5月7日の)講演である。伝統的なプロテスタント神学では、聖書論は神学のプロレゴメナ(序論)として、最初に登場する。ところが、被造物管理の神学では違う。最初に宇宙の話を7回も続けた。それからやっと、聖書に入った。なぜ、このような経緯をたどったのか。この経緯そのものが、実は、被造物管理の神学の本質を表わしている。この講演では、従来のどの神学の教科書にもふれていない、聖書に関するさまざまな疑問点を明らかにする。ありきたりのものですませたくはない。私はこれまで 50 年以上、「聖書は誤りのない神のことばである」と告白し、信仰の歩みを続けてきた。これからも、その告白に生きていく。私の信仰と教理と神学のすべては、この聖書信仰にかかっている。内実の乏しい観念的聖書論では間に合わない。現代のキリスト者が本当に必要としている、どんな批判にも耐えうる聖書理解を提示したい。

この度もまた、ずいぶん長いまえがきになってしまった。それでは、創世記 1 章の解説を始めることにしよう。ご 自分の頭のタイムスイッチを 3、300 年ほど前に戻していただきたい。

えっ! 宇宙創造の話でしょ。もしそうであれば、138 億年(物理学者の間では、昨年から 137 億年ではなく、138 億年とすることに統一した)前に切り替えるのではないのか、そんなふうにおっしゃる方がおられるかもしれない。138 億年前、というのではない。確かに、3,300 年ほど前に、である。宇宙の始まりにではなく、モーセの生きた時代にである。その理由は、これからの講演を聞いていただければ、納得していただけると思う。

Are you ready? Let's go!!

#### 被造物管理の神学講演8(A-8)

2014年4月16日 大野キリスト教会献堂記念講演(1)

# A. 自然

# 8. 世界はどのように造られたのか

(創世記1章のメッセージに聴く)

### はじめに

本日は、大野キリスト教会の献堂感謝記念の神学講演会にご出席いただき、心より感謝する。私にとっては、この新会堂は、まさに夢のような神様からのプレゼントである。

私は、東京のお茶の水のOCCで20年間 JWTCのクラスを開いてきた。今後は、大野キリスト教会でこのクラスを継続する。引き続き、皆様のお祈りとご支援をお願いしたい。

挨拶はこれぐらいにして、早速本題に入りたい。これまで我々は、物理学や天文学の視点から、宇宙を見てきた。これからの3週連続の神学講演会では、視点を全く変え、聖書から「世界の創造」について考えたい。

本講演では、「宇宙の創造」と「世界の創造」を区別して論述している。こういう区別をしている人が他にいるのかどうか、私には分からない。ただ、このような区別をするなら、これからの議論がとても分かりやすくなる。「宇宙の創造」とは、138 億年の広がりをもつ広大な宇宙の創造のことを考えていただきたい。「世界の創造」とは、人間の目に映る身の回りの世界の創造のことである。前者についていえば、古代人、中世人、近代人、現代人の間には大きな違いがある。ところが、後者の方は、いつの時代の人間も、ほとんど変わらない認識をもっている。

この世界、あるいは宇宙の創造に言及している聖書個所は、たくさんある。しかし、創世記1章は、何といってもその代表的なものである。詩篇や箴言、ヨブ記やイザヤ書などにも興味深い記述は数多くある。だが、創世記1章に勝るものはない。今日は、その創世記1章に集中する。他の箇所は、来週取り扱うことにしよう。

#### 1. 七日間の創造のタイトル(創世記 1:1-2)

説教でも、講演でも、最初の滑り出しはとても重要である。聴衆は身を乗り出し、今か今かと胸をときめかしながら話し手の最初の言葉を待っている。その緊張感に応えることは、話し手にとっては冥利に尽きる。それは、書物にとっても変わらない。創世記の著者は、神のことばである聖書をどんな言葉で始めるのか、興味津々である。

初めに、神が天と地を創造した。(1節)

地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。(2節)

初めに、神が天と地を創造した。いったい、これ以上にふさわしい聖書の開巻劈頭の言葉はあるだろうか。誰もが知りたい事柄を、単刀直入、そのものずばりで切り込んでいる。

これは、古代中近東の文献と比較すると、一目瞭然である。紀元前 2,000 年期あるいは 1,000 年期のメソポタミアの文献では、まず神々の誕生から話が始まる。そして、その神々が互いに戦い、争う。その戦いが終わると、やっと創造の話になる。しかもそれは、どの神がどの領域の支配権を奪うのかという、まことに血なまぐさい話である。強い神々ほど、重要な部分を支配する。このような混沌とした世界が、メソポタミアの創世神話の背景である。エジプトにおいては、状況は少々異なる。そこでは、死や葬儀、生命の再生などに関わる話が多い。世界創造の話にしても、エジプトのアトム神の体から世界が生まれてくる、というような話になる。

このような古代の文献に比べると、創世記の崇高さはダントツである。その気高さと孤高の輝きは全く比較にならない。創世記は、神の誕生や存在については一切ふれない。当然実在するものという前提で、いきなりその神による創造が始まる。神はこの宇宙を造られた。その宇宙を見て、神がいかなる方かを悟れ。これが聖書のスタンスである。パウロは、「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められる」と述べている(ローマ 1:20)。そのとおりである。神は今も、同じことを語り続けている。

新改訳聖書は、この1節を独立した文章として訳している。新共同訳をはじめ、ほとんどの翻訳聖書も同じである。しかし実は、文法的には、「神が天と地を創造したその初めのときに、地は茫漠として・・・」と、2節の従属節として訳すこともできる。著者の意図はどちらだったのか。この種の問いに答えるのは、容易ではない。最終的には、著者に聞いてみなければ分からない。でも、そう言ってしまってはおしまいである。何とか推測し、とりあえずの答えを出さなければならない。

創世記全体には、「トレドート」という言葉が11回出てくる(このことについては、次週詳しく話す)。そのいずれもが、それに続く出来事のタイトルになっている。しかもそれは、執筆の際に利用された資料のタイトルのようだ。その言葉が最初に出てくるのは、2章4節である。ということは、2章4節以降50章までは、11の資料が集められたもの、ということになる。

ところで、1章1節から2章3節までは、明らかに一つのまとまりをもっている。すると、創世記全体は12の資料から構成されていることになる。12という数字は、イスラエルの12部族を表わし、完全を表わす。2つ目からの資料にはいずれも「トレドート」のタイトルがあるのに、最初の資料にタイトルがないのは、いかにも中途半端な感じがする。タイトルはもともと12の資料全部にあった、そう考える方が自然である。とすれば、1章1節は2節に従属する文章ではなく、最初の資料のタイトルだったことになる。従って我々も、多くの翻訳聖書同様、1章1節を独立文として理解しておこう。

聖書の解釈は、著者がその箇所において言わんとする意図を正確に読み取ることである。読者が、自分の考えを聖書本文に読み込むことではない。理論上はそのとおりである。ところが現実には、著者の意図がすぐに分かるわけではない。違う解釈が可能な場合も、いくらでもある。そのようなときは、与えられている情報の中で、著者の意図を推測する以外にない。時々、そのような作業は人間的過ぎると、不信の目を向けるキリスト者に出会う。だが、それは避けて通れない。むしろ、そこに聖書研究の面白みや楽しみを見出し、聖書信仰の醍醐味を味わっていただけたらと思う。

1 節をタイトルとした場合、2 節の位置づけが問題になる。1節に結びつけて読むのか、それとも 3 節以降に結びつけて読むのかという点である。

まず、3 節の「神は仰せられた」という言葉に注目しよう。二日目以降、著者は常に、この言葉をもって一日を始めている(6、9、14、20、24節)。すると、一日目もまたこの言葉をもって始めた、そう理解するのが自然である。さらに、4節と5節の「やみ」は、2節の「やみ」を受けている。6節と7節の「大水」も、2節の「大水」を受けている。つまり2節は、一日目と二日目の創造の原材料を提供している。そうなると、2節は3節に結びつけるより、1節に結びつけ、2節の「茫漠とした地」は1節の創造の結果生じた、と考えねばならない。そう理解しない限り、2節の「茫漠とした地」は、永遠の昔から存在していたことになる。それは、キリスト教の「無からの創造(creatio ex nihilo)」という伝統的な考えに矛盾してしまう。

このように創造が 1-2 節と 3 節以降の二回(あるいは二段階で)行われたと解釈すると、1 節は二番目の七日間の創造のタイトルにはならなくなる。これでは、トレドートと同列に見なすという先の提唱は、おかしなことになる。むろん、1 節を、最初に起こった創造を伝えると同時に、最初と二番目の七日間の創造のタイトルを兼ねている、と屁理屈を言えば、何とか弁明できたことになるだろう。だが、何ともすっきりしない。もっと、別の解釈はないのか。ある。確かにある。古代中近東の人々の考え方を導入すれば、この問題は簡単に解決する。この読み方を、聴衆の皆さんに会得していただきたい、そう思って本日の講演をしている。

まず、1節は1章2節から2章3節までの「七日間の創造」のタイトルである。すると、2節の「地」は永遠の昔から存在していたかのように見えるが、これは、古代中近東(シュメール、アッカド、ウガリット、アッシリヤ、バビロニヤ

など)の人々の創造理解を無視した時に起こる問題である。彼らの創造論においては、物質の起源が問題にされることはほとんどなかった。彼らは、自分たちの目に映る世界は既に存在するものというところから出発していた。 その起源について問うことはしなかった。むしろ、その世界に属するそれぞれのものが、どのような役割を担っているのか、どの神によって支配されているのか、そのことを問題にしていた。

創世記1章(本講演では、今後は創世記1章1節から2章3節までをこのように略して言うことにする)の著者は、このような古代中近東の思考パターンの中で生きていた。その最初の読者たち(あるいは、聞き手たちだったかもしれないし、暗唱して礼拝した人々だったかもしれないが)もまた、同様だった。彼らは神と契約を結んだ神の民だった。唯一の神ヤハウエを信じていた。神の恵みと祝福の中に生きていた。だが、彼らは、カナンに生きる民だった。天のみ国ではなかった。古代中近東の文化圏の空気を吸っていたのだ。

我々現代のキリスト者は、創世記 1 章を、宇宙の起源の奥義が啓示されているはずだと期待して読む。人間の誰もが立ち会えなかった宇宙創造の奥義を明らかにしているのが聖書である。そういう啓示があってこそ、聖書が聖書であることの権威なのだ、そういう暗黙のコンセンサスがキリスト者の間にある。そういう考え方は、宗教の世界では当たり前のことである。私自身も、そういう中に 50 年以上身を置いてきた。だから、よく分かる。だが、それは幻想である。そこから解放されるには、創世記1章に真正面から対峙することである。もしそうするなら、これまで決して聞こえてこなかった神のすばらしいメッセージが、天からのシンフォニーとして聞こえてくるはずである。(私の声は、だみ声で、聞くに堪えないとは思うが 一笑一)

古代中近東の世界に生きていた著者は、宇宙の起源などには到底思いをはせることはなかった。そういう意味では、彼もまた時代の子であった。彼は、自分の目に映るいろいろなものが、人間の生存にとってどのような役割を果たしているのか、その点に興味を持っていた。ヨハネの福音書1章3節やコロサイ人への手紙1章16-17節は、キリストが万物を「無から創造」されたことを教えている。だが彼は、そのような啓示を受けてはいなかった。「無からの創造」などという神学議論には、全く無縁だった。

テレビのクイズ番組に出たつもりで考えてほしい。我々が住む「地球」と「空」と「太陽」と「月」と「星」とはいつ頃造られたのか。6,000年前、46億年前、138億年前。以上三択から答えよ。さて、皆さんの答えはどのようになるだろうか。そして、その理由はどうしてなのか、考えてほしい。

ついでにもう一つ質問させてほしい。今から 3,000 年以上もの昔、古代中近東に住んでいた人々は、もし上記のような質問をされたら、どのような答えを出しただろうか。

たぶん皆さんは、そんな無茶な、分かるはずないでしょ、と答えるだろう。何か、文献でも調べればヒントぐらいは見つかるかもしれないが、・・・。大体、彼らがそんな疑問をもつことはなかっただろう。そんな変な質問はいい加減にしてほしい、そういう応答になるのではないかと思う。

今日は、2014年2月8日(土)である。ここ関東にも、昨夜から雪が深々と降り続けている。45年ぶりの大雪だという。私は朝からずっと祈っている。明日は日曜日だ、教会の礼拝に出席したい、皆さんとお会いしたい、自然を支配している神様、どうぞ雪がすみやかにやみますように、と。勝手な祈りだと思う。でも、本音の祈りである。朝から一度も、雪の降るメカニズムがどのようなものか、などとは考えなかった。天気予報は気にしたが、それ以外のことはあまり考えなかった。

古代中近東の人々もまた、同じだったことだろう。天候は、彼らの生活にとって死活問題だった。彼らは、今年も太陽が適度に照らし続けてくれて、雨が適度に降ってくれるようにと、祈ったはずである。豊かな収穫が得られ、放牧している家畜たちがよく育ってくれることを祈っていた。彼らの宗教は、たくさんの神々が誕生したと説いていた。この神々は、この世界のどの領域を支配するのかをめぐって争った。その結果、一番強い神が他の神々を従え、それぞれにいろいろな分野を担当させた。彼らにとって、天候を支配する神が誰なのかは重要なことだった。天候のことはその神に祈らなければならない。間違うことは、神々の怒りを買うことになるのだ。彼らにとって、どの神に、何を、どのように祈るのか、それこそ最重要事だった。

我々は学校で科学的な教育を学んでいる。ところが、科学的な問題意識は、古代中近東の人々にとっては無縁なことだった。創世記 1 章の著者も読者も変わらない。我々が問題にしているようなことは意識の中に浮かんで

くることさえなかった。彼らがそのような問題に踏み込むことはなかったし、その能力もなかった。神の御霊は、そのような問題意識や回答を与えようと、霊感の働きを用意されたわけではなかった。彼らの文章の中に、我々の求めている答えを読みとろうとするのは、お門違いの願望に過ぎない。

創世記 1 章が明らかにする六日間の創造作業は、この世界の一つ一つを、人間との関わりにおいて説明するという意図のもとで書かれた。それは、コンピュータを前に仕事をしている人が、そのコンピュータを新しく使いたい友人に、コンピュータの説明をしているようなものである。バッテリー、キーボード、画面、演算装置、ソフトウエア、電話機能、サーバーの情報管理などの一つ一つの役割を、丁寧に説明することだろう。しかし、その素材の一つ一つとか、工場で組み立てられていく順番を説明する人はいない。コンピュータを使う人には、そういうことは必要ないからだ。誰が説明するにしても、このコンピュータを使う人の身になり、その人が必要とすることを説明するはずだ。神がこの世界を説明するときも、同じような思いで啓示されたに違いない、私自身はそう思っている。

話がわき道にそれてしまった。しかしこの問題は、キリスト者が創世記 1 章を読むとき、初めに解決しておかねばならない問題である。これまでキリスト教界は、カトリックあるいはプロテスタントを問わず、あまりに長い間、このような根本的な問題を未整理のまま、創世記 1 章を読み続けてしまった。その結果、神が意図されたメッセージをこの世界に伝えず、宗教と科学の無駄な対立をまき散らすという愚かなことをしてしまったのである。

では、これまでのところをまとめておこう。

- 1節は、創世記1章、七日間の世界創造のタイトルである。
- 2節は、七日間の創造の素材になるものを提示している。
- 3節以下2章3節までは、七日間の創造の記録である。

では、1節の本文をたどっていくことにしよう。

初めに(ブレシート)は、通常「一年の始まり」(申命 11:12)とか「王の治世の始まり」(エレミヤ 26:1)など、時間の始まりを指す。ここでは、2 節以下の、世界が創造される以前の「その瞬間」を指している。哲学的に言えば、時間は物質の変化や繰り返しがあるとき初めて生じる。その瞬間までは、この世界には何もなかったのだから、時間そのものもなかった。そういう考察は、我々にとって大切である。だが、著者にそのような哲学的な思考を求め、あたかも著者がそのようなことを言おうと意図していたかのように言うのは、行き過ぎである。この世界が始まった時、それはすべての物事の始まりである、その程度の直感的理解は、古代の人々であっても、中世の人々でも、現代人でも分かる。初めにというのは、そういうニュアンスの「初め」である。

**神(エロヒーム)**は、単数形の「神(エル)」に複数を表わす「イーム」を付加した言葉である。つまり、神は複数形で表現されている。ところが、続く動詞の「創造した」は単数形である。このように神をエロヒームと複数形で、動詞を単数形で表わすことは、旧約聖書全巻をつうじて見られる現象である。聖書は唯一の神を説いている。従って、動詞の単数形の方は正しい。では、なぜ神を複数形で表わしたのか。そういう習慣だったと言ってしまえばそれまでである。この問題については、26 節でもう少し深く突っ込んでみよう。今は、唯一の神が複数形で表現されていることには、何かの奥義が隠されているのかもしれない、その程度のことを心に留めていただければと思う。

この**エロヒーム**と呼ばれる神は、別の呼び名をもっている。「ヤハウエ(主)」である。この神名が祈りの中で使われるようになったのは、エノシュ時代までさかのぼる(創世 4:26)。文献としても、最初のトレドート(創世 2:4-4:26)に既に現れている。そこでは、「神である主(ヤハウエ・エロヒーム)」が20回、「主(ヤハウエ)」が10回、「神(エロヒーム)」が3回出てくる。つまり、神の二つの名前は、人類の初めの頃から使われていた。現代の聖書批評学は、神名によって資料分析をしていく。このような学問的研究方法は、文献学的にはかなり有効な部分もある。しかし、違った名前を一人の神に併存して使うことは、古代中近東の文献においてはごく普通のことである。資料分析は、テキストの一つ一つを慎重に扱い、総合的な判断をしなければならない。

この「ヤハウエ」は、「ある(ハヤー)」という動詞のヒーフィル形(実現するの意味―出エジプト 6:2-5)が語源である。神の民イスラエルは、「ヤハウエ」を契約を実現してくださる神というニュアンスで、固有名詞のように使っていた。それに対し**エロヒーム**という神名は、「万物の創造者あるいは支配者」というニュアンスで、超越的・絶対的な神を表わすときに用いた。

神が天と地を創造したの天(シャマイーム)とは、地から見た「空」とか「天」を指す。地(アレッツ)とは、人間が住

むこの地上のことである。この「天と地」という表現は、聖書中に 51 回出てくる(5 回は順序が逆で、「地と天」となっている)。その内の 18 回は、「神が造られた」というニュアンスの「世界(宇宙)」である。他には、法廷証人、神をほめたたえる主語、神が活動される場、諸法則をもっているものとしての「世界(宇宙)」などがある。なお、この 1 節の天と地は、2節の「地は茫漠としている状態」から、3節以降の「六日間で人間の生存し得る状態にまで整えられていく世界全体」を指す。

ヘブル語には、二つの極端な言葉を合わせて全体を表す「メリスムス」という表現法がある。例えば、2 章 17 節の「善悪の知識」や3章5節の「善悪を知る」の原語は、「善と悪の知識」が直訳で、「善から始まって悪に至るまでのすべての知識」を意味する。従って、ある学者は、この創世記1章1節を「初めに神は、すべてのものを創造した」と訳している。**天と地**を「すべてのもの」と訳すのは、古代中近東の人々の生活感覚からいうと、とても自然なものだった。

**創造した(バーラー)**は、この創世記 1 章の記録では、他に 5 回出てくる。21 節において鳥と魚の創造(1 回)、27 節において「神のかたち」に造られた人間の創造(3 回)、2 章 3 節においては、全体をまとめての創造(1 回)に対してである。この語は、植物と動物に対しては使われていない。神が地に、植物(11-12 節)や動物(24-25 節)を生み出すように命じたことと関係があるのかもしれない。

この「バーラー」は旧約聖書に 48 回出てくるが、その主語は、常に神である。この動詞の目的語は世界(宇宙)が 10 回、一般的な民が 10 回、特別なグループの民が 6 回、特定の個人が 5 回、被造物が 2 回、暗闇などさまざまな現象が 10 回、宇宙の地図の組み合わせなどが 3 回、きよい心が 1 回などである。必ずしも物質とは限らず、あいまいなものもある。この言葉自体には、「無からの創造」というニュアンスはない。既に存在するものを材料にして新しいものを創造する、というのが普通である。この 1 章 1 節においても、七日間のわざをまとめた、タイトルとしての創造である。

ヘブル語の**ブレシート(初めに)**と**バーラー(創造する)**は、最初の3 文字が同じで、連続して出てくる。これは「言葉遊び」である。創世記1章21-22節、27-28節、2章3節、5章1-2節などには、「バーラー(創造する)」と「バラフ(祝福する)」の二語が並置されている。両語の最初の2 文字は同一で、ここにも「言葉遊び」が見られる。古代中近東の人々は、現代人よりはるかに詩的表現、言葉遊び、さまざまな文学的技法に大きな関心をもっていた。彼らのユーモアのセンスや感性の豊かさを味わう余裕が出てくると、聖書を読む楽しみは倍増する。

では続いて、2節に進もう。

創世記1章2節は、3節以降の世界創造の背景説明である。創世記の著者は、このような手法を繰り返し用いている。例えば、3章では、最初の1節において「蛇の狡猾さ」を説明し、その後蛇が人間を誘惑する出来事を展開する。4章でも、最初の1節において「カインの誕生」を説明し、その後カインの生涯に起こった出来事を詳述する。そのような見方を拡大すれば、この1章の創造記録は、2章以降の人類の歩みの背景説明となっている。同様に、創世記は、出エジプト以降のイスラエル民族史の背景説明になっている。

**地は茫漠として何もなかった**の地は、1 節の「地」を受けているかのように見える。その場合は、「天」に対応する「地」となり、自分たちが住んでいる地球を指していることになる。しかし、1 節の「地」と 2 節の地は、言葉は同じだが、意味している内容は異なる。1 節の「地」は、「天と地」というメリスモス表現における「地」である。ところが、この 2 節の地は、3 節以降の創造の原材料となるものを指している。その原材料はやがて、大空、地球、太陽、月、星などに割り当てられていくことになる。

**茫漠(トーフー)**は、聖書に 20 回出てくる。その内 11 回は、イザヤ書である。**トーフー**は「目的がない」とか、「漠然としている」という状態を指す。砂漠の砂嵐に会い、前に進めないような状態に近い(申命 32:10、ヨブ 6:18 では「荒地」と訳している)。**茫漠**というのは、なかなかの名訳である。

何もなかった(ボーフー)は「準備ができていない」状態を指す。この直後に大水が出てくるので、何もないという訳語はちょっと戸惑う。ボーフーはいつでもトーフーとペアを組み、他ではイザヤ34章11節(虚空と虚無)とエレミヤ4章23節に出てくる。この両語は、リズミカルに韻を踏んでおり、言葉遊びが見られる。1節冒頭の「ブレッシート(初めに)」と「バーラー(創造した)」の二語も、リズミカルな韻を踏んだ言葉遊びだった。著者は、この種の文学的技法を多用し、創造の記述を楽しんでいる。

新共同訳は、この二つの言葉をまとめ、「混沌」と訳している。二語を一つの言葉で訳すのは構わない。ただ、

「混沌」と訳すのは、何らか問題が生じて混乱しているかのような印象を受け、いただけない。この二つの言葉は、 六日間の創造以前の**地**が、人間生存のための準備ができていない状態を述べている。預言者イザヤは、この**茫 漢(トーフー)**という言葉を、見事に使いこなして地球の創造に言及している。

天を創造した方、すなわち神、地を形造り、これを仕上げた方、すなわちこれを堅く立てた方、これを茫漠としたものに創造せず、人の住みかにこれを形造った方、まことに、この主がこう仰せられる。「わたしが主である。ほかにはいない。」(イザヤ 45:18)

イザヤはここで、「茫漠としたもの」と「人の住みか」を対比している。これは明らかに、創世記1章2節の「地が茫漠としている状態」と六日間で人間が住む世界に整えられていく状態とに言及している。両者があまりに類似しているので、第二イザヤは創世記1章を前に置いて記したと推測する学者がいるほどである。

**やみが大水の上にあり**の**やみ(ホシェク)**は、旧約聖書には80回ほど出てくる。この語には、二通りの意味がある。一つは、光が神に関わりがあるのと同じように、「やみ」は悪、罪、サタンなどに関係しているというものである。 やみの道(箴言 2:13)、神の裁き(出エジプト 10:21)、神が与える苦悩(イザヤ 9:1)などがこの用例である。もう一つは、そのような道徳的、霊的な意味を含まず、単純に「明るさの無い状態」をいう。この箇所の**やみ**は、次の3節で光が創造されるので、「光のない状態」のことである。

そのやみには、大水(テホーム)が覆っている。やみと大水は、ここでは、ほとんど同義語である。テホームの直訳は「深い水」で(創世 7:11、49:25、出エジプト 15:8、詩篇 104:6 など参照)、旧約聖書には 36 回出てくる。通常は、「混沌とした世界」や「深淵」を意味する。ここでは、これから人間の活動舞台になる世界を生み出す素材を指している。二日目には、上下に分かれた水となるので、この箇所のテホームを大水と訳したのは適切である。

世界創造の源を「水」とする考えは、ニップル出土のシュメールのテキストや、エヌマ・エリシュ(バビロニア神話の創世記叙事詩)などに見られる。また、「ティアマット」神が、マルドゥク神によって滅ぼされた死体から天と地を造っていく話がバビロニヤの文献に載っている。多くの旧約学者は、この2節の**テホーム**が「ティアマット」神と関連していると考えている。その場合は、創世記の神がバビロニヤの神々に勝っていることを教えていることになる。その可能性はないとは言えない。しかし2節は創造以前の状態が淡々と描写されたもので、混沌とした神々の世界の話までを読み込まない方がよい。

神の霊が水の上を動いていたは、六日間の創造が神の霊の働きによることを示唆している。神の(エロヒーム) という言葉は、「神の」とも、「神的な」とか「超自然的な」とも訳すことができる。霊(ルーアッハ)についても、「風」、「息」、「霊」などに訳しうる。すると、「神からの風」、「超自然的な風」、「神の息」、「神の霊」などの解釈が可能となる。最近の旧約学者たちは、古代中近東の文献(例えば、エヌマ・エリシュ 1,105-10)を根拠に、「超自然的な力」とか「激しい突風」などと訳す傾向がある。しかし、神のという表現は、1節の「神」と同じ言葉であり、創世記では常に「神」を表わしている。「超自然的」とか、「激しい」などと形容詞的に訳すより、神のとストレートに訳す方がよい。

**ルーアッハ**は、これから人間の住処を建てあげていく働きに関わっているわけである。風や嵐だと、大水を破壊していくというイメージが強くなる。従って、「息」とか「霊」と訳す方がよい。エジプトの神的な「カ」が、この箇所の「神の霊」に近いと指摘する学者もいる。2章7節には、「神がいのちの息を吹き込むと、生きものになった」と記されている。人間の創造には「いのちの息」が必要だった。詩篇104篇は「あなたが御霊を送られると、彼らは造られます。また、あなたは地の面を新しくされます」(詩篇104:30)と歌っている。これらのことから、**ルーアッハ・エロヒーム**は「神の霊」と理解するのが、適切である。

むろん、**神の霊**と訳しても、著者が三位一体の第三位格なる聖霊に言及している、という言い方には慎重であった方がよい。三位一体に関する啓示は、新約聖書まで待たねばならない。著者や最初の読者たちも、三位一体の神という認識はなかっただろう。しかし、旧約聖書の随所に、神の霊的な働きは強調されている。新約聖書の時代になると、御霊なる神は明確に啓示される。旧約聖書時代は、その準備段階だった。従って、この創世記 1章においても、御霊なる神という含みをもたせて、神は特別に啓示されたと考えてよいであろう。

私自身は、キリスト者として、宇宙創造の御業は、三位一体の第三位格なる御霊のお働きだったと信じている。 その最大の根拠は、この2節に、**神の霊**が登場してくることである。むろん、ユダヤ教や聖書批評学者の世界に おいては、そういう解釈は邪道である。しかし、聖書信仰者にとっては、そこまでいかない聖書解釈は不十分の誹 りをを招くであろう。

**水の上を動いていたの動いていた(ラハフ)**という動詞は、申命記 32 章 11 節では、「わしが雛の上を舞いかける」という訳語があてられている。この語は、旧約聖書ではこの二箇所にしか出てこない。ところが、「アクハットの叙事詩」(1360 年頃のカナンから出土した叙事詩)には、この語は 3 回連続して出てくる。そのいずれもが、鷲が高く舞い上がるというイメージを伝えている。このような使用例から、この 2 節においても、神の御霊が「地球と大空の素材になる**大水**」の上を、秩序ある世界を生み出すために活発に飛び回っていた、と理解するのがよい。この世界のすべてに今日のような秩序をもたらしたのは、神の御霊の全能の力だった。

世界の創造の準備は整った。さあ、いよいよ七日間にわたる神の創造のわざを、一日、一日追いかけていくことにしよう。その前にちょっとだけ時間を取り、我々自身も、この創造記事を読む心の準備をしよう。

創世記1章の著者は、神がこの世界を整えていく姿を明らかにしている。その頂点は、人間が「神のかたち」に造られ、神が休まれたことにあった。ところが、現代のキリスト者は、著者のこの意図を読み取れず、全く別の読み方をしている。大抵は、宇宙の創造過程が明らかにされているものと、期待して読んでいる。宇宙の成り立ちに大きな関心をもっているからである。聖書は神の啓示なのだから、長い間科学が疑問にしてきたことに答えてくれているに違いない、そんな美しき誤解に基づいて、創世記1章に近づく。そういう誤解は、なぜ生じたのか。キリスト教神学の歴史と、教会の教職者たち(つまり、聖書や神学の専門家たち)が造り出させたものである。

今から 3,300 年以上もの昔、神は、世界創造の出来事を啓示された。古代中近東の片隅に住む神の民イスラエルに、創世記1章の著者を通して。彼らの世界観は、周辺諸国のそれと大差なかった。著者は、そのような神の民に、「神とこの世界」との関係を明らかにする責任を負わされた。その責務は神信仰の根幹に関わる重要なものだったので、著者は神の御霊の導きを受けながら世界創造の記録をしたため、創世記の冒頭に置いた。

神はまず、古代中近東の文化圏に生きる神の民に(to)、神の御心を啓示された。だが、それだけにとどまらない。どの時代に生きる神の民のためにも(for)、その啓示は記述された。とすれば、時代的要素は最小限に抑えられなければならない。創世記1章の著者は、彼の生きる文化圏の真っただ中で、この創造の記録を書いた。仲間の民の誰もがよく分かるよう、注意深く書く必要があった。困難は山ほどあった。だが神は、彼ならそれができると見込んで、その使命を託した。彼はそれに答え、最新、最高の表現技法を用いて執筆した。聖霊は、彼の働きのすべてを助けてくださったのである。

古代中近東の人々は、宇宙の起源や成り立ちに関心はなかった。そういう問題を詮索すらしなかった。現代人は、対極の道を歩んでいる。現代科学は、宇宙の素材の問題に異常なほどの関心をもっている。それに対しキリスト教神学は、「無から有の創造(creatio ex nihilo)」という回答を用意した。しかしそれは、創世記1章の主要なテーマではない。神は、そのテーマに答え得る聖書箇所を別に用意された。この点に関しては、続く講演で詳しく検討する。本講演では、あくまでも創世記1章にこだわることにしよう。

我々は今、現代人として生きている。古代中近東の文化圏に戻るわけにはいかない。ではどうすれば、神のメッセージを間違えずに受け止めることができるのか。それは、難しくない。創世記 1 章に対峙するとき、現代的な意識のすべてを横に置いたらよいのである。ビッグバン理論も、進化論も、地動説も、地球が丸いという認識さえも、社会問題や人間の問題も、キリスト教界や神学の歴史さえも、すべてをちょっと横に置くのである。

ごく自然な、いつの時代の人々にも共通する、単純素朴な日常生活に戻ればよい。自然の中に身を置き、山を眺め、海を思い、木々や草花、動物の世界に思いを馳せたらよい。月を眺め、星空を楽しむ、そんな生活こそ、アブラハムやモーセ、ダビデやイザヤ、イエスやパウロと、我々との「共通世界」なのだ。古今東西を問わず、人類に共通の「生活の座」というものがある。それは、人間にとっては最も素朴な、日常生活である。人はそこに戻るとき、どのような文化圏に生きていたとしても、時代的制限の最も少ない環境を手にする。そこに自分の身を置くとき、聖書の世界に入り込む。すると、神のメッセージを聴くことができるのだ。

#### 2. 第一日(創世記 1:3-5)

では、一日目の創造のわざを追いかけよう。神のわざは、日を追うごとに詳しい記述となっていく。最初ほど簡潔明瞭な言葉で、奥深い中身が表されている、ということである。ゆっくり、一言一言味わっていただきたい。

神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。(3節)

# 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。(4 節) 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。(5 節)

著者は、神の創造のわざを七つのポイントに分けて記述する。つまり、①神が語りかけたこと、②語られた言葉の中身、③語られた被造物の誕生、④被造物に対する神の是認、⑤神の区別のわざ、⑥神が名づけたこと、⑦一日の終わりを示す定型句、である。実に手の込んだ書き方である。この七つのすべてに言及しているのは、この一日目だけである。最初に完全なパターンを例示し、その後の日々については、適当に省く。このようにして大事な点を強調し、メリハリをつけた。まことに見事な表現手法である。ぜひそのへんも楽しんでいただきたい。

神は仰せられた(ウァヨーメル)という表現は、「ヴァヴ・コンセキュティブ」という、物語を語るときのヘブル語独特の用法である。状況を説明するための「誰々が語った」という形式をとる(例えば、3 章 1 節では蛇がエバに、16 章 1-2 節ではサラがアブラハムに語っている)。著者は、創世記 1 章において、この表現を 10 回使っている。一日目(3 節)、二日目(6 節)、四日目(14 節)、五日目(20 節)でそれぞれ一回ずつ、三日目は二回(9、11 節)、六日目は四回(24、26、28、29 節)で合計 10 回となる。七日目は、神が休まれたので、神の語りかけはない。10 という数字は、ひとめぐり、あるいは十分性を表わす。創造が神の意思のすべてを実現したことを示唆する。

なお、エジプトのメンフィス神学の碑文は、神「プタ」の言葉によって創造が始められたと伝えている。むろん、 両者に依存関係はない。古代中近東の文化圏を共有している例として、知っておくとよい。

創造はすべて、神のことばによってなされた。この神の語りかけには、神の崇高な希望、希望を現実化する遠大な計画、計画を実行する強い意思、意思を100パーセント実現する力など、すべてが含まれる。神のことばによって創造が実現したことを理解できるのは、信仰による。「信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟る」(ヘブル 11:3)。創造は、信じることから切り離すと虚無の世界に陥る。神は人に信じるという特別な能力を与えられた。その信じるという力は、あらゆる分野で必要なものである。宗教の世界だけの話ではない。

神は**光があれ**、と命じた。この**光(オール)**とは何を意味しているのか。続く 4 節は「神は光とやみとを区別された」と述べている。従って、2 節の「やみ」(茫漠とした地の状況)に対比される「光」である。次の 5 節は「神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた」と述べている。「昼」と名づけられるような「光」は、太陽の光のように見える。しかし、太陽の光は四日目に登場する。従って、太陽の光ではあり得ない。

この光は、「茫漠とした地の状況」に差し込み、明るく光輝く世界をもたらした。2節の「やみ」の状態では、人は生存できない。まずは、人間が活動できる「昼と言われる状態」が必要である。そこは、適度な明るさがあり、秩序があり、暖かさ、エネルギーがなければならない。ここで造られた光は、明るい昼を造り出した。その結果、それまで存在していたやみは、夜となった。むろんこれは、地球の自転によって太陽の光がもたらす「昼と夜」とは違う。この一日目の段階では、未だ、「昼間の明るいところ」と「夜の暗いところ」が生じた、というイメージである。

従って、神が光と**やみ**を**名づけられた**とは、時間が導入されたことだ、と解する学者も多い。エジプトでは太陽神「レ」が毎朝昇ることによって時間をつくっている、と考えられていた。バビロニヤでは、神「マルドゥク」が時間の制定者と見なされていた。このような古代中近東の文化圏をイスラエルの民も共有していたとすれば、イスラエルの神こそ時間の創造者であると宣言したのかもしれない。

古代中近東の文献では、光とかやみという言葉は、霊の世界や道徳的な「善悪」を含むことが多い。しかし、この創世記 1 章の記述は、そのような雰囲気をいささかも感じさせない。むしろ、この光には、神の働き、神の輝き、神の恵み、神の栄光、神の臨在など、神が与える祝福を放散している。詩篇 104 篇の冒頭を読んでみよう。

わが神、主よ。あなたはまことに偉大な方。あなたは尊厳と威光を身にまとっておられます。 あなたは光を衣のように着、天を、幕のように広げておられます。(詩篇 104:1-2)

詩篇 104 篇は、世界の創造を歌った詩である。その成立過程における両者の依存関係は認められない。にもかかわらず、両者は驚くほど類似している。この冒頭においても、それは明らかである。2 節の「天を、幕のように広げて」とは、創世記1章でいえば、二日目の「天、あるいは空の創造」にあたる。すると、その前の「あなたは光を衣のように着」という句は、一日目の「光」と関係がありそうである。両者に依存関係がなかったとすれば、この類似性は、古代中近東世界における共通の思考方法がもたらしたもの、と考えねばならない。

創世記1章3節の光は、詩篇104篇2節の「神が衣のように着ている光」に対応している。これは、とても重要である。神的な光であって、物理的な光ではない、という点である。詩篇104篇においても、太陽と月の登場は19節まで待たねばならない。物理的な光ではなく、神的な光について述べている個所は、旧新約聖書を問わず、数多くある。例えば、預言者イザヤは、次のように述べている。

国々はあなたの光のうちに歩み、王たちはあなたの輝きに照らされて歩む。(イザヤ 60:3) 太陽がもうあなたの昼の光とはならず、月の輝きもあなたを照らさず、主があなたの永遠の光となり、あなたの神があなたの光栄となる。あなたの太陽はもう沈まず、あなたの月はかげることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。(イザヤ 60:19-20)

同じような光についての言及は、新約聖書にも見られる。神は「近づくこともできない光の中に住まわれ」る方(Iテモテ 6:15-16)、「光を造られた父」(ヤコブ 1:17)、「あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方」(Iペテロ 2:9)、「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない」(Iヨハネ 1:5)、「神が光の中におられる」(Iヨハネ 1:7)。「やみが消え去り、まことの光がすでに輝いている」(Iヨハネ 2:8)。そして黙示録は、新しい天と新しい地では「もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない」(22:5)と述べている。イザヤが述べていることと、全く同じである。

むろん、創世記1章3節の**光**は、前節の「やみ」に対比される。すると、物理的な光という側面を含んでいる。それは、太陽などと関係する光ではなく、神の衣のような存在としての「光」である。それは、人間が生存し、活動するのに不可欠な、バックボーンとなる光である。その光無くして、人間は存在し得ない。ただし、そのような光について、これ以上述べることはできない。神は昔、「光の住む所に至る道はどこか。やみのあるその場所はどこか。あなたはわたしをその国まで連れて行くというのか。また、その家に至る通り道を見分けるというのか」(ヨブ記38:19-20)と、ヨブに語られた。我々もまた、この神の語りかけを聞く以外にない。

神が、**光があれ**と語られると、そのことばどおり、**光があった**。創造された物が繰り返えされるのはここだけである。他の五日間においても、神の命令どおり、ことは運んだ。しかしいずれの日も、「するとそのようになった」と簡潔に記されるのみである(7、9、11、15、24、30 節)。最初だけは詳しく描写し、その後は定型句で済ませるというのは、著者の巧みな表現技法である。しかしそれだけだろうか。ここで、**光があった**と少々違う言い回しをしたのは、この**光**が単なる物理的なものではなく、神的な特別の光だったことを暗示しているのではないだろうか。

著者は、神は光を見て良しとされたと、神が被造物を是認されたことを伝える。神は一日一日、その日の創造物を確認している。ところで、光を見てと、「見て」という言葉を加えたのは、この一日目だけである。続く日々も、神は見てから「よしとされた」ことは間違いない。見ないで是認することなど、あり得ない。にもかかわらず、最初の日だけは「見て」と加えた。一日目だけの特別丁寧な記述、これもまた、著者独特の表現技法である。と同時に、特殊な神の光であったことと関係しているのではないだろうか。

**よしとされた**は、神が是認されたということである。**よし(トーブ)**とは、「良い」とか「美しい」とか「立派である」ことを表わす、最もポピュラーな言葉である。神は、命じたものが意図どおりにできあがっているかを確認し、満足感を表明された。この言葉も、1 章全体で7回出てくる(他に10、12、18、21、25、31 節)。この7という数は、神の是認が完全であったことを暗示する。こうして、人間の生存のために必要な環境は、一つ一つチェックされながら整えられていった。

神は光とやみとを区別されたとは、光の創造により、2節の「やみ」、状態に別世界が生じたことを述べている。多くの学者が、光を昼間、やみを夜と結びつけ、この言葉を一日のサイクルが生じた、と解釈する。一日目の光とやみを、四日目の太陽と月の役割に合体させるなら、そういうことになる。事実神は、四日目にはそのことをなさっている(14、16節)。しかし、この段階は、未だ一日目である。著者は、そこまで述べてはいない。やがて18節において再び、「神は光とやみを区別された」と同じ言葉が繰り返される。その時以降であれば、そのように理解するのは当然である。だが、ここではもう少し別の考え方をした方がよい。

**区別する(ヤブデイル)**という言葉は、この創造記事全体において、重要な役目を果たしている。6 節では「水と水」が、7 節では「大空の下にある水と大空の上にある水」が、14 節では「昼と夜」が、18 節では「光とやみ」が区別されている。一般に、創造とは新しい物質を生じさせる働きだと思われている。しかし、創造とは、それだけではな

い。既に存在するものに新しい機能を加え、新しいものに仕上げることも、立派な創造である。この創世記 1 章の創造は、基本的には、この意味における創造である。しかもその機能は、人間の生存に必要なものである。

神は、光とやみを区別した後、**光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた**。人間にとっては、区別することと名づけることとは、ほとんど同じである。区別せずして、名づけることはできないし、名づけることなくしては、区別したことにならない。ところが、旧約聖書や古代中近東の文献では、この両者は異なる。「区別する」は、「創造する」とほとんど同義だった。しかし、「名づける」とは、名づけた者が名づけられたものを支配する権限をもつことを意味した(創世2:20、Ⅱ列王23:34、24:17など参照)。従って、**光を昼と名づけ**とは、神が昼を支配下に置いた、ということだった。**やみを夜と名づけられた**とは、同じように神が夜を支配下に置いた、ということである。

古代中近東の世界では、一般に「やみ」とか「夜」は神に反逆する存在と見なされていた。しかし、この一日目のやみは異なる。光の創造の結果生じたものであり、神に反逆するものではない。神がやみを夜と名づけ、神の支配下にあると宣言したことは、古代中近東に生きた神の民にとっては、とても重要なメッセージを含んでいた。神は、同じことを、預言者イザヤをとおして語られた。

「わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。 わたしは主、これらすべてを造る者」(イザヤ 45:7)

本節には、「名づける」という動詞が2回出てくる。この語はさらに、8節に1回、10節に2回、通算5回出てくる。加えて、22節と28節には、「祝福する」という言葉が1度ずつ出てくる。この両方を合わせると、7回出てくることになる。実は、「名づける」と「祝福する」とは、両方とも「支配下に置く」という基本的概念でくくられる。それゆえ創世記1章の著者は、二つで7になるように記述した。これも、著者特有の表現技法である。さらに、本節には、「名づける=光、やみ=名づける」という逆順法(キアスムス)が見られる。著者はさまざまの表現技法を用い、偉大な創造の奥義を神の民に解き明かしていく。

**夕があり、朝があった**、これは、「一日の区切り」を表わす定型句である。**夕**とか**朝**という一日の区切りは、普通太陽がないと起こらない。その太陽の出現は、四日目である。従って、「夕があり、朝があった」という表現は、文字どおりの意味に取らない方がよい。創世記 1 章の著者は、神の創造の御業を安息日神学に基づいて記した。すべての神の創造の働きを、六日間に振り分け、一日一日の区切りを「夕があり、朝があった」という言葉で表した。これもまた、著者特有の巧みな表現技法である。

第一日は、一日目の神の創造のわざが終わったことを告げている。同じ表現は、8 節(第二日)、13 節(第三日)、19 節(第四日)、23 節(第五日)、31 節(第六日)に出てくる。七日目については、「夕があり、朝があった」、および「第七日」という定型的な句は出てこない。これは、神の働きは六日間のわざだけで終わったのではなく、現在もなお、続いていることを示唆するのかもしれない。さらに、「一日目」だけが序数で記され、六日目と七日目には定冠詞がついている。これらの日が特別重要な日だったからである。

ここで、「安息日神学」について、簡単に説明しておこう。

神の民イスラエルは、前1,300年前後に、モーセを先頭に出エジプトの経験をした。神はその際、民が守るべき十の戒めをお与えになった(出エジプト 20:1-17)。その四戒は、「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。――あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も――」(8-10 節)というものであった。この戒めの根拠は、神が六日間でこの世界を創造されたことにあった。

それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。(出エジプト20:11)

出エジプトを経験した神の民は、この「安息日神学」に基づく創造の記録を読んだ(あるいは聞いた)。彼らは、メソポタミアやエジプトの神々ではなく、聖書の神こそ、この世界を創造された神であると知った。そして、その神が契約を結び、ご自分の民として招いてくださったと、信じたのである。その時以降神の民は、いつの時代であっても、同じ信仰に立ち、神の恵みを経験してきたのである。

#### 3. 第二日(創世記 1:6-8)

さて、いよいよ二日目の創造のわざが始まる。もう 20 年近く前のことになるが、ある学校で創世記の講義をしていた。クラスも終わりに近づいたとき、一人の生徒が、「一日目の夕方から二日目の朝方にかけての 8 時間ほど、神は何をしていたのか」と尋ねられたことがある。創世記 1 章の「一日」を文字通りに解釈してはいけないと講義した直後のことだったので、面食らった。どのような質問をしてもよいけれど、質問する前に、人の話はよく聞かなければならない。大抵の質問は、もし人の話をきちんと聞いているなら、しないで済むものである。というわけで、二日目の神の創造の話を、じっくり聞くことにしよう。

神は仰せられた。「大空が水の真っただ中にあれ。水と水との間に区別があれ。」神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水とを区別された。(6 節)

そのようになった。神は大空を天と名づけられた。(7節)

夕があり、朝があった。第二日。(8節)

**神は仰せられた**、著者は、一日目同様、神の語りかけをもって、二日目の創造を始めたことを伝える。神は、人間の舞台設定という創造のわざを、神のことばによって着々と進めていく。神のことばは、神の計画、意思、力を表わしている。

二日目に語られた神のことばには、二つのことが含まれていた。その一つは、**大空が水の真っただ中にあれ**である。**大空(ラキーア)**は、「広がり」、「空間」、「天空」、「円天井」、「ドーム」、「天蓋」などの訳が可能である。著者は、大きな空間がどんどん広がっていき、地上から見た空ができ上っていくようすを描いている。**ラキーア**の動詞「ラカ」は、もともとは、金細工人が金の板を「打ち延ば」したり(出エジプト 39:3)、金を「かぶせる」(イザヤ 40:19)作業を指した。それが自然界に対する神のわざにも使われるようになった。天に対しては「張り延ばす」(ヨブ 37:18)、地に対しては「敷く」(詩篇 136:6)、「押し広げる」(イザヤ 42:5、44:24)などの訳語があてられている。ここではむろん、天に広がる**大空**に適用されている。**水の真っただ中**とは、2節の「大水」を指している。その大水の中に、**大空**が侵入してきた、そんなイメージである。

神が語られたもう一つのことは、**水と水との間に区別があれ**だった。これは、その前の**大空が水の真っただ中にあれ**という神の命令の結果生じた現象である。神が別の創造を行ったわけではない。この二つの文章は、ヘブル詩の平行法に基づいて記されている。創世記1章は、詩文体ではなく散文体で書かれている。それはそのとおりなのだが、ことはそう簡単ではない。ここでも、詩的な用語(大空もその一つ)や文学手法(平行法)が登場する。現代の文学は、ジャンルごとに文体を変える。ところが、口伝伝承の世界では、散文体と詩文体の区別は、それほどはっきりしていない。それゆえある学者は、創世記1章を「詩的散文体」と呼んでいる。

**水と水との間**とは、前文の「水の真っただ中」同様、2 節の「大水」のことである。**区別があれ**とは、「大空」が入ってきた結果、生じる現象を指している。この言葉については、既に 4 節で解説した。エジプトにも、空気の神「シュ」が、際限のない海(ヌン)を上下に分けた、という記録がある。むろん、両者に依存関係はない。このような考え方は、共通の文化圏においては、ごくありふれた話だった。

一日目は、神が「光があれ」と命じると、すぐ「光があった」と、記されている。ところが、この二日目は、神の言葉が実現したと記される前に、神が語られた言葉が著者の言葉で言い直されている。つまり、**大空が水の真っただ中にあれ。水と水との間に区別があれ**という神の命令が、神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水とを区別されたと解説し直される。これも、ヘブル詩の平行法が応用された表現技法である。このような繰り返しによって、二日目の創造は、一日目の創造より詳細に展開されていくようすを読者に印象づける。著者は、日にちが進むにつれ、言葉数を増やしていく。五日目には少々減らすが、六日目には一気に大幅に増やす。このように表現技法を巧みに駆使し、創造の壮大さを描写する。

神は大空を造りの造り(アーサー)は、1 節の「創造した(バーラー)」とは違う。旧約聖書では、「アーサー」はいろいろなものにまんべんなく 400 回ほど使われている。「バーラー」の方は 48 回で、主語は常に神である。両語の意味に違いはほとんどない。強いて言えば、「バーラー」の方が、特別重要な存在とか、新しい形態、あるいは特別感動を覚える場合などに使われる。本節では、大空は新しい空間ではあるが、新しい物質が創造されたわけではない。つまり素材の水そのものが変化したわけでなく、水が後ろに退いた、というイメージである。

大空の下の水と、大空の上の水とを区別されたの大空の下の水は、次の三日目の創造から明かなように、地球とその周囲を構成する物質を指す。それでは、分けられたもう一方の大空の上の水の方はどのようになったのか。詩篇104篇は、創造賛歌と言われる詩篇である。この詩篇が、創世記1章に深い関わりがあることは既に述べた。1-2節の「光」は、創世記1章の一日目の「光」と対応していた。続く3節では、「水の中にご自分の高殿の梁を置き、雲をご自分の車とし」と歌われている。そこで言及されている「水」とか「雲」は大空の上の水に関連している。つまり、二日目に大空の上に登って行った水は、雲になって雨として降ってくる水の詩的表現である。

古代中近東の人々にとって、雨は自分たちの生存に関わる、最も重要なものだった。従って、雨に関する記述は特別多い。カナンの神話には、バアルの宮殿の窓が開かれ、雲を通して雨が降ってくるという記述がある。その天にある海と雨を司どっているのは、バアル神とされていた。エジプトは「ナイルの賜物」と呼ばれていた。そのナイル川に水があふれるのは、空の雲が雨を降らすからである。その雨を降らす実権をもっているのはどの神なのか、エジプトに住む人々にとっては、それが大きな問題だった。バビロニヤの世界では、マルドゥク神が、地上に洪水をもたらさないよう番兵に命じている。(エノマ・エリシュ 4.139-40)

イスラエルの民にとっても、生活環境は変わらなかった。雨が降らないことによって作物は実らず、飢饉に襲われる。それは、族長時代であっても、王国時代や預言者の時代であっても、いつの時代であっても、変わらなかった。雲を通して雨が降ってくることは、彼らにとっても常識だった(創世 9:14、士師 5:4、I 列王 18:45、イザヤ 5:6、ヨブ 26:8、詩篇 77:17、エレミヤ 10:13、51:16、など参照)。

神は、雨のためにその降り方を決め、いなびかりのために道を決められた。(ヨブ記 28:26) だれが知恵をもって雨雲を数えることができるか。だれが天のかめを傾けることができるか。(ヨブ記 38:37) 主は地の果てから、雲を上らせ、雨のためにいなずまを造り、その倉から風を出される。(詩篇 135:7)

著者は、神の語りかけを説明した後、**そのようになった**と記述する。三日目も、神のことばどおり、ことは実現した。一日目では、「光があった」と、造られたものに言及されている。ところが、二日目以降は常に、**そのようになった**と述べるにとどめられている。このような単純明快なフレーズを繰り返すことによって、読者の関心を、被造物より神のことばそのものに集中させている。これも、著者特有の表現技法である。預言者イザヤは、神のことばの確かさを次のように証言している。

わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。(イザヤ 55:11)

**神は大空を天と名づけられた**。ここでは、上下に分けられた水については言及しない。ただ、**大空**についてのみ語っている。水に関しては、三日目に先送りされる。**天(シャマイーム)**は、言葉としては1節に出てくる「天」と同じである。しかし、本節の天は、人間から見た「天」であり、1節の「天と地」の「天」とは異なる。同じ言葉であっても、文脈によって内容は微妙に違う。その違いを察知することは、古代文書を読むときに不可欠である。

現代人は、物事を正確に把握するため、言葉を限りなく増やしていく。そうすることによって、学問は大きく発展できた。そういう学問を受けた我々は、古代人に戻ることはできない。同様に、古代人を現代人であるかのように期待してはいけない。古代人の語彙の乏しさは、生活体験の貧しさを意味しない。乏しい語彙ではあっても、古代の人々は我々以上の豊かな感性をもち、多くの生活体験をしていた。そのような状況を深く察知し、著者の言わんとするところを読み取っていくことが肝要である。

**名づけられた**とは、名づけたものを支配下に置いた、という意味である。**大空を天と名づけられた**とは、神が大空を支配していると言われたに等しい。ここで名づけられた**天**は、我々がごく日常的に見ている「空」を指している。1 節の「天と地」の天とは違う。古代中近東の人々は、空の上の方には「水の層」があり、人間が生きていくために必要な雨は、そこから降ってくると考えていた。雨の量は、彼らにとっては死活問題だった。多すぎても、少なすぎてもいけない。神が大空を名づけられたとは、大空を支配下に置いたということであり、雨の量を決める方である、ということだった。

二日目の創造の書き方は、他の日とは違っている。「よしとされた」という、神の是認の言葉がない。それは、二日目の創造はよくなかった、ということではない。神が**天と名づけられた**以上、それはあり得ない。それに、六日目の最後に、神はすべてをご覧になって「よしとされ」ている。従って、二日目が不完全だったはずはない。二日目の創造は完結したのではなく、三日目に引き継がれたということである。二日目には、**大空**が造られた。三日目に

は陸地が造られる(10 節)。この二日間の創造がそろったとき初めて、神はチェックされた。三日目は、「よしとされた」が二度記されている。二日目の「よしとされた」は、三日目の二つの是認の中に含まれていた。

なお神は、六日目にも、創造が終わった時と、その後総点検された時の二回、「よしとされ」ている。著者は、イレギュラーな書き方を織り交ぜながら、全部で七つになるように工夫している。これも、創造の完全性をより深く印象づけるための、著者の優れた文学的センスである。まさに脱帽、というところである。

**夕があり、朝があった。第二日。**かくして二日目も終わる。日本語では分からないが、一日目と六日目と七日目の日にちには定冠詞がついている。二日目から五日目には、定冠詞がない。これもまた、日にちにメリハリをつけた、著者特有の表現技法である。

# 4. 第三日(創世記 1:9-13)

創造もいよいよ三日目、道半ばに差し掛かっている。この三日目は、一日目および二日目と違い、一つではなく二つの物が創造された。

神は仰せられた。「天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現われよ。」そのようになった。(9 節) 神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを見て良しとされた。(10 節)

神は仰せられた。「地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、種類にしたがって、地の上に芽ばえさせよ。」そのようになった。(11 節)

地は植物、すなわち種を生じる草を、種類にしたがって、またその中に種がある実を結ぶ木を、種類にしたがって生じさせた。神はそれを見て良しとされた。 $(12\ \mathrm{m})$ 

夕があり、朝があった。第三日。(13節)

まず、創世記1章の著者が、この創造記録を書いているスタンスを、再度確認することから始めよう。この視点をはっきり自覚して講演をお聞きいただかないと、「労多くして収穫ゼロ」ということになりかねないからである。

神はイスラエルの民に、神と被造物の関係を知り、神の民としての使命を全うしてもらいたいと願われた。そこで神は、一人の人物を立て、創造の出来事を啓示された。立てられたその人は、自分が観察している世界を、古代中近東の世界に生きる者としての限界をもちながら、神の創造の出来事として記述した。彼は、神が六日間ですべてを造られ、七日目に休まれたという啓示(出エジプト20:11、31:17、レビ19:22、26:2)に基づき、創造の記録をまとめた。同時代に生きる神の民イスラエルが信仰に立ち、与えられた使命を全うすることができるようにとひたすら願い、あらん限りの表現技法を用いて。

この三日目もまた、神は仰せられたという言葉で始まる。

神は、天の下の水が一所に集まれと命じる。二日目の創造において、水は既に大空によって上下に分けられていた。この三日目は、大空の下の水が一か所に集められる。神は既に大空を天と名づけられていた。それゆえ、こでは「大空の下の水」ではなく、天の下の水と変えられている。この水から、陸と海、つまり人の住む世界が造られた。神が水に一所に集まれと命じると、かわいた所が現われた。この表現は、かわいた所は創造されたのではなく、水が引いて水底の土地が現われた、と述べているように見える。しかし、2 節では水は茫漠とした存在であり、6-7 節ではその水は大空によって分けられただけである。すると、科学的な思考に慣れた人は、その水はいつ土に変えられたのかと疑問を抱く。しかし著者は、そのような生成過程には関心を示していない。ただ、陸や海が誕生した、と淡々と伝える。詩篇 104 篇の詩人は、この点について、少々異なった書き方をしている。

また地をその基の上に据えられました。地はそれゆえ、とこしえにゆるぎません。 あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上にとどまっていました。 水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の声で急ぎ去りました。(詩篇 104:5-7)

ここで詩人は、「地をその基の上に据えられました」(5 節)と、地の基が据えられたことを述べる。そして次に、「深い水を衣のようにして、地をおおわれました」(6 節)と、その地の基を水が覆ったことを説明する。そして最後に7 節で、「水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の声で急ぎ去りました」と、水が引いたことを加える。この7 節の記述こそ、創世記1章9節の天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現われよという命令に通じる。詩篇24 篇もまた、同じことを明らかにしている。

地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。 まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた。(詩篇 24:1-2)

地球上の陸地がどのように形成されたのか、創世記1章の著者は、この問題については何も述べていない。著者は、地球上には陸地と海とがあることをよく知っており、そのことを三日目の創造として描写するだけだった。

一つ目の陸と海の創造については、神の命令どおり**そのようになった**。神の意思は必ず実現する、著者はこのことを繰り返し伝える。創造のわざを信じるとは、結局神のことばの権威を受け入れることに他ならない。

神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。ここでの地と海は対立概念である。今日でいえば陸と海のことである。海は複数形で表現されている。この複数形は、二日目に分けられた「上の水」と「下の水」のことではない。古代中近東の世界では、多くの海が存在したと考えられていた。この箇所は、そのことを反映したものと思われる。あるいは著者は、海が陸地によって幾つかに分けられたと考えていたのかもしれない。その場合、地が単数形なのは、自分たちが住む場所を中心に考えた結果であろう。

**地と名づけ、・・・海と名づけられた**という表現は、神が地と海の両方を支配下に置いた、と宣言したことを意味する。 荒れる海の恐怖を絶えず経験していた古代の人々にとって、両者の境界線問題は深刻だった。 預言者エレミヤは、この点に関し、次のように述べている。

あなたがたは、わたしを恐れないのか。――主の御告げ――それとも、わたしの前でおののかないのか。わたしは砂を、海の境とした。越えられない永遠の境界として。波が逆巻いても勝てず、鳴りとどろいても越えられない。(エレミヤ 5:22)

海から陸地を分けるという作業は、遂に完成した。神はそれを見て良しとされた。しかし、ここはまだ、三日目の 創造の途中である。この段階で神の是認の言葉が入っているのは、古代中近東の人々にとって、海は大きな災 いをもたらすものだったからであろう。神の民イスラエルは、神ご自身が海の支配者であることを繰り返し歌ってい る(詩篇 65:7、89:9、93:3-4、107:25、29)。

三日目の創造は、陸地と海の形成で終わらなかった。さらにもう一つの創造のわざが行われた。それは、陸地から植物が育つようにという、創造である。そのために、再び**神は仰せられた**。これは、三日目では二番目、初めから数えると四番目の神の語りかけである。

今回の語りかけは、かなり長い。それは、**地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、種類にしたがって、地の上に芽ばえさせよ**というものだった。ここでは、神が地をとおして草木を生じさせることを述べている。地が草木を生じさせることについては、古代中近東の文献にも出てくる。エリドゥ伝承のテキストは、新しい水の神「エンキ」がすべての水を集め、植物を生じさせていくことを伝えている。

29 節を見ていただきたい。そこでは、神が「見よ。わたしは、全地の上にあって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる」と語っている。つまり、本節の**種を生じる草(アシャブ)と種がある実を結ぶ果樹(エイツ)**は、人間の食物として与えられたことが分かる。29 節の人間の食物には、本節の**植物(ダシャー)**が出てこない。その理由は、**ダシャー**が**アシャブとエイツ**の総称だったからである。この二つには、**種がある**。古代中近東の人々は、「種」の中にその植物の生命が宿っていることをよく理解していた。従って、この箇所においても、**種のある草や種のある樹木**は、**種類にしたがって(ミーン)**成長する、と記述されている。

この種類にしたがっては、植物であれ、動物であれ(21、24-25 節参照)、生命は神の秩序のもとに継承されていくことを明らかにしている。この言葉を基に、進化論への反駁を試みる人たちがいる。進化を肯定するにしても、否定するにしても、このような日常言語から議論するのは、やめた方がよい。著者は単に、ブドウの木からはブドウの実がなり、オリーブの木にはオリーブが実る、ただ、そういうことを言っているだけである。古代中近東に生きた人々が食物として知っていた草や実を結ぶ果樹は、ごくわずかな種類に過ぎなかった。

神が命じられたことは、そのようになった。この言葉を読むと、読者は、三日目の創造記述は終わった、そう勘違いすると思う。ところが著者は、ここで終わらせてはいない。神が命じられた言葉を、ほぼそのまま繰り返し、記述を続ける。

地は植物、すなわち種を生じる草を、種類にしたがって、またその中に種がある実を結ぶ木を、種類にしたがって生じさせた。先の神が語られた言葉との違いは、一つだけである。「種類にしたがって」という句が一つだけだったのが、ここでは二つに増えたことである。著者はなぜ、種類にしたがってという言葉を繰り返したのか。食物となる草や木は、神の定めた法則に基づいて生命が継承されていくという事実を強調したかったからである。それはまた、これらの植物が、人間の食物として極めて重要だったことを示唆している。

この著者の追加文をもって、三日目の創造は終わった。**神はそれを見て良しとされた。**この神の是認の言葉は、既に見たように、二日目にはなかった。従って、この言葉は三日目に二度繰り返され、二日目の分までカバーした。著者の卓越した表現技法の見事さは、誰もが舌を巻くほどである。

#### 夕があり、朝があった。第三日。これは定型的な言い回し。

創世記の著者は、神の啓示に基づき、聖霊の助けをいただきながら、神の創造のわざを記録している。これまでに、六日間の創造の内、前半の三日間を終えた。神はこれまで、光を備え、大空を造って天候を整え、海と陸とを分けて食物が供給できる環境を整えた。

古代中近東の文献、特に、パピルスの Insinger は、水、地、種の重要性を説いている。エジプトに住む民にとっては、ナイル川の恩恵に浴した肥沃な土地を耕し、そこに種を蒔いて収穫することが、生きることそのものだった。雨、土地、食物のサイクルがあって初めて、彼らは生きることができた。これら三つは、いつの時代であっても、人間存在には不可欠なものである。古代中近東の人々にとっては、この三つを安定的に享受できることが神の祝福を受けることだった。

神の民イスラエルにおいても、状況はさほど変わらない。神は、洪水による裁きの後、ノアに次のように約束された。「地の続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜とは、やむことはない」、と。この創世記8章22節には、洪水後の世界が、食物(種蒔きと刈り入れ)、天候(寒さと暑さ、夏と冬)、時間(昼と夜)の順番で再び整えられたことが述べられている。この順番は、1章の創造記事の「昼と夜(一日目)、天候(二日目)、食物(三日目)」という順番とは逆になっている。ここにも逆順法の文学技法が見られる。

#### 5. 第四日(創世記 1:14-19)

いよいよ四日目である。四日目の創造は、太陽、月、それに星などの天体である。既に、一日目には昼と夜、二日目には大空、そして三日目には地球が造られた。人間の生存に必要な、活動の場(時)、雨などの天候、食料などは整えられた。今度は目を天に向ける。この地球から、昼間や夜を司っている天体へと。

神は仰せられた。「光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ。(14 節)

また天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」そのようになった。(15 節)

神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物に は夜をつかさどらせた。また星を造られた。(16 節)

神はそれらを天の大空に置き、地上を照らさせ、(17節)

また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神はそれを見て良しとされた。(18 節) 夕があり、朝があった。第四日。(19 節)

この創造の記録では、六日目の創造に一番多くのページが割かれている。創造のゴールが人間にあったからである。その次に多くの言葉が費やされているのは、四日目である。自然の中で、遊牧や農耕に生きていた古代中近東の人々にとっては、天体が人間生活に及ぼす影響は絶対的なものだった。それは、人工物に囲まれて生活している現代人にとっては、想像しがたいものである。

エジプトでも、太陽や月は神として拝まれ、星も人間の歩みを支配するものと考えられていた。エジプトの神「アムン-レ」への賛歌には、太陽神が時を刻んでいることを述べている。また、、シュメールの天文学の文書は、主要な神々であるアン、エンリル、エンキが太陽、月、星をそれぞれの場所に置いたと述べている。バビロニヤの太陽神シャマシュへの賛歌には、季節やカレンダーを決めるのに重要な役割を果たしていることが歌われている。

出エジプトを経験し、カナンの地を目指した神の民イスラエルは、同じような宗教的・文化的環境を背負いなが

ら生きていた。それゆえ著者は、太陽は地上に光を届けて収穫をもたらすこと、月や星は夜の休みを備える存在に過ぎないことを説き明かした。神は、人間にとって不可欠なものすべてを備えられた。本当に恐れ、礼拝すべき方は、メソポタミアやエジプトの神々ではない。万物を支配下に置いている「世界の造り主、唯一の神」である。

この四日目の創造の記録は、繰り返しが多く、すっきりしない。そう感じる学者の多くは、その背後に資料があったと推測する。だが、それは見当違いの解決法である。逆順法という文学手法を考慮すれば、資料を想定していじくり回すより、ずっとすっきりする。もし逆順法に基づいて書き直すと、以下のようになる。

- A 光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ
  - B しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ
    - C 天の大空で光る物となり、地上を照らせ
      - D 大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ
      - D'小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた
    - C'星を造られ・・・天の大空に置き、地上を照らさせ
  - B' また昼と夜とをつかさどり
- A' 光とやみとを区別するようにされた

この逆順法という文学手法は、古代中近東の文献ではよく知られていた。聖書においても、創世記にとどまらず、他の旧約各書、新約聖書の福音書などに数多くみられる。このような考え方の流れは、特別な文学手法というより、人が潜在的にもっている能力の一つだと見なす人もいる。つまり、物事を表現しようとすると、無意識のうちに出てくるものなのかもしれない。しかし、かなり頻繁に出てくるし、ときに複雑な構造をたどることができるので、意図的な手法と見なす方がよい。聖書批評学は、重複する表現に出くわすと、すぐ資料の違いを想定する。しかし、資料分析に走るより、文学手法の解明に向かう方が、はるかに有効な場合が多い。

四日目の創造もまた、**神は仰せられた**という言葉で始まる。この神の語りかけは、初めから数えると五番目になる。著者がこの言葉を繰り返し記述するのは、この世界が隅々に至るまで、神の主導的な意思によって統括されていることを強調するためである。

四日目の神の命令は、**光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ**だった。**光る物**とは、16 節から太陽と月と星を指す。四日目に太陽や月、そして星が造られたとは、到底考えられない。このような天体が造られる前に、地球が誕生していたこともあり得ない。太陽と地球の自転なくして、昼と夜が生じることもない。第一、太陽無しで、どのようにして最初の三日間が分かるのか。現代人であれば、誰でもそんな疑問をもつ。ただ、我々にとってこんな当たり前のことも、よく分かるようになったのは、たかだか数百年前のことである。

3,000 年以上もの昔、古代中近東地方に住む人々は、現代人がもつこのような疑問を抱くことは全くなかった。 彼らは、太陽や月、星などがいつ、どのように造られたのかということなど、興味をもっていなかった。彼らの関心 は、自然界を支配している神々を怒らせてはいけない。自分の身に不幸を招かないよう、天体の異常な動きに神 経を使うことだった。

創世記 1 章は、そのような人々に向かって書かれたものである。だから著者は、天体や天体を支配している神々を恐れるな、人間のために完全な配慮をもって天体を創造した唯一の神に服せ、と説いたのである。太陽などの天体が四日目に創造された、と言いたかったのではない。そういう問題意識そのものが、著者にも、最初の読者にもなかったのである。

では、著者は、どんな思いでこの記録を書いているのか。たぶん、身の回りで大事だと思ったことから書き始めたに違いない。目ざめと共に始まる昼間の活動、日が沈んで味わう一夜の憩い、そんな時の流れをまず書こう(以上が一日目)。続いて、雨や日照りの太陽の恵みに(二日目)。それから、食卓に並べられた食物への感謝にふれる(三日目)。これが誰でも大事にしている素朴な日常生活であろう。その一つ一つは、神の御意思によって人間のために備えられた。まずこの三つのものをもたらす「背後にあるもの(光、大空、陸地)の創造」を描こう。続く四日目には、目を天に向け、人間に必要なものを天で供給する源(太陽、月、星)の創造を記すことにしよう。

私は、こんな想像をしてみた。あまりいい説明ではないかもしれない。たぶんあなたなら、もっとすばらしい考えを思い浮かべてくださるだろう。とにかく、著者の心の中にあった思いを推し量ってもらいたいのだ。神は著者が抱いたすべてのことをとおして、神の御心を啓示されたからである。

著者は、光**る物が天の大空にあって**と述べるが、「太陽(シャメシュ)」とか、「月(ヤルアッハ)」いう言葉を持ち出

さない。古代中近東の文化圏に生きた読者たちに、天体と太陽神「シャマッシュ」や月神「ヤリ」とを結びつけさせないためである。天体は神々ではない。ただ、地球に光を届けるだけの存在に過ぎない。それゆえ著者は、このような天体に向かって、**地上を照らせ**という神の命令を二度繰り返す。太陽は、人間が仕えるものではない。太陽が人間に仕えるのだ。著者は、このメッセージを伝えるため、この創造を記録しているのである。

これらの天体は、**しるしのため、季節のため、日のため、年のため**に存在した。新改訳では、しるし、季節、日、年の四つを並列的に訳している。むろん、このような理解も可能である。しかし、①季節と②日と年、この二つが「しるし」を形容していると解釈する方が、自然である。天体は、「季節のしるし」のためにあり、さらに「日と年のしるし」のためにある、と読むのである。

天体が「季節のしるし」のためにあるとはどういうことか。日本人は、季節といえばすぐ四季を想像する。しかし、農業を営み、牧畜に生きた古代中近東の人々にとっては、**季節**とは、種まきや収穫の季節を指していた。一日目は人が活動する昼間が、二日目は雨などをもたらす大空が、三日目には食物になる草や木の実が備えられた。そしてこの四日目になると、天体が種まきや収穫の季節を備えた、と言いたかったのである。この**季節**という言葉は、レビ記では「例祭」と訳されている(23:2、4、37、44)。季節とは、季節ごとに祝われる祭りと深く結びついていた。人々は、祭りを祝い合って、季節の喜びを共有していたのである。

天体は「季節のしるし」だけでなく、「日と年のしるし」でもあった。**日のため**とは、天体が一日、一日と時を刻んでいることを述べている。人々は、洋の東西を問わず、昔も今も一日を最小単位に生活している。朝起きて仕事に出かけ、夕方戻って休息を取る。その一日の間に、家族や近隣社会、職場で、さまざまの喜怒哀楽を経験する。**年のため**とは、天体が一年という時を刻んでいくことを指している。一年は人間の生涯を刻んでいく単位で、年齢は世界共通のものである。その一年の間には、季節ごとに何回かの祭りが祝われる。その祭りは、共同体の中で生きている喜びを分かち合う時だった。古代中近東の世界では、天体は時に、人間の日常生活を左右する恐るべきものであり、不吉な予感を生み出させるものだった。しかし聖書は、天体は人の日常生活に必要な恵みをもたらすものと説いている。

主は季節のために月を造られました。太陽はその沈む所を知っています。

あなたがやみを定められると、夜になります。夜には、あらゆる森の獣が動きます。

若い獅子はおのれのえじきのためにほえたけり、神におのれの食物を求めます。

日が上ると、彼らは退いて、自分のねぐらに横になります。

人はおのれの仕事に出て行き、夕暮れまでその働きにつきます。 (詩篇 104:19-23)

では、16 節に進もう。神は二つの大きな光る物を造られた。この箇所の二つの大きな光る物とは、太陽と月のことである。造られた(アーサー)は、これらの天体が四日目に新たに造られたというより、三日目に造られた地球との関係を整備した、という意味である。これから造る動物や人間が地球に生存可能となるために、天体が最も適した状態に整えられた、ということである。

大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。著者はここで、太陽のことを述べるのに、太陽という言葉を使わなかった。むしろ、大きいほうの光る物と、とても変わった言い方をしている。著者は、光る物(14 節)、天の大空で光る物(15 節)、大きい方の光る物(16 節)と、表現を変えながら、3 度も「光る物」という言葉を繰り返す。だが、「太陽」とは一言も言わない。月についても同じである。光る物(14 節)、天の大空で光る物(15 節)、そして、小さい方の光る物(16 節)と表現しながら、「月」とは一言も言わない。

これは、古代中近東の宗教的背景と関係がある。エジプトでは、太陽は神「レ」と呼ばれ、神々の中でも最高位を占めていた。メソポタミアでは、月は神「シン」と呼ばれ、主神の神の一人だった。それぞれの国家では、神々の名前を言い表さないだけでも、不敬罪によって処罰された。このような環境やメンタリティーをよく知っていた著者は、この天体の創造を記述するにあたり、意図的に神の名前を書かなかった。エジプトを脱出してカナンを目ざしている神の民に、太陽神や月神の本質をよく分からせる必要があったのである。

太陽は、常に変わらず光と暖かさを届けてくれる。それは、昼間を支配している光である。 夜支配するのは月である。 月は星に比べ、圧倒的に大きく見える。 従って、 夜を支配するものと言われている。 このことは、 創世記 1 章 の著者は、 目に見えるままを描写していることが分かる。

**昼をつかさどらせ・・・夜をつかさどらせた**。太陽や月は、それぞれ分担すべき領域をもっている。それは、場所的なものというより、時間的なものだった。むろん、太陽が昼で、月が夜である。**つかさどる(レメムシェレト)**の原

義は、「支配する」である。ここでは、太陽が、昼間地球を照らし、多くの恵みを注いでいることを述べている。聖書によれば、本当の支配者は神である。神が太陽に、人に祝福を注ぐ大きな役割を与えた。月もまた、人々に静かな安らぎの夜を備えた。そのような状況を、「つかさどる」と表現したのである。これは、古代中近東の宗教とは全く違う天体理解だった。

また星を造られたという表現は、最後に何となく付け足したような書き方である。我々は、星は恒星で、太陽と本質的には変わらないことを知っている。しかし、古代中近東の人々の考えは違っていた。メソポタミア地方の宗教では、無数に輝く星の一つ一つは神々の増殖したもので、人間の生活を左右するもの、と見なされていた。例えば、バビロニヤのエヌマ・エリシュの叙事詩は、星を最初に、続いて月、そして最後に太陽を置いている。彼らにとって、星は太陽や月以上に重要な存在で、人々の生活や運命を支配する不気味な存在だった。従って占星術は、紀元前4,000年頃から盛んになっていた。

こういう宗教的事情によく通じていた著者は、太陽と月の後、そっと**神は星を造られた**と付け加えた。つまり、先の文献とは逆に、太陽を最初、月を二番目、そして最後に星を述べた。しかも、これらの天体すべてを統括しているのは、唯一の神であると宣言したのである。古代中近東の人々にとっては、これほど痛烈なメッセージはなかった。神の直接的・絶対的な支配について、ヨブは友人のビルダテに次のように述べている。

神が地をその基から震わすと、その柱は揺れ動く。

神が太陽に命じると、それは上らない。星もまた封じ込められる。

神はただひとりで天を張り延ばし、海の大波を踏まれる。

神は牡牛座、オリオン座、すばる座、それに、南の天の室を造られた。

神は大いなることを行なって測り知れず、その奇しいみわざは数えきれない。(ヨブ記 9:6-10)

そのヨブに向かい、神は、その終わりにおいて、次のように語りかける。

あなたはすばる座の鎖を結びつけることができるか。オリオン座の綱を解くことができるか。

あなたは十二宮をその時々にしたがって引き出すことができるか。

牡牛座をその子の星とともに導くことができるか。

あなたは天の法令を知っているか。地にその法則を立てることができるか。(ヨブ記 38:31-33)

#### 神はそれを見て良しとされた。神は四日目に造られた天体をご覧になり、神の是認を告知した。

ところで、この言葉の後の書き方は、他の日の書き方と違っている。これまでの一日目から三日目までは、神は「名づける」という作業をしている(5、8、10 節)。五日目と六日目には、祝福の言葉が続く(22、28 節)。それに比べ、この四日目だけは、何も続かない。いきなり、**夕があり、朝があった。第四日**と、一日の締めくくりの言葉が続く。なぜか。

このような書き方に特別意味はない、そう考える学者もいる。しかし、他の日では何らかの言葉が続くにもかかわらず、この四日目だけは何もない。私には、引っかかる。古代中近東の人々は、太陽、月、星を、神性を帯びたもの、神々と見なしていた。そういうものに神が名前をつけたり、祝福することは、彼らに誤解を与えただろう。それゆえ、あえて何も付け加えず、四日目を終えたのではないだろうか。

#### 6. 第五日(創世記 1:20-23)

創造の御業も、終盤に近づく。いよいよ五日目である。この日の神の創造のわざは、海の生き物と空の鳥だった。四日目の天体の創造は、一日目に対応していた。この五日目の創造は、大空と海が造られた二日目に対応している。

神は仰せられた。「水には生き物が群がれ。鳥が地の上、天の大空を飛べ。」(20 節)

神は、海の巨獣と、種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。神はそれを見て良しとされた。(21 節)

神はそれらを祝福して仰せられた。「生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は地にふえよ。」(22 節) 夕があり、朝があった。第五日。(23 節)

この五日目の創造もまた、神の語りかけから始まった。**神は仰せられた**、これは初めから数えると、六番目の神の語りかけである。この世界や人間の創造は、自然や偶然によって出来たわけではない。それは、「世界の基の置かれる前から」(エペソ 1:4)、「神があらかじめお立てになったみむねによることであり」(エペソ 1:9)、「みこころ

によりご計画のままをみな行う方の目的に従って」(エペソ 1:11)なされた。それが、**神は仰せられた**という神の語りかけの背景にあったことである。

水には生き物が群がれ。鳥が地の上、天の大空を飛べ。著者はこれまで、逆順法(キアスムス)や言葉遊び (メリスムス)、平行法(パラレリズム)などの文学手法を用いて、創造の記録を描写してきた。この五日目においても、海の魚と空の鳥の創造を、三重の平行法を用いて記述している。水には生き物(20 節)、水に群がりうごめくすべての生き物(21 節)、海の水に満ちよ(22 節)が一方の平行句群であり、鳥が地の上(20 節)、翼のあるすべての鳥(21 節)、鳥は地にふえよ(22 節)が他方の平行句群である。この箇所には、このような三重の平行法により、空と海にたくさんの生き物が満ち溢れていくようすが、見事に描かれている。神は、空いっぱいに鳥が、海いっぱいに魚が満ち、増え広がっていくことを望まれた。それは、美しい、楽しい、活気に満ちた自然の世界だった。一羽の鳥もいない空を想像してみるとよい。一匹の魚も泳いでいない川や海なども。本当に寂しい限りではないか。詩篇 104 篇の作者も、こんな風に歌っている(24-25 節)。

主よ。あなたのみわざはなんと多いことでしょう。

あなたは、それらをみな、知恵をもって造っておられます。

地はあなたの造られたもので満ちています。

そこには大きく、広く広がる海があり、その中で、はうものは数知れず、大小の生き物もいます。

ここで鳥に関しては、**鳥、翼のある鳥、鳥**と、ちょっとした違いはあるが、ほとんど同じ表現を用いている。それに対し海の生き物については、**海の巨獣と水に群がりうごめくすべての生き物**と、あたかも二種類の魚が造られたかのように記している。後者はごく普通の魚を指している。問題は、前者の**海の巨獣(タンニーン)**である。ウガリットの文献では、「タン」は「ヤム(海)」の別名で、「タンニーン」は、海に生存する「バール神に敵対する代表的なもの」だった。では、この箇所の**タンニーン**はどのような意味か。

「タンニーン」という言葉は、旧約聖書では二通りの意味がある。一つは、「蛇」(出エジプト 7:9、10、12、申命32:33、詩篇91:13、32:2)、「わに」(エゼキエル 29:3、32:2)、「竜」(エレミヤ 51:34)などと訳されている。これらは、ごく普通に生きている海の生き物である。それに対し、「海の巨獣」(詩篇 74:13)、「レビヤタン」(詩篇 74:14)、「蛇レビヤタン」(イザヤ 27:1)、「竜」(イザヤ 51:9)などは、やがての終末時に完全に滅ぼされると予告されている。それは、神に敵対する存在として描かれている(ヨブ 7:12 および詩篇 148:7 などでは「海の巨獣」と訳されているが、神に反逆するものではない)。

著者がこの箇所の**タンニーン**をどちらの意味で記述しているのかは、はっきりしない。しかし、わざわざ他の海の生き物と区別しているのだから、特別な存在と考えていたことは間違いない。むろんここでは、神に反逆しているようすは全く見られない。むしろ、唯一の神が**タンニーン**を海の一被造物として造られたことが、淡々と記述されている。最初の読者だった古代中近東の人々は、この記述を読んだだけで、**タンニーン**は神的な存在ではなく、被造物の一つに過ぎないことを悟ったはずである。

この五日目の**海の生き物**と空の鳥の創造に対し、**創造した(バーラー)**という言葉が使われている。この言葉は、1節以来のことであり、次に使われるのは 26 節の人間に対してである。一般に「バーラー」は、重要な創造に言及するときに使われる、と考えられている。では、なぜこの箇所で使われているのか。二つの可能性がある。一つは、空や海の生き物、自然界が人に大きな感動を与えるような創造だったから、というものである。もう一つは、海の生き物の中にタンニーンが含まれているからだというものである。この二つは大きく違うように見えるが、古代中近東の人々にとっては深く結びついていた。だから、どちらかの一つと、決める必要はない。

この箇所では、先の植物と同じように、**種類にしたがって(ミーン)**という表現が二度繰り返されている。**水に群がりうごめくすべての生き物**に対して一度、**翼のあるすべての鳥**に対してもう一度。くどいと言おうか、丁寧と言おうか・・・。おそらく、きよいものときよくないものを分類するときに、重要な意味をもっていたのであろう(創世 6:20、7:14、レビ 11:14-29、19:19、申命 14:13-18、22:9-11 など参照)。むろん、**海の巨獣(タンニーン)**については、**種類にしたがって**という言葉から除外されている。

このような創造の後、神はそれを見て良しとされた。ところが、それだけでは終わらない。著者は、この創造記事においてこれまで使われたことのない初めての言葉を付け加えた。神はそれらを祝福して仰せられた、と。祝福する(バラク)という言葉は、前節の創造した(バーラー)との組み合わせで、言葉遊びが見られる。ここと同じ「バーラー」と「バラク」の言葉遊びは、人間の創造のときにも見られる(27-28 節)。このような言葉遊びの繰り返し

は、動物の創造も、人間の創造同様、神にとって大きな意味をもっていたことを示唆する、と考える学者もいる。そうかもしれない。そうではなく、人間の存在にとって、動物の創造は大きな意味があったので、神の祝福が告げられた、と理解する学者もいる。神にとってか、人にとってか、どちらか一つに限定しなければならない理由があるとも思えない。両方を含めて考えておこう。

天は喜び、地は、こおどりせよ。国々の中で言え。主は王である。

海とそれに満ちているものは鳴りとどろけ。野とその中にあるものはみな、勝ち誇れ。

そのとき、森の木々も、主の御前で、喜び歌おう。

確かに、主は地をさばくために来られる。(I 歴代 16:31-33)

いずれにしても、神が最初に祝福されたのは、人間ではなかった。空の鳥であり、海の魚だった。現代のキリスト者が考えなければならない事柄が、ここにある。この箇所における神の祝福の中身は、**生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は地にふえよ**という、子孫の増加にあった。このように神の祝福が子孫の増加と結びつけられているのは、創世記では極めて一般的なことである(1:28、9:1、7、17:6、20、28:3、48:3-4 など参照)。むろん、このような祝福は人間に対してのものだった。しかし、預言者ホセアは、神が生き物と契約を結ぶとまで言っている。人間への祝福というコンテキストにおいてであるが、とても興味深い。

その日、わたしは彼らのために、野の獣、空の鳥、地をはうものと契約を結び、弓と剣と戦いを地から絶やし、彼らを安らかに休ませる。(ホセア 2:18)

神の祝福の内容は、むろん時代によって異なる。さらに、人によっても異なるだろう。しかし、ここで大切なことがある。その内容が何であれ、神からの祝福を受ける、そのこと自体である。神から祝福を受けることのできない人生など、空しい歩み以外の何ものでもない。

夕があり、朝があった。第五日。これは、五日目の空の鳥や海の魚の創造の終わりを告げる定型句である。

五日目を閉じるにあたり、先日散歩をしていたときの話をさせていただきたい。長い冬をじっとこらえ、やっと春が来たとばかりに、川の土手にタンポポの花が咲いていた。45年ぶりの大雪の後である。たった一輪だが、とてもかわいらしく咲いていた。そのときふと、空の鳥を見よ、野に咲く花を見よ、と言われたイエスの言葉(マタイ6:26、28)を思い出した。そして、歩きながら、被造物管理の神学について思いを巡らしていた。

福音派のキリスト教は、自然の中に神を体感したり、自然に基づく神学を展開することを極度に警戒してきた。そのような宗教体験の芽は自由主義神学の中に育てられたものだからである。神のことばを信ずる神学とは対立する。そんなふうに教えられてきた。その結果だろうか。聖書信仰からは、深みのある、感動に心踊らせるような神学は生まれてこなくなってしまった。思弁的で護教的な、何の面白みもない神学ばかりである。それでいいのだろうか。本当は、神学ほど、楽しく、心が解放され、勇気と希望を与えるものはないはずだ。神学がこんなふうに変わってしまったのは、いつからのことなのだろうか。被造物管理の神学が、もしそれと同じようなものなら、屋上屋を重ねる必要はない。そんな思いが堂々巡りしていた。

小1時間も歩いていただろうか。夕日が沈みかけていた。お寺の鐘が遠くで鳴った。まさに夕があった。

#### 7. 第六日(創世記 1:24-31)

そして、朝になった。とうとう創造の最高潮、六日目がやってきた。人間が造られ、創造の完成する日である。ユダヤ人であれば誰でも、六日目は翌日の安息日に備え、特別忙しい日になることを知っていた。そのことは、神の創造のわざにおいても起こった。というより、創世記1章の著者は、自分たちの経験に合わせ、世界の創造のわざを描写したのだ。五日目は、軽いフットワークのような感じで終わった。その分だけ、そして七日目の分も含めて、六日目は大忙しになった。長い一日である。

神は仰せられた。「地が、種類にしたがって、生き物を生ぜよ。家畜や、はうもの、野の獣を、種類にしたがって。」そのようになった。(24 節)

神は、種類にしたがって野の獣を、種類にしたがって家畜を、種類にしたがって地のすべてのはうものを 造られた。神はそれを見て良しとされた。(25 節)

神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」(26 節)

神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

(27節)

神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」(28 節)

神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上にあって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる。(29 節)

また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」そのようになった。(30 節)

神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六 日。(31 節)

神がご自身の民イスラエルに初めて安息日について教えたのは、マナの出来事の時だった(出エジプト 16:5、22-30)。それは、十戒を受ける以前、やっとの思いでエジプトを脱出した直後のことである。カナンを目指して旅立ち、シンの荒野までやって来た。そこでとうとう、食物がなくなり、窮地に陥った。そんな彼らは、つぶやき嘆き、指導者を責めて怒り狂った。神は彼らにマナを備えた。そして、七日目を安息日として守るため、六日目には二倍のマナを集めよ、と命じた。以来六日目は、神の民にとっては一番忙しい日となった。

創世記1章の著者は、世界創造のわざを記録するよう神から命じられた。彼はもともと、安息日が神の創造のわざに基づいて定められていると示されていた。そこで彼は、自分が観察した周囲の世界を、六日間の神の創造のわざとして、同胞の民がよく分かるようにまとめた。この六日目の創造には、これまでの一日の働きの倍以上の仕事を帰している。六日目は、神にとっては、とても忙しい日であった。七日目を前に、六日中に全仕事を完成させようと必死になっているかのようだ。このような書き方をしているのは、たぶん、神の民の安息日体験が反映されているのだろう。安息日神学の息吹が、このような記述方法にも表れている。

六日目の創造もまた、これまでどおり、**神は仰せられた**という常とう句をもって始められた。これは、神の語りかけとしては、七番目である。しかしこの神の語りかけは、この24節に加え、26節、28節、29節と六日だけで4回出てくる。これまで6回出てきたので、合計10回になる。7という数字を守りながら、同時に3をプラスして、10回にする。10は十全であることを示唆する。これもまた、すべてのものが神のことばによって造られたことを印象づけるための、特別な表現技法だった。

その語りかけの内容は、地が、種類にしたがって、生き物を生ぜよ。家畜や、はうもの、野の獣を、種類にしたがってという、長い命令だった。この命令は、逆順法(種類に従って一生き物、生き物一種類に従って)に基づく平行法によって記述されている。しかも、地が・・・生ぜよという形式の表現は、11 節(三日目)の「地が・・・芽生えさせよ」という句に類比される。三日目には、乾いた土地と植物が造られた。この六日目には、その土地に住む動物が造られる。六日目の創造は、明らかに三日目の創造に対応している。これによって、一日目と四日目、二日目と五日目、三日目と六日目とが、それぞれきれいに対応した形でまとめられた。

**地が、生き物を生ぜよ**という表現は、地が動物の生命を生じさせたかのように聞こえる。11 節の植物の場合も、この箇所の動物の場合も、地が生命の起源であるかのような印象を受けるかもしれない。しかし著者は、そのような意図でこの文章を記述したのではない。神が、ご自身の命令によって、植物や生き物を地を土俵にして生じさせた、と伝えたかったのである。

進化論擁護のキリスト者が、この箇所を根拠に、神は一つ一つの動植物を直接ではなく、地を媒介にして間接的に創造され、生命の法則に基づいて生命継承がなされるよう定めた、と解説しているのを聞いたことがある。しかし、この記述を現代の進化論論争に絡ませて解釈するのはよくない。24 節の繰り返しの文章を見ていただきたい。「地」は出てこない。自分の考えに合う(都合の良い)ところは引用するが、不都合に見えるところは無視する。そういう姿勢が、進化論者にも、反進化論者にも見られる。これでは、ものごとをきちんと考えようとする人々からは、見離される。進化を否定するにしても、肯定するにしても、科学が提起している問題は、科学の方法論によって解決しなければならない。他の情報を混入させると、問題を複雑にするだけである。

生き物とは、ここでは動物を指す。続く説明では、動物は三種類に分けられている。その最初は、**家畜(ブヘマー)**である。それは家で飼われているような動物を指す。二番目の**はうもの(ラメシュ)**は、足のないトカゲとか蛇の

ようなもの、三番目の**野の獣(ハイトー・アレッツ)**は、野原に生きる野生動物をいう。この大雑把な分け方は、当時の人々にとってごく普通のものだった。おそらく、身近にあって食べることのできるもの、身近にはあるが食べることのできないもの、そして、人間とは無関係に生きているものと、区別されていたのだろう。

種類にしたがっては、ブヘマー、ラメシュ、ハイトーの動物たちの間に見られる、それぞれの種類の動物を指している。羊は羊、ヤギはヤギ、豚は豚、ライオンはライオンといった、古代中近東の人々がごく普通に区分していた種類である。この言葉は、生き物の生命継承の秩序を述べている。神は、それぞれの生き物にそれぞれにふさわしい特色を与え、その位置と目的をもって創造された、ということなのである。預言者イザヤは、これらの生き物さえも、神を賛美していると伝えている。

野の獣、ジャッカルや、だちょうも、わたしをあがめる。わたしが荒野に水をわき出させ、荒地に川を流し、わたしの民、わたしの選んだ者に飲ませるからだ。(イザヤ 43:20)

神の語りかけの言葉は、**そのようになった**。神のことばの権威は、創造の記録全体をとおして貫かれている。 我々は、繰り返しの部分については、もう分かっていると、読み飛ばしやすい。しかし、著者が繰り返すのは、重要 だからである。単にパターン化して記述する、文学技法に過ぎないと扱わないでほしい。神のことばの背後にある ご計画やご意志の奥深さについて、しばし沈思黙考の時をもっていただきたいと思う。

続く、神は、種類にしたがって野の獣を、種類にしたがって家畜を、種類にしたがって地のすべてのはうものを造られたという文章は、神の語りかけどおりに、すべての生き物が造られたことを記述している。この24節は、野の獣、家畜、はうものの三つを、三重の平行法によって表現している。美しい韻を踏んで描かれていることは、一読するだけで分かる。著者は、この世界創造の最終目標を人間の創造に置いている。それはそのとおりである。しかし、植物の世界でも、動物の世界でも、人間の舞台設定の一こまに過ぎない、と見なしてはいけない。それ自体で完結した目標をもっている、そういう側面もある。パウロは、被造物の贖いについても、言及している。全被造物に対する神の遠大なご計画については、今の人間にははかり知ることのできない面がある。

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。(ローマ 8:19-22)

種類にしたがってという言葉は、24 節では三つの動物を取り囲むように、そして 25 節では動物が一つずつ述べられるたびに、繰り返されている。この言葉は、(三日目の)植物の命の継承の時にも使われた。植物同様、動物もまた、親から子へと同じ生命を継承させていく。このような生命をもつものに対し、単にいのちの法則に従っている生き物だと、簡単に片づけてはいけない。現代科学の粋をもってしても、生命の神秘には未だ到達し得ないでいる。進化論に対しどのような意見をもっていても、キリスト者が神の創造のすばらしさに感動し、生命に対する畏敬の念をもち続けるのは当然である。

この24節の語りかけと25節の成就の文章には、動物におけるキアスムス構造が見られる。

- A 家畜とはうもの
  - B 野の獣
  - B'野の獣
- A' 家畜とはうもの

**神はそれを見て良しとされた**。神は、動物の創造においても、是認を表明された。地上の動物の世界もまた、 空の鳥や海の魚と共に、神による偉大な創造物だった。

ところで、生き物に対しては、神の祝福の言葉は記されていない。ある学者は、人間が造られるまでは、動物が増えることをよしとしなかったのではないか、と推測している。あるいは、人間の祝福の中に動物の祝福も含まれるので、ここでは祝福の言葉は述べられていないという解釈もある。いずれしても、神は動物たちに食物を備えられた(29節)。それゆえ、生き物に祝福がなかったわけではない。

それでは、人間に関する創造を見て行くことにしよう。まず、26節である。

神は仰せられた。

「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。

#### 彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」(26 節)

神は仰せられた、これは、六日目の創造における二度目の語りかけである。動物の創造の後は、人間の創造が続く。この人間の創造によって、六日間にわたる創造のクライマックスを迎える。人間は、生物学的に言えば、動物の一種である。しかし、創世記の著者は、そう理解してはいない。人間を動物とは全く違う存在として描いている。どんな点が違うのか。①神のかたちに造られたこと(26-27 節)、②地を支配すること(26、28 節)、③男と女に造られたこと(27 節)、④より大きな祝福を受けたこと(28-29 節)の 4 点である。これらの点を中心に、人間の創造に迫ってみよう。

人間の創造を記述している 26-28 節には、次のようなキアスムス構文が見られる。

- A 神の意思:生き物を支配させる(26 節)
- B 神のかたちに造られる(27節 a)
- B'神のかたちに造られる(27節b)
- A'神の祝福:生き物を支配させる(28節)

人間の創造に関するキーワードは、「神のかたち」である。古代中近東の文献によれば、創造は神々のためになされた。ところが創世記の著者によれば、創造は人間のためになされた。驚くべき違いである。人間を、神を代表する存在として、あるいは神の代理者として、描いているのだ。

神は、**さあ人を造ろう**と言われた。この言い回しは、神が誰かに語りかけたように聞こえる。誰にだろう。ちょっと前に造った動物たちにだろうか? それはありそうもない。彼らに言葉は通じないだろう。では、天使か? それは、あまりに唐突である。誰かに語りかけたというのではなく、英語でいう Let's ・・・という表現であり、神の決意表明だったと解釈する人もいる。ということは、独り言? そうかもしれない。でも私には、神の傍らに誰かがおられたのではないか、そんな印象を受ける。著者も最初の読者も理解できなかっただろうが、新約聖書にはその答えがある。イエスに、そして神の御霊に語りかけられたのではないだろうか、と。

中澤は、あるところでは最初の読者たちが理解できるように書いたはずだと言う。ところが、他の場所では、読者は理解できなかっただろうが、と断り書きを入れる。こういう矛盾した解釈はおかしい、そう批判される方がおられるだろう。そのとおりで、反論の余地はない。それでもあえて、私の信じるところを言わせていただきたい。

創世記1章の著者も、最初の読者も、そこに書かれていることは基本的には理解できたはずである。しかし、神が啓示された部分の中には、分からないところもあったことだろう。何もかも神の啓示のせいにして、彼らが理解できないことが書かれているのだとするのは間違いである。だが反対に、神の啓示的内容を少しも認めず、理解できないことは何一つなかったはずだと、すべてを割り切ってしまうのもどうかと思う。

この辺の問題になると、キリスト者の間にも意見の相違がある。それは当然のことだ。だからこそ、胸襟を開き、自由、活発に議論したらよいと思う。

この箇所の**人(アダム)**には冠詞がない(次節 27 節には冠詞がある)。固有名詞だからというより、人類一般、あるいは人類の代表としての人間を指しているからだろう。**造ろう(アーサー)**という動詞は、次の 27 節の「創造する(バーラー)」ではない。言葉を変えているのは、意味が違うからではなく、いろいろな言葉を使って人間の重要性を強調する、一種の表現技法であろう。

神は、**われわれのかたちとして、われわれに似せて**人を造ろう、と言われた。ここで神は、**われわれ**と複数形を2度使っている。この神の複数形は、3章22節や11章7節などにも見られる。イザヤ6章8節の「われわれ」という表現も似た用法である。神なぜ、ご自分のことをこのように複数形で語っているのか。聖書が初めから終わりまで一貫して教えようとしているのは、神は唯一であるという真理である。にもかかわらず、なぜ**われわれ**なのか。この複数形は、説明を要する。

ある聖書学者は、著者は多神教の資料を使ってこの記事を書いた、複数形はその名残りであると述べている。 とすれば、著者は全く間抜けな人物となる。唯一の神の創造を教えようとしているのに、多神教の部分を修正する のを忘れた、というのだ。こんなうっかりミスを犯してしまう著者がいたと信じることは、私にはとてもできない。しかも それに気づいた読者も一人もおらず、修正する人もいなかったということになる。

その他、いろいろな説明が提唱されている。①神の中に語る神と語られる神の人格があるとか、②神は自問自答しながら自らを励ましているとか、③権威の複数形であるとか、④旧約聖書の中には、神が天使たちと会議を開

いていることを示唆する記録があるので(例えば、ヨブ 1:6-12、2:1-6、I 列王 22:19-23 など)、天上の天使たちを含めているのではないか(詩篇 89:6-7)とか・・・。

私自身は、この複数形に三位一体の神を読み取っている。この箇所の「神のかたち」の解釈は、神の複数形を三位一体と解釈するとき、一番スムーズで、豊かなものとなる。それ以外の解釈は、極めて貧しい内容になる。しかも、神の霊は創世記 1 章 2 節で既に言及されている。2 章 7 節にも、人間創造の場面で出てくる。さらに、新約聖書は、キリストによる宇宙の創造について明瞭に啓示している(ヨハネ 1:3、コロサイ 1:15-17、ヘブル 1:2)。

著者と最初の読者は、この複数形をどこまで意識していたのか、どのように理解していたのか、はっきりしない。 間違いなく、三位一体とは理解しなかっただろう。それでも私は、三位一体説がベストだと思う。

では次に、**かたち(ツェレム)**、および**似せて(デムート)**とは、何を意味しているのか。**ツェレム**は、旧約聖書に17回出てくる。そのうちの10回は、外形的な実体を表現した像、例えば、「石像」(民数 33:52)、「像」(エゼキエル7:20)、「肖像」(エゼキエル 23:14)などを表わしている。一方**デムート**は、「人間の姿に似たもの」(エゼキエル1:26)、「人の姿をとった者」(ダニエル 10:16)など、あるものの似姿を表わしている。一般的には、**デムート**は**ツェレム**に含まれる、といってよい。ただし、これらの言葉の語源や使用例などをいくら調べても、この箇所の「神のかたち」の内容は、明らかにならない。神学的な考察をとおして理解すべきことだからである。

キリスト教神学者は、今日までさまざまな解釈を提案してきた。①人間に特有な知性、感情、意志などの働き、②神に背くことさえできるような自由意志、③自意識やさまざまな人格(ペルソナ)、④道徳性や倫理性、⑤神と交わることのできる特質、祈りや礼拝などの宗教的能力や霊性、⑥永遠性をもつ霊、魂、不死性、⑦男と女の関係、愛の交流の能力や社会性、などである。これらは皆、他の動物にはない、人間を人間たらしめている特質である。

一般論ではあるが、私は、聖書解釈においては、あれかこれかではなく、あれもこれもがよいと思う。立派な学者たちが真摯に考えた結果、意見の違いが生じているのだ。従って、矛盾しない限り、どの意見も尊重すべきだと思っている。その意味では、「神のかたち」には、上記七点すべてが含まれている、と考えてよい。そして、これらに加え、さらにもう一つ、最も大切なことを加えさせていただきたい。それは、「被造物を管理する能力と責任」ということである。この点をこれから説明していきたいと思う。

26 節をもう一度読んでみよう。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。ここで人間は、これまで神が創造してきたすべての生き物を支配するようにと命じられている。 さらに 28 節に進んでみよう。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。ここには、 ヘブルの平行法が見られる。つまり、「生き物を支配すること」は、「地を支配すること」に他ならない。「地を支配する」とは、具体的にはどういうことなのか。アダムにとってそれは、エデンの園を耕すことだった。「神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた」(創世記 2:15)。

創世記の著者は、「神のかたち」を被造物の支配権と結びつけている。この「神のかたち」と支配権の結びつきに関し、古代中近東の文献はよきヒントを与えている。紀元前 9 世紀頃の北メソポタミア(上シリア地方)から、「テル・ファクハリエ」という碑文が出土した。これは、古アラム語とアッカド語の二か国語の碑文である。そこには、次のような文章が彫り込まれている。

- (1行) シカンのハドゥの前に設置された、ハドゥ・イシの彫像(ダムート)
- (12行) 彼の王座を励まし、継続するために、グザンとシカンとアズランの王ハドゥ・イシの彫像(ツァラム)
- (15-16 行) 彼は、以前よりもより良いものとしてこの彫像(ダムート)をつくった。 彼は、シカンに住む、ハブルの主ハドゥの面前で、彼の彫像(ツァラム)を設置した。

この碑文は、王ハドゥ・イシの彫像に対し、「ツァラム」と「ダムート」の二つの言葉を使っている。しかも両語は、明らかに交換可能な言葉である。彼らの文化では、王は、神々の代理者として地上を治める者だった。その王の彫像に対し、**ツァラム**とか**ダムート**が使われていたのである。むろん、上記の文献だけではない。古代中近東の文献では、この用例のように、「神のかたち」は、王あるいは支配者に対してのみ使われている。他方、古代中近東の世界では、普通の人間は、神々や悪に翻弄される極めて低い被造物と見られていた。

創世記1章の著者は、このような古代中近東の文化をよく知っていた。にもかかわらず、神は人間を神のツァラ

ム、あるいは**ダムート**として造られたと述べた。つまり、人間は高貴な王のような存在であり、支配能力とその責任を課せられている、と説いたのである。著者は、古代中近東社会の常識と神の啓示との間には明らかなコントラストがあることを、実に巧みに表現したのである。

**支配せよ(ラーダー)**という言葉は、「支配する」という訳語が一般的である(イザヤ 14:2、6、エゼキエル 29:15 など多数)。他には、「導く」(詩篇 68:27 など)、「指揮する」(Ⅰ列王 5:16、9:23、Ⅱ歴代 8:10)、「総べ治める(詩篇 72:8)、「治める」(民数 24:19、詩篇 110:2)、「平和に、安心して住むことができるように支配する」(Ⅰ列王 4:24-25)、「酷使してはいけない」(レビ 25:46、53)などの訳語があてられている。

古代中近東の王は、ほとんどが専制君主的な王だった。しかし、聖書は、違った王のイメージを説いている。弱者に心を配り、愛と公平をモットーとする支配者である。

これは、彼が、助けを叫び求める貧しい者や、助ける人のない悩む者を救い出すからです。彼は、弱っている者や貧しい者をあわれみ、貧しい者たちのいのちを救います。彼はしいたげと暴虐とから、彼らのいのちを贖い出し、彼らの血は彼の目に尊ばれましょう。(詩篇 72:12-14)

聖書と古代中近東の王たちのイメージは正反対である。では、聖書の王や支配者のイメージは、いったいどこから来たものなのか。預言者エゼキエルは、イスラエルのリーダーたちに対し、神のような牧者(王)になることを求めた。神こそ、民を正しく、慈しみ深く治める王だった。

まことに、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。牧者が昼間、散らされていた自分の羊の中にいて、その群れの世話をするように、わたしはわたしの羊を、雲と暗やみの日に散らされたすべての所から救い出して、世話をする。わたしは国々の民の中から彼らを連れ出し、国々から彼らを集め、彼らを彼らの地に連れて行き、イスラエルの山々や谷川のほとり、またその国のうちの人の住むすべての所で彼らを養う。わたしは良い牧場で彼らを養い、イスラエルの高い山々が彼らのおりとなる。彼らはその良いおりに伏し、イスラエルの山々の肥えた牧場で草をはむ。わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。——神である主の御告げ——わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものを力づける。(エゼキエル 34:11-16)

人間は、ここに記されているような神の姿を反映し、被造物を支配するようにと造られた。ところが従来のキリスト教神学は、人間の堕落のみを強調し、王としての存在である人間の高貴さにほとんど目をとめてこなかった。その結果、神が人間に被造物の管理責任を委ねられたことをすっかり忘れてしまった。キリストの贖いが語られても、イエスの神の国のメッセージを聞いても、人間の被造物管理権と結びつけられることはなかったのである。

では、引き続き、27節に進むう。この27節を直訳すると、次のようになる。

神は人を創造された、ご自身のかたちとして。

神のかたちとして、神は彼を創造された。

男と女とに、彼は彼らを創造された。

この三つの文章は同格である。最初の二つの文章はキアスムス構文(創造―神のかたち、神のかたち―創造)を示している。三つ目の文章は、二つの文章の中身をさらに深め、男性と女性の同格性を強調している。と同時に、28 節で人類が増え広がっていくことの伏線になっている。

**創造された(バーラー)**は、既に 1 節の「天と地の創造」と、21 節の「海の動物の創造」において使われた。この 箇所は三度目であるが、特別三度も繰り返されている。これは、この創造記録の中心が人間にあったことを強烈 に印象づけている。前節 26 節では「造る(アーサー)」が使われていた。5 章 1-2 節においても、このようにアーサ ーが1度、バーラーが3度という組み合わせが見られる。いずれにおいても、人間が創造の頂点にあることを強調 した、巧みな表現技法である。

**神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された**。この文章によれば、「神のかたち」は、男女に造られたことに関係がありそうである。40年以上も前のことである。「神のかたち」とは、人間が男と女に造られたことと関係がある、人間の愛の交流、社会性こそが「神のかたち」である、というバルトの解説を読んだ。その読みの深さに大きな衝撃をうけたことを、今も、昨日のことのように覚えている。

被造物支配は、一人で行うものではない。助け手が必要である。だから神は、男に女を備えてくださった。それ

は、結婚の奥義に通じ(創世記2章)、家族に展開され(創世記4章)、教会の奥義を表わす(エペソ5章)。これらすべては、人が「神のかたち」に造られていることに基づいているのである。

続く28節は、「人間に対する神の祝福の言葉」を述べている。

神は彼らを祝福された。

神は彼らに仰せられた。

「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。

人間を創造された後、神は彼らを祝福された。神のかたちに造られた人間が神の祝福を受けるのは、当然かもしれない。しかし、この祝福は、人間だけではなく、安息日 (2:3) にも与えられている。「祝福する」という言葉は、創世記では、アダム (5:2)、(5:2)、(5:2)、(7:2)0、(7:2)1、(7:2)20 、(7:2)1、(7:2)20 、(7:2)20 、(7:2)3 、(7:2)4 、(7:2)5 、(7:2)6 、(7:2)6 、(7:2)7 、(7:2)7 、(7:2)7 、(7:2)8 、(7:2)9 、

そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」(創世記 12:2-3)

この祝福の言葉は、22 節のすべての生き物に対して語られた祝福の言葉と、基本的に同じだった。ただし、二つの違いがあった。一つは、神は彼らに仰せられたと、造られた人間に神が直接語りかけられたことである。人は、神が直接語りかけることのできる相手だった。他の生き物は、神から直接語りかけられることはなかった(旧約聖書には全く例外がないというわけではないが)。

二つ目は、**生めよ。ふえよ。地を満たせ**、と神が人に語りかけ、**地を従えよ**と命じたことである。22 節では、魚は「海の水に満ちよ」、鳥は「地にふえよ」と、祝福の言葉を受けていた。しかしここでは、「満ちる」と「地」という、両方とも大きな言葉が取りあげられ、**地を満たせ**とより大きな祝福の言葉になっている。古代中近東のアトラハーシス叙事詩には、人が増え、問題や騒々しさが増えることを嫌う文章が出てくる。これに対し創世記 1 章では、神は人が増加するよう祝福の言葉を与えている。

続く、海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよという命令は、直前の「地を従えよ」との平行句と受け止め、地を従えよの繰り返しと読むのが自然である。海の魚、空の鳥は、五日目の被造物である。地をはうすべての生き物は、六日目の被造物である。これらの言及は、二日間にわたって造られたすべての生き物をカバーしている。最初の地を従えよは、地のすべての生き物を支配せよという命令を含んでいる。

では、29節に進もう。ここでは、神が人に食物を備えたことを述べている。

神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上にあって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる」

そして続く30節には、神が生き物に食料を備えたことを述べている。29節の人間に対する祝福と比較して考えるため、続けて引用しておこう。

「また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」

メソポタミアの文献では、神々に食物を備えるための存在として、人間は造られている。聖書の神は、そうではない。神が人間に、そして生き物に、食物を用意してくださるのである。ただし、人間には、他の生き物とは違う点が三つある。

まず、**見よ。わたしは**と、人間の食物を備えるのに、神ご自身が特別深く関わっていることを強調している。 第二は、**全地の上にあって**と、人間が全地球上に増え広がっていくことが想定されている。他の動物たちも、増

第二は、**全地の上にめって**と、人間か全地球上に増え広かっていてことが想定されている。他の動物たらも、増え、広がっていてことは約束されている。しかし、全地というところまでは言われていない。

第三は、動物たちには、**すべての緑の草**のみが食物として与えられた。それに対し人間には、**種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木が**食物として備えられた。

第三の点に関し、キリスト者の間に意見の違いがある。あるキリスト者は、この 1 章の段階では、人間に食物として与えられたのは植物のみで、動物の肉を食することは許されていなかった、それが許されるようになったのは、 洪水以降のことである(9:3)、と考えている。

しかし、他のキリスト者は、神はアダムとエバのために「皮の衣」を備えていた(3:21)、アベルは羊を飼う者となり、 犠牲をささげていた(4:2)、ノアは「きよい動物」と「汚れた動物」を区別して、箱舟に入れている(7:2, 8-9)などという点を取り上げ、人間は洪水以前より動物の肉を食べていた、と解釈している。もしこのように理解する場合は、「生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた」(9:3)という文章は、人間が動物の肉を食べることを、神が批准された、という意味になる。

洪水以降、人間は動物の肉を食べることを許されたのだから、どちらの解釈をしても、今となっては大きな違いはない。ただ、聖書解釈という観点からは、興味深い問題である。講演をお聞きの皆さんは、どちらの意見に賛成されるだろうか。

神の祝福の言葉は**そのようになった**。創造に関わる言葉であっても、祝福に関わる言葉であっても、それが神のことばである限り、必ず成就する。著者は、この言葉を繰り返すことによって、創造は、神の言葉によったのであり、神のことばは絶対的な権威をもっていることを知らせようとした。

六日間の創造は終わった。そこで、神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。神はそれまで、毎日その日の創造物をチェックしてきた。しかしこの最終チェックは、三つの点で、日々のチェックとは違っていた。一つは、すべてのものを見られたことである。毎日のチェックは、それぞれ部分的なものだった。一つ一つの部分はよくできていても、全体としてはどうも・・・、ということは、よくある。部分もよく、全体もよくなければ完全とは言えない。神はここで、この世界全体が人間存在のためにうまく機能していることを確認された。

二つ目は、神が**見よ**と語りかけられたことである。語られた相手は、いったい誰か。神と交流する能力をもつ人間だと考える人が多い。しかし、私自身は、違和感を覚える。むしろ、聖書は、被造物全体を擬人的に扱い、しばしば被造物に呼びかけている。ここも、全被造物に神の創造のわざを喜んでもらおう、そういう気持ちが込められ、呼びかけられたものではないだろうか。詩篇の作者はしばしば、「全地よ」と呼びかけ、神への賛美をささげるよう励ましている(詩篇 66:1、98:4、100:1)。

そして三つ目は**非常に良かった**と、**非常に**という言葉が付け加えられていることである。神が造られたこの世界は、これ以上のものは不可能というほど、最高の完成品だった。我々は、神が造られたのだから、すべてがよくできて当たり前、そんなふうに考えやすい。すると、感動や喜びは小さなものになってしまう。この被造世界は、実にうまくできている。宇宙を知れば知るほど、驚嘆せざるを得ない。電子顕微鏡で見ても、世界最大の望遠鏡で見ても、その感動は増幅する。神は人に、創造の御業のすばらしさを共に喜ぶようにと招いている。

そして、最後の定型句、**夕があり、朝があった。第六日**が続く。二日目から五日目は、定冠詞がない(英語で表現すると、day, Xth となる)。しかし、この六日目には定冠詞がついている(英語でいうと day, the sixth)。次の七日目も定冠詞がついているが(day, the seventh)、それは安息日で特別の日だからである。この六日目に定冠詞があるのは、創造の最終目標が人間の生存にあり、それが実現した特別な日という意味が込められている。

#### 8. 第七日(創世記 2:1-3)

聖書の章とか節の区切りは、中世につけられたものである。世界創造は、六日間で完成された。これで一区切りとなり、七日目の神の安息は別の話である、そう考えて新しい章をスタートさせてしまった。1章と2章の区切りを六日目と七日目の間に置いてしまった気持ちも、分からないでもない。しかしこれは、明らかに知恵足らずだった。2章1-3節には、「第七日目」という言葉が三度も繰り返されているのだから、1章の流れの中で、2章3節までをひとまとめにすべきだった。

こうして、天と地とそのすべての万象が完成された。(1節)

神は第七日目に、 なさっていたわざの完成を告げられた。 すなわち第七日目に、 なさっていたすべてのわざを休まれた。(2 節)

神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造 のわざを休まれたからである。(3 節) 七日目の記録は、これまでの六日間とは、かなり違った書き方をしている。「神が仰せられた」という創造のわざを表わす言葉は出てこない。「そのようになった」という創造が実現したことを表わす言葉も、「よしとされた」という神の是認の言葉も、「夕があり、朝があった」という一日の締めくくりの常とう句も出てこない。しかし、1 章の六日間のわざを締めくくる七日目であることは間違いない。

創世記1章1-2節は六日間の創造の序論だった。2章1-3節は、その序論に対応する結論である。序論の部分の静けさが再び戻り、この結論部分を覆うことになった。何かが始まる前の沈黙が、すべてが終わったという沈黙に変わったのである。もはや、神の語りかけも、神の御業も、神の是認も、神の祝福の言葉も聞こえなくなった。神が休まれた。創造の大激動は、平和な静粛に取って代わった。

著者は、序論の1章1節をヘブル語で7語、2節を14語、序論全体を21語でまとめた。それに対応する結論部分の2章1-3節は、7語からなる3つの文章を含め、合計35語でまとめている。前者が $7\times3$ 、後者が $7\times5$ で、6日間の創造の業の結果、 $7\times2$  が増えたという計算になる。

1 節の**こうして、天と地とそのすべての万象が完成された**は、六日間の創造の結末を描写した文章である。この文は、創造の初めの文章、「初めに神は天と地とを創造した」(1:1)に対応している。しかも、両者の間には、キアスムス構文(創造—神—天と地が、天と地—万象—完成)が見られる。

神による創造の六日間は終わった。1章1節では「天と地」のみだった。それに対し、ここでは、**そのすべての万象**という句が加えられている。この句こそ、茫漠としていた地が、人の生存舞台へと変えられた世界を示す「端的な言葉」であった。**万象(ツェバー)**は、全体が秩序だって動いている集団を指す言葉である。聖書では、軍隊(21:22)、星(申命記 4:19)、天使(I列王記 22:19)などに対して使われている。造られたものすべては、あるべき位置に組み立てられ、秩序だって動き、期待された機能を完璧に果たすようになったのである。「トーフーとボーフー」(1:2)が、**ツェバー**に変わったのである。

完成されたと言われると、我々は創造された被造物の方に関心を抱く。しかし著者の意図はそこにあるわけではない。造り主である神ご自身にフォーカスがあてられている。古代中近東の人々は、世界の成り立ちや構造にはほとんど興味をもっていなかった。むしろ、この世界を支配している神々は誰なのか、ということに関心をもっていた。預言者イザヤが、神ご自身を世界の創造者であると繰り返し宣言したのは、このような背景があったからである(40:25-26、45:7-8、12、18、48:12-13 など)。

イザヤだけではない。そのことを示す聖句は聖書全巻に満ちている。例えば、「天と地を造られた方、いと高き神」(創世 14:19、22)、「あなたが天と地を造られた」(II 列王 19:15、イザヤ 37:16)、「天と地とをお造りになったイスラエルの神、主」(II 歴代 2:12)、「主は、天と地を造られた方」(詩篇 115:15)、「主は天と地と海とその中のいっさいを造った方」(詩篇 146:6)、「あなたは大きな力と、伸ばした御腕とをもって天と地を造られました」(エレミヤ32:17)、「天と地と海とその中のすべてのものを造られた方」(使徒 4:24、14:15)、「天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物」(黙示録 5:13)、「天と地と海と水の源を創造した方」(黙示録14:7)などである。エレミヤは、「天と地との諸法則」を定めたのが神であり(エレミヤ 33:25)、偶像は「天と地を造らなかった神々」と呼ばれている(エレミヤ 10:11)。

六日が終わり、新しい七日目を迎えた。その七日目に、神は三つのことをされた。一つは、**なさっていたわざの完成を告げられた**ことである(2 節 a)。二つ目は、**なさっていたすべてのわざを休まれた**こと(2 節 b)、そして三つ目は、**第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた**ことである(3 節)。一つ一つの文章を丁寧に見ていくことにしよう。

まず、第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられたという文章である。なさっていたというと、第七日目にも神は働いていたかのような印象を受ける。原文を直訳すると、そう読めないわけではない。しかしそう読むことは著者の意図ではない。六日間に神がなさったわざの完成を、七日目に宣言したというのが真意である。わざ(メラカー)とは、熟練工がすべての思いを注ぎ込んで作品を作り上げていくときの言葉である。旧約聖書では、普通の労働者の働きに対しては「アボダ」という言葉が使われた。メラカーの方は、特殊な能力と技術をもっている職人が、他の人が真似できない特別な製品を仕上げていく作業を指す。完成(カーラー)とは、もはやこれ以上は手の入れようのない、完全な状態をいう。六日間の創造によって、人間が生存するに必要な環境は完全に整えられ

たのである。

むろん、いったん完成された被造物も、それぞれの歩みを進めていく。自然は、与えられた法則性に基づき、その活動を展開する。不確定な要素もたくさんあるが、それは、人間の認識能力を超えた世界である。そのような領域にまで、人間は首を突っ込まなくてもよい。人は「神のかたち」に造られても、神ではない。それぞれの生き物もまた、生命の法則性に従い、生命の継承を繰り返す。生き物たちも、人のもつ自由意思とは異なるが、それなりの意思をもっている。動物の世界をじっくり観察するなら、彼ら特有の興味深い能力をたくさん発見することができる。そういうことをすべて含め、創造は一応の完成となった。

二番目の文章に移ろう。第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。この文章もまた、誤解されやすい。なさっていたすべてのわざというと、神は七日目にもわざを行っていたかのように勘違いしてしまう。むろん、著者の言いたい趣旨は、これまで六日間にわたってなさったわざを、この七日目には休まれた、ということである。休まれた(シャバット)という言葉は、旧約聖書に 207 回出てくる。「シャバット」の語源は「休む」とか「安息する」である。日常の生活のリズムから離れて休むことが安息日の原義である。働くことから解放されることが休みとなる。人間はどんな人でも、仕事をすれば疲れる。仕事を趣味のように楽しんでいる人も、やはり疲れ、休みを必要とする。しかし、神はそのようなお方ではない。疲れることはない。その意味では、休まれたという訳語は、神にとってはふさわしい言葉ではない。この語は、一つの仕事が終わり、それとは全く違う状態に置かれている状態を指す。つまり、神は、六日間の創造のわざを終え、その業に基づいた新しい働きを始められたということである。

続けて、三番目の文章に進もう。神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。神は、六日目には人と動物を祝福した。その祝福は、子孫が増え広がっていくことに関係していた(創世 1:22、28)。しかし、ここでは、神は第七日目を祝福している。祝福の対象が第七日目と、日にちであることは、極めて珍しい。この神の祝福の中身は、この日を聖であるとされたということだった。聖である(カドーシュ)の語源は「切断する」である。そこから、聖書では、あるものを、神以外のすべての物から切り離し、神にのみ属するものとして扱うという、特殊な用語になった。新改訳では、「聖別する」という特別な訳語をつくり、この語に充てたほどである(出エジプト 28:38、29:1、29:27 など 31 回)。

**この日を聖であるとされた**とは、神は「七日目」が神に属するものと宣言されたということである。これまでの六日間、神は人間を最終のゴールとし、創造のわざを続けてきた。この七日目は、そのすべてのわざを休み、その日を神ご自身のために使っている、ということである。

3節後半のそれは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからであるは、神が「七日目を聖であるとされた」ことの付加説明である。この神の説明文を、ほとんどのキリスト者は理解していない。すべての創造のわざを休まれたという言葉を、神は何もしていないで休んでいると解釈してきたからである。このような誤解が生じたのは、「休む(シャバット)」という訳語にあったことは、既に述べた。神は、六日間で創造のわざを完成した。七日目は、すべてのわざを休んだ。休んだと言っても、神は働き過ぎて疲れた、というわけではない。創造の業から完全に離れた、ということである。離れてどうしたのか。創造のわざとは違う働きを始められたのである。

もう少しわかりやすく説明しよう。もし、「もう休もうか」とか、「おやすみなさい」と言うなら、何もしないで眠るという意味である。しかし、明日は「休みだ」とか、「学校は休みだ」というと、「眠る」という意味ではない。「今は忙しい時だから休めない」とか、「今度の連休はどこに行こうか」といえば、仕事から解放され、仕事以外のことをする、という意味である。この箇所で神が**休まれた**と言われたのも、これまでの六日間の創造のわざとは違う働きをしている、ということである。

イスラエルの民にとって、安息日の戒めはとても重要なものだった。それは、六日間働き、七日目には、体をゆっくり休める、そういう戒めではなかった。安息日の戒めの最後は、「主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された」(出エジプト20:11)という言葉で締めくられている。安息日は、聖なるもので、神に属する日なのである。イザヤ58章13-14節によれば、安息日とは「主の聖日」であり、「神を喜ぶ日」である。イスラエルの民は、安息日には、神を思い、神に祈りをささげ、神を礼拝するために集いあった。彼らは、仕事から解放され、神にお仕えしたのである。

神は、六日間の働きを終え、その創造のわざに対し新しい関係に入られた。それが、この日を聖であるとされ

たということの意味だった。では、**この日**、つまり七日目とはいつのことか。創世記2章1-3節には、「夕となり、朝となった」という定型句が出てこない。多くの聖書研究者は、この七日目は、今も続いていると考えている。

イエスは、「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです」と言われた(ヨハネ 5:17)。イエスは、父に見習って働かれた。しかも、その働き方についても興味深いことを述べている。「子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです」(ヨハネ 5:19-20)。イエスは、神の働きを見ながら働くと言われた。まさに、神は今も働いているのである。

では、どのような働きなのか。創造のわざとは違う。その延長線上のわざである。贖いのわざである。神は、造られたものを、完全に購われるために、今も働いている。そしてその働きに、我々キリスト者を、神の国の民として招いてくださったのである。

#### おわりに

我々は、創世記 1 章の著者が、本当に言いたかったことはどのようなことだったのか、その問題を追究してきた。 今回の講演は、この辺で終わらねばならない。しかし、まだまだ考えねばならないことがたくさんある。このことは、 次週の講演でさらに深めていく。最後に、この講演が、従来の創世記 1 章の解釈と異なる点について、はっきりさ せておこう。次週の講演は、以下の点を前提に進めていくことになる。

第一は、創世記1章は、「宇宙の創造」ではなく、「世界の創造」に関する啓示だということである。多くのキリスト者は、創世記1章は、神は、宇宙の創造の出来事を、それが起こったとおりに啓示してくださった、と思っている。その結果、歴史的、科学的に正確な記述だと、考えている。しかし、そのような前提に立って創世記1章を読むと、たくさんの矛盾が生じる。その前提を変えねばならない。創世記1章の著者が、自分の生活体験に基づいた世界を、聖霊に導かれて書き記した、と。

第二は、著者は、古代中近東に生きた同胞イスラエルの民に、彼らが理解できるように記述した、ということである。神の民は、多くの点で、古代中近東の人々の文化を共有していた。神への信仰にとって対立するような事項は、避けねばならない。しかし、そうする必要のないものもたくさんあった。著者は、そういう事柄についてはそれをそのまま受け入れ、啓示の手段として用いた。そうしない限り、同胞の民と有効なコミニケーションを取ることはできなかった。

第三は、安息日神学でまとめたことである。神は十戒の安息日の戒めの中で、六日間働き、七日目に休まれたと啓示された。その啓示に基づき、著者は、自分の見る世界を六日間の働きに割り振りながら記述した。古代中近東の人々は、宇宙の起源や生成過程については関心をもっていなかった。彼らは、どの神がどの領域を支配しているのかという点を問題にしていた。そういう背景を共有していた神の民イスラエルに、著者は創造の記録を書いたのである。

第四は、表現技法を巧みに駆使したことである。普通、創世記1章は、散文体であると言われる。その結果、歴史的な出来事が、忠実に描かれている、と考えられてきた。しかし著者は、ヘブル詩の平行法、三連詩、言葉遊び、キアスムス構文などの文学的な技法をふんだんに使っている。全体をきれいに7の数になるようにまとめたり、5+2で7になるようなイレギュラーな方法など、著者特有の表現技法を巧みに織り交ぜながら筆を進めている。この創造の記録は「詩的散文体」と呼ばれるほど特異なもので、従来の文学類型では当てはめきれない文書だと言ってよい。

第五は、神からの啓示的内容を、神の創造のわざに調和させながら見事に描写している、ということである。唯一の神と被造物との関係、創造のわざの進め方、神の霊の活動、三位一体的奥義、人間の本性と使命、安息日と神のわざの関係などは、神の啓示なくしては知りえないことだった。著者にとっても、時に理解しがたいことはあったことだろう。そういうことであっても、著者は示されるままに記したのである。

#### 被造物管理の神学講演9(A-9)

2014年4月23日 大野キリスト教会献堂記念講演(2)

# A. 自然

# 9. 宇宙創造の全貌に迫る

## (聖書全体が明らかにしている宇宙創造の奥義)

#### はじめに

大野キリスト教会は、新会堂献堂記念講演会として、3回の神学講演シリーズを企画した。今日は、その2回目である。このような講演の機会が与えられ、心より主に感謝する。この講演会には、キリスト者だけでなく、ノンクリスチャンの方々にも参加していただきたいと願っている。取り上げるテーマは、「科学と神学」のテーマであるが、誰にでも分かるように話すつもりである。

最近、宇宙に関するいろいろな講演会やサイエンス・カフェに出かけ、有名な専門家の話を聞く機会に恵まれている。どなたの話を聞いても、とても分かりやすい。もとより素人の私である。専門的なところまで、正確に分かるとまではいえない。だが、講師が言わんとすることは、ほとんど理解できる。大抵は、難しい言葉を使わず、順序立てて話されるからである。自分も、聖書や神学の話をするとき、そんなふうに話したいと思っている。

先週の講演では、「世界はどのように造られたのか」というテーマで話した。創世記 1 章を、できる限り先入観を もたずに読むよう努めた。かなり斬新なアプローチをした。神の視点に立ち、時系列的な読み方をするのではない。古代中近東に生きた著者の観点に立ち、安息日神学に基づいて読むのである。この点について簡単におさらいし、今日はさらに奥深く、「創造の世界」に踏み込みたい。

創世記1章は、すべてのキリスト者が親しんでいる。それだけではなく、キリスト教の世界を飛び越え、人類にとっての宝物である。世界の創造に始まり、人間の堕落をとおって、ノアの洪水からバベルの塔に至る一連の物語は、人類文化史の金字塔といってよい。これほど大きな影響を与えた文学は、この世界にない。世界文化遺産の筆頭にあげられてもおかしくない。

ところが、この創世記 1 章のメッセージを正しく受けとめている人は少ない。一般の人々は、古代中近東の神話だと思っている。世界のベストセラーの冒頭部分だからと、何となく畏敬の念はもたれている。だが、実際に手に取って読む人は少ない。

では、キリスト者の世界ではどうか。聖書の初めの部分なのだから、誰でも手に取って読み始める。科学的にはちょっと変だなと感じることもあるが、聖書だからきっと真理なのだろう、そんなふうに思って読み進む。何か自分の信仰に役立つ教えがあるに違いない、そんな期待をもちながら。

時々、すべてを文字どおりに解釈し、変に確信に溢れているクリスチャンに出会う。先日も、「一日」は 24 時間で、宇宙は記述どおりの順番で造られた、「種類に従って」という言葉は進化論を否定している、そう考えている牧師と話をした。神学校の教え子だったので、とても複雑な気持ちだった。

私の周囲は、こんな状況である。だから、創世記 1 章を、きちんと正確に読む必要がある。そう思い、先回の講演では、創世記 1 章のテキストを丹念に解説した。著者の言わんとするところを、できる限り正確に理解しようと努めた。

それを踏まえ、今日は三つの事柄を扱いたいと思う。

まず、創世記1章の解釈上の問題を整理する。著者や読者、資料の問題、物語として読むこと、著者の表現技

法、古代中近東の文化的背景、科学との関係、宇宙を神殿に見立てることなどについてふれる。

二番目は、宇宙創造に言及している創世記以外の旧約聖書のテキストを取りあげる。それぞれの文脈を尊重しつつ、創世記1章の創造と関連づけながら、解説する。

三番目は、新約聖書の中で、創造に関わりのあるテキストを取り上げる。

普段あまり考えることのない話題や聖書箇所が多くなるだろう。だが、未知の世界に踏み込む楽しさを味わってもらいたい。信仰が聖書の真理に近づき、奥行き深いものに変えられていくという体験をしていただきたい。信仰の歩みが豊かにならないような聖書や神学の学びは、やめた方がよい。どこかがおかしいのだから。

#### I. 創世記1章の解釈上の諸問題

先週の講演では、創世記1章の本文を解説した。通常の聖書研究では、本文に入る前に、著者(編者)は誰か、 想定される読者はどのような人か、資料は使われたのか、全体はどのような構造なのか、そういう問題を扱う。それ は、聖書学上では緒論問題と言われ、一般には、聖書本文の解釈には不可欠なものと考えられている。

ところが我々は、この種の問題をバイパスし、いきなり創世記 1 章の本文に取り組んだ。かなり無謀な読み方である。一般の書物でも、まず、著者のプロフィールやまえがき、あるいはあとがきなどを読む。冒頭の推薦文や巻末の解説などの予備知識から入れば、著者の執筆意図も理解しやすい。だが我々は、そういう手続きは一切省いた。いきなり本文にアプローチした。それには理由がある。従来の読み方はいずれも不十分なもので、誤った先入観になってしまう。そういう予備知識はない方がよい。そう確信したので、あえて直接、聖書本文に向かった。

例えば、創世記1章の著者問題を取り上げてみよう。

学者の間では、大きく分けると、紀元前14世紀のモーセ説と紀元前6世紀頃の祭司説とに分かれる。どちらの説に立つかで、本文の読み方はかなり違ってくる。一方、読み方次第で、著者が誰であるかが決まってくる。まさに循環論法の世界である。前者を取れば、伝統的な保守的立場となり、結局伝統的な読み方になる。後者を取れば、現代の聖書批評学の立場となり、本文をいくつかの資料に分類して解釈することになる。

どちらの意見にも、それぞれの言い分がある。本当は、両方の主張を客観的に学び、それからそれぞれの読み方をじっくり比較するのがよい。そうすれば、どちらかの立場に納得するだろう。あるいは、どちらの立場にも納得できないかもしれない。そのときは、第三の道を探せばよい。ただ我々には、そんな時間的余裕はない。とすれば、どちらの意見にも加担せず、いきなり本文に向かわざるを得ない。実は、創世記1章の緒論問題がどうであっても、著者が言わんとする趣旨は、概ね理解できる。というわけで、先回の講演では、いきなりテキストそのものの解説を試みた。

#### 1. 著者、読者、構造などについて考える

創世記には、たくさんの物語が出てくる。世界の創造に始まり、最初の家族の誕生、人間の堕落、兄弟間の殺人事件、洪水による神の裁き、バベルの塔事件、アブラハムの生涯、イサクの生涯、ヤコブの生涯、ヨセフの生涯等々である。創世記全体は、神が「一つの家系」を選び、導かれた「神の物語」である。

この創世記に、興味深い一つの言葉が11回出てくる。ヘブル語の「トレドート」で、その後に続く記録のタイトルになっている。トレドートのタイトル、聖書箇所、及びその内容は以下のとおりである。

(最初のタイトル「初めに神は天と地を創造された」、1:1-2:3、七日間にわたる創造の記録)

第一のトレドート「天と地が創造されたときの経緯」、2:4-4:26、エバの創造、堕落、カインとアベル

第二のトレドート「アダムの歴史の記録」、5:1-6:8、アダムからノアまでの系図

第三のトレドート「ノアの歴史」、6:9-9:29、洪水による神の裁き

第四のトレドート「「セム、ハム、ヤペテの歴史」、10:1-11:9、ノアの子孫の系図、バベルの塔

第五のトレドート「セムの歴史」、11:10-26、セムからアブラハムまでの系図

第六のトレドート「テラの歴史」、11:27-25:11、アブラハムの生涯

第七のトレドート「イシュマエルの歴史」、25:12-18、イシュマエルの系図

第八のトレドート「イサクの歴史」、25:19-35:29、イサク及びヤコブの生涯

第九のトレドート「エサウ、すなわちエドムの歴史」、36:1—36:8、エサウの生涯 第十のトレドート「エドム人の先祖エサウの系図」、36:9-37:1、エサウの子孫の系図 第十一のトレドート「ヤコブの歴史」、37:2-50:26、ヨセフの生涯

では、このトレドートについて、いくつかのコメントを記しておこう。

第一は、トレドートの意味である。トレドートの語源は「ヤラド(生まれる)」で、「生み出されたもの」を意味する。例えば、11章 27節に「テラの歴史(トレドート)」というタイトルが出てくる。普通、「テラの歴史」といえば、テラ自身の歴史が書かれる。ところが、その聖書箇所(11:27-25:11)は、テラの息子アブラハムの生涯である。テラについては、その直前の11章 24-26節に出てくるのみである。結局「テラのトレドート」とは、「テラが生み出したもの」という意味で、「テラの息子アブラハム」を指す。すると、「テラのトレドート」は、「テラの歴史」ではなく、「アブラハムの歴史」と訳す方が実態に合う。

第二は、最初の「創造のタイトル」には、トレドートがないことである。トレドートが最初に出てくるのは2章4節で、それは、2章4節から4章26節までのタイトルである。すると、1章1節から2章3節の記述には、トレドートのタイトルがなかったことになる。すると、創世記は、トレドートのない天地創造の資料を含め、初めから12の資料で構成されていたのか、それとも、資料はもともと11しかなく、それをまとめた編者が、最初に創造の話をつけ加えたのか。どちらでもよさそうなこんな問題を、旧約聖書の研究者たちは、喧々諤々の議論をしている。

前者であれば、最初の資料は天地創造の話で、天地創造以前の出来事はないわけだから、トレドートを使いたくても使えなかった、という理屈になる。後者であれば、資料の編纂者が、アダムの創造から創世記が始まるのは 唐突だと感じ、アダムが造られるまでの経緯を追加した、ということになる。どちらであっても、証拠があるわけではない。解釈上にも、さしたる影響はない。

どちらがよいのか、皆さんの判断で結構である。理系の問題とは違い、この種の問題の正解は一つではない。 ものは考えよう、なのである。そんな無意味なことに時間を使いたくない、そういう人がいれば、それも立派な答え である。専門家は、しばしばどちらでもよいことに無駄なエネルギーを使う。時々大当たりで、思いもかけない益を もたらすことがある。そういう世界なのだ(笑い)。

第三に、これらのトレドート(資料)は、何の目的で、誰によって、どのように保管されてきたのか、という問題である。近隣のメソポタミアやエジプト社会では、似たような話がさまざまな形で継承されてきた。大抵の話は、家系の秘話として、親から子へ、子から孫へと口頭で伝えられた。しかしあるものは、途中で文書の形で保存されるようになる。一口で資料というが、民族の伝承叙事詩、宗教行事の典礼文書、管理的役人たちのさまざまな記録、学校の教科書、図書館の蔵書、商取引の契約文書、法令上の文書、支配者の統治記録や戦勝記録、日記類など、いろいろなものがある。粘土板もあれば、パピルス文書、さまざまな種類の碑文など、伝承の形もさまざまである。

ただ、神の民イスラエルの場合は、不明なところが多い。特に出エジプト以前の族長時代に関していえば、創世記に暗示されているもの以外、直接的な資料は見つかっていない。

四番目に、これらのトレドートの編者は、手を加えずそのまま編纂したのか、それとも編集作業を経て現在の形態にまで仕上げたのか、という問題である。我々が手にしている一つ一つのトレドートは、内容も表現もきわめてバラエティーに富んでいる。誰かによって統一された形跡はない。受け継いだものをそのまま合体させた、そう考えるのが自然である。たとえ手が加えられたとしても、ごくわずかだったろう。編者のもとに集められる前の段階では、さまざまな手が加わえられたかもしれない。しかし、いったん編者によってまとめられたなら、その後は大きな変更はなされなかった、と考えてよい。

五番目は、編者がまとめた 12 の資料集の最初の読者は誰だったかという問題である。ある文書が生まれてくるのは、その文書を必要とする人々がいたからである。そういう背景が無いなら、創世記に限らず、いかなる文書も世に出てくることはなかった。天地創造、人類の発生、ノアの洪水、バベルの塔、族長たちの歩みなどを振り返り、民族のアイデンティティーを必要とした人々は誰だったのか。モーセと共にエジプトを脱出し、約束の地を目指していたイスラエルの民だったのではないだろうか。彼らは、先祖が信じてきた神は部族的な神ではなく、天地の創造者であり、唯一の神であることを確認する必要があったのである。

六番目に、12 の資料の編纂者は誰だったのか、という問題である。私は、イスラエルの民に十戒を与えたモーセだったと思っている。ユダヤ人の伝統的な理解、キリスト教神学の総合的な解釈、古代中近東の文献学的な考

察からの結論である。少なくとも、そう考えて不都合なことは何もない。むろんモーセというとき、モーセ個人に限定する必要はない。モーセの側近が、モーセの監督のもとに、モーセの名で編纂し、モーセの権威で公刊した、ということである。しかも、創世記 1 章に関していえば、その時以降の伝承過程で、その表現に多くの工夫が加えられてきたのではないかと考えている。この工夫は、一般に言われる文学類型とか文学技法とは違う。むしろ、「表現技法」とでも呼んだらいいのではないかと思っている。

18 世紀に起こった聖書批評学は、神の名前の違いを基に、モーセ五書を JEDP と呼ばれる資料に分析した。 むろんその方法論には、聞くべき事柄がたくさんある。だがそれは、合理主義的考えに固執し過ぎるきらいがあり、 古代中近東の文献を扱う方法としては違和感を覚える。むしろ、最近の「物語批評」のアプローチに、私自身は親 和性を覚えている(この物語批評については、次の項目でふれる)。資料分析を鵜呑みにせず、表現技法のレベ ルで扱う方が、歴史の真実に近づきやすいと考えている。

七番目は、解釈原理の一貫性という問題である。保守派のあるグループは、次のような議論を展開している。12章から50章までの歴史性を信じるのであれば、1章から11章までの歴史性も信じなければならない。とすれば、11章までの系図は文字どおりに受け取るべきである。1章の「一日」も、むろん24時間を指す。これらの年代を合算すると、宇宙創造の年代は紀元前4,000年頃になる。聖書は神の啓示で間違いないはずだから、その字句は文字どおりに受け止めねばならない。これが解釈の一貫性ということである。教会がその原則から逸脱することは、背教を意味する、というのである。

この講演を聞いておられる皆さんの中には、このような考えを教えられ、そのように信じてきた方々がいらっしゃると思う。いわゆる「創造科学」という考え方である。これは福音主義にとっては大切な問題である。時を改め、時間をじっくりかけて話させていただく。今は、トレドートの問題に留めて話しておきたい。

トレドートの一つ一つは、それぞれいろいろな背景の中で生まれ、継承されてきた。従って、すべてのトレドートは散文体であるから歴史的に正しい、それゆえ文字どおりに解釈しなければならないという主張は、乱暴すぎる。すべてのトレドートの文学ジャンルは一つではない。従って、一つの解釈原理を当てはめるというのは無謀である。一つ一つのトレドートを細かく検討し、それぞれにふさわしい解釈法を見極めねばならない。加えて、創世記に編纂されたトレドートは、イスラエル民族の中で継承されてきたごく一部のものである。このような情報のみで、宇宙の始まりから人類史のすべてをカバーする歴史を構築することは無理である。イスラエル民族の中に継承されてきたトレドートは、神がモーセ時代の民に語られた「神の物語」である。その視点から、創世記1章を読まねばならない。

ここで、この講演をお聞きの皆さんに、一つのことをチャレンジしていただきたい。何人かの仲間をつくり、創世記の12の資料の一つ一つを取り上げ、ああでもない、こうでもないと自由に話し合って楽しんでいただきたい。専門の辞書や註解書、参考書や説教集などを参考にすることは構わない。だが、必ずしも必要ではない。聖書自体を、多くの目で一緒に読むのである。どんな発想、感想、意見、コメント、疑問も大歓迎。フリートーキングで、仲間との交わりを楽しんでほしい。

司会者は必要だが、教師はいらない。皆が同列で、ワイワイ、ガヤガヤとやるのがよい。できれば、古代人、イスラエル民族の一員になったつもりで話し合うのがよい。意見の違いが出たら、そのままにしておくのがよい。分からないところが出てきても、宿題にしておけばよい(意外と誰かが、翌週には調べてくるものだ)。とにかく、他の人の読み方を尊重し、自分と違う考えに耳を傾けることだ。そうすると、聖書の面白さを経験できる。イスラエルの民は、長い間そういう読み方をしてきた。現代のキリスト者が追体験できたらすばらしいと思う。

## 2. 神の物語として読む

聖書を理性的・合理的に研究する学問を聖書批評学という。それは 18 世紀後半に始まった。最初はプロテスタントの世界で盛んだったが、その後カトリックの世界にも多大な影響を及ぼした。19 世紀は、聖書の各書物の資料分析が中心だった(これを「資料批評」という)。20世紀になると、その資料の文学様式が問題にされ、資料が生み出された背景(生活の座—Sits im Leben)を探る研究へと発展した(これを「様式史批評」という)。さらに20世紀の半ばになると、それぞれの資料をまとめた編集者の意図(神学とも言われた)を探る研究が盛んになった(これを「編集史批評」という)。

この編集史批評をもって、聖書批評学は一応の完成を見たかのように思われた。ところが、その学問は 1980 年頃から思わぬ方向へと進展した。「物語批評」という、全く切り口の違う聖書の読み方を模索し始めたのである。私は、注解書を書く必要があり、1990年代の後半から 10年間、アメリカ、ヨーロッパ、オセアニア、アジアなど世界中

の聖書学に関連する学会のほとんどに参加した。当時は、どこに行っても「物語批評」の話題で持ちきりだった。 最初は新約聖書、特に福音書からだったが、瞬く間に旧約聖書にまで広がり、今では聖書全巻を「神の物語」とし て読むことが常識のようになりつつある。

最初聖書批評学に懐疑的だった福音派の学者たちも、編集史批評あたりから共通の基盤を見出すようになった。そして、物語批評になると、「わが意を得たり」というところもあり、むしろ福音派が中心になって推し進めるという様相を呈するようになった。むろん、今でもその流れに乗ることを警戒する福音派の学者たちもいる。だが、時代の流れは想像以上に早く進んでいる。そういう意味では、聖書批評学の歴史は、学問がたどる道に対し、多くの示唆を提供する。

これまでの福音派の神学校では、聖書の正しい解釈とは、歴史的、文法的、文脈的に理解することだった。聖書には、神の真理が啓示されている。それを知的にきちんと把握しなければならない。神は真理なる方である。だから啓示もまた、すべてを理解すれば、真理であることが分かる。神のみ言葉に仕える牧師は、この真理を明らかにする責任がある。それが説教であり、聖書研究である。そんなふうに教えられてきた。

しかし、ここにきて、新しい問題が投げかけられている。聖書は、歴史的事実を伝える目的で書かれたわけではない。キリストの救いを提示し、その応答を求めるために記された。ところが教会は、その聖書を歴史の書、教えの書に変えてしまった。ギリシャ哲学の嵐にさらされたからである。教会は、ギリシャ哲学に対抗し得るキリスト教哲学の構築を迫られ、宗教、歴史、哲学、科学の教科書として聖書を利用するようになったのである。その後キリスト教神学の中で問題になる「聖書の正典性」、「無謬性」、「解釈学」、「批評学」などは、皆この延長線上で論じられることになる。

しかし、実は、歴史を正確に書くことはできない。Dicta(記述したもの)は、人間の記述である限り、Facta(起こった事実)ではない。Dicta は、Facta を解釈してできあがったものである。我々は、ストレートに Facta には近づけない。Dicta を通してのみ、Facta に近づくことが可能である。だから、Dicta の性格を見極めることが、何よりも重要なことになる。

もう少し、分かりやすく話してみよう。

今年(2014年)の1月7日のことである。ハーバード大学マーシャル・ガンツ教授による「どうアプローチしたらいいのか。僕の中でいま方法論がなくて」というテレビ番組を見た。ガンツ教授が、共に働く人々を見出せずに困っているリーダーに答えていく、という番組だった。教授は、示唆に富む言葉を次から次へと発信していった。

人と人をつなぎ、新たな活動の輪をつくるのは、「自分の物語」を語ることにある。

状況を分析し、必要を訴えても相手に活動する勇気やきっかけを与えることはできない。

人々に行動を促すのは、理念ではなく感情に響いたときである。

大事なのは、その人を突き動かす動機である。

自分だけで何でもやろうとするのは、良いリーダーではない。

リーダーとは、目的を達成するため仲間を募り、彼らが力を発揮できる環境を整えることにある。

リーダーは、その根底にある価値観を言葉で表し、相手と共有しなければならない。

そのためには、「自分の物語」を語ることが不可欠である。

初め私は、この番組を説教者、あるいは牧師として見ていた。そのときは、面白い番組ではあったが、特別な感動はなかった。行動心理学やリーダーシップ論で既に語りつくされてきたことに過ぎず、目新しいことは何も無い、そう感じていた。出演者たちは、「自分の物語を語る」というアドバイスに感動しているようだった。でも、それも自分の経験から分かっている、そんなふうに思いながら見ていた。

ところが、ふと、とんでもない考えが頭の中をよぎった。もしかすると、神様も同じような行動を取られたのかもしれない、と。神はこの世界を創造された。そして、その世界を共同管理させようと、人々を招いている。自由意思をもつ人間が、自発的に、喜んで応答することを求めている。そのため神は、ご自分の物語を語り、人々に呼びかけているのではないか。それが聖書ではないのか・・・。

確かに、他人を動かすのに、自分の物語を語ることは有効である。これは、人間にとっての「普遍的な原理」かもしれない。とすれば、神が人間に応答を求めるとき、この原理を使っているはずだ。無視されるはずはない、そ

んなふうに思えてきたのである。

これまでキリスト教界の中では、聖書は真理を明らかにしている書物だと見なされてきた。だが、この番組は私に、違う聖書の見方に気づかせてくれた。従来の聖書の真理性にこだわる読み方は、見当違いのことをしているのかもしれない。もし聖書が歴史書であるなら、歴史的に正確な記述をしていると期待して読むべきだろう。だが、もし神が、聖書をとおして、我々を神の救いや働きに招いているとすれば、神は我々に、「神の物語」を語っているのかもしれない。人間の行動原理を一番よくご存知なのは、神である。もしそうだとすると、神は、宇宙の創造のプロセスやイスラエルの歴史、イエスの生涯や教会の歩みを、歴史の事実として教えようとされたのではない。少なくともそれが主なる目的ではない。人をキリストの救いに招くために、聖書は記述された(ヨハネ 5:39-40、II テモテ3:15)。とすれば、神は、聖書に「神の物語」を記し、人間に応答を求めたのではないだろうか・・・。

聖書には「神の物語」が記されている。それは、聖書をとおし、神の招きに応答させるためだった。聖書がそのような目的の書物であるとすれば、聖書を読むとき、歴史や科学や教理の整合性を問題にすることは、愚かなことではないか。この点については、牧師の説教を例にして話すと、理解しやすいかもしれない。

説教とは、人々に神の招きに応じるように語られた「牧師の物語」である。牧師は、物事をできる限り正確に話すように努力はしている。しかし、会衆に合わせて話すことはもっと重要である。人々に感動を与え、神に応答するよう求めるのが説教だからである。そこでは「私の物語」が重要な要素になる。客観的な真理ではない。そのような目的をもつ説教に、正確な科学や歴史を語るよう求められるなら、悲劇に陥ることになろう。無誤性が求められることなど、まさに論外である。聞き手あっての説教だからである。

聖書記事を「物語」と表現するのは、出来事を聴き手に意味あるものとして、分かりやすく伝えたいからである。物語的に読む場合、その出来事が実際にいつ、どこで起こったかは、さほど大きな問題ではない。例え話との境界線も、極めてあいまいなものになる。取税人ザアカイの話とレプタ二つをささげた婦人の話は、よきサマリヤ人や放蕩息子の話としばしば同レベルで語られる。ルカ 16 章のラザロの話になると、史実なのか、たとえ話なのかは、はっきりしない。旧約聖書では、ヨナの話、ヨブの話、ダニエルの話、エステルの話などになると、教訓的意図と史実との間に微妙な問題が起こる。否、このような聖書記事に史実性の問題を持ち込むこと自体が、問題なのである。神が人に応答を求めるために語られた「神の物語」と理解すれば、そういう問題意識そのものが現代的で特殊なものであることに気づく。

高校生時代のことである。聖書を読んでいたら、「こうして、日は天のまなかにとどまって、まる一日ほど出て来ることを急がなかった」(ヨシュア 10:13)という文章に出会った。とてもびっくりした。たった一日であっても、否、一日だからこそ、地球の自転が止まることなどあり得ない、そう思って、信仰の先輩に聞いてみた。すると、そういう疑問をもつこと自体が神に対する不信仰だと叱られた。そして、『聖書と科学』という書物を貸してくださった。そこには、世界史の資料の中には「失われた一日 (missing day)」があったことを示唆する歴史的証言が紹介されていた。もしそうであれば、遠心力によって地球上のすべてのものがどこかに飛んで行ってしまうのではないか、そういう私の疑問には答えていなかったが。

その後、それに続く「主がイスラエルのために戦ったからである」という文章から、神の戦いによって二日分の戦果があったという詩的表現だと教えられた。もっと早く教えてくれればこんなに悩まなくてもすんだのに、と恨みがましい気持ちになったことを鮮明に覚えている。詩的な表現と読むと、この箇所で神が言いたいことはよく分かる。そんな経験をとおして、科学とか史実を問題にしながら聖書を読むことの間違いを教えられた。キリスト者は、「神の物語」という聖書の本性を理解して、聖書を読む必要がある。そこから外れると、神の意図から逸脱し、問題でないことを問題にしてしまう危険性がある。

「物語」という言葉に、違和感を覚える人があるかもしれない。しかしそれは、キリスト者にとって特別なものではない。牧師の説教は、聖書を物語的に読んで話すのが普通である。キリスト者が毎朝のデボーションで聖書を読むときにも、実は聖書を物語的に読んでいる。個人やグループで行う聖書研究も、自分の益を求めている場合には、同じである。批評学の書物を参考にしたり、無誤性を基に議論することは、キリスト者にとっては異常なことなのである。神の民としての普通の読み方は、聖書を神の物語として読むことなのである。

むろん、物語的に読むときには、ある種の注意が必要である。読む人の考えや気持ちが過剰に入りやすい、ということである。人は、探しているものを見出すものである。だから、本当にそのようには言っていなくても、そう読

めてしまう、ということは少なくない。聖書の話の流れや聖書が語ろうとしている意図を飛び越え、自分の考えや主張を語らないように気をつけることは必要である。そのような行き過ぎをさせない力は、結局常識のセンスである。

この講演の目的は、創世記 1 章の世界創造の記録をどのように読んだらよいのか、ということにある。これ以上の聖書論の問題に踏み込むことは、今日の講演の趣旨から外れる。次回の講演でもう少し詳しくふれる。今日はこの辺でやめ、先に進みたい。

聖書全体は、一つの物語としての構造をもっている。創世記 1-2 章は、聖書全体の序論となっている。それに対し、ヨハネの黙示録 21-22 章は、結論部分を構成している。エデンの園には新しい都エルサレムが対応し、神が人とのすばらしい交わりをもっていることを描写している。今ある世界をスタートにして、新しい世界において完成する。その間に展開される出来事は、神が全人類を贖う御業に他ならない。この序論と結論を踏まえ、旧約聖書、モーセ五書、創世記、創世記1章へと、次第にフォーカスを絞って読んでいくのがよい。

ここではまず、「神の物語」という視点に立って創世記全体の流れを整理し、その後創世記1章に進もう。

創世記全体は 11 のトレドートから成り立ち、1 章はそれに追加されたものである。これらのトレドートの内、第二のトレドート(5:1-6:8) はアダムからノアまでの、第四(10:1-11:9) はノアの子孫の、第五(11:10-26) はセムからアブラハムまでの、第七(25:12-18) はイシュマエルの、第十(36:9-37:1) はエサウの子孫の系図である。11 のトレドートの内の 5 つが系図であるということは、神は一つの家系、一つの民族に大きな関心をもっていたことを示唆する。神はある家系を、神の贖いの中心になる「神の民」へと招かれたのである。

その系図の合間合間に、神は、人類と関わったさまざまな物語を話してくださった。1章1節から2章3節までは、神が六日間で世界を創造し、七日目に休まれたという「創造物語」である。その七日目は、今も続いている。つまり神の「創造物語」は、現在進行形の出来事なのである。この点は、本項目の六番目「神殿を宇宙支配の拠点として読む」において詳しくふれる。

続く2章4節から4章26節の最初のトレドートは、アダムとエバが造られ結婚したこと、二人がサタンの誘惑を受け神に反逆してしまったこと、カインが弟のアベルを殺してしまうという忌まわしい事件を語っている。これは「人類最初の家族物語」である。

三番目のトレドート6章9節から9章29節は、神が堕落しきった人間を洪水によって滅ぼされたこと、その中で、 ノアとその一家を救われたことを伝えている。これは「人間の堕落に対する神の裁き物語」である。

六番目の 11 章 27 節から 25 章 11 節までのトレドートは、アブラハムの生涯を描いている。アブラハムは、神の友と呼ばれるほどだった。神も、彼についてはたくさんのことを話したかったに違いない。これは「神の友アブラハムの信仰物語」である。

八番目の25章19節から35章29節のトレドートは、イサクとヤコブの生涯を描いている。神がこの二人の族長をどのように扱われたのかは、実に興味深い。これは、「約束の子たちの試練に出会う物語」である。

続く九番目の36章1-8節のトレドートは、エサウの生涯を語っている。「傍流の人々の信仰物語」である。

最後の十一番目のトレドート 37 章 2 節から 50 章 26 節は、ヨセフとその兄弟、さらに父ヤコブの歩みを伝えている。神が神の民に試練を乗り越えていくために、どのように関わっていくのかを明らかにされた「万事を益とされるヨセフの物語」である。

物語であれば、モチーフがある。創世記全体のモチーフは、「神の民が増え、広がる」ということだった。1 章 28 節で、神はアダムに対し「産めよ、増えよ」と述べている。同じ祝福の言葉が、洪水後のノアに対しても(9:1)、アブラハムに対しても(12:2-3)、イシマエルに対しても(17:20)、イサクに対しても(26:3-4)、ヤコブに対しても(28:3、48:3-4) 語りかけられている。これは、出エジプト記に入っても続く。神が人類を祝福し、人類は大きく広がり続けている(出エジプト 1:7、12)。また神は、カナンを前にしたイスラエルの民に、彼らが約束の地で増え続けることを確認している(申命記 7:13-14、30:16 参照)。

創世記1章の「神の物語」は、神が万物の創造者であることを伝えている。神はその創造のクライマックスとして 人間を造られた。神のかたちに造り、被造物を共に管理させようとした。人間以前の創造物は、人間生存に役立 つように造られた。古代中近東の人々が神々として恐れていた太陽、月、星などは、神ご自身が創造し、支配して いる。従って、恐れる必要は一切ない。メソポタミアの人々が神に反逆したと信じていたレビヤタンさえも、海に生 きる被造物の一つに過ぎない。 神の創造のわざは六日間で終わった。七日目になると、神は休まれた。休まれたというのは、疲れて寝りについたというイメージではない。創造のわざは完成し、そこからは解放された。それゆえ、神の働きは新しい段階を迎えた。完成した被造物を管理するという、新しい任務に就任されたのである。七日目は未だ終わっていない。ということは、その働きは今も継続中である。以上が、創世記1章の「神の物語」である。

## 3. 表現技法を考慮しながら読む

神は、「神の物語」を語るため、聖書記述者を用いた。神によって立てられた記者は、その物語をどのような文学ジャンルで著わすのか、決める必要があった。文学ジャンルには歴史、法律、説教、系図、伝記、劇文学、詩歌、格言、祈り、典礼賛歌、預言など、いろいろあった。歴史といっても、さらに民族伝承、家系秘話、民俗史、救済史、王制史、戦争史、教訓史、祭儀史などに分かれる。ジャンルごとに、内容も書き方もさまざまだった。

アメリカのある学会で、創世記 1 章が散文体か詩文体かをめぐって、激しい論争が展開された。散文体であれば歴史的・科学的な事実として読まねばならない、詩文体であればその限りではない、そういう問題意識がこの論議の背景にあった。例えば、出エジプト記14章は散文体である。それゆえ、そこに記述されているエジプト脱出の出来事は、歴史的事実である。一方 15 章の方は詩文体である。従って、記述をそのまま史実と解釈する必要はない。このような議論が延々と展開された。

とても面白い論争だったが、何か違和感を覚えた。大体、散文体か詩文体かは、いつでも明確に区別できるわけではない。また、区別できたとしても、散文体であるから歴史的事実をそのまま伝えている、詩文体だとそうではない、などと簡単に割り切れるものではない。確かに現代においては、歴史を詩文体で書くことは珍しい。しかし、古代の文書では、そうとは言えない。イスラエルの歴史が神によって導かれたことを歌っている詩篇は、たくさんある。歴史的な出来事が口頭伝承されるときには、ほとんど詩文体である。詩文体だと歴史的に正確ではないというのは、現代的センスでの歴史理解である。

創世記 1 章が散文体で書かれていることは、明らかである。詩文体と見なす学者はいない。問題は、散文体であるにもかかわらず、さまざまな表現手法が随所に出てくることにある。従って、ある学者は「詩的散文体」などと言い始めている。文学の卓越性は、比喩的な表現やさまざまな表現技法の使い方にかかっている。そのような表現技法が用いられているのは、詩文体の世界だけではない。散文体においても、ふんだんに用いられている。創世記 1 章は、典型的な例である。

創世記 1 章には、たくさんの表現技法が出てくる。6 節の「大空」は、詩的な文章の中でよく使われている単語である(ヨブ37:18、詩篇19:1、150:1、箴言8:28、哀歌4:19、エゼキエル1:22、23、26など)。また、「ブレシート(初め)」と「バーラー(創造する)」、「トーフー(茫漠)」と「ボーフー(準備が整っていない」、「バーラー(創造)」と「バラク(祝福)」などの「言葉遊び」が頻繁に見られる。「キアスムス構文」やヘブル詩の「平行法」の用例もたくさん登場する。

詩篇 104 篇は詩文体である。創世記 1 章と同じように、世界の創造について歌われている。だが、その内容は驚くほど似ている。創世記 1 章は散文体なので、歴史的・科学的に正確である。しかし、詩篇 104 篇は詩文体なので、そうとは言えない、そんな評価を下されたら、創世記の著者も、詩篇の作者も目を丸くするに違いない。文学ジャンルや文学手法は、記述内容の歴史性とは関係がないのだから。

創世記 1 章の最も特徴的な表現技法は、安息日神学に基づいていることである。神は、十戒の四戒で安息日を守るよう定めた。この安息日の命令は、神が六日間で創造のわざを終え、七日目に休まれたことに基づいている(出エジプト 20:11、31:17)。1 章の記者は、この安息日の教えに基づき、世界創造のわざを六日間の枠組みの中にまとめたのである。

ただし、この創世記 1 章には、安息日という言葉は出てこない。出てくるのは、第七日目に神が完成されたとか、休まれたとか、聖とされたということである。この「七日目」という言葉が、安息日神学を表わすキーワードだった (2:2 に 2 回、2:3 に 1 回)。そして、創造の六日間を二つのフレームに分け、一日目と四日目、二日目と五日目、三日目と六日目を対応させた。この三日ずつに分けたのは、古代中近東の人々が、天と空と地の三つに分けて

考えるパターンに合わせたものである。

この安息日神学に基づく創造物語は、「7」という数字を巧みに使っている。例えば、神が被造物を生じさせるために語りかけた言葉は7回だった(4、7、12、16、21、25、27節)。その結果、神が命じられたとおりになるのだが、著者はそれを「そのようになった」と表現している。その言葉も7回繰り返されている(3、7、9、11、15、24、30節)。さらに神は、創造の段階を終わるたびに、「よしとされた」と満足感を表明している。その是認の言葉も7回登場する(4、10、12、18、21、25、31節)。

「地(エレッツ)」という言葉は21回、「天(シャマイーム)」を表わす表現(大空(ラキア)を含む)も21回、「神(エロヒーム)」は35回出てくる。「名づける(カラー)」は5回しか出てこないが、「祝福する(バラク)」が2回加わって合計7回になる。第一日には「光(オール)」が5回、「やみ(ホシェイク)」が2回出てくるので、合計7回になる。2節に出てくる「水(マイム)」は二日目と三日目で7回、光に関するものが第四日に7回出てくる。

この 7 という数字は、ヘブル語聖書で使われる文字数にまで反映されている。1 章 1 節は、ヘブル語本文では 7 語で構成されている。1 章 2 節は 14 語なので、序論部分の合計は 21 語になる。それに対し、結論部分の 2 章 1-3 節は 35 語である。1 章 1 節から 2 章 3 節までは、全部で 469 語によって $(7 \times 67)$  記されている。

この「7」という数字が大切にされているのは、創世記 1 章だけではない。「神の物語」全体(聖書のこと)に及んでいる。本講演の趣旨からそれるが、興味深いことなので、紹介しておこう。

まずは、旧約聖書である。主の栄光はシナイ山の上にとどまり、雲は六日間、山をおおっていた。七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた(出エジプト 24:16)。モーセは、幕屋建設に必要な教えを七つにまとめて話した(出エジプト記 25:1、30:11、17、22、34、31:1、12)。この最後の 31:12-17 は、安息に関する教えである。祭司の任職の期間が終了する日までの七日間は、特別重要な期間だった。祭司職に任命されるには七日を要した(レビ 8:33-35)。祭司が病気からのきよめを確認するのにも、七日間が必要だった(レビ 13:5-6、なお 13:27、32、34、51、14:9、39 など参照)。

エリコ攻略にあたっては、七人の祭司たちが七つの雄羊の角笛を持ち、契約の箱の前に行った(ヨシュア 6:4)。七日目になると、朝早く夜が明けかかるころ、七度町を回った(ヨシュア 6:15)。神殿は七年で完成した(I列王記 6:38)。第七の新月の祭りがあった(I列王 8:2)。神殿奉献の際、ソロモンは七つの願いをささげた(I列王記 8:31-53)。七日間の祭りを祝った(I列王 8:66)。両軍は互いに向かい合い、七日間陣を敷いた。七日目になって、戦いを交えた(I列王 20:29)。祭りの七日間、傷のない七頭の雄牛と七頭の雄羊を全焼のいけにえとして、、七日間毎日主にささげた(エゼキエル 45:23)。

「7」の重要性は、新約聖書においても変わらない。ヨハネの福音書は、七つの奇跡を挙げている。パンの奇跡は、五つのパンと二匹の魚によって起こった(マルコ 6:38)。罪の赦しについては、七の七十倍が求められた(マタイ 18:21-22)。イエスの話には七がよく出てくる(マルコ 12:20-23)。十字架上のイエスの叫びは、全部で七つだった(ルカ 23:34、43,46、ヨハネ 19:26、28、30、マタイ 27:46)。エルサレムに入場されてから、復活までの最後は一週間、七日だった(マタイ 28:1)。復活後イエスが弟子たちに再び現れたのは七日後のことである(ヨハネ 20:26)。エルサレム教会は七人の執事を選んだ(使徒 6:3)。パウロの働きにおいても七は重要だった(使徒 13:19、20:6、7、21:4、27、27:27、28:14、)。黙示録は、七つの御霊 (1:4、3:1、4:5、)、七つの教会 (1:4、7)、七つの金の燭台 (1:12、2:2)、七つの星 (1:16、2:2)、七つの封印 (6:1)、七人の御使い (8:2、15:1、7、8、21:9)、七つのラッパ (8:2)、七つの雷 (10:4)、七つの鉢 (17:1)、七人の王 (17:9) など、七の数字のオンパレードである。

お分かりいただけただろうか。「7」はまさに、神の働きを象徴する数字だった。「神の物語」においては、神がそこにいますと、無言で語りかけている数字である。この事実を知って以来、日曜日の教会の礼拝に出席する意味が変わってきた。これまでの七日間、私の歩みの中で神が働き続けてくださったことを感謝する。そして新しく迎える七日間も、神が私の歩みを一つずつ導いてくださることに期待して祈る。教会の1時間の礼拝には、無駄なことは一つもない。だが、その中でも、この祈りをささげるときは、私にとって一番大切な時である。これが私の礼拝であり、この積み重ねが私の人生である。神は私の人生の中で「神の物語」を書いておられるのである。

### 4. 古代中近東の文化圏の中で読む

神は、「神の物語」を語られた。誰に対してか。神は、すべての人を愛され、すべての人を神の御国に招いている。しかり、神は、聖書の中に啓示された「神の物語」を、すべての人に向けて語られた。だから聖書は、古今東西を問わず、万人の書なのである。いつの時代の人が読んでも、読めば分かる、そういう書物である。辞書を引いたり、専門的な解説を聞かなければ分からない、というようなものではない。

聖書は、現在は一冊にまとめられている。ところが、もともとは違う著者により、異なった読者に向けられた 66 巻の書物だった。彼らが日常使っていた言語によって、その時代の世界観、歴史観、価値観の中で啓示されたものだった。

では、創世記 1 章の最初の読者は誰だったのか。もし著者がモーセか、モーセに近い人であったなら、その読者は、モーセと共に出エジプトを経験したイスラエルの民だったはずである。著者は、同世代、もしくはせいぜい次世代の人々を意識して書いた。数百年後の人々を念頭に置くことはなかった。

彼らは、アブラハムの子孫であり、その信仰の継承者だった。メソポタミアやエジプトの文化、宗教、伝統に囲まれながら、唯一真の神を信じる道に招かれていた。従って、彼らは、古代中近東の人々と宇宙観をはじめ、多くの文化的な事柄を共有していた。神を信じたからといって全く違う世界観や価値観をもっていたと考えるのは幻想である。中世のキリスト者は中世の文化的影響のもとで信仰をもっていた。近代のキリスト者は、近代の文化の中で、現代のキリスト者は現代の文化の中で信仰を育てている。信仰をもった結果、捨てなければならないものも確かにある。しかし、そのまま受け継いでいくものもたくさんある。この事実を踏まえずに創世記 1 章を読むと、結局現代人の感覚で聖書を読む間違いを犯すことになる。

メソポタミアとエジプトの文化的・宗教的状況はかなり異なっている。イスラエルの民がエジプト脱出を経験した時代、つまり紀元前 14 世紀前後は、どのような状態だったのか。

メソポタミア地方には、数多くの文献が発見されている。

まず、最も有名なのが、ギルガメッシュ叙事詩である。おそらく、2,500-2,000 年ぐらいの間に出来上がり、広く流布されていたと思われる。日本語にもいくつかの翻訳があり、手軽に読むことができる。ここでは詳しい説明は省かざるを得ないが、古代中近東の人々の世界を知るため、じっくり読むことをお勧めしたい。実は、お読みになると、聖書のすばらしさが分かってくると思う。

二番目に、ニップルから出土した紀元前 17 世紀頃の「エリドゥ創世記」を挙げておきたい。現存しているのはごく一部に過ぎない。そこには、人類の文明化が進んで騒々しくなったので、洪水によって裁かれる、という話が出てくる。ジウスドゥラ王がこの洪水についての警告を発し、船を作ったことが記されている。断片的な資料しか残されていないので、話の全体像はつかみにくいが、創世記理解にはとても役立つ。

三番目に、紀元前 17 世紀半ばの頃の「アトラハーシスの叙事詩」である。この話によれば、位の低い神々が働きに疲れてしまったので、その働きをさせるために人間を造ることになった。その人間の人口が増えて騒々しくなったので、人間は、災害、飢饉、洪水などによって滅ぼされてしまう。その際、動植物を船に入れて保護するところなどは、ノアの洪水に類似しており、大変興味深い。アトラハーシス以外にも救われた人々はいると思われるが、現存する資料からははっきり言えない。

四番目に、前 1,100 年頃と思われるバビロニヤの創造叙事詩「エヌマ・エリシュ」は、七つの粘土板から成るマルドゥク神の物語である。

マルドゥク神は、エア神とダムキナ神の間に生まれた。彼以前に生まれた神々、彼以降に生まれた神々が互いに争っている(第一の粘土板)。マルドゥク神は、反逆したティアマット神に勝利を治め、神殿の長に就任する(第二の粘土板)。その後大量の武器を手にしたマルドゥク神は、最終的な勝利者となり、ティアマット神の死体を引き延ばし、その上に世界を創造する(第三、第四粘土板)。マルドゥク神は、星、月、太陽などをつくって役割を与え、自らは神々の王に就任する(第五粘土版)。エア神は、ティアマット神のパートナーだったキング神の死体から人間をつくった。その人間が働くようになった結果、神々は働かなくなった。人間は、バビロン市をつくった(第六粘

土版)。マルドゥク神は、50人の神々を指名し、最高の神としてあがめられるようになった(第七粘土版)

なお、ウガリットの古代海岸都市から出土したラスシャムラなどの文献には、バアルの神々の話が登場する。これは、バビロニヤのマルドゥク神の話とはかなり違っている。

このようなメソポタミアの文献に対し、エジプトの文献はかなり趣を異にしている。聖書に関係しそうなものをいくつか紹介しておこう。

まず、メンフィス神学である。もともとは、3,000 年期半ばの古代王朝の時代につくられたものと推定される。それは、ピラミッド・テキストの創造物語に、メンフィスのプタ神を最高神として挿入して作り上げた話である。初めの創造神アトゥムも創造に関わっているが、この文献ではプタ神の方が創造のプロセスにおいて中心的な位置を占めている。

他に、ヘリオポリスの創造物語がある。この文献もまた、もともとは、ピラミッド・テキストやコッフィン・テキスト、死者の書などと深い関わりがある。最初の水の丘から創造神アトゥムが誕生し、そのアトゥム神の口から空気のシュ神と湿気のテフェネット女神が吐き出される。この夫婦の神々から地のゲブ神と空のヌトゥ神が生じる、という話である。

ヘルモポリスからの創造物語(コッフィン・テキスト)では、最初の水には、死、永遠、暗黒、不視の四つの性格がある。それぞれの性格には、一組の神々がついている。ヘルモポリスのトス神は、その8人の神々の頭になるわけである。ただし、その役割は不明なところが多い。

メソポタミアの方が、エジプトより混沌としている。マルドゥク神もエジプトのプタ神も、言葉によって創造を進めている。しかし、後者の方が、より言葉が中心になっている。マルドゥク神は創造を手で行っているが、エジプトのアトゥム神の方は自分の体から創造を始めている。前者は創造といってもよいが、後者は進化に近い感じがする。両方の世界とも、よく計画され考えられている点では共通している。

創世記 1-11 章は、バビロニヤの創造神話「エヌマ・エリシュ」と類似しているところがある。従って、聖書批評学者たちは、両者に依存関係があったと考えてきた。ところが、最近のアッシリア学の専門家たちは、むしろ、シュメールの王のリスト、アトラハーシスの叙事詩、エリドゥの創世神話との類似性により注目している。両者の間には、創造、王権の授受、洪水、新しいスタート、などのモチーフに共通性が見られるからである。といっても、両者に依存関係がある、というのではない。むしろ、創世記 1-11 章の読者たちは、このような類似した話をたくさん知っていたという前提で読むべきだ、と言いたいのである。そこには、神の物語が語られるための衣として用いられているものもたくさんある。チャレンジされていることもある。その両方を見極めながら「神の物語」を解釈することが求められているのである。

例えば、創世記 1 章に出てくる「水」が世界の原材料になること(2 節)、水が上の水と下の水に分けられたこと (7 節)、創造に区別するとか名づけるという言葉が使われていること(5、7 節)、太陽と月が大きな光る物と小さな光る物と言われていること(16 節)、星が、太陽や月より後に記されていること(16 節)、海の野獣が出てくること(21 節)、人間が「神のかたち」に創造されたこと(26 節)などは、当時の文献を理解するときに、新しい光をもって我々に語りかけてくれる。むろん、古代中近東の文化的な背景を一切知らなくても、「神の物語」を理解できる。しかし、もし知っているなら、より豊かなメッセージを受けることができるのだ。

創世記 1 章は、安息日神学に基づいて記されている。古代中近東の文献にも、聖書にも、創造の記録を七日間で完成したという記録は、この創世記 1 章以外にない。ところが、メソポタミアやウガリットの文献には、六日間活動し七日目に休むという生活パターンを示唆する記述がたくさんある。そのような生活スタイルは、異教的な背景をもっていた。神は、そのような生活のリズムを、イスラエルの民が出エジプトをしたとき、安息日の掟として与えた。それは、民が食物について不平を呟いたマナの事件の時だった。しかもその際、神は、ご自身が創造を六日で行い七日目に休まれた、という新しい意味づけをもって啓示されたのである。

バビロニヤの創造叙事詩「エヌマ・エリシュ」にも、宇宙の創造、神殿、休み、王としての支配など、一連の出来 事が描かれている。古代社会では、神が支配するための中心的な場所として神殿を建てた。神殿は神の住居で あり、王宮であった。王宮とは、休みの場所ではなく、支配業務をこなしていく場所である。神々にとっては、戦いが終わって王位に就いたなら、休みがあるのではなく、王位の職務が王宮で待っているということだった。このことは、宇宙を神殿と見立てていく考え方に通じていく(この点は、第六項において詳述する)。

## 5. 現代科学の問題意識を読み込まない

多くのキリスト者は、聖書は神の啓示であり、科学的にも正しいはずだと考えている。もし科学と一致しないようなら、聖書は信じるに値しない、そう思っている。従って、無意識のうちに、創世記 1 章を科学と調和させながら読む習慣がついている。

先日も、ある牧師が、創世記1章3節の「光よ。あれ」という言葉は、宇宙の起源のビッグバンを指している、と説教していた。彼はさらに、現代科学がビッグバンを発見する以前に、このような記述が存在すること自体、聖書が神の啓示であることを証明するとまで言い切っていた。神学校の教え子だったこともあり、後でそっと注意しておいたが、冷や汗ものだった。

創世記は、科学の教科書ではない。確かにそこには、神が世界を創造された事実が記されている。しかしそれは、宇宙の創造のプロセスを明らかにする意図で書かれたわけではない。著者は、自分の身の周りを眺めながら、この世界のすべてが神によって造られたことを描写したに過ぎない。彼は、その神の創造のわざを、安息日神学に基づいて描いた。同時代に生きる人々がそれを読み(あるいは聞き)、自分の信仰を確信するように、そして、心から神をほめたたえるようにと、記した。彼らが理解できないようなことは、できるだけ書かないように努めた。それは、当たり前のことだった。

著者と読者のこのような状況を踏まえず、創世記 1 章を現代科学の問題意識から読み取ろうとするキリスト者が、何と多いことだろう。もしそういうことを続けていくなら、ものごとをまじめに考える人たちから、聖書と信仰を遠ざけてしまう。即刻やめるべきだと思う。これまでの福音派の教会は、聖書は神の啓示であり、永遠・絶対・普遍的な真理を教えている、と信じてきた。科学が進めば進むほど、それは聖書に一致する、そんなふうに考えてきた。はっきり言おう。それは幻想である。

聖書を科学的に読むことがおかしいことについては、キリスト教神学では昔から気づいていた。古代の教父オリゲネス(185-254年)やアウグスティヌス(354-430年)でさえ、創世記1章の一日目に光が現われて昼と夜が生じたことと、太陽、月、星が四日目に造られたこととの間に矛盾のあることを指摘している。彼らは、創造の「一日」を文字どおりではなく、比喩的に解釈していたのである。

しかし、聖書に矛盾を認めたくない人々はいつの時代にもいた。彼らは、屁理屈をこねくり回し、その矛盾を説明してきた。例えば、一日目と四日目との矛盾については、最初の三日間は、太陽とは別の一日を区別するものを備えていたはずだ、と説明する。それは、具体的にはどのようなものかと聞き返すと、そんなことは分からない。神に聞いてほしい、と返答する。自分が出した説明なのだから、自分に答える責任がある。その程度のことも分からない学者であっては困る。どのような解釈をしようと自由である。だが、何かを言う以上、説得力のある答えを出すべきである。それは、神のなさったことだから我々には分からないとか、今後科学が発展すれば分かってくるはずだなどと、逃げの論理を使うのは不正直である。

こんな説明も、聞いたことがある。「日」と訳されたヘブル語「ヨーム」は、旧約聖書ではいろいろな訳が可能で、 必ずしも 24 時間の一日を指すわけではない。従って、「一日」はある一定の長い期間と考える方がよい。さらにまた、次のような説明をしている学者もいた。一日から三日目までの「一日」と、四日目の太陽が造られてからの「一日」とは違う。四日目以降の一日は 24 時間だが、それ以前はもっとずっと長い期間だった、と。

「一日」に関しては、いろいろな解釈が提案されている。何とか、聖書と現代科学との矛盾を解消したいからである。整合性を取り、認知的不協和を少しでも和らげたい、というのが本音なのだ。しかし、いろいろ説明をしてみても、実際にはなかなかうまくいかない。天文学の世界では、天体現象のつじつま合わせに、二千年もの無駄な時を費やした。地動説に立たず、天動説に立っていたからである。地動説を主張した人々は、ごく少数だったが二千年前にもいた。でも、ほとんどの天文学者たちは、彼らの声に耳を傾けることをしなかった。聖書の研究においても、同じことが起こっている。

では、この「一日」をどのように解釈するのがよいのか。その長さとか、意味はとにかく、「夕があり、朝となった」という句がこの一日に付随しているので、この表現が、通常の「一日」をモデルにしていることは間違いない。問題は、この一日をどのような日として解釈するのかという点にある。少なくとも四つの可能性がある。

第一は、「一日」は 24 時間の一日で、しかも宇宙は書かれている順番どおりに造られた、という解釈である。神は一日目に光を造られた。その 24 時間後の二日目に、大空と地球を造られた。その 24 時間後の三日目に、海と陸を分けられた・・・、と記述どおりに読むわけである。ごく普通に読めば、そう解釈するのが最も自然である。4 日目に太陽が造られたと言われると、ちょっと面食らうが、1日目との差はわずか 3 日間なのだから、目くじら立てることもない、と弁解することもできよう。でも、太陽の無かった三日間を、どのようにして三日間と数えたのかという問題は、依然としてつきまとう。それに、現代科学が明らかにしている宇宙誕生のストーリーとはあまりにかけ離れている。ほとんどの人にとって、認知的不協和は避けられない。現代科学の証拠をすべて否定し、文字どおりに聖書を解釈することが信仰なのだと言われると、そのような信仰そのものに懐疑的ならざるを得ない。

第二は、「一日」は神が啓示された日にち、と解釈することである。神は著者に、一日目に光を造られたと啓示された。二日目には、大空と地球を造られたと啓示され、三日目には・・・と、創造のわざのすべてを六日間に分けて啓示された、というのである。こう理解すれば、確かに科学との衝突はなくなる。しかし、聖書本文の中にそのような解釈を暗示するものはない。また、類似した用例を他の聖書箇所に見出すこともできない。仮説として提唱するのは構わないが、確信をもって推奨するのは難しい。

第三は、著者が自分の身の周りを見、著者の考える順番で、創造のわざを記述したという解釈である。著者は、人間の創造を頂点に据えた。そして、その人間の生存に必要なものを一つずつ、六日間にわたる神の創造のわざとして描写した。最初は昼と夜、次は空と地、その次は陸と海、さらに天体、そして動植物から人間へと。この理解では、「一日」は通常の一日を指しているのだが、時間の区切りを示す比喩的な意味での「一日」である。

四番目は、神殿(あるいは幕屋)の祭儀において、被造物の一つ一つが神によって確認された「一日」、という解釈である。古代中近東では、毎年神殿において新年祭が行われた。その祭では、神々がそれぞれの被造物の支配権を確認する儀式が行われた。その際の、被造物の支配権の確認は、被造物の創造と理解された。イスラエルにおいても、その種の祭りが神殿において行われた。創世記 1 章は、その祭りの典礼文書だった。すると、祭りの一日目に、光の領域の支配者を確認した、二日目には大空と地との領域の支配者を確認した、三日目には、陸と海との領域の支配者の確認をした、・・・という意味だった。古代中近東とイスラエルの祭りとの違いは、いろいろな神々の分担ではなく、唯一の神がすべてを創造された、ということである。

これら四つの可能性の内、私自身は、三番目と四番目を組み合わせるのが一番よいと考えている。創世記1章の著者は、創造の記録を安息日神学に基づいて描写した。従って、著者は、全被造物の創造を六日間に割り振った。従って、「一日」は、比喩的な意味での一日である。

ところで、古代中近東の神殿において毎年行われていた新年祭が、イスラエルにおいても行われていたという 証拠はない。従って、この創世記1章を新年祭用に用意された典礼文書だったと考えるのは行き過ぎだと思う。そ うではなく、毎年新年祭が行われていた文化圏の人々に対し、著者は、彼らの文化的フレームを採用し、「神の物 語」を明らかにしたのだと思う。従って、創世記 1 章の「創造」という概念は、古代中近東の世界で一般的だった 「被造物の領域の支配権を確認する」ということだった。

ここでちょっと、考えていただきたいことがある。もし神が、宇宙創造のわざを科学的に正確に記すとしたら、いつの時代の科学に合わせればよかったのか、ということである。創世記1章の最初の読者だった3,000年以上前の古代中近東の宇宙観だろうか。それとも、預言者イザヤの時代の宇宙観だろうか。イエスの時代の一世紀、教父アウグスティヌスの五世紀、中世のスコラ哲学の13世紀、近代の科学が勃興してきた啓蒙主義の18世紀、それとも現代のビッグバン理論だろうか。もし神が、今の科学に合わせた場合、これから50年後、100年後、1,000年後の人々は、何というだろうか。

神が、どの時代の科学に合わせて創造を記しても、他の時代の人々からは、科学と矛盾すると指摘されるだろう。聖書と科学が一致するとは原理的にあり得ない。科学は絶えず変化するからである。もしそうであるなら、聖書記者は、時代的な衣を身にまといながらも、いつの時代にも通じる素朴な実体験を基にして描くのがベストだった

ことだろう。否、歴史に実在する人物を聖書記者として用いる限り、それ以外の方法はあり得なかった。

もっとはっきり、具体的に書いてみよう。

神は、今から 3,000 年以上も昔、一人の人物を聖書記者(編者)として選んだ。世界の創造の記録を書かせるためである。その記録の目的は、唯一の神が、この世界のすべてを創造し、支配していることを教えるためだった。その記者も、それを読む最初の読者も、古代中近東の文化圏で生活していた。その文化圏では、「創造」とは、被造物それぞれが、人間の歩みに益するよう、神々によって適切にコントロールされる、ということだった。聖書記者は、そういう文化圏に生きる人々に、被造物のすべては一人の神によって創造された、と宣言したのである。

古代中近東の人々の宇宙像は、時と場所によって異なり、一様ではなかった。しかし、もし最大公約数的な宇宙像を求めるなら、次のようなものだった。

地は、地の基の上に据えられた。その地の基は、何本かの柱の上に置かれていた。地は平らで、陸地と海とに分かれていた。空はお椀を逆さにしたような形の天蓋だった。その天蓋の中央上部には天の神殿があった。またその天蓋の上には、水が覆っていた。そして、時折、天蓋の窓が開かれ、雨が降ってきた。太陽は毎朝、その天蓋の東の方から出て、西の方に向かって移動した。夜の間に地下の通路を通って西から東に移動した。月は、太陽が沈むと出始め、天蓋を少しずつ移動した。星もまた、天蓋に張り付いているかのようだったが、時折異常な行動をした。それを見て、人々は不吉な予感に襲われた。

神の民イスラエルも、同じような宇宙像をもっていたのか、これについては、学者の間で意見が分かれている。 このような宇宙像を暗示するテキストが、詩篇を中心に見られる(これについては、次の旧約聖書の創造論で扱う)。それを文字どおりに解釈すべきか、それとも詩的・比喩的な表現と捉えるべきかについて、喧々諤々の議論が展開されている。どちらを取るにしても、これらの文言が古代中近東特有のものであることに変わりはない。

すると問題は、神が創造のわざを啓示するにあたり、神の民がもっていた宇宙像を変える必要があったかどうかという点に帰着する。もし神が人間に、科学的に正しい宇宙観をもってほしいと望まれたなら、そのことは啓示内容に含まれていたはずである。しかし、神が民に知ることを望まれたのは、「神と世界との関係」であって、宇宙像ではなかった。もしそうだとすれば、神は彼らの宇宙観を修正する必要はなかったということになる。

このことは、歴史の中で生きてきたキリスト者を見れば分かる。いつの時代であっても、キリスト者は、自分の時代の宇宙観で聖書を読んできた。神はそれを許している。古代中近東の時代には古代中近東の、ギリシャ・ローマ時代にはその時代の、中世ヨーロッパの時代には中世の、啓蒙主義時代には啓蒙主義の、近代には近代の、現代には現代の宇宙理解で聖書を読んでいる。それでよいのだ。

神は創世記1章で、科学的に正しい宇宙観を啓示されたわけではなかった。当時の宇宙観を背景として、「神と世界の関係」を明らかにされたのだ。詩篇の言葉を文字どおりに解釈しようが、詩的に解釈しようが、古代中近東の宇宙像には変わりない。神の啓示だからといって、科学的に正しい宇宙観を聖書に期待するのは、愚かなことである。

#### 6. 神殿を宇宙支配の拠点として読む

古代中近東の世界では、毎年正月、新年祭が各地の神殿で行われた。それは、神々がその年、宇宙のどの領域を支配するかを確認する祭だった。そのような祭の背景には、神々が神殿を中心に宇宙を支配しているという信仰があった。

古代中近東では、宇宙創造と神殿建設は、しばしば関係づけられている。宇宙創造の結論として、神殿が建てられることもあった。神殿は宇宙のシンボルで、宇宙を反映していた。マルドゥク神が創造を終えると、彼のために神殿が建てられた(「エヌマ・エリシュ」5.113、5.121-24、5.138、6.51-52など)。神殿がないと宇宙には秩序がないと言われ、エリドゥ神殿は建てられた(前 1,600 年頃の「エリドゥ創世記」)。

シュメールでは、神殿は太陽が昇るところに建てられた。「エシャッラ(宇宙の家の意)」とか、「エテメナンキ(天と地の間のプラットホームの意)」などのように、神殿はしばしば、宇宙を表わす名前が付けられた。神殿は宇宙の機能に仕えているとか、天と地を分けるのは神殿である、などとも言われている(シュメールのグデアの神殿建設

の文書「グデア」B.xx.8-11)。

エジプトでは、そこで神が創造を始めたとの伝承に基づき、水が湧き出る場所に神殿が建てられた。また、あるエジプトの神殿は、床は地球上を、天井は空を、円柱と壁は植物を表わすなど、宇宙をモデルに建造された。神殿は、偏在している神が満ちており、宇宙の支配が統括されているところだった(「神殿賛歌」4.80.1)。

20 世紀後半になると、メソポタミアやエジプトの文献学者たちは、イスラエルにも、神殿が宇宙支配の拠点になっていた、と主張するようになった。キリスト教界はこれまで、神殿とは、神がイスラエルの民と共におられることの象徴である、と見なしてきた(I列王 6:11-14、8:13-14)。しかし彼らは、それよりさらに一歩進め、聖書の神は、神殿から宇宙を支配するため、神殿建設を命じた、と主張し始めたのである。表現は微妙な違いに過ぎないが、もたらす結果は、大変大きなものである。

もし聖書から、「神殿イコール宇宙支配の拠点」という考えを明らかにすることができるなら、キリスト者の神理解や宇宙理解は大きく変わってくる。キリストが受肉されたことも(ヨハネ 1:14)、キリスト者が「聖霊の宮」であることも(Iコリント 6:19)、全く違った響きを帯びてくる。より豊かで、深まったものになる。

世界創造の記録は、安息日神学に基づいて記された。神は、六日間で創造のわざを完成し、七日目は休まれた。ほとんどのキリスト者は、この神の休みを、七日目には働かず何もしなかった、と読んでいる。一生懸命働いたご褒美の休み、というところだろうか。六日間の創造は大切だが、七日目はおまけみたいなものでさしたる意味はない、そんな受け取り方である。

だが、このような読み方は、根本的に間違っている。「七日目」という言葉は、2章1-3節に三回出てくる。聖とされ、祝福されたのは、七日目だけである。確かに、六日目の人間は、被造物のゴールだった。しかし七日目は、全創造の最終ゴールであり、主役は神ご自身だった。

キリスト教界が、この七日目の重要性に気づかなかったのは、「休む」という言葉を正しく理解できなかったことにある。では、「休む(安息する)」とは、どのような意味なのか。

創世記 2 章 2 節の「休む(シャバット)」は「終わる」という意味で、それまで従事していたことが完成したことを指す(ヨシュア記 5:12 では「やみ」、ヨブ 32:1 では「やめた」と訳されている)。それは、ものごとが新しい段階に入ったことを暗示する。出エジプト記 31:17 は、「主が六日間に天と地とを造り、七日目に休み、いこわれた」と述べている。ここでは、「いこわれた(イナファッシュ)」という言葉が、「休み(シャバット)」に続いている。この二つの言葉は補完的な使用例で、同じことを指している。この「イナファッシュ」は、安全、保護、強固な状態に入ることを意味する。神は、創造の大変なわざを終わり、新しい働きに整えられた状態で過ごしている、ということだ。

詩篇 132 篇 7-8 節と 13-14 節は、神が安全で守られている状態で何をしているのかを明らかにしている。まず、 7-8 節をお開きいただきたい。

さあ、主の住まいに行き、主の足台のもとにひれ伏そう。主よ。立ち上がってください。あなたの安息の場所に、お入りください。あなたと、あなたの御力の箱も。(詩篇 132:7-8)

ここでは、「住まい(ミシュフノート)」が「安息の場所(メヌーアッハ)」と平行句である。さらに、「足台(ハドーム・ラグライフ)」と「御力の箱(アローン・ウゼー)」とが、平行句になっている。ここで「主の住まい」とは、神殿のことである。その神殿が「安息の場所」と言い変えられている。「安息(メヌーアッハ)」という言葉は、「憩う(イナファッシュ)」と同根の言葉である。それは、安全に保護され、憩いの状態の中で働いている姿を表わす。それは、六日間の創造の働きとは全く種類の違う状態にあることを指した表現である。激しい動きを見せた創造とは違い、すべてを平静に支配しておられる新しい働きを示唆している。そのような神の働きが、神殿においてなされているのだ。

足台とは、神が働いている世界を指す。その足台は、「御力の箱(契約の箱)」と同義として描かれている。契約 の箱は、神殿の至聖所に安置されていた。この世界は至聖所と同一視されているのだ。

続く13-14節にも、同じことが繰り返されている。

主はシオンを選び、それをご自分の住みかとして望まれた。「これはとこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは住もう。わたしがそれを望んだから。(詩篇 132:13-14)

ここでは、神が「シオンを選び、それをご自分の住みか」としたこと(13 節)と、「わたしの安息の場所、ここにわた

しは住もう」(14 節)とは、平行関係にある。とすれば、ここでも神殿と安息の場所は同一視されている。つまり、神が神殿に住んで王座に就いていることと、安息の場所にいることとは、同じことである。すると、七日目に安息されたことは、神殿で王座に就いて御業を行われていることに他ならない。

この「安息」という言葉は眠っているという意味ではない。通常の生活状態を指していることは、次の民に対する神の約束にはっきり表されている。

あなたがたは、ヨルダンを渡り、あなたがたの神、主があなたがたに受け継がせようとしておられる地に住み、 主があなたがたの回りの敵をことごとく取り除いてあなたがたを休ませ、あなたがたが安らかに住むようになる なら(申命 12:10)

神はイスラエルの民に、約束の地において「回りの敵をことごとく取り除いて休ませる」と語られた。「敵をことごとく取り除く」と、民は自由に往来ができ、収穫の喜びを味わい、生活を楽しむことができる。「あなたがたを休ませ」は、「あなたがたが安らかに住むようになる」と言い換えられている。ここでも、「休ませる」とは、眠っている状態を指すのではなく、「安らかに住むようになる」という意味である。イスラエルの民は、カナンの地で、何もしないでぼおっと過ごすのではない。平和と祝福に溢れた日常生活を約束されたのである。

次のヨシュア記の言葉もまた、イスラエルの民の「安住」について言及している。

主は、彼らの先祖たちに誓ったように、周囲の者から守って、彼らに安住を許された。すべての敵の中で、ひとりも彼らの前に立ちはだかる者はいなかった。主はすべての敵を彼らの手に渡された。(ヨシュア 21:44) 今すでに、あなたがたの神、主は、あなたがたの同胞に約束したように、彼らに安住を許された。今、主のしもべモーセがあなたがたに与えたヨルダン川の向こう側の所有地、あなたがたの天幕に引き返して行きなさい。(ヨシュア 22:4)

両方の箇所とも、「安住を許される」という表現が出てくる。この箇所の「安住」の中身を考えていただきたい。カナンは、かつては先祖たちが住んでいた土地とはいえ、外国の地である。イスラエルはそこを侵略していくのであり、敵に囲まれ、困難な状況に出くわすのは当たり前である。そういう状況の中で、神は、敵をイスラエルに与え、平和な国家形成を約束された。それが「安住を許される」という言葉の中身だった。

敵に囲まれた真っただ中で、神から約束された平和で祝福に満ちた歩みを送る、これが約束の地におけるイスラエルの姿である。このような「安住」のイメージを、神の七日目の「休み」について当てはめてみたらどのようになるのだろうか。皆さんに、ぜひ考え直していただきたい。

さらに話を進めることにしよう。我々は今、神殿を宇宙支配の根拠地に見立ててよいのか、というテーマを追いかけている。次のイザヤ書の言葉は、そのことを暗示する大切な御言葉である。

天はわたしの王座、地はわたしの足台。わたしのために、あなたがたの建てる家は、いったいどこにあるのか。 わたしのいこいの場は、いったいどこにあるのか。これらすべては、わたしの手が造ったもの。これらすべては わたしのものだ(イザヤ 66:1-2)。

ここで神は、まず、「天はわたしの王座、地はわたしの足台」と述べている。「天はわたしの王座」とは、神が天から支配している、という意味である。「足台」は、神が統治している場所である。「地はわたしの足台」とは、神の支配の対象が地であることを述べている。この二つの句は、神が宇宙の支配者であると宣言している。

次に神は、「わたしのために、あなたがたの建てる家は、いったいどこにあるのか」と、神殿に言及する。そしてその神殿が、「わたしのいこいの場」と、言い直される。神殿は、神が王座に就いて支配を執行する場所である。それがここでは、神が憩われる場所、と説明されている。神にとって、「支配する」ことと「いこう」こととは同じだった。人間にとっては、全く相反することなのだが、神にとっては全く違う。「いったいどこにあるのか」とは、地上の神殿は、神の住まいとしては小さすぎて(I列王記 8:27、II歴代 2:6、6:18)、神の前には存在感が全くないことを、示唆する。

そして最後に神は、「これらすべては、わたしの手が造ったもの。これらすべてはわたしのものだ」と述べる。「これらすべては、わたしの手が造ったもの」とは、被造物すべてを指す。「これらすべてはわたしのものだ」とは、創造された宇宙のすべてが神の支配下にある、との宣言である。このイザヤの言葉は、神の支配、神殿、宇宙の三

つを一つのこととして、はっきり述べている。

このイザヤの言葉は、とても重要なものだった。従って、ステパノも、ユダヤ議会を前に、この言葉を引用している(使徒 7:49)。神は天の聖所から、我々一人一人への燃えるような愛をもって見ておられる(申命記 26:15、イザヤ 63:15)。この地は、神が働かれる「神の足台」である(詩篇 99:5、I 歴代誌 28:2、マタイ 5:35)。イザヤ書 60 章 13 節は、聖所を「神の足台」と呼んだ。神殿とは、神の統治のシンボルだった。

ところで、創世記2章1-3節では、七日目が終わったとは告げられていない。紀元前2世紀のユダヤ人アリストブロスは、「七日目は終わっていない、神の休みは今も続いている」と述べている。出エジプト記31章17節は、七日目が「永遠に」続くことを暗示している。

ヨハネの福音書5章17節においてイエスは、「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです」と、述べている。「今に至るまで」の始まりは、創世記2章の七日目を指すと思われる。神は、創造のわざを終え、七日目の安息に入られた。しかしイエスによれば、神はその時以来ずっと、働き続けておられる。イエスは、その神の働きを見ながら、安息日に病人を癒された。神にとっても、イエスにとっても、安息日は、何もせずに休んでいる日ではなかった。神の恵みと祝福を広げ続けていく働きを展開している。

被造物は、創造されたらそれで終わり、というわけではない。地上の植物、太陽、空の鳥や海の魚、動物、人間など被造物それぞれは、自分の役目を果たすために動いている。神はそれらに何の働きかけもせず、休んでいるだけなのか。そんなことはない。神殿から、新しい被造物支配を始めたのである。コンピュータをセットアップしたとする。本体や画面、キーボード、プリンターをつないだら、それで終わりというわけではない。そこから新たな仕事が始まる。それと同じように、六日間の創造のわざが終わり、七日目の被造物の支配・管理のわざが新たに始まる。それが、七日目の休むという内容だったのである。

## Ⅱ. 旧約聖書における創造記述

創世記 1 章が世界創造に関する最高の文書であることは論を待たない。しかし神は、他にもたくさんの創造記述をいろいろな聖書箇所に残された。キリスト者は、啓示の一部を学ぶだけで、そのテーマに関する神の御心がすべて分かった、と考えてはならない。もし他の箇所でも啓示されたとすれば、一つ一つ丁寧に取り上げ、真摯に学ぶ必要がある。そうすることによって、そのテーマを、いろいろな角度から、奥深く学ぶことができる。この講演では、旧約聖書から新約聖書へと、話を進めていく。その際、創世記 1 章との関わりを大切にして取り上げる。

創造のすばらしさを歌った詩が、詩篇にはたくさん出てくる。特に、詩篇 8 篇、19 篇、24 篇、33 篇、74 篇、104 篇、136 篇などは、その代表的なものである。一つ一つの詩篇を、丁寧に取り上げていくことにしよう。

#### 1. 詩篇8篇(人は被造物の管理を委ねられている)

人とはいったい何者なのか、そう問いかけた人物が3人いる。まず、苦悩の中で自らを振り返ったヨブである(ヨブ7:17)。次に、敵に囲まれ、助けを求めた詩人である(詩篇144:3)。三番目は、夜空を見上げ、哲学的な問いを発した本詩篇の著者である。彼は、広大な宇宙を見上げ、人間について考える。人は、神の恵みを受けているとはいうものの、いかに小さな者であるかを告白する。

あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、(3節)

人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれ を顧みられるとは。 (4 節)

あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。(5節)

あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。(6節)

すべて、羊も牛も、また、野の獣も、(7節)

空の鳥、海の魚、海路を通うものも。(8節)

私たちの主、主よ。あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう。(9節)

3 節の「あなたの指のわざである天を見」と、「あなたが整えられた月や星を見ますのに」は、ヘブル詩の平行法である。「あなたの指のわざ」と「あなたが整えられた」が対応し、「天」と「月や星」が対応している。天は、創世記 1

章の二日目の創造、月や星は四日目の創造への言及である。

4 節で詩人は、一転して人間に目を向ける。そして、「人を、神よりいくらか劣るものとし」と述べる。これは、六日目に、人が「神のかたち」に造られたことへの言及である。5 節の「これに栄光と誉れの冠をかぶらせました」と、6 節前半の「あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ」、及び6 節後半の「万物を彼の足の下に置かれました」の三つは三連句である。これは、人間に与えられた「支配せよ」(創世1:26)に関連する。

7節の「すべて、羊も牛も、また、野の獣も」は、六日目の動物の創造、8節の「空の鳥、海の魚、海路を通うものも」は、五日目の創造に関係する。この二つはヘブル詩の平行句で、人間が支配する対象を指している。

詩篇 8 篇は、とても興味深い詩篇である。詩人は、夜空に輝く月や星を見ながら、人間とは何者かと問う。彼は、人間が「神よりいくらか劣るものとして」造られたことを述べる。そして、神より被造物の管理を委ねられたことを思いを巡らし、「人とは、何者なのでしょう」と叫んだ。このような流れは、この詩が創世記1章を背景にしてつくられたことを示唆する。

# 2. 詩篇 19 篇 1-6 節 (太陽は神の創造の栄光を語っている)

詩篇 19 篇は、前半と後半で内容が異なっている。前半の 1-6 節は、大空に輝く太陽が、全地に神の栄光を告げていると歌っている。前の 8 篇が、夜空に輝く月や星を歌い、人間に目をとめているのと対照的である。

天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。(1節)

昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。(2節)

話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない。(3節)

しかし、その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた。神はそこに、太陽のために、幕屋を設けられた。(4節)

太陽は、部屋から出て来る花婿のようだ。勇士のように、その走路を喜び走る。(5節)

その上るのは、天の果てから、行き巡るのは、天の果て果てまで。その熱を、免れるものは何もない。(6節)

まず、全体としての流れを把握しておこう。1 節は、ヘブル詩の平行法が見られる。天と大空、神の栄光と御手のわざ、語り告げと告げ知らせるが、それぞれ対応している。詩人はここで、天や大空が神の創造のすばらしさを物語っている、と述べている。

2 節の「昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す」とは、天と大空は、昼間も夜も神の存在と栄光を宣言している、という意味である。むろん、それは単なる天や大空に過ぎない。それらがしゃべることはない。従って詩人は、「話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない」(3 節)と歌う。

ところが、4 節になると、「その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた」と、正反対のことを宣言する。一言の言葉も声もないと言ったばかりなのに、今度は「全地」そして「地の果てまで」、声が響き渡っているという。なぜ、そんなことが起こるのか。太陽の存在である。詩人は、「太陽のために、幕屋を設けられた」と述べている。これはむろん、創世記 1 章の四日目の太陽の創造を指している。「幕屋を設けられた」は、定住の場所をもっているとの、詩的表現である。

詩人は、5 節から 6 節にかけ、「太陽は、部屋から出て来る花婿のようだ。勇士のように、その走路を喜び走る」と、太陽が全天を駆け巡るようすを歌っている。部屋とは前節の幕屋のことである。ここで太陽は、花婿、そして勇士に例えられている。前者は喜びの代表者、後者は力強さの代表者である。昼間太陽の照ることが、人間にとってどれほど喜びに満ちたものであり、生きる力を与えるものかを、巧みに歌い上げている。

そして、6 節の最後「その熱を、免れるものは何もない」は、この天の下に生きる者すべてに、神の恵みが注がれていることの強烈な表現である。

古代中近東に生きる人々は、太陽の恵みをよく知っていた。適度な雨と太陽、この両者がなければ生存は文字どおり不可能だった。だから彼らは、太陽をシャメシュ神としてあがめ、怒らせないよう心砕いていた。ところが、この詩篇は、そういう文化圏の中で生きている人々に対し、強烈なメッセージを送っている。太陽は創造者なる神の恵みを告げるもので、神ではない。それは歓喜をもって迎えるべき存在であり、少しも恐れるようなものではない。

#### 3. 詩篇 24 篇(この世界は神殿になぞらえられている)

詩篇24篇は、旧約聖書の中でも特異な詩である。1-2節は世界を創造された神を賛美しているのに、3節以降

は神殿に関わることが歌われている。長い間、この両者の関係が分からず、旧約学者たちを悩ませてきた。しかし 我々は、この問題を解決するヒントを手にしている。まずは、本文をゆっくり読むことから始めよう。

地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。(1節)

まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた。(2節)

だれが、主の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか。(3節)

手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。(4節)

その人は主から祝福を受け、その救いの神から義を受ける。(5節)

これこそ、神を求める者の一族、あなたの御顔を慕い求める人々、ヤコブである。(6節)

門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。(7節)

栄光の王とは、だれか。強く、力ある主。戦いに力ある主。(8節)

門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。(9節)

その栄光の王とはだれか。万軍の主。これぞ、栄光の王。(10節)

#### この詩篇は、三つに分けられる。

まず 1-2 節で、世界の創造に関して歌われている。1 節の「地とそれに満ちているもの」と「世界とその中に住むもの」は、平行句である。2 節の「海に地の基を据え」と「もろもろの川の上に、それを築き上げられた」も、平行句である。しかも、1 節は万物を指し、2 節は万物の基礎を述べ、2 行連句を構成している。加えて、「地と世界一主、主一海と川」という、キアスムス構文になっている。

1節は、創世記1章の記録では六日間全体にわたる創造、2節は、三日目の海と陸の創造に関係する。「地の基」という表現は、詩篇 102:25 の「あなたははるか以前に地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです」(この箇所は、ヘブル1章10節において引用されている)を始め、「主は知恵をもって地の基を定め、英知をもって天を堅く立てられた」(箴言 3:19)、「天を張り、地の基を定め、人の霊をその中に造られた方」(ゼカリヤ 12:1)など、旧約聖書には頻繁に出てくる。人が住んでいるこの地は、堅固な土台の上に建てられているという建築用語で、詩的表現である。

二番目は 3-6 節で、神殿詣でをする人たちについて歌われている。しかも、その内容と形式は、神殿に入る際の儀式文の中で語られたことを示唆する(詩篇 15 篇参照)。シオンの山の入り口で、巡礼者たち(その代表かもしれない)が「だれが、主の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか」(3 節)と質問する。すると祭司が、「手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。その人は主から祝福を受け、その救いの神から義を受ける」(4-5 節)と答える。すると、巡礼者のグループの代表者が「これこそ、神を求める者の一族、あなたの御顔を慕い求める人々、ヤコブである」(6 節)と応答する。

三番目は 7-10 節で、神殿の入り口における儀式文である。まず、契約の箱を担ぐ祭司が「門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる」(7 節)と宣言する。すると、神殿の中から門番が、「栄光の王とは、だれか」(8 節前半)と尋ねる。再び祭司が、「強く、力ある主。戦いに力ある主。門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる」(8 節後半と9 節)と答える。再度門番が、「その栄光の王とはだれか」(10 節前半)と確認する。「万軍の主。これぞ、栄光の王」(10 節)と、祭司が三度目の宣言をする。

古代中近東の世界では、新年祭を始めいろいろな場面で、この種の儀式文による「掛け合いの問答」が行われた。しかし、イスラエルの民の間で、二番目と三番目のような問答が実際に行われたかどうかは、定かではない。サムエル記第二6章12-19節には、神殿建設以前のダビデ時代のことではあるが、類似した出来事が起こっている。近隣のメソポタミア文化圏のように、年に一度の神殿における王の即位式のような儀式が、イスラエルにもあったとは思えない。しかし、エルサレムにおける祭りを詣でる巡礼者たちによって、あるいは祭司たちによる神殿の儀式において、詩篇24篇のような問答が公唱されたと想定するのは、とても自然なことである。

古代中近東では、新年に行われる王の即位式によって、それぞれの王のその年の支配権が確立した。イスラエルにおいては、そのような新年祭は必要なかった。唯一の神が全被造物の創造者であり、支配者であることは、信仰の基幹に属することだったからである。彼らは、この24篇の1-2節に歌われているように、この宇宙が唯一の神の支配に属することを、三大祭の時も、また毎日の礼拝儀式の中でも、確認し続けた。このように理解すれば、この24篇は一貫した詩篇となり、「24篇の統一性」に関する長い間の疑問も解決する。

### 4. 詩篇 33 篇 4-9 節 (神はみことばによってこの世界を造られた)

イスラエルの民は、礼拝においてさまざまな賛美を神にささげた。詩篇33篇は、その一つである。1-3節が序文で賛美への呼びかけ、20-22節が信仰の告白で結文である。その間に、主の言葉(4-9節)、主の計画(10-12節)、主の目と力(13-19節)が歌われている。本講演では、創造が神のことばによってなされたことを伝える4-9節の部分のみ扱う。

まことに、主のことばは正しく、そのわざはことごとく真実である。(4節)

主は正義と公正を愛される。地は主の恵みに満ちている。(5節)

主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。(6節)

主は海の水をせきのように集め、深い水を倉に収められる。(7節)

全地よ。主を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。(8節)

まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。(9節)

主は国々のはかりごとを無効にし、国々の民の計画をむなしくされる。(10節)

主のはかりごとはとこしえに立ち、御心の計画は代々に至る。(11節)

33 篇のこの箇所は、神のことばの権威について歌っている。4-5 節は、現在の世界が神のことばによって統括されているようすが描写されている。そして、6 節から 9 節にかけ、神のことばが神の創造のわざに深く関わっていたことを述べている。6 節の「主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって」という表現は、全被造物が神のことば、神の息吹によって創造されたことを述べている。

7 節の「主は海の水をせきのように集め、深い水を倉に収められる」は、創世記 1 章でいえば、万物の創造の「素材になった大水」(2 節)ではなく、三日目の「海」の創造(10 節)と関係する。9 節の「まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ」は、創世記 1 章の「神が仰せになった。すると、そのとおりになった」という一連の句を思い出させる。

10-11 節は、創造時の出来事というより、基本的には、現在から未来のことが展望されている。11 節の「主のはかりごとはとこしえに立ち、御心の計画は代々に至る」という文章は、創世記 1 章の「神はよしとされた」という言葉にも通じる。イスラエルの民が神のことばを大切にし、賛美するのは、万物が神のことばによって創造されたからである。その神のことばは、永遠の「主のはかりごと」であり、「御心の計画」(11 節)である。被造物のすばらしさは、神の御心を明らかにしていることにある。神の民は、被造物自体を賛美するのではない。被造物が示す神ご自身の御心、ご計画を賛美するのである。

### 5. 詩篇 74 篇 13-17 節 (神が海や天体を創造されたことを宣言している)

詩篇 74 篇は、国家の不幸を嘆く国民的な歌である。この詩は、動詞の時制によって、次のようなキアスムス構文を構成している。

A 命令(2-3節)

B 完了(4-9節)

C 未完了(10-11節)

B'完了(12-17節)

A'命令(18-23節)

この中の「B'完了」の部分に注目しよう。詩人は 12 節において、「神は、昔から私の王」と告白する。そして 13 節から 17 節において、その神がこの世界の創造者であることを歌っている。

あなたは、御力をもって海を分け、海の巨獣の頭を砕かれました。(13節)

あなたは、レビヤタンの頭を打ち砕き、荒野の民のえじきとされました(14節)。

あなたは泉と谷を切り開き、絶えず流れる川をからされました。(15節)

昼はあなたのもの、夜もまたあなたのもの。あなたは月と太陽とを備えられました。(16節)

あなたは地のすべての境を定め、夏と冬とを造られました。(17節)

13 節と 14 節は、ヘブル詩の平行法で、「海を分ける―巨獣の頭を砕く、レビヤタンの頭を砕く一荒野のえじきにする」と、キアスムス構文を構成している。海を分けるとか、荒野で民に食物を与えるという描写は、出エジプトの

出来事を思い出させる。それも、背景にあっただろう。しかし、続く15-17節より、「海を分け」は創世記1章の三日 目の創造、「海の巨獣」は五日目の創造と関連づけて読む方が自然かもしれない。

海の巨獣とかレビヤタンは、古代中近東の文献では「神々に反逆する者として、七つの頭をもつ蛇のようなレビヤタン」と言われている。詩人は、その頭を神が打ち砕かれたと二度も繰り返し、それを人々の餌食として与えたと詳述する。このような描写は、レビヤタンの存在に脅かされていた古代中近東の人々に対し、決定的な挑戦状になった(ヨブ 3:8、41:3、詩篇 104:26 参照)。

その日、主は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタン、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。(イザヤ 27:1)

さめよ。さめよ。力をまとえ。主の御腕よ。さめよ。昔の日、いにしえの代のように。ラハブを切り刻み、竜を刺し殺したのは、あなたではないか。(イザヤ 51:9)

15-17 節は、神が世界を創造し、支配していることに言及している。15 節は、神が、泉、谷、川を支配していることを述べている。これは創世記1章の三日目、「陸の創造」と関連する。16 節には「昼一夜、月一太陽」のキアスムス構造が見られるが、これは四日目の「天体の創造」にあたる。古代中近東においては、太陽や月は代表的な神々として祭られていたが、ここでは神の主権のもとにあることが強調されている。17 節の「地のすべての境を定め」は、三日目の創造への言及である。「夏と冬とを造られました」は、四日目の「季節のため」に関係する。

詩篇 74 篇の 1-11 節、および 18-23 節は、苦境の真っただ中に置かれ、神の救いを呼び求めている神の民の姿を伝えている。周囲の国家がイスラエルを攻撃し、神の民は存亡の危機にさらされていた。そういう状況の中で歌われた 74 篇は、古代中近東の宗教に対する厳しい挑戦状だった。しかも詩人は、神を「地上のただ中で、救いのわざを行われる方」(12 節)と宣言し、その神を「昔からの私の王」と、一人称単数形で告白した。これこそ、現代のキリスト者へのメッセージである。

# 6. 詩篇 104 篇(神はすべての被造物を喜んでいる)

詩篇 104 篇は、この世界の創造を歌った詩篇である。一見すると、創世記 1 章とは全く似ていない。しかし実際には、意外な類似点が浮かび上がってくる。ほとんどの詩篇研究家は、両者の依存関係には否定的である。しかし、この詩篇は、創世記 1 章の解釈には不可欠である。両者とも古代中近東の共通の文化的背景をもっているからである。

聖書研究の奥義は、聖書そのものを繰り返し読むことにある。註解書や辞典、説教集や解説書などは役立つ。だが、その種の書物は、我々を著者の気持ちに導くものではない。著者の気持ちになるには、聖書を暗記するほど、繰り返し読むことである。詩篇 104 篇は、長さでは創世記 1 章とほとんど変わらない。ただ、詩であるため、七日間にまとめるような描き方はしてない。しかも、詩篇の中でも後の方にあり、目立つこともない。だから、創世記 1章ほど有名ではない。だが、創世記 1章の理解に欠かすことはできない。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。わが神、主よ。あなたはまことに偉大な方。あなたは尊厳と威光を身にま とっておられます。(1節)

あなたは光を衣のように着、天を、幕のように広げておられます。(2節)

水の中にご自分の高殿の梁を置き、雲をご自分の車とし、風の翼に乗って歩かれます。(3節)

風をご自分の使いとし、焼き尽くす火をご自分の召使いとされます。(4節)

また地をその基の上に据えられました。地はそれゆえ、とこしえにゆるぎません。(5節)

あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上にとどまっていました。(6節)

水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の声で急ぎ去りました。(7節)

山は上がり、谷は沈みました。あなたが定めたその場所へと。(8節)

あなたは境を定め、水がそれを越えないようにされました。水が再び地をおおうことのないようにされました。 (9節)

主は泉を谷に送り、山々の間を流れさせ、(10節)

野のすべての獣に飲ませられます。野ろばも渇きをいやします。(11節)

そのかたわらには空の鳥が住み、枝の間でさえずっています。(12 節)

主はその高殿から山々に水を注ぎ、地はあなたのみわざの実によって満ち足りています。(13節)

主は家畜のために草を、また、人に役立つ植物を生えさせられます。人が地から食物を得るために。(14節)また、人の心を喜ばせるぶどう酒をも。油によるよりも顔をつややかにするために。また、人の心をささえる食物をも。(15節)

主の木々は満ち足りています。主の植えたレバノンの杉の木も。(16節)

そこに、鳥は巣をかけ、こうのとりは、もみの木をその宿としています。(17節)

高い山は野やぎのため、岩は岩だぬきの隠れ場。(18節)

主は季節のために月を造られました。太陽はその沈む所を知っています。(19節)

あなたがやみを定められると、夜になります。夜には、あらゆる森の獣が動きます。(20節)

若い獅子はおのれのえじきのためにほえたけり、神におのれの食物を求めます。(21 節)

日が上ると、彼らは退いて、自分のねぐらに横になります。(22節)

人はおのれの仕事に出て行き、夕暮れまでその働きにつきます。(23節)

主よ。あなたのみわざはなんと多いことでしょう。あなたは、それらをみな、知恵をもって造っておられます。地はあなたの造られたもので満ちています。(24節)

そこには大きく、広く広がる海があり、その中で、はうものは数知れず、大小の生き物もいます。(25 節)

そこを船が通い、あなたが造られたレビヤタンも、そこで戯れます。(26節)

彼らはみな、あなたを待ち望んでいます。あなたが時にしたがって食物をお与えになることを。(27節)

あなたがお与えになると、彼らは集め、あなたが御手を開かれると、彼らは良いもので満ち足ります。(28 節) あなたが御顔を隠されると、彼らはおじ惑い、彼らの息を取り去られると、彼らは死に、おのれのちりに帰りま す。(29 節)

あなたが御霊を送られると、彼らは造られます。また、あなたは地の面を新しくされます。(30節)

主の栄光が、とこしえにありますように。主がそのみわざを喜ばれますように。(31節)

主が地に目を注がれると、地は震え、山々に触れられると、山々は煙を上げます。(32節)

私は生きているかぎり、主に歌い、いのちのあるかぎり、私の神にほめ歌を歌いましょう。(33節)

私の心の思いが神のみこころにかないますように。私自身は、主を喜びましょう。(34節)

罪人らが地から絶え果て、悪者どもが、もはやいなくなりますように。わがたましいよ。主をほめたたえよ。ハレルヤ。(35 節)

この詩篇は、「わがたましいよ。主をほめたたえよ。わが神、主よ。あなたはまことに偉大な方」という語り出しで始まり、「わがたましいよ。主をほめたたえよ。ハレルヤ」で終わる。詩人は、さまざまな被造物を観察しながら、神を賛美する。これは聖書全巻を貫いている信仰である。

詩は詩である。詩の感動は、そこで留めて置く方がよい。変に研究の対象にすると、著者の意図や気持ちを逆なですることになる。そんな野暮なことはしたくない。詩集を読んで、歴史的、科学的な分析をするのは愚かである。だが、聖書は神のことばでもある。神が詩人をとおして何を語ろうとしているのか、それが創世記1章の創造記録とどのような関係にあるのか、その辺を明らかにしたい。

創世記1章は、安息日神学に基づいて神の創造を記述している。それに対し詩篇104篇は、日にちの区切りはなく、著者の目に映るがままの被造物について歌っている。だが、とても不思議なことに、全体として創世記1章の創造の流れを追いかけるような歌い方をしている。共通の文化圏と信仰に基づいていたからである。

まず、1節後半から2節前半までに「あなたは尊厳と威光を身にまとっておられます。あなたは光を衣のように着」と歌われている。これは創世記1章で言えば、一日目の「光」の創造に関連する。先週の講演では、この箇所を基に、創世記1章の「光」は四日目の太陽や月のような物理的な光ではなく、神の栄光と結びついたより象徴的な光である、と解説した。

2節の「天を、幕のように広げておられます」、3節の「水の中にご自分の高殿の梁を置き、雲をご自分の車とし、風の翼に乗って歩かれます」、4節の「風をご自分の使いとし、焼き尽くす火をご自分の召使いとされます」などの描写は、二日目の「大空」に関係する。すべてがぴったりというわけにはいかないが、幾つかの類似点が見られることに驚かされる。ご自分で確認していただきたい。

5節の「地をその基の上に据えられました。地はそれゆえ、とこしえにゆるぎません」は、三日目の「陸地」の創造 と関係する。6節の「あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上にとどまっていまし た」は、「海」の創造と関係がある。7節の「水は、あなたに叱られて逃げ」は、創世記1章の「神が仰せられた」に関係がある。続く、「あなたの雷の声で急ぎ去りました」は、「そのようになった」に関係する。

8節の「山は上がり、谷は沈みました。あなたが定めたその場所へと」、さらに9節の「あなたは境を定め、水がそれを越えないようにされました。水が再び地をおおうことのないようにされました」は、三日目の「海と陸を分けた創造」に対応する。詩人は、①神がより細かなところまでを配慮していること、②神が直接被造物に指示を出していること、③創造より摂理の働きを強調していること、の三点において、創世記の著者より詳しい。

10-11節の「主は泉を谷に送り、山々の間を流れさせ、野のすべての獣に飲ませられます。野ろばも渇きをいやします」や、13節の「主はその高殿から山々に水を注ぎ、地はあなたのみわざの実によって満ち足りています」、14節の「主は家畜のために草を、また、人に役立つ植物を生えさせられます。人が地から食物を得るために」、15節の「人の心を喜ばせるぶどう酒をも。油によるよりも顔をつややかにするために。また、人の心をささえる食物をも」、16節の「主の木々は満ち足りています。主の植えたレバノンの杉の木も」、18節の「高い山は野やぎのため、岩は岩だぬきの隠れ場」、32節の「主が地に目を注がれると、地は震え、山々に触れられると、山々は煙を上げます」などはいずれも、三日目の「土地」の創造と関係がある。詩人は、身の回りを観察しながらこの歌を歌っているので、このように「土地」に関わりのある部分に多くの言葉を割いている。

12節の「そのかたわらには空の鳥が住み、枝の間でさえずっています」、17節の「そこに、鳥は巣をかけ、こうのとりは、もみの木をその宿としています」などは、五日目に創造された「空の鳥」への言及である。自然の美しさや細やかな描写は、読む者の心を慰める。

19 節の「主は季節のために月を造られました。太陽はその沈む所を知っています」、22 節の「日が上ると、彼らは退いて、自分のねぐらに横になります」とか、23 節の「人はおのれの仕事に出て行き、夕暮れまでその働きにつきます」などは、太陽が支配する昼のようすをリアルに描いている。それに対し、20-21 節の「あなたがやみを定められると、夜になります。夜には、あらゆる森の獣が動きます。若い獅子はおのれのえじきのためにほえたけり、神におのれの食物を求めます」は、夜の状態について述べている。いずれも、創世記1章の四日目の天体の創造と関係がある。

24 節の「主よ。あなたのみわざはなんと多いことでしょう。あなたは、それらをみな、知恵をもって造っておられます。地はあなたの造られたもので満ちています」は、神への賛美であるが、創世記 1 章の「神はよしとされた」というみ言葉を思い出させる。

25-26 節の「そこには大きく、広く広がる海があり、その中で、はうものは数知れず、大小の生き物もいます。・・・ あなたが造られたレビヤタンも、そこで戯れます」という海の光景は、創世記 1 章の「海の生き物」の創造(五日目)に関係する。古代中近東の人々にとっては、海は恐ろしいものだった。「レビヤタン」は神々に反逆するもので、その代表的なものだった。詩人は、そのような人々に向かい、海は広く平安なもので恐れを感じることはない、とのメッセージを送っている。

27-30 節は、六日目の創造記録に匹敵する。27 節の「あなたが時にしたがって食物をお与えになる」、28 節の「あなたがお与えになると、彼らは集め、あなたが御手を開かれると、彼らは良いもので満ち足ります」は、創世記1章の六日目に「動物に食物を与えたこと」と関係がありそうだ。ただし、29 節の「ちり」とか、30 節の「あなたが御霊を送られると、彼らは造られます。また、あなたは地の面を新しくされます」は、人間に対する食物供与(創世1:29)に関係するようにも見える。この箇所の「御霊」は、創造の一日がはじまる前の状態(創世1:2)、あるいは人間の創造(創世2:7)に関係がありそうである。。

31 節の「主の栄光が、とこしえにありますように。主がそのみわざを喜ばれますように」は、詩人がこれまでの一連の被造物の創造を振り返って叫んだ言葉である。原文では、「そうであったらいいなあ」という願望を込めた祈りではなく、「神は喜んでおられます」という高らかな宣言である。この宣言は、六日間の創造を終えた神が、造られたすべてのものをご覧になって「よしとされた」ことに通じている。

この詩篇は、一人称の賛美で始まった(1 節)。途中一人称は出てこない。ところが、最後になって再び一人称

の賛美に戻る(33-35 節)。33 節の「私は生きているかぎり、主に歌い、いのちのあるかぎり、私の神にほめ歌を歌いましょう」、34節の「私の心の思いが神のみこころにかないますように。私自身は、主を喜びましょう」、35節の「わがたましいよ。主をほめたたえよ」は、三連句の神への賛美である。神の創造のわざを観察しながら、被造物に思いをめぐらすことは、神を賛美することに他ならない。

創世記 1 章では、神の創造のわざを物語的に伝えている。そこから我々は、神と被造物の関係を知ることができる。ところがこの詩篇 104 篇は、被造物を支配している神をほめたたえている。神を知ることは、神を賛美することと同じである。創造と摂理の奥義は、神への高らかな賛美を生み出す。 賛美に至らない創造理解は、聖書の信仰ではない。

## 7. 詩篇 136 篇 4-9 節(創造は神の永遠の恵みを伝えている)

詩篇 136 篇は、神が、宇宙創造以降、全被造物及び神の民の歴史に対し、どのように関わってきたかを歌っている。それは、「その恵みはとこしえまで」という言葉に、すべてが込められている。神の恵みが全被造物に、しかも永遠に、注がれている。この事実こそ、詩人が本詩篇全体を通じて訴えたいことだった。本講演では、この詩篇の 4-9 節の創造に関する部分にのみを取り上げよう。

ただひとり、大いなる不思議を行われる方に。その恵みはとこしえまで(4節)

英知をもって天を造られた方に。その恵みはとこしえまで。(5節)

地を水の上に敷かれた方に。その恵みはとこしえまで。(6節)

大いなる光を造られた方に。その恵みはとこしえまで。(7節)

昼を治める太陽を造られた方に。その恵みはとこしえまで。(8節)

夜を治める月と星を造られた方に。その恵みはとこしえまで。(9節)

この詩篇 136 篇の 1-3 節では、神が神であることを黙想するとき、神の恵みが全被造物に、永遠に注がれていることを確認できる、と歌われている。続けて、4-9 節では神が創造された全被造物に目をとめるとき、10-15 節では神が出エジプトの際に行われた奇跡的な御業を思い出すとき、16-22 節では神が荒野からカナン定着までになされた御業を振り返るとき、そして最後の 23-26 節では神がそれぞれ個人の歩みにおいて救いの御手を延ばされた経験に思いをめぐらすとき、神の永遠の恵みを確認できる、と歌われている。

4 節の「大いなる不思議」は、5 節以下の事柄を指し、創造の御業のことである。5 節の「英知をもって天を造られた」は、二日目の「大空の創造」と関係がある。6 節の「地を水の上に敷かれた」は、三日目の「土地の創造」に関係する。7 節の「大いなる光を造られた」は、一日目の「光の創造」に関係がありそうだが、次節の「昼を治める太陽を造られた」と平行句に読む方が自然である。すると、9 節の「夜を治める月と星を造られた」を含め、7-9 節は四日目の太陽、月、星の創造に関係していると理解するのがよい。

結局これらのテキストによれば、二日目から四日目の創造を実現した神を深く心にとめるなら、神の恵みが全被造物に永遠に注がれていることが分かるはずである。もしキリスト者が、この詩篇が述べていることを真正面から受け止めるなら、その歩みは全く変わってくるだろう。被造物管理の神学などと大上段に振りかざさなくても、この詩篇に身を沈めて生きるとき、その神学の実践者ということになる。そのような生き方を送っていただくために、私自身は、この講演をしている。

これまで、創造に言及している詩篇を見てきた。詩篇以外の旧約聖書にも、創造に言及している個所はたくさんある。しかし本講演では、ある程度まとまってふれている個所に限り、紹介する。それは、ヨブ記、箴言、イザヤ書に見られる。むろん、それぞれの箇所を十分に解説する時間はない。創世記1章の創造記録との関連で、取り上げるのみである。この講演をきっかけに、ご自分でこれらの箇所を深く味わっていただけると、嬉しく思う。

# 8. ヨブ記 9 章 5-10 節 (神が支配者であり、創造者であることを伝えている)

ョブ記 9 章 1 節から 10 章 22 節は、ヨブによる友人のビルダデへの応答である。ョブは、彼のもとに訪問してきた三人の友人によって慰められることはなかった。それどころか、さらに深く傷つき、悩みの中に追い込まれてしまった。そのような中でヨブは、神の絶対的な主権に寄りすがろうと、神の創造、あるいは神の支配に言及する。

神が山々を移されるが、だれもこれに気づかない。神は怒ってこれをくつがえされる。(5節)

神が地をその基から震わすと、その柱は揺れ動く。(6節) 神が太陽に命じると、それは上らない。星もまた封じ込められる。(7節) 神はただひとりで天を張り延ばし、海の大波を踏まれる。(8節) 神は牡牛座、オリオン座、すばる座、それに、南の天の室を造られた。(9節) 神は大いなることを行なって測り知れず、その奇しいみわざは数えきれない。(10節)

この箇所の主語は、すべて神である。ヨブは、神が一つ一つの被造物を直接支配していることを強調している。 ここは、三連詩(5-6 節、7-8 節、9-10 節)で、それぞれは、二つの平行法の文章によって構成されている。

5-6 節では、「山々を移される」と「地をその基から震わす」とが対応し、「怒ってこれをくつがえされる」と「その柱は揺れ動く」が対応している。このテキストは、地震について言及しているのだろう(詩篇 18:7、82:5、97:5、イザヤ13:13、29:6 参照)。「地をその基から震わすと、その柱は揺れ動く」という表現は、柱の上に地の基が置かれ、その上に山などが乗っかっているかのような描写である(詩篇 75:3、I サムエル 2:8 参照)。むろん、これを文字どおりに解釈する学者もいるが、詩的な表現と見なす方がよい。創世記 1 章で言えば、三日目の「地」の創造に相当する。

7-8 節には、神が、対照的な二つのものを意のままに支配する権限をもっている事実を歌っている。7 節の「神が太陽に命じると、それは上らない」と「星もまた封じ込められる」は、神が昼夜両方の支配者であることを宣言している。8 節では、「天を張り延ばし」と「海の大波を踏まれる」が対比されている。「天を張り延ばし」(イザヤ 40:22、42:5、51:13、エレミヤ 10:12、51:15、ゼカリヤ 12:1 など参照)とは、創世記 1 章の二日目の「天」の創造と関係がある。「海の大波を踏まれる」は、海の巨獣を支配することを意味している。これは、創世記 1 章の三日目の「海」及び五日目の「海の巨獣」の創造と関係する。「神はただひとりで」という句は、古代中近東の世界では、いろいろな神々が支配権を争奪しあっていることを強く否定している。

9-10 節は、平行法の連句である。9 節の「神は牡牛座、オリオン座、すばる座、それに、南の天の室を造られた」と、10 節の「神は大いなることを行なって測り知れず、その奇しいみわざは数えきれない」とは、二行連句である。5-6 節と 7-8 節の二行連句は、現在の描写を中心に歌ったものである。しかしこの最後の連句は、過去の創造時への言及である。「神は牡牛座、オリオン座、すばる座、それに、南の天の室を造られた」(アモス 5:8、ヨブ38:31-32参照)とは、創世記1章の四日目の「星の創造」を指す。これは、7節の「星もまた封じ込められる」と正反対の状態をいう。

10節の「神は大いなることを行なって測り知れず、その奇しいみわざは数えきれない」は、これまで述べてきたことの総まとめである。「大いなること」とか「奇しいみわざ」とは、神の創造のみわざを指している。それは、人にとっては、測り知り得ないことである(ヨブ 5:9 のエリファズの言葉にも同じような表現が見られる)。この箇所でヨブが伝えたかったメッセージは、まさにこの点にあった。神の創造の奥義は、現代科学をもってしても理解し得るようなものではない。

# 9. ヨブ記 38 章 4-11 節 (神が創造の時の状況についてヨブに尋ねる)

ョブを訪れた 3 人の友人たちは、入れ替わり立ち代わり、ヨブを励まそうと努めた。だが、すべて無駄だった。ョブの苦悩は、かえって増すばかりだった。そんな中にあったヨブに、神は痛みを覚え、最後に語られた。ヨブの問いかけは、問題の核心ではなかった。だから、神はヨブの質問には、何一つ答えなかった。その代り、ヨブがこの世界の自然の秩序に全く無知であることを示された。そのようなことさえ分からないのに、神の御計画や霊的奥義を分かるはずはない、神はヨブにそう語りかけたのである。

わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。(4節) あなたは知っているか。だれがその大きさを定め、だれが測りなわをその上に張ったかを。(5節)

その台座は何の上にはめ込まれたか。その隅の石はだれが据えたか。(6節)

そのとき、明けの星々が共に喜び歌い、神の子たちはみな喜び叫んだ。(7節)

海がふき出て、胎内から流れ出たとき、だれが戸でこれを閉じ込めたか。(8節)

そのとき、わたしは雲をその着物とし、黒雲をそのむつきとした。(9節)

わたしは、これをくぎって境を定め、かんぬきと戸を設けて、言った。(10 節)

「ここまでは来てもよい。しかし、これ以上はいけない。あなたの高ぶる波はここでとどまれ」と。(11 節)

神がこの世界を造られたとき、ヨブはそこにいなかった。従って、ヨブは神のすべてのわざを知ることはできない。できなくても神に従っていく、それが信仰なのだ。神はヨブに、そう語りかけた。4 節の「地の基を定めた」、5 節の「その大きさ」、6 節の「その台座」とか「その隅の石」などは、創世記1章の三日目の「地の創造」に関連する。7 節の「明けの星々が共に喜び歌い、神の子たちはみな喜び叫んだ」は、三日目の創造時に、天上の世界で起こっていたことを伝えている。

4-7 節は、陸地の創造に関係したことだった。8 節からは、目を陸から海に転じる。「海がふき出て、胎内から流れ出た」は、海の創造が出産に例えられている。9 節の「わたしは雲をその着物とし、黒雲をそのむつきとした」とは、神が荒れ狂うようすの海を、新生児同様に扱われたことを述べている。10-11 節の「これをくぎって境を定め、かんぬきと戸を設けて、ここまでは来てもよい。しかし、これ以上はいけない。あなたの高ぶる波はここでとどまれ」とは、神が海と陸の間の境界線を定めたことに言及している。人は荒れ狂う海を鎮めることはできない。それを支配しているのは、神である。神は、ヨブに、人は人であり、その限界を知って生きよ、と語られた。神の創造の力は、人間の限界を教えている。

## 10. 箴言 8 章 22-31 節(神は知恵を用いてこの世界を造られた)

箴言 8 章のテーマは、世界の創造ではない。神の知恵である。その神の知恵が、1 人称により、自らについて 語るという形式で記述している。この知恵は、世界の創造以前から、神と共にいたと告白する。この知恵の告白に 付随して、この8章には、世界の創造が言及されている。ところが、その言及の中身は、創世記1章の創造の描写 に驚くほど似ている。

主は、その働きを始める前から、そのみわざの初めから、わたしを得ておられた。(22節)

大昔から、初めから、大地の始まりから、わたしは立てられた。(23節)

深淵もまだなく、水のみなぎる源もなかったとき、わたしはすでに生まれていた。(24節)

山が立てられる前に、丘より先に、わたしはすでに生まれていた。(25節)

神がまだ地も野原も、この世の最初のちりも造られなかったときに。(26節)

神が天を堅く立て、深淵の面に円を描かれたとき、わたしはそこにいた。(27節)

神が上のほうに大空を固め、深淵の源を堅く定め、(28節)

海にその境界を置き、水がその境を越えないようにし、地の基を定められたとき、(29 節)

わたしは神のかたわらで、これを組み立てる者であった。わたしは毎日喜び、いつも御前で楽しみ、(30節)

神の地、この世界で楽しみ、人の子らを喜んだ。(31節)

この箇所の知恵とは何者なのか。コロサイ1章15節の「造られたすべてのものより先に生まれた方」や、ヨハネ1章1-3節の「ことば」と結びつけ、キリストを指すと解釈する人もいる。しかし私自身は、この箇所に箴言全体が説く知恵と違う内容を読み込むことには、大きな違和感を覚える。知恵は擬人化され、自らが語っているかのような文学的手法が取られている、と解釈する方がずっと自然である。ただ、この問題に深入りすることは、本講演の趣旨から外れる。創世記1章の創造の問題に関わる事柄にのみ、焦点を当てて考察しよう。

22 節から23 節までは平行法に基づく二連詩である。22 節の「主は、その働きを始める前から、そのみわざの初めから」と、23 節の「大昔から、初めから、大地の始まりから」は同じことを言い、いずれもこの世界が始まる前を指している。これは、創世記1章の冒頭の言葉「初めに」に相当する。

24-25 節は、もう一つの平行法に基づく二連詩である。24 節の「深淵もまだなく、水のみなぎる源もなかったとき」と、25 節の「山が立てられる前に、丘より先に」も同様である。24 節の「深淵」とか「水のみなぎる源」は、創世記 1章 2 節の「地」がなかったときと関連がある。

27 節の「天を堅く立て、深淵の面に円を描かれたとき」とか、28 節の「神が上のほうに大空を固め、深淵の源を堅く定め」とは、二日目の創造への言及であろう。「深淵」と訳されている「テホーム」は、創世記 1 章 2 節、あるいは 5 節の「やみ」と訳されている言葉と同じである。

29 節の「海にその境界を置き、水がその境を越えないようにし、地の基を定められたとき」とは、三日目の「陸と海の創造」に関連する。31 節の「神の地、この世界」は、この宇宙が神の所有物であることを示唆する。

創世記 1 章には、「神は仰せられた」という表現が、10 回出てくる(3、6、9、11、15.20、24.26、28、29 節。22 節のヘブル語原文には出てこない)。神が語られた言葉は、神の豊かな知恵の現れである。その知恵には、神の思い、計画、意志などのすべてが含まれていた。この世界の被造物は、神の知恵がそのまま反映されている。現代の科学者たちは、被造物の美しさ、そこに貫かれている自然法則の見事さに驚嘆の声をあげている。箴言8章で明らかにされている神の知恵によって、これらのすべては造られたものである。

## 11. イザヤ書 40 章以降(世界の創造者であるとの神のタイトル)

聖書全体を通じて、イザヤ書ほど多くの個所で「世界の創造」に言及している書物はない。特に、バビロン捕囚からの解放を預言したイザヤ書 40 章以降に顕著である。しかし、そのほとんどは、神が創造者であるという「タイトル的な言及」である。 創造そのものについて論じている個所は、それほど多くはない。 二、三か所のみである。 そのようなテキストについては、この項の後で扱う。 まず、タイトル的な用法を紹介しよう。

最初は、預言者自身が語っているタイトル的用法である。イザヤは、「神をだれになぞらえ、神をどんな似姿に似せようとするのか」(イザヤ 40:18)と民に問うた。そして、この問いに対し、預言者自ら次のように答えている。

主の手がこのことをし、イスラエルの聖なる者がこれを創造した。(イザヤ 41:20)

天を造り出し、これを引き延べ、地とその産物を押し広め、その上の民に息を与え、この上を歩む者に霊を授けた神なる主。(イザヤ 42:5)

天を創造した方、すなわち神、地を形造り、これを仕上げた方、すなわちこれを堅く立てた方、これを茫漠としたものに創造せず、人の住みかにこれを形造った方。(イザヤ 45:18)

天を引き延べ、地の基を定め、あなたを造った主。(イザヤ51:13)

神が「天を引き延べ、地の基を定めた。(イザヤ 51:16)

問いかけて答えを出す、このような形式で語ったのは、預言者だけではなかった。神ご自身もまた、「それなのに、わたしを、だれになぞらえ、だれと比べようとするのか」(イザヤ 40:25)とか、「わたしをだれになぞらえて比べ、わたしをだれと並べて、なぞらえるのか」(イザヤ 46:5)と、民に問いかけている。しかも、預言者同様、神自らが民に対し、その問いに答えを出している。

わたしは万物を造った主だ。わたしはひとりで天を張り延ばし、ただ、わたしだけで、地を押し広げた。 (イザヤ 44:24)

わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者。(イザヤ 45:7)

このわたしが地を造り、その上に人間を創造した。わたしはわたしの手で天を引き延べ、その万象に命じた。 (イザヤ 45:12)

わたしの手が地の基を定め、わたしの右の手が天を引き延ばした。わたしがそれらに呼びかけると、それらは こぞって立ち上がる。(イザヤ 48:13)

このようなタイトル的な表現をまとめると、神とは、①天を引き延ばし、天の万象を造った方、②地の基を定め、押し広げ、地の万象と産物をつくった方、③地を人の住処とし、人間を造った方、④光、やみ、平和、わざわいをもつくった方、ということになる。創世記 1 章の創造に比べると、無いのは海と海に泳ぐ魚、空と空を飛ぶ鳥、地に生きる動物ぐらいである。むろん、これらを「万象」という言葉の中に含めれば、創世記 1 章の被造物の中でタイトル的用法に出てこないものは何もない。むしろ、両者の表現はとてもよく似ており、二つの成立過程においては何らかの依存関係があったのではないか、と推測したくなるほどである。

実際多くの聖書批評学者たちは、両者の依存関係を認めている。両者の類似点を指摘し、創世記1章は紀元前6世紀頃に記された、と主張する。いわゆる、創世記1章の第二イザヤ著作説である。このような学問的方法論には、それなりの説得力がある。しかし、類似点をあげて同一著作説を主張するのは、単純すぎる。むろん、その可能性はある。聖書の無誤性の教理を持ち出し、そのような方法論そのものを否定するのは間違っている。と同時に、無批判に受け入れるのも避けるべきである。

神の民イスラエルは、モーセから第二イザヤの時代まで、創世記 1 章に記されているような世界創造の記録を何一つもたず、宗教生活を送ることができただろうか。古代中近東の宗教史を知れば知るほど、そのように想像することは難しい。紀元前 3,000 年から 2,000 年にかけてのメソポタミア文明下の人々は、世界のどの領域をどの神々が支配しているのかという点に最大の関心を払っていた。それは、彼らが日常生活において多くの困難に遭

遇し、神々の助けを必要としていたからである。

神は、アブラハムをカルデヤのウルから召された。そのとき神はアブラハムに、土地と子孫を与え、イスラエル国家の基になることを約束した。その神は唯一の神であり、世界の創造者・支配者であることは当然の前提であった。しかし、この信仰が、創世記1章のような形で花開くのは、モーセ時代の安息日神学を待たねばならなかった。その後、修正されることはあっただろう。だが、創世記1章の「世界創造の記録」の中核(ケルネル)は、アブラハム時代にまでさかのぼるはずである。創造物語を欠いた宗教など実在しないし、存続できない。

考えていただきたい。人類の宗教史において、唯一神教は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教だけである。その唯一神教の根源はアブラハムであり、旧約聖書だった。唯一神教の本質は、この宇宙は唯一の神によって創造されたということである。それを欠いた唯一神教など、実態のない宗教である。出エジプト、カナン征服、ダビデ王制、ソロモンの神殿、バビロン解放、そのどれ一つとっても、「宇宙の創造者にして支配者なる神」という概念無くしてはあり得ない出来事だった。

### 12. イザヤ書 40 章 21-26 節 (神は万物の創造者であり、支配者である)

イザヤ書において、神が宇宙の創造者であると述べている個所は、タイトルだけではない。創造そのものについてまとめて記述されている箇所もある。例えば、イザヤ書 40 章 21-26 節である。

あなたがたは知らないのか。聞かないのか。初めから、告げられなかったのか。地の基がどうして置かれたか を悟らなかったのか。(21 節)

主は地をおおう天蓋の上に住まわれる。地の住民はいなごのようだ。主は天を薄絹のように延べ、これを天幕のように広げて住まわれる。(22 節)

君主たちを無に帰し、地のさばきつかさをむなしいものにされる。(23節)

彼らが、やっと植えられ、やっと蒔かれ、やっと地に根を張ろうとするとき、主はそれに風を吹きつけ、彼らは 枯れる。 暴風がそれを、わらのように散らす。 (24 節)

「それなのに、わたしを、だれになぞらえ、だれと比べようとするのか」と聖なる方は仰せられる。(25節)

目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって、呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない。(26 節)

この箇所の中心は、神が神の民に、「わたしを、だれになぞらえ、だれと比べようとするのか」(25 節)と問いかけたことにある。この問いに対し預言者は、21 節では「地の基」を置いた方、22 節では「地をおおう天蓋の上に住まわれる」方、あるいは「天を薄絹のように延べ、これを天幕のように広げて住まわれる方」と答えている。

さらに、23 節と24 節では、「君主たち」や「地のさばきつかさ」たちが完全に神の支配下に置かれていることを説明する。そして最後の 26 節では、「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって、呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない」と、真の神がどのような方であるかを宣言している。

この箇所の「地の基」(21 節)は、創世記 1 章では三日目の創造に関わりがある。「地をおおう天蓋」(22 節)は、 二日目の創造に関係する。これらの表現が詩的なものなのか、それとも古代中近東の宇宙像を反映したものかは、 議論の余地がある。しかし、どちらであっても、預言者の言わんとすることは明白である。神とは万物の創造者で あり、それ以外ではない、ということである。

26 節の「その万象」は、直前に「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ」とあり、直後に「一つ一つ、その名をもって、呼ばれる」と言われている。すると、創世記 1 章の四日目の「天体の創造」に言及していることは明らかである。なお、「一つ一つ、その名をもって、呼ばれる」とは、星の一つ一つに至るまで神の支配下にあることを強調している。

預言者は、宇宙の創造に関する問題を解明することを期待して、これらの問いかけをしているのではない。神が創造されたこれらの被造物をとおして、イスラエルの民が信じている神こそ万物の創造者であることを明確に示し、「この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない」ことを知るようにと、励ましている。

聖書は、いろいろな個所で、全被造物が神によって造られたと宣言している。それは、困難に直面している神の民を励ますためだった。そのような記述を、あるキリスト者たちは、創造のプロセスを論じる材料にしている。それは、聖書記者にとっては、想定外のことだった。実際、キリスト教界がそのような取り扱い方を始めるのは、中世も後半からだった。それまでは、この宇宙は宗教的な意識をもって見られてきた。科学的な問題意識で宇宙を観察するようになるのは最近のことなのである。むそん、宇宙の管理者に任じられている者としては、宇宙をそのような目で見ることは当然である。だが、それは、聖書の記述をとおしてではない。聖書は、神からの語りかけを聞き、神に祈り、神を賛美するためのものである。

# IV. 新約聖書における創造の記録

これまで、旧約聖書に見られる世界創造の記録を一とおり見てきた。今度は、新約聖書に移ろう。新約聖書は、世界創造については、ほとんど何もふれていない。それを前提に、キリストの贖いの物語が展開されている。というわけで、新約聖書には、創造者なる神に呼びかける祈りがたくさん出てくる。

これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。」(使徒 4:24)

皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。(使徒 14:15)

主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。(黙示録 4:11)

彼は大声で言った。「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」(黙示録 14:7)

永遠に生き、天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方をさして、誓った。「もはや時が延ばされることはない」(黙示録 10:6)。

これらの祈りの中での呼びかけは、神へのタイトル的な使い方である。本講演では、これ以上詳しい説明は避ける。初代のキリスト者たちが、宇宙の創造をどのようにとらえ、祈りの中で利用していたかを、じっくり黙想していただきたい。創造論が最も脚光を浴びる場所、それは科学ではなく、祈りの世界である。神の前にひれ伏す時が、その御業である創造の世界に思いを寄せる時でもある。

新約聖書が伝えたい中心的なメッセージは、キリストの贖いである。その贖いのご計画は、万物の創造以前から神のみ旨の中にあった。これは、創造論とか宇宙論の問題というより、贖罪論の問題である。しかし、宇宙創造の目的と深く関わりがあるので、この箇所で取り上げたい。

神を真剣に求めている人が、牧師に尋ねた。神は、創造以前には何をしておられたのか、と。それに対し牧師は、そのようなくだらない質問をする人のために、地獄を用意していたのだ、と答えた。本当にあった話とは思わないが、腹が立った。真剣な質問に対しこんな茶化した答えを出す、そういうことはやめてもらいたい。

永遠の昔、まだ何もないとき、神は何をしておられたのか、そんなことは確かに、余計なお世話かもしれない。 だが、そう言われてもなお、世界を創造される前、永遠の神がどのように過ごしておられたのかは、興味深い問題 である。むろん、人間に分かるはずはない。分からなくてもよい。それは、一匹の蟻が、人間の世界を心配してい るようなものだろう。にもかかわらず、私には気になる。特に、神はなぜ人を創造されたのだろうか、ということが。

聖書の中のどこかに、このことに関するヒントはないのだろうか。ある。ヒント以上のものがある。それは、イエスの祈りの中だった。

#### 1. ヨハネ 17 章(創造以前の人間に対するイエスの思い)

ョハネの福音書17章には、イエスの祈りが記されている。十字架に架けられる前夜、12弟子の前で祈られた祈りである。その祈りは、次のような言葉で始まる。

今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。(ヨハネ 17:5)

イエスは、御父のもとで世界の創造以前からもっていた栄光について祈られた。イエスは、御父との特別な関係をもち、栄光に輝く立場にあった。この祈りの中でも、そのことが繰り返し述べられている。イエスのものはすべて御父のもの(10 節)、御父のものはイエスのものである(10 節)。イエスは御父によって遣わされ(21、23 節)、御父によって栄光を与えられ(22 節)、御父によって愛されている(23 節)。御父はイエスにおられ、イエスも御父におられる(21、23 節)。

このイエスの祈りには、キリスト者の立場についても明らかにされている。キリスト者とは、御父から出ており(7節)、御父のものである(6、9節)。御父が世から取り出してくださった者であり(6 節)、この世のものではなく(14、16 節)、世から憎まれる者である(14 節)。御父がイエスに下さった人々であり(6、7、9 節)、イエスからみことばを与えられる者である(14 節)。イエスが御父から受けたみことばを受け入れ(8 節)、それを守る人である(6 節)。真理のみことばによって聖め別けられ(17 節)、父(あるいは御子)の御名の中に保たれる者である(11、12 節)。キリスト者とは、イエスが御父から出てきたことを知り、御父がイエスを遣わされたことを信じる人である(8 節)。キリスト者は、イエスの喜びを全うさせ(13 節)、イエスに栄光をささげる者である(10 節)。御父が御子におられ、御子が御父の中にいるように、すべてのキリスト者が一つになることを求めておられる(11、21、22、23 節)。

キリスト者のために祈り続けられたイエスは、その最後を次のような祈りの言葉で締めくくられた。襟を正し、すべてのキリスト者に、イエスの祈りを聞いていただきたいと思う。

父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。 あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るよう になるためです。そして、わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これからも知らせます。それは、 あなたがわたしを愛してくださったその愛が彼らの中にあり、またわたしが彼らの中にいるためです。」(ヨハネ 17:24 -26)

イエスは、「あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光」と祈られた。イエスがもっておられた栄光とは、御父の御子に対する愛である。世界創造の前からの愛である。しかもその愛について、「あなたがわたしを愛してくださったその愛が彼らの中に」あるように、と祈られた。

何ということだろう。御父のイエスに対する愛と同じ愛が、キリスト者の中にも注がれるように、との祈りである。御父が御子に対してもっておられる愛とは、独占的な愛であり、永遠の愛である。その愛が、キリスト者に注がれるようにというのである。しかもイエスは、「またわたしが彼らの中にいるため」だと祈られた。御父の愛がキリスト者に注がれる。そのキリスト者の愛の中にイエスがおられる。これが、御父と御子とキリスト者の間に生じる「愛によって一つになる」ことである。

ここには、我々の理性では到底理解できない事柄が記されている。宇宙が創造される以前に、御父と御子は栄光を共有しておられた。その栄光とは、御父と御子の間の愛の交わりである。この愛の交わりを、御父と御子の間に留めず、キリスト者の間にまで広げよう、というのである。神は、その愛の関係を分かち合える存在として、人間の創造を計画された。それが、神が人を「神のかたち」に造られた理由だったのである。

# 2. エペソ1章(創造以前の人間に対する神の計画)

イエスの祈りによれば、御父と御子は、創造以前にもっていた親しい交わりを、キリスト者の間に広めようと話し合っていた。それと同じことを、パウロはエペソ人への手紙の冒頭で解説している。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天にあるすべての 霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼 にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエ ス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。(エペソ 1:3-5)

まず、「世界の基の置かれる前から」という句に注目していただきたい。神は、宇宙創造以前に、キリストにある「霊的祝福」をもってキリスト者を祝福された。これは、キリストの贖いを指している。すると神は、創造以前から人間

の堕落を予測していたことになる。何ということだろう。神は人の堕落を予測し、キリストの贖いを計画され、その贖われた人々に愛の交わりを広げていこう、と計画されたのである。

では、この霊的祝福とは、具体的に何を指しているのか。それは、キリスト者が一つに集められ、「御国を受け継ぐこと」である。

いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方にあって、一つに集められるのです。この方にあって私たちは御国を受け継ぐ者ともなりました。みこころによりご計画のままをみな行なう方の目的に従って、私たちはあらかじめこのように定められていたのです。それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。この方にあってあなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。(エペソ1:9-14)

この記述によれば、キリスト者とは、「真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じた」人のことである。その人は、キリストにあって「御国を受け継ぐ者」になる。そして、聖霊が「御国を受け継ぐことの保証」である。結局、天地創造以前からキリスト者に用意されていた「霊的祝福」とは、「御国を受け継ぐ」ことだった。「御国を受け継ぐ」とは、天国に入れるということではない。神が王として支配されている御国の相続人になる、ということである。御国の相続人とは、御国の共同統治者ということである。御国の統治は、神の御霊によってなされる。その御霊を既に受けているということは、今この地上において、その御国が既に始まっていることを意味している。

この御国は、イエスが語られた「神の国」のことである。御国の相続は、死んで天国に行ってから始まるのではない。キリストを信じた時から、すでに始まっている。しかも、このようなすばらしい特権が、天地創造以前から神の永遠のご計画の中で進められていた、というのである。何という大きな喜びであろう。

先のイエスの祈りでは、キリスト者の受ける栄光とは、神およびキリストと一つとなり、愛の交流をもつことだと学んだ。この交流は、実際問題としてどのような形で実現するのか。神及びキリストと共に、被造物を支配することによってである。

#### 3. I コリント2章(創造以前から用意されていた十字架の贖い)

神は、イエスの贖いを天地創造以前から準備されていた。これは、神の知恵の奥義である。人は誰も、この神の知恵を悟ることはできない。この神の知恵の中で、キリストの十字架の奥義は世界創造以前から練られていた。

私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。( I コリント 2:6-8)

パウロがここで語っていることは、「隠された奥義」である。「奥義」とは、人間の知恵では到達し得ない真理で、「神の知恵」に属する。それはキリストの十字架に関するものである。イエス時代の人々は、イエスを十字架上にはりつけにした。パウロはそのことを、「神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたもの」だと、説明する。

この箇所で言う「私たちの栄光」とは何か。キリスト者の栄光は、ヨハネ 17 章のイエスの祈りによれば、キリスト者が御父及び御子との交わりにあずかることだった。パウロによれば、神の国の民になり、相続財産をキリストと共に受け、御国をキリストと共に協働統治することだった。ヘブル人への手紙によれば、それは、神と共に、被造物の管理責任を果たすことだったのである。

このようなすばらしい恵みをもたらすのが、十字架の奥義である。それは、世界のはじまる前にあらかじめ立てられた神のご計画に基づくものだった。もしこれが真実であるなら、神は人類の堕落を、世界創造以前からご存知だったことになる。というより、「あらかじめ定められたもの」という表現は、もっと強い印象を受ける。あたかも、神ご自身の意思が強く働いていたかのような書き方である。むろん、人間の堕罪に神の責任があった、などと言おうとしているのではない。ただ、人間の堕落のような忌まわしい出来事さえ、神の最終的な恵み深い主権のもとにあった、ということである。

人間の堕落、そしてキリストによる贖い、これは、神にとっても大きな冒険的な出来事だった。神は、人に自由意

思を与えた。人間がその自由意思の使い方を失敗することを、お見通しのうえでのことだった。それゆえあらかじめ、キリストの贖いを計画された。その贖いをとおして神のいのち(聖霊)を分かち合い、神の子に招こうとしたのである。

もし人間が神の知恵を悟っていたら、「栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう」とは、どういう意味か。イエス時代のユダヤ人は、イエスを十字架に架けてしまった。なぜか。イエスを神に背く者と考えたからである。彼らは、イエスを理解することができなかった。「栄光の主」を見ることができず、「罪人の一人」に数えてしまった。それゆえ、イエスを十字架に架けてしまったのである。

彼らの行動、それはむろん、無知に基づくものだった。全く愚かな行動だった。しかし神は、この人間の無知さえよく御存じで、それを踏まえて十字架による恵みを用意してくださったのである。まさに、神の知恵は人間の愚かさに勝ったものだった。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」(Iコリント 1:25)とは、よく言ったものである。

宇宙が人間によって協働統治されるとの神のご計画は、創造以前に立てられたものだった。それは、「私たちの栄光のため」だった。栄光とは、本来神にのみ属する。神は、「わたしはわたしの栄光を他の者には与えない」と言われている(イザヤ 48:11)。にもかかわらず、ここでは、「キリスト者の栄光」について述べている。キリスト者がどれほど大きな恵みを受けているのか、それは、筆致に尽くしがたいものである。

パウロは、イスラエル史の歩みを振り返り、神のお取り扱いの絶妙さに驚嘆した。神は、ユダヤ人を捨てられ、異邦人を救おうとされているかのように見えた。しかしそれは違った。異邦人に恵みが及んだのは、ユダヤ人を奮起させるためであり、最終的にはユダヤ人も異邦人も皆一つになって神の祝福にあずからせるためだった。そのような神の大きなご計画に気づいたパウロは、次のような叫びを発した。

ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか。また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。(ローマ 11:33-36)

宇宙創造のご計画、それは、イスラエル史の比ではない。神は、歴史のすべてを、万物の創造以前から、ご計画された。すべてのキリスト者は、パウロと共に、この神への賛美を叫ばざるを得ない。

#### 4. ヨハネ1章、コロサイ1章、ヘブル1章(万物の創造の目的はキリスト)

神が万物の創造者である。それは、旧約聖書が教えているところであり、誰でも信じている。ところが、新約聖書は、キリストが万物の創造者であるとも述べている。このことが結局、三位一体の真理に結びついていくのであるが、これは全く不思議な啓示である。この点に言及している新約聖書のみことばを読んでいこう。まず、ヨハネの福音書 1 章である

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。 すべてのものは、この方によって造られた。 造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。 (ヨハネ 1:1-3)

このヨハネの福音書は、「初めに」という言葉で始まっている。これは明らかに創世記 1 章の冒頭の箇所を意識したものである。創世記もまた「初めに」という言葉で始めているが、その「初め」はこの世界の初めであり、時間の初めである。このヨハネの福音書の方は、時間のない、考えられる限りの初めであり、神の世界における初めである。創世記の記述より、はるか永遠の昔にさかのぼる、人間の知性では論じることのできない初めである。

福音書の著者は、「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない」と宣言する。そして著者は、このキリストにいのちと光があったことを告げる。「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」(ヨハネ 1:4-5)ここには、いのち、光、やみが出てくる。この順番は、創世記 1-2 章の順番とは逆である。ヨハネの福音書の最初と創世記の最初の間にキアスムス構造を読み取ろうとするのは、行き過ぎかもしれない。しかし、そう言いたくなるほど、ヨハネの福音書の著者は、創世記を意識している。

キリストがこの世界を創造されたことについては、パウロもコロサイ人への手紙1章において述べている。この箇所は、初代教会の讃美歌集からの引用だと考える学者が増えている。そうかもしれない。そうであってもなくても、初代のキリスト者たちが、キリストについてどのように信じていたかを、よく考えていただきたい。

御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。(コロサイ1:15-17)

ここでパウロは、「万物は御子にあって造られた」、「すべて御子によって造られた」、「万物は、御子によって造られ」と、キリストが万物の創造者であることを三度も繰り返し、強調する。さらに「御子のために造られた」と、御子が相続者であることが述べられている。さらに、「万物は御子にあって成り立っています」と、御子が万物の保持者であることも付け加えられている。これまで我々は、万物は人間をゴールにして造られたと見てきた。むろん、そのような側面もあり、そのように言うこともできる。しかし、本当は、人間は最終のターゲットではない。キリストこそ、全被造物の中心におられる方だった。

同じことがヘブル人への手紙1章2-3節に言われている。

この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。(ヘブル 1:2-3)

ここでも、キリストと万物の関係は極めて明確に整理されている。「御子を万物の相続者とし」とは、キリストが相続者であることを述べている。「御子によって世界を造られました」は、キリストが創造者であることを明らかにしている。「その力あるみことばによって万物を保っておられます」は、キリストが万物の保持者であることを宣言している。相続者、創造者、保持者、この順番は重要である。神は、創造以前から、万物を御子キリストの相続分として定められていたのである。それゆえ、一切の被造物は御子に所属するものとして造られたのである。

## 5. ヘブル2章(被造物の管理権を回復したキリストの贖い)

ヘブル人への手紙1章の冒頭に続き、この手紙の2章6-13節は、世界の創造、特に創世記1章との関係で、最も重要な個所である。この箇所は、人間の被造物管理という、創世記の初めから問題にされていたテーマが展開されている。この箇所とそのテーマについては、既にいろいろな所で講演をし、講演原稿もいくつか冊子にまとめてきた。従って、本講演の時間もほとんど残されていないこともあり、割愛する。皆さんきっと興味をお持ちだと思う。大野教会のホームページにアクセスし、講演原稿をダウンロードしてお読みいただきたい。

神は日々、「今日」という新しい日を創造され、キリスト者にすべての被造物の管理を託している。我々は、「神の相続人」であり、キリストとの「共同相続人」である(ローマ 8:15-17)。相続の対象は、人間とその社会のすべてを含めた被造物である。むろん、自然界も含まれる。今の世界だけでなく、やがて来る新しい世界も含まれる。

その管理には、神のみ心を知り、神からのアドバイスを必要とする。そこに祈りがある。自分勝手に治めるのではない。神は我々の先頭に立ち、今日も全被造物を治めておられる。基本的には神が定めた「一般法則」に基づいての統治である。しかし神は、法則に拘束される方ではない。必要であれば、いつでも奇跡(法則を超えた業)を行うことができる。神は法則の支配者である。Deismではなく、Theismである。キリストは、神の働きを見ながらご自分の働きを進められた。キリスト者も同じである。神とキリストの働きを見ながら、与えられた使命を追行していくのである。

#### 6. 黙示録 21-22 章、イザヤ書 65-66 章 (神は新しい天と新しい地を創造する)

聖書は、新しい天と新しい地の創造を教えている。それは、これまで述べてきた創造とどのような関係にあるのか、未だ不明の部分が多い。しかし、深い関わりがあることは間違いない。従って、ここでその問題についてふれ、本日の講演を終わりたいと思う。

新約聖書は、「新しい天と新しい地」の創造について、二箇所で言及している。まず、ペテロの手紙第二3章である。

そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、 そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし、私たちは、神の約束に従って、 正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。(IIペテロ3:12-13)

ペテロは、「神の日(神の裁きの日)」に言及する。そして、「神の日」には、今の世界は「天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまう」と述べている。天と天の万象が燃えてくずれるとは、いったいどのようなことを想定すればよいのか。天については述べられているが、地についてはふれられていない。地はこの崩壊には含まれていないのか。続く「新しい天と新しい地」という表現は、天と地の両方がすべて含まれているのではないか。イエスの「天地が滅びうせない限り」(マタイ 5:18)とか、「この天地は滅び去ります」(マタイ 24:35)という言葉は、地を含めて考えるべきではないか、等々考えなければならないことはたくさんある。(「火」というのはノアの洪水の「水」に対比された言葉で、もしそうだとすると、洪水によって滅ぼされたはずの「地」が依然存続していることも考えておかねばならない。「滅ぼされる」という言葉は、崩壊してなくなってしまうという意味ではないのかもしれない。)

ペテロは、新天新地は「正義の住む」世界だと述べている。ここで、正義が強調されているのは、この世界が、 サタンあるいは罪や悪の力によって支配されているという前提に立っている。新しい世界の「正義」とは、神の支配 原理であろうが、具体的にはどのような中身なのだろうか、考えてみるとよい。

さらにこの新天新地は、「神の約束」に基づいている。この約束とは、旧約聖書の預言者たちが明らかにした「神が統治する新しい世界」である。「子羊が狼と共に住んでいる平和な、恵みに溢れた世界」である。

新約聖書において、「新しい天と新しい地」が出てくるもう一か所は、黙示録の最後である。

また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、{また彼らの神となり、}彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」(黙示録 21:1-4)

この箇所は、キリスト者の葬儀の時によく読まれる。いわゆる天国の光景が描かれていると理解されているからである。それは、見当違いではないと思う。天国とは、どのようなところなのか。今の世界とは全く違う、新しい世界なのか。とても興味がある。しかし、そのような問題に深入りすることは、本講演の趣旨からそれる。被造物管理の神学では、終末の問題もおいおい扱われる。そのときを楽しみにしていただきたい。

この新天新地は、旧約聖書の「神の約束」に基づいていることは既に述べた。この「新しい天と新しい地」に言及しているのは、預言者イザヤである。彼は、二箇所でふれている。まず、65 章 17 節である。

見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。先の事は思い出されず、心に上ることもない。(イザヤ 65:17)

このイザヤが伝えている「新しい天と新しい地」とは、どのようなものなのか。65 章 17 節の後、次のような文章が続く。一つ一つの文章を味わい、じっくりお読みいただきたい。難しく考える必要はない。まずは、文字どおりの意味をつかみ取っていただければ十分である。

だから、わたしの創造するものを、いついつまでも楽しみ喜べ。見よ。わたしはエルサレムを創造して喜びとし、その民を楽しみとする。わたしはエルサレムを喜び、わたしの民を楽しむ。そこにはもう、泣き声も叫び声も聞かれない。そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命の満ちない老人もない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる。

彼らは家を建てて住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる。彼らが建てて他人が住むことはなく、彼らが植えて他人が食べることはない。わたしの民の寿命は、木の寿命に等しく、わたしの選んだ者は、自分の手で作った物を存分に用いることができるからだ。彼らはむだに労することもなく、子を産んで、突然その子が死ぬこともない。

彼らは主に祝福された者のすえであり、その子孫たちは彼らとともにいるからだ。彼らが呼ばないうちに、わたしは答え、彼らがまだ語っているうちに、わたしは聞く。狼と子羊は共に草をはみ、獅子は牛のように、わらを食い、蛇は、ちりをその食べ物とし、わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわな

### い」と主は仰せられる。(イザヤ65:18-25)

イザヤが預言した新天新地は、今の世界と全く違うというより、この世界の延長線上に形成されるような印象を受ける。この記述を、文字どおりに解釈するのがよいのか、それとも象徴的な意味に理解すべきなのかは、はっきりしない。キリスト者の間にも両方の意見がある。以前神学校のクラスで、学生たちが数人のグループに分かれ、共に読み合いながら、各自が自分の印象を語り合うときをもったことがある。それぞれの教派(教会)の背景を代弁する人が多く、興味深かった。あなたの印象を聞かせていただきたいと思う。

イザヤが語った二つ目の言葉は、66章22節である。

わたしの造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くように、——主の御告げ——あなたがたの子孫と、あなたがたの名もいつまでも続く。(イザヤ 66:22)

新天新地は、「いつまでも続く」と二度繰り返されている。つまり、新天新地は、今の世界とは異なり、永遠に続くことが強調されている。では、この永遠に続く新しい世界は、どのようなものか。この直前に記されている 66 章 18-21 節は、次のように述べている。

わたしは、彼らのわざと、思い計りとを知っている。わたしは、すべての国々と種族とを集めに来る。彼らは来て、わたしの栄光を見る。わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちののがれた者たちを諸国に遣わす。 すなわち、タルシシュ、プル、弓を引く者ルデ、トバル、ヤワン、遠い島々に。

これらはわたしのうわさを聞いたこともなく、わたしの栄光を見たこともない。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせよう。彼らは、すべての国々から、あなたがたの同胞をみな、主への贈り物として、馬、車、かご、騾馬、らくだに乗せて、わたしの聖なる山、エルサレムに連れて来る」と主は仰せられる。

「それはちょうど、イスラエル人がささげ物をきよい器に入れて主の宮に携えて来るのと同じである。わたしは彼らの中からある者を選んで祭司とし、レビ人とする」と主は仰せられる」(イザヤ 66:18-21)。

さらにまた、22 節の後の23 節には、「毎月の新月の祭りに、毎週の安息日に、すべての人が、わたしの前に礼拝に来る」と主は仰せられる」と続く。

これらの表現はすべて旧約聖書を背景にしている。もし文字どおりに解釈するなら、旧約聖書的な世界に彩られた新しい天と新しい地になる。まさに、ディスペンセーショナルな千年王国の姿である。それは無理だとして、比喩的な意味に解釈しようとする人たちがたくさんいる。しかし、単なる比喩的な解釈では間に合わない。その描写は、あまりにリアルな言葉遣いだからである。

私自身は、まず文字通りにそのまま受け止め、イザヤ時代の人々がそのメッセージをどのように受け止めたかをきちんと把握すべきだと思う。なぜなら神は、彼らが理解できるように、イザヤ時代の思考枠と表現法の中で、新しい天と地のすばらしいメッセージを啓示されたからである。新天新地に関しても、神の啓示は斬新的だった。イザヤ時代にはイザヤ時代らしく示された。同様に、新約聖書の時代には、初代教会のキリスト者たちが理解できるフレーム、世界観、言葉使いの中で啓示された。従って、いつの時代のキリスト者も、自分の時代であれば神はどのように語られるのだろうかということを推測する必要がある。つまり、神学的な再考察をし、現代の人々に提唱しなければならないのである。

なお、新しい天と地は、今の宇宙とは全く無関係なものとしてやってくるのか、それとも、今の宇宙の延長線上に築かれるのか、この点でキリスト者の間には意見の違いがある。この問題は、教会の初期時代から論じられてきた。目新しいものではない。講演をお聞きの皆さんは、どのように考えられるだろうか。中には、「新しい」という言葉の意味を明らかにして問題を解決しようとする人々もいる。しかし、そういう方法はナンセンスであろう。

聖書全体の中で、この問題の解決にヒントになるような聖句はないだろうか? ある。一つだけある。パウロが「全被造物の贖い」ということについて述べている個所がある。

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われる

ことを待ち望んでいます。(ローマ8:19-23)

ここには、キリスト者の贖いと同時に、被造物の贖いについても言及されている。キリスト者の贖いは、全被造物の贖いの先駆けとも、代表とも理解できる。では、キリスト者の贖いとは何か。「わたしたちのからだの贖われること」である。この「からだの贖い」とは、今の我々の肉体の贖いのことである。それはいったい、どのようなものになるのか。聖書は、その点について、ほとんど何も語っていない。ただ、霊には霊にふさわしい体が存在することが明らかにされている(Iコリント15:40-49)。連続性の中の非連続の世界である。それ以上のことは分からない。人間は、今の世界を理解する言葉と論理しかもっていない。来たるべき世界を認識する能力は、今の世界では与えられていない。新しい天と新しい地は、人間の限界点を超えた世界なのである。だからパウロは、それは目に見えない熱心に待つべき「望み」だと強調している

私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。(ローマ8:24-25)。

キリスト者とは、すべてを理解できなくても、信じ望んで生きていく神の民である。見えないからこそ、分からないからこそ、望みをもって生きていくのである。

### おわりに

前回の講演では、創世記 1 章から「世界の創造」について考えた。今回の講演では、聖書全体から「宇宙の創造」について見てきた。ここでは、「世界」と「宇宙」をあえて区別した。前者は、我々がこの目で現に見ている世界のことである。後者は、もっと思弁的・抽象的で永遠の流れの中で捉えた宇宙のことである。現代人である我々は、科学的思考をごく当たり前のこととして受け止めている。従って、この両者を切り離す必要はない、というより、切り離すことはできない。しかし、歴史上に表れたすべての人類が、我々と同じ思考パターンに生きていたわけではない。時代をさかのぼれば上るほど、古代の人々にとっては、彼らの目に現に映っている世界がすべてだった。そのことを、忘れてはならない。

紀元前 13 世紀前後の古代中近東の人々にとっては、宇宙といっても、日常生活の中で経験する素朴な世界のことだった。創世記 1 章が描写している創造は、そのような世界観で生きていた人々に向かって記述されたものである。一方、時代も下り、第二イザヤの時代になると、同じ古代中近東の人々でも、かなり違う世界の見方をしていた。新約聖書の時代になると、古代ギリシャ・ローマの世界では抽象的な概念を基にした宇宙観はごく当たり前のものになっていた。

聖書の創造の記録を考察するときには、こういう時代的な背景をよく理解しておかなければならない。そうしないと、「宗教と科学の闘争」みたいな、見当違いの不毛な議論を繰り返すことになる。そのような議論には、この際、きっぱり卒業しよう。パウロは、文化的な違いに生きる人々への宣教について、次のように述べている。

私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。律法を持たない人々に対しては、――私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが――律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをともに受ける者となるためなのです。( I コリント 9:19-23)

ユダヤ人も、ギリシャ人も福音を必要としている人々である。だからパウロは、自分を捨て、できうる限り相手に合わせようとした。キリスト者は、古代の人々に宣教を試みるのであれば、古代人にならねばならない。中世人には中世人のように、近代人には近代人のように、現代人には現代人のようにならなければ、キリストの福音を届けることはできない。

## 被造物管理の神学講演10(A-10)

2014年5月7日 大野キリスト教会献堂記念講演(3)

# A. 自然

# 10. 聖書の正しい理解を求めて

(聖書が神の言葉であるとはとういう意味か)

#### はじめに

本日は、新会堂の献堂記念講演の3回目にご出席いただき、心より感謝する。

このシリーズにおいて、一回目は、創世記 1 章から「世界創造の記録」について解説した。二回目は、聖書全体から「宇宙創造の奥義」を模索した。そして本日の三回目は、「聖書の正しい理解」について話させていただきたい。

この講演シリーズでは、これまで知られていない情報をたくさん紹介している。しかも、既成の思考パターンにとらわれず、新しいパースペクティブの基で展開させている。むろん、大勢の方々の助けをいただき、たくさんの書物を参考にした。だが、あえて注を一切付けず、参考文献も挙げていない。自分の言葉と論理で、全責任を負う覚悟で話している。神学は、キリストへの信仰と、教会的な背景をもつ教理を土台にしながら、個人の問題意識と生活体験の中から出発し、その個人に帰属するものである。その意味では、被造物管理の神学は、その頭に固有名詞がつく。つまりこの講演原稿は、「中澤啓介の被造物管理の神学」なのである。そして、講演会の参加者の皆さんには、ぜひ自分の名前の付いた被造物管理の神学を構築していただきたい。

この講演会は、前半と後半のスケジュールを変えている。前半では、私が本講演原稿の重要なポイントをまとめて、講義する。後半では、参加者によって講演に対する質疑応答、批判、反論、検証作業を自由にしていただく。そこでは、ご自分の考えをご自分の言葉で述べていただきたい。遠慮なく中澤神学を斬り、ディベイトしてほしい。そうすることによってはじめて、参加者は、自分の名前の被造物管理の神学を築きあげることができる。そのためには、自由闊達な雰囲気と健全な批判精神が不可欠である。

# I.被造物管理の神学における聖書の位置

最近私は、どこに行っても、「現代の教会は、パラダイムシフトが必要である」と講演している。キリスト教界は、信仰義認による天国行きの信仰から、神の国に生きる信仰へとシフトする必要がある。また、教派を絶対化する教義から、エキュメニズム志向の教義へと変わらねばならない。さらに、聖俗二元論に基づく伝統的神学から、回復された人間性に基づく被造物管理の神学へと、転換が求められている。

神はキリスト者に、この被造物管理の神学に生きることを求めている。しかも、この神学に立たない限り、キリスト教界の未来はない。このような福音理解でなければ、「欠陥福音」だと言わねばならない。では、この新しい被造物管理の神学において、聖書はどのような位置を占めるのか、ご一緒に考えてみたいと思う。

## 1. 聖書が神学の中心にあるとはどういう意味か

これまでのキリスト教神学は、聖書を中心に、神論、キリスト論、聖霊論、贖罪論、教会論、終末論と展開するのが普通である。それに対し、新しい被造物管理の神学は、同じように聖書を中心に置きながら、自然論、社会論、人間論、啓示論、贖罪論、神の国論、教会論、終末論などを扱う。パラダイムが変われば、展開される各論部分

が異なるのは当然である。ただし、いずれの神学においても、「聖書」が中心に置かれることに変わりはない。

神学は、どのようにパラダイムシフトをしても、やはり神学である。神学である限り、テーマの如何にかかわらず、 最終的には、聖書がそのテーマについて述べていることをもって終結する。それが、哲学や宗教学とは異なる点 である。

聖書は、従来の神学でも新しい神学でも、神学の中心に置かれている。ところが、聖書が果たす役割になると、 両者の間に大きな違いがある。前者では、聖書は、神学の各論を上から支配している。後者では、聖書は、神学 の各論を下から支えている。

もう少し分かりやすく説明しよう。これまでのプロテスタントの、特に福音派の組織神学は、大抵聖書論から始まる。そこでは、「神学の序論(プロレゴメナ)」として、聖書の本性、権威、正典性などの問題が扱われる。このように聖書論が神学各論の前に置かれるのは、これから展開される各論の内容と方向性が、聖書自身によって規定されるからである。実際に、その各論は、聖書の言葉で満ちたものになる。

ところが、新しいパラダイムの神学は、聖書論から始めなかった。最初の七回までの講演は宇宙の話ばかりで、 聖書の引用をほとんどしなかった。聖書を中心にするはずの神学講演で、なぜ聖書を使わず、宇宙に関する科 学的な情報提供ばかりをしたのか。

それは、神学に対する考え方を、根底から変えたからである。被造物管理の神学では、どのようなテーマを扱っても、まずそのテーマに関する最新の学問的成果を学ぶことからスタートする。その上で、そのテーマに対する神の御心を知るため、聖書に向かう。えっ、学問的成果を踏まえてから聖書に向かう? それはないでしょ。神学は神の御心を伺う学問だ。その神の御心は、聖書に啓示されている。とすれば、まず聖書を開くべきではないのか。それなのになぜ、最初に学問的成果に聞くのか・・・・。順序が逆転している、そう考えるキリスト者がいても、当然である。教会はこれまで、ずっとそのように考えてきたのだから。

しかし、この新しい神学で順序を逆転させたのは、二つの理由から適切である。一つは、神学で扱いたいテーマが、必ずしも聖書に出てくるとは限らないからである。もしそのテーマが、聖書の完結以前から存在した場合には、聖書がそのテーマにふれる可能性はある。もしそうであれば、取り上げることもできよう。ところが、我々が神の御心を伺いたいと願っているテーマのほとんどは、聖書の時代にはなかった。従って、聖書には出てこない。それゆえ、聖書に出てこないとしても、神がそのテーマについて何の関心もない、とはいえない。あるいは神学のテーマとしてはふさわしくない、などと考えてもいけない。聖書が一言もふれていないことでも、神学が扱わねばならないことは山ほどある。

二番目の理由は、聖書がたとえ似たような出来事を報じていても、その状況や背景は違い過ぎることである。ほとんどの場合、その出来事をそのまま、我々のテーマに関連づけることはできない。どのように関連づけるかは、取り上げているテーマの中身をよく理解している必要がある。むろん、関連する聖書箇所もすべて取り上げねばならない。我々の問題意識とそれにぴったり当てはまる聖書箇所、この二つを巧みに組み合わせ、一貫した体系につくりあげないかぎり、その問題に関する神の意思を把握したことにならない。

ところが教会は、長い間全く違う考え方で、伝統的な神学を構築してきた。まず教会は、歴史の流れの中で、神、キリスト、聖霊、救い、教会、終末など、キリスト教信仰にとって中心的な教理を、信仰告白として打ち立てた。そして教会は、これらの教理に関連する聖句を聖書からすべて探し出し、それらの聖句を演繹的に展開し、告白してきた教理を擁護した。これが伝統的な神学の方法論だった。そこには、聖書から信仰告白をつくり、その信仰告白を聖書によって立証するという、循環論法がある。そのような神学は、キリスト教村社会では通じる。だが、聖書の権威を認めない部外者にとっては、独白の世界に過ぎない。

例えば、「宇宙の創造」というテーマを取り上げてみよう。聖書はその冒頭において「神が天と地を創造された」と述べている。そこで教会は、「神は宇宙の創造者である」という教理を打ち立てる。続いて、この教理に関連しそうな聖書箇所をすべて集める。そして、それらの聖句を並べ替え、一つの体系につくりあげる。キリスト者は、その体系化された創造の教理を眺め、創造を理解した気分になる。そこには、実際の宇宙を実験・観察するなどという余地は全くない。その必要も感じない。これが、伝統的なキリスト教神学の「創造論」だったのである。

### 2. 被造物管理の神学は、すべての問題を扱う

被造物管理の神学は、伝統的な神学とは違った方法論を提唱する。キリスト者は、キリストと共にすべての被造物を管理する。日常生活は、被造物管理のわざそのものである。そのわざには、仕事、余暇、スポーツ、読書、散策、芸術、音楽、観劇、文化活動、趣味、ショッピング、旅行、学問、テレビを見ること、友人との団欒、病気、経済、社会、政治、民族や国際関係、天候、自然災害、被造物の全歴史など、すべてのことが含まれる。そこには、聖なる世界と俗なる世界の区別はない。

もう一度、従来のキリスト教神学の各論を見ていただきたい。神論、キリスト論、聖霊論、贖罪論、教会論、終末論などである。いずれも、神と深い関わりがある。まさに、聖なる世界の話である。では、新しい被造物管理の神学の各論はどうか。少なくとも自然論、社会論、人間論の三つは、聖なる世界とはいえない。啓示論、贖罪論、神の国論、教会論、終末論などは、神と深い関わりがある。しかしそのようなテーマであっても、被造物の管理という観点から扱う。従って、純粋に聖なる世界の出来事にはならない。

神は、人間の聖なる世界に対する関わりにのみ、関心をもっているわけではない。それは、旧約聖書においても、新約聖書においても、変わらない。例えば、神がイスラエルの民に与えた十戒の、最初の四つは神に対するものであり、残りの六つは人に対するものだった(出エジプト 20:1-17)。レビ記の「律法」には、宗教行事に関わる「祭儀法」と、日常の諸問題に対処する「市民法」とが含まれていた。箴言は、「あなたの行くところすべてにおいて主を認めよ」(3:5-6)と教えている。その格言のほとんどは、日常生活に関わるものばかりである。伝道者の書は、神が、人の喜怒哀楽のすべてに時を定めていることを、明らかにしている(3:1-13)。

新約聖書のキリスト者の歩みについても同じである。イエスは神の国を説かれ、その御国の倫理を明らかにした。その最たるものは山上の説教だった(マタイ 5-7 章)。その教えの一つ一つは、日常生活に深く根ざしたものばかりである。「信仰や霊的な世界」と「世俗や物質的な世界」の区別など、一切なかった。そういう区別は、後のギリシャ哲学やグノーシス主義の産物である。2世紀から3世紀の初期キリスト教神学は、そのような哲学の影響を色濃く受けて発展した。

パウロは、日常的な事柄を信仰から切り離すことはしなかった。「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい」(Iコリント 10:31)とか、「あなたがたのすることは、ことばによると行ないによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい」(コロサイ 3:17)、「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい」(コロサイ 3:23)と教えている。霊的な世界を物質的な世界から区別せず、両者とも、神に属していると考えていたからである。「地とそれに満ちているものは、主のものだからです」(Iコリント 10:26)。「食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません」(Iテモテ 4:3-4)。

キリスト者は、日常のどんな小さな事柄であっても、神の御心を求めながら歩んでいる。いつでも、どこでも、神の栄光が現されることを祈りつつ生活している。それゆえ、被造物管理の神学では、人の営むすべての活動が、神学のテーマになる。

## 3. 被造物管理の神学は、理解力や識別力を働かせる

被造物管理の神学の根幹は、「キリスト者はキリストと共に被造物を管理する」という使命にある。この使命を担うキリスト者は、どのような管理にたずさわるにしても、その管理業務に関する神の御心を知り、使命を全うしたいと願っている。しかし、具体的な事柄に対する神の御心は、聖書に記されているわけではない。基本的原則さえ、聖書の中に見出すことは困難である。聖書は、そのような目的のために記されたわけではないからである。キリスト者はむしろ、与えらえている理性(この理性は御霊の支配下にある)を用い、祈りの中で神の御心を求めつつ、管理のわざにたずさわる。

パウロの次の言葉を聞いていただきたい。

私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられます

ように。(コロサイ1:9-10)

この箇所の「神のみこころに関する真の知識」と「神を知る知識」は並行関係にあり、同じことを述べている。この表現には、今我々が問題にしている「被造物管理にあたって必要な神の御心に関する知識」も含まれる。

パウロはまず、この知識に満たされるためには「あらゆる霊的な知恵と理解力」が必要だと説く。「霊的な知恵と理解力」とは、聖霊によって整えられた知恵や理解力のことである。「あらゆる」という言葉は、この知恵と理解力が及ぶ範囲すべてを意識して付加された。キリスト者は、託された使命を果たし得る「知恵と理解力」を、神から備えられている。神がキリスト者に、能力以上の責務を負わせるようなことはしない。

その知識は、ある時点で満たされている。しかしそれだけでなく、その後は増し加えられ続ける。そのためには、キリスト者の「主にかなった歩み」が求められる。そのような歩みは、当然主に喜ばれ、善行の実を結んでいく。

このコロサイ人への手紙に記したことを、パウロは、ピリピ人への手紙の冒頭のあいさつにおいても、言葉を変えて繰り返している。このことが、キリスト者の歩みにとって、極めて重要なことだったからである。

私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現わされますように。(ピリピ 1:9-11)

ここでパウロは、キリスト者の中にある「真の知識」と「あらゆる識別力」に言及する。これらの能力は、「真にすぐれたものを見分けることができる」キリスト者に、変えてくれる。しかもそれは、キリスト者を「キリストの日には純真で非難されるところがない」ように、整えてもくれる。さらに、「イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となる」ように、歩ませてくれるのである。

この箇所の「真の知識」は、先のコロサイ人への手紙 1 章の「神のみこころに関する真の知識」と同じことを述べている。また「識別力」は、先の「霊的な知恵と理解力」と同義である。しかも、「善行のうちに実を結び」とか「義の実に満たされる」と、いずれの箇所においても「実」について言及している。人間にもともと与えられている「理解力とか識別力」及び「知恵とか知識」は、キリスト者の人生に豊かな実を結ばせる。そして、神の栄光を現わす者につくり変える。すばらしいことだ。ところが、伝統的な神学は、人間の全的堕落を強調するあまり、この種の能力を過小評価している。残念という他ない。

神は、自然の中には自然法則を定めた。自然は、通常その法則によって運行される。同じように神は、社会の中には社会のルールを、人間関係にはその関係を正常に保つための原則を定めた。そのことは、信仰的・霊的生活においても変わらない。神の定めた霊的原則がある。例えば、信じる者は救われる。神を第一にするなら、すべての必要は満たされる。従う者は祝福される。神は万事を益と変えてくださる。ささげる者は豊かな報いを受ける。蒔いた種を刈り取る。感情で行動すれば亀裂を生む。罪の報酬は死である。受けるよりは与える方が幸いである。小事に忠実であれば大事を任される。探す者は見出す。戸を叩くなら開かれる。祈るなら応えられる。忍耐は希望を生み出す。神は愛する者を訓練する・・・。キリスト者が日常味わっている恵みは、神によって定められた法則なのである。従って、キリスト者が信仰の歩みを続けていけばいくほど、神との交わりは深まっていく。そうなると、神の定めた霊的なルールも身につき、豊かな実を結ぶ者になっていく。

言うまでもなく、キリスト者が日々直面する問題は、単純なものばかりではない。否、小さく見えることであっても、複雑な問題がほとんどである。複雑であるというのは、そこにいくつかのルールが絡み合っている、ということである。そういう問題であればあるほど、理解力や判断力を必要とする。例えば、今日の天候を予測することは、今日の日の出時間を知ることより、はるかに難しい。地震の起こる可能性が高い地域を予測することはできる。だが、その地震がいつごろ、どの程度で起こるのかを予測することは、今のところできない。現在分かっているルールを組み合わせても、なお不確定な要素が残るからである。否、人にはまだ、未発見のルールが山ほどあるのだ。

自然の問題は、比較的単純である。社会的な問題は、よりいろいろなことを考慮しなければならない。人と、歴史と、さまざまな状況が絡んでくるからである。

先日、クリスチャン新聞の根田編集長から、メールが届いた。友人の朝岡牧師たちが、「特定秘密法案」に対する牧師たちの反対署名活動を展開している。ぜひ参加してほしい、ということだった。若い牧師たちが立ち上がっ

てくれたことが、何よりもうれしかった。そのことをまず、神に感謝した。そして、この法案に反対の署名活動に参加 すべきかどう、神の御心を伺った。祈りの中で、聖霊は、署名するかどうかを決める前に、もう一度法案を読み直し なさい、と語ってくださった(信仰的にそのように確信した、という意味)。

その全文は、昨年の12月8日の朝刊、見開きの2頁にわたって掲載されていた。そのことを思い出し、じっくり読んだ。この法案については、それまで数週間にわたり、ずっと考え続けてきた。それでも、法案の全文を読んだことはなかった。読み直してみると、それまで気づかなかったことがたくさん見えてきた。関連する記事や情報をインターネットで調べた。各方面の有識者によるさまざまな意見をたくさん読むことができた。私の返信にどれほどの意味があり、効果(価値)があるのか、返信しないとどうなるのか、じっくり考えてみた。やっと結論が出た。そんなわけで、メールの返信にはかなりの時間を要した。

言うまでもなく、ここで皆さんに、「特定秘密法案」について考えてほしいわけではない。ただ、小さなことであっても、ものごとの判断は、決して簡単ではないことを知っていただきたかっただけである。この種の迷いや悩みは、誰もが、日々経験している。身の回りに起こる日常的な出来事に対する神の御心は、霊的な知恵とか理解力、判断力などをフルに活用して見出していく以外にないのである。

### 4. 被造物管理の神学は祈りと御霊の働きを大切にする

被造物管理の神学に生きると、キリスト者生活に二つの点で大きな変化が生じる。一つは祈りであり、もう一つは御霊の導きである。被造物の管理などというと、仰々しく聞こえる。しかし、分かりやすく言えば、私の身の回りに起こるすべてのことは、復活されたキリストのご支配のもとで起こっている。私は、それらの一つ一つに、キリストと共に管理する(仕える)責任を委ねられている。祈りを通し、聖霊の助けによってその使命を果たしていく、そういう生き方のことである。

神は、この使命遂行のために、祈る恵みを備え、御霊の助けを送ってくださった。このすばらしい賜物が無ければ、被造物管理などおこがましく、全く不可能なことである。それは本来、神にのみ属すことだった。神は最高級のわざを、キリストによって贖った者たちと共に分かち合おう、と計画された(ローマ 8:15-17)。従ってキリスト者は、神の御霊の助けがあってはじめて、その使命を遂行できるのだ。

最後の晩餐の時イエスは、御父の大切な約束を明らかにした。キリスト者に聖霊を遣わすとの約束である。

しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。(ヨハネ 14:27)

わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。(ヨハネ 15:26)

わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。(ヨハネ 16:7-13)

イエスは、「真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます」と、弟子たちに教えた。教会は、この言葉の中に、聖書が記され、教会に与えられることを読み取った。むろん、そのような内容を含めても構わないだろう。だが、イエスが語られたことは、もっとずっとパーソナルなことのように思われる。真理の御霊は、今も、この世界のすべての人に、そして一人一人のキリスト者に働いている。イエスは、そのことを話されたのだ。

人間がもつ理解力や判断力、それはとてもすばらしい。だが、神が人に託された使命から言えば、それだけでは不十分だった。そのような能力は、神の御霊の御支配の中に生かされて、はじめてその使命に役立つものとなる。御霊の助けを受けない、生まれつきの能力だけでは、神の使命を果たすには、間に合わない。パウロの次の言葉を聞いていただきたい。

この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。 その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のこと は御霊によってわきまえるものだからです。御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分はだれによってもわきまえられません。(Iコリント2:13-15)

この箇所には、数多くの「御霊」の働きに関する言及がある。「御霊に教えられたことば」、「その御霊のことば」、「御霊のことを解く」、「神の御霊に属すること」、「御霊のことは御霊によってわきまえる」、「御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえる」などである。御霊の助け、これこそがキリスト者に備えられた最大の特権である。神の御霊は、今日も一人一人のキリスト者を教え、導いておられる。キリスト者は、御霊の賜物を受けながら託された使命を果たしていく。その賜物についてパウロは、次のように述べている。

ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、 またある人には同じ御霊による信仰が与えられ、ある人には同一の御霊によって、いやしの賜物が与えられ。 (I コリント 12:8-9)

キリスト者生活は、「御霊によって導かれる」(ガラテヤ 5:18)。あるいは、「御霊によって生き、御霊に導かれて、進む」(ガラテヤ 5:25)。さらには、「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい」(エペソ 6:18)という歩みである。キリスト者の歩みにおいて、聖霊がどれほど重要であるかは、ローマ人への手紙8章を一読すれば明らかである。この神学講演が、単なる知的な遊びに終始せず、圧倒的なリアリティーを体感させるものとなるために、お家に帰られてから、この8章をじっくり読んでいただきたい。

新約聖書は、御霊の重要性を、教会とキリスト者の歩みに不可欠なものとして説いている。ところが福音派の教会は、聖書を重要視するほどには、御霊の働きを強調していない。少しでも強調しようものなら、カリスマ派になったのではないか、と騒がれたりする。それも、分からないわけではない。行き過ぎというか、逸脱した聖霊運動が教会を混乱させた、苦い歴史を味わわされたからである。

神の御霊と言いながら、自分勝手な思いつきや、いい加減なことを言うキリスト者が後を絶たない。そのために、教会は多くの被害を受けた。従って教会は、御霊が聖書と共に働くことを強調し、御霊の働きを制限した。御霊は聖書の真の著者である。それゆえ、御霊が聖書に反するようなことを示すはずはない。そのような論理で、御霊の語りかけと言われるものに対し、聖書による枠づけをしたのである。

教会史上を眺めるなら、聖書にこのようなチェック機能を課したのは、賢明なことだった。だが、それと同時に、 御霊の自由な働きを、聖書によって制限し過ぎた事実も認めなければならない。危険性を重視するあまり、御霊 の自由な働きを妨げている。では、どうすればよいのか。結局聖書に帰ることである。聖書が御霊について教えて いることに、徹底して聞くことである。多くのキリスト者は、聖書が教えている十分の一も、御霊の働きを体験してい ないように思うことがある。御霊の異常な現れではなく、御霊の正常な働きに関してである。

その理由は明白である。聖霊の働きと祈りが、被造物管理の使命から切り離されているからである。個人の内面的なきよめや宣教の文脈の中でのみ語られてきた。一番大切な使命を忘れて信仰生活を歩んできた。その結果、この二つのすばらしい恵みは、力を発揮する場を見出せなかったのである。

新しい神学のパラダイムにおいても、聖書が中心に置かれている、それは上からではなく、下から支えるという意味においてである。そのように述べた背景説明をこの辺で終わりたいと思う。被造物管理の神学は、決して聖書を軽視しているのではない。聖書を、聖書として真に敬意を払うため、人間の理解力や祈り、聖霊の働きを大切にしているに過ぎない。聖書は、依然として神学の中心にある。

それでは、被造物管理の神学が考える「聖書論」に入っていくことにしよう。

## Ⅱ. 神のことばである聖書

キリスト教は、聖書に基づく宗教である。従って、聖書をどのように見るのかは、キリスト教理解の鍵となる。プロテスタント教会の信仰告白や信仰基準は、そのほとんどに「聖書は信仰と生活の唯一の規範である」という文言がある。キリスト者の信仰生活に必要な事項は、聖書の中に記されている、との告白である。宗教改革者たちは、「聖書のみ」という標語を高く掲げた。聖書が、当時のカトリック教会の制度、組織、伝承、神学を改革する基盤だったからである。信仰に必要な真理はすべて、聖書に啓示されていると確信していた。

### 1. 神は聖書を通して御心を啓示された

キリスト教にとって、聖書は信仰の要である。聖書から離れると、キリスト教信仰は崩壊する。聖書の上に何かを置いた途端、それはキリスト教ではなくなる。聖書には、人間が必要とする神に関する真理は、すべて啓示されている。組織であれ、人物であれ、主義であれ、どのようなものであっても、聖書の上に置かれるなら、聖書は信仰の基盤でなくなる。やがて、聖書の上に置かれたものが、時間とともに信仰を規定していくようになる。

では、聖書とは、どのような書物なのか。

聖書は「神の啓示の書」である。それは、時代を超えたすべての人に、神が語りかけようと記された書物である。その意味では絶対的なものである。と同時に、聖書は、特定の人々に、特定の人々を通して、特定のメッセージを伝えるために記された。その意味では相対的なもので、人間の限界に包まれた書物である。このような二つの側面をもつ書物は、世界に例がない。それは、イエスの中に「神性」と「人性」とが共存しているとか、神はこの世界に対し「超越者」であると同時に「内在者」である、というような事柄に類比される。

聖書は、紀元前1300年頃から紀元後100年ぐらいの1400年以上の年月にわたって記された。その著者には、 王、政府高官、預言者、祭司、牧羊者、漁師、取税人、政治家、ユダヤ教教師、詩人、知者などが含まれる。

この聖書は、毎年、1 億冊以上頒布されており、文句なく世界のベストセラーであり、ロングセラーである。ウイックリフ聖書翻訳協会の2012年11月のレポートによれば、翻訳されている聖書の言語数は、2,798に達する(旧新約聖書518語、新約聖書のみ1,275語、分冊1,005語)。現在翻訳を進めているのは、2,075の言語においてである。しかし、未だ手つかずの言語が1,967語ある。同協会は、これにも順次対応していこうとしている。このような書物は他に類例がない。

聖書は神の言葉なのか。神の権威があるとどうして分かるのか。この問に答えようとすると、ジレンマに陥る。もしその権威を理性によって証明しようとすると、理性を聖書より上に置くことになる。その証明を聖書の証言に求めると、循環論法に陥る。どちらで弁護しても、問題は残ってしまう。とすれば、批判を承知の上で、ここではあえて後者の論理で話を展開する。講演を聞いている皆さんの多くが、キリスト者だと思うからである。

聖書の権威の根拠は、聖書そのものにある。聖書には、神が直接語られた言葉が記されている。その事実こそ、聖書の権威の土台である。聖書は、神の存在について論じていない。神は存在するという前提で(詩篇 14:1 など参照)、すべてが展開されている。人間は、神の方から語りかけてくださらない限り、自分から神に到達することはできない。神はそのことをよくご存知である。だから、創造も、神の語りかけによってなされた(創世記 1:3、6、9、11 など参照)。神は、アブラハムに語りかけた(創世記 12:1-3、15:1 など)。族長たちの一人一人に、モーセをはじめとするイスラエルの指導者たちに、士師や王や預言者たちに、その時その時必要な事柄を語られた。

サムエルはサウルに、「神のことばをお聞かせしますから」と述べている(Iサムエル 9:27)。神の人シェマヤに「神のことばがあった」(I列王記 12:22)。「神のことばがナタンにあった」(I歴代誌 17:3)。旧約聖書のモーセ律法は、その条文のすべてが神のご意思だった。イエスも、「まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます」と語られた(マタイ 5:17)。それぞれの預言書が残した言葉の一つ一つは、すべて神から託宣されたものだった(イザヤ 1:1、エレミヤ 1:4 など参照)。預言に関しペテロは、「預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです」(IIペテロ 1:20-21)と述べている。

預言者イザヤをとおし、神は、ご自分のことばが必ず成就することを、繰り返し宣言している。

わたしの口から出ることばは正しく、取り消すことはできない。(イザヤ 45:23)

わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。(イザヤ 55:11)

「あなたの上にあるわたしの霊、わたしがあなたの口に置いたわたしのことばは、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、すえのすえの口からも、今よりとこしえに離れない」と主は仰せられる。(イザヤ 59:21)

旧約聖書自身が、旧約聖書に神の権威があることを証言している。しかし、それだけではない。新約聖書も同様である。ヨハネは、「神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからであ

る」と、イエスについて語った(ヨハネ3:34)。そのイエスは、悪魔の誘惑に遭われ、「と書いてある」と申命記の言葉を引用された(マタイ4:4、6、10)。旧約聖書を神の権威あることばとして活用されたのである。イエスはまた、ご自身のことを話すのに、旧約聖書を用いられた。「それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた」(ルカ24:27)。「イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて」(ルカ24:45)、キリストご自身のことを語られたのである。

それだけではない。イエスは、ご自分の言葉を神の権威をもつものとして語った。「わたしの言うことを信じなさい」(ヨハネ4:21)とか、ご自分の言葉を「決して滅びることはありません」(マルコ13:31)と宣言された。イエスは、ご自分の言葉を神のことばとして提示しただけでなく、「神から出た者は、神のことばに聞き従う」と言われた(ヨハネ8:47)。それゆえ、イエスの弟子たちは、復活後に「聖書とイエスが言われたことばとを信じた」(ヨハネ2:22)。

だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。

(ヨハネ 12:47-48)

「わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。 わたしがあなたがたに言うこと ばは、わたしが自分から話しているのではありません。 わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」(ヨハネ 14:10-11)

パウロは、神のことばを余すところなく語ることが自分の使命であると確信していた(コロサイ 1:25)。彼がキリスト者にメッセージを取り次いだとき、神のことばとして受けとめることを期待していた。

あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。( I テサロニケ 2:13)

このような神の言葉は、すばらしい特質をもっている。「神のことばは、すべて純粋」(箴言 30:5)、「神のことばは永遠に立つ」(イザヤ 40:8)。従ってキリスト者は、「神のことばにつけ足しをしてはならない」(箴言 30:6)。「神のことばを曲げてはいけない」(エレミヤ 23:36、II コリント 4:2)。「神のことばに混ぜ物をして売ってはいけない」(II コリント 2:17)。イエスは、「自分たちの言い伝えのために、神のことばを無にしてしまう」(マタイ 15:6)とか、「自分たちが受け継いだ言い伝えによって、神のことばを空文にする」(マルコ 7:13)と、パリサイ人を非難した。彼らが、伝承によって神の言葉をないがしろにしていたからである。使徒たちは、「神のことばをあと回しにする」ことはいけないと述べている(使徒 6:2)。

## 2. 神は聖書を霊感によって与えられた

聖書が神の言葉であるという神学的な根拠は、聖書が神の霊感によって記されたという事実にある。普通の書物は、著者がいて、著者が書きたいことがあるので、書物を出版する。ところが、聖書はそうではない。書きたいことがあり、書物を出版しようとしたのは、神だった。神は、書く人を選び、その人に聖霊の助けを与えて聖書を書かせたのである。

それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。(Ⅱペテロ1:20-21)

聖書は「決して人間の意志によってもたらされた」ものではない。世の中に出ている書物はすべて、「人間の意思によってもたらされた」ものである。聖書は全く違う。それは、「聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語った」ものだからである。「動かされる(フェロメノー)」とは、「運ばれる」との意味である。聖霊が主導権を持ち、人をご自由に運ばれ、神の言葉を語らせたのである。結局聖書の著者は、人間ではなく、聖霊だった。聖霊などという、わけのわからない言葉を持ち出さないでほしい、そういう人がいるだろう。その気持ちは、よく分かる。だが、今論じているのは神学の世界である。哲学の世界ではない。神学の世界は、神への信仰、キリストの贖いの信仰を絶対的なものとして受け入れた人々の営みなのである。

この箇所でペテロは、「聖書の預言」を問題にしている。つまり、旧約聖書に出てくる預言者の言葉である。しか

しここでペテロは、ある特定の預言者に言及しているわけではない。むしろ、代表的な例として預言者を挙げている。従って、預言者の言葉に限定せず、旧約聖書全体について述べているものと理解してよいであろう。

さらに、キリスト教界は、この「聖書の預言」という言葉に、新約聖書も含めて解釈してきた。この手紙を書いているペテロ自身が、かつての預言者たちのように聖霊に動かされていると自覚していたかどうかは分からない。しかし、旧約聖書の著者たちの多くも、聖霊の導きのもとに書いていると自覚していたわけではなかった。結局神の摂理の御手のもとで「聖書」として集められたこと自体が、神の言葉であることを証ししている。その意味で、神の霊感の教理は、神の摂理の教理と切り離して考えることはできない。

聖書を書かせた聖霊の働きを、パウロは「霊感」と呼んでいる。パウロの次の言葉は、聖書について論じるとき、必ず引用される重要な言葉である。

けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており、また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。(II テモテ 3:14-17)

「聖書はすべて、神の霊感による」という句こそ、この箇所のキーワードである。「霊感」の原語「セオプニューストス」は、「神が息を吹きかける」が語源である。聖霊が著者に働きかけ、書物を著わさせる働きを象徴的に表現した言葉である。

霊感という聖霊の働きかけは、聖書記者個人に限定されたもの、と考えない方がよい。最初の資料の著者に始まり、その書が最終的に編さんされ、正典の中に組み込まれるまでの全過程に対し、聖霊の霊感という働きを認めることが重要である。即ち、神学の世界で「原典」という言葉が使われるときは、正典編集時において確認された本文(即ち、現在手にしている聖書)を指す。途中の段階におけるテキストではない。

福音派の聖書論では、この「霊感」の後にすぐ、「誤りがない」という言葉を続ける。「聖書は霊感を受けて書かれたので、誤りがない」と。しかし、実際には、このテモテへの手紙第二3章のみ言葉は、そのような聖書の無謬性を教えていない。この点について、三つのことをコメントしておきたい。

まず、「幼いころから聖書に親しんで来た」という句である。テモテが幼いころから親しんできた聖書とは、ヘブル語聖書ではなく、ギリシャ語訳聖書だった。「親しんで来た」といっても、聖書が家の中にあり、毎朝デボーションで読んでいたかのようなイメージをもってはいけない。一軒に一冊の聖書があるようになったのは、16世紀に印刷機が発見されて以降のことである。

ところで福音派は、「聖書は原典において誤りがない」と告白する。「原典」とわざわざ断り書きをするのは、ギリシャ語やラテン語の翻訳聖書ではなく、ヘブル語の聖書を指す。この聖句に基づいて論じているときに、原典を持ち出すのは、実はパウロの述べている趣旨を逆なでしていることになる。パウロ自身は、原典ではなく、ギリシャ語訳旧約聖書に言及していたからである。

二つ目は、「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせる」という句である。 ここでパウロは、聖書の書かれた目的を明確にしている。一言で要約するなら、キリストを信じて救いを受ける、ということである。 聖書はキリストについて証している、この点に関しイエスは、パリサイ人に次のように語られた。

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。 (ヨハネ 5:39-40)

イエス時代のパリサイ人は、「聖書の中に永遠のいのちがあると思い」、聖書を調べていた。イエスは、その点を 否定しなかった。問題は別のところにあった。イエスは、聖書は「わたしについて証言している」と明言し、「あなた がたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません」と非難した。彼らが「永遠のいのち」を求めて聖書 に近づいたこと自体は間違っていなかった。だが、聖書は、それ以上のことを要求していた。聖書の中にキリスト を発見し、キリストのところに来ることを求めたのである。聖書が求めているものを実行しないなら、いくら聖書を調 べても無意味なことをしていることになる。今の時代も、変わらない。多くの人が、聖書を読みながら、キリストのもと にひれ伏し、永遠のいのちを受け取っていない。それでは聖書読みの聖書知らずになる。

聖書はイエスについて証言している。直接的な証言も、比喩的な証言も、神学的な洞察をもって読み取るべき 証言も、いろいろある。いずれにしても、旧約聖書は、イエスを証言している。イエスは復活後、12 弟子に、旧約 聖書を紐解きながら、ご自身の身に起こった事柄を話された。福音書の著者ルカは、この出来事を次のように伝 えている。

さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」(ルカ 24:44-47)。

イエスはここで、ご自身の宣教について二つのことを述べている。一つは、十字架以前の宣教であり、もう一つは十字架以降の宣教である。十字架以前のイエスは、「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就する」と宣べ伝えていた。「モーセの律法と預言者と詩篇」とは、旧約聖書のことである。旧約聖書という呼び方は、新約聖書が出来上がって初めて意味のある呼び方である。ユダヤ人たちは、旧約聖書を「タナク」と呼んだ。「タ」は「トーラー」の「タ」で「モーセの律法」を、「ナ」は「ナヴィーム」の「ナ」で「預言者」を、「ク」は「ケトゥビーム」の「ク」で「詩篇など」を指す。つまり、「モーセの律法と預言者と詩篇」という表現は、ユダヤ人の旧約聖書に対する呼び方だった。旧約聖書はキリストを証言している。そして、それは「必ず全部成就する」と、イエスは十字架以前から宣べ伝え続けていたのである。

復活されたイエスは、「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改め」を宣べ伝えた。キリストの死とよみがえり、悔い改めによる罪の赦し、これこそキリスト教の中心的なメッセージだった。イエスは、このメッセージが「エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」と言われた。それ以降のキリスト者たちは、このメッセージを携え、全世界の宣教に邁進してきたのである。

三つ目のコメントは、「教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるため」との言葉に対してである。この文章は、聖書の目的を表わすというより、聖書を読んだ結果もたらされるものについて述べている。「教えと戒めと矯正と義の訓練」の四つがどのように違うのか、この点は本講演の趣旨から外れるので、今日はふれない。大切なことは、「神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者」となることである。聖書は、キリストの救いを明らかにするだけでない。キリスト者を神の国の働き人にふさわしく整えることにある。

ちょっと回り道をしてしまった。では、聖書の霊感の問題に戻ろう。

神は霊感によって聖書を著された。その際、人を聖書記者として用いられた。その記者が誰であるのかは、むろん重要である。神は、記者がもつものすべてを、最大限に生かされた。著者は、突然恍惚状態に陥り、お筆先のようになって、神からの啓示を書いたわけではない。神は、ごく自然で正常な状態にある著者を用いた。著者は、自分の理解できる言葉で、自分の文化圏を背景にしつつ、書こうとするテーマの目的にふさわしい表現技法を駆使して、聖書を著した。使った言語はヘブル語であり、ギリシャ語だった。その単語の意味と文法は、日ごろから使われていたものだった。

霊感を考える場合、著者同様、読者のことも併せて考えておく必要がある。神が語りかけようとした人々の状況である。彼らは、著者と同時代の人々であり、近隣諸国の文化的背景を共有していた。基本的には、同じ信仰に生きる人々、もしくはその信仰を求める人々だった。著者が書く文章は、特別なものでない限り、彼らもすべて理解できたはずである。

神は、神の民に知らせたいと望んだことを、一度にすべて教えたわけではなかった。それは、普通の教育と同じである。初歩から高度に、表面的なところから奥深くに、単純なとろこから複雑なところへ、と徐々に啓示された。例えば、キリストについてである。最初は、人間の創造のときに神が相談された相手として出てくる(創世 1:26 の「われわれ」)。次に、人間の堕落の時に、その到来が予告された(創世 3:15)。その後、キリストと思われる方がしばしば登場する。例えば、アブラハムを訪れた天使の一人(創世 18:1)、ヤコブが相撲を取った相手(創世

22:22-32)、モーセに芝の中で語りかけられた方(出エジプト 3:1-6)、ダニエルと共に火の中に伴われた方(ダニエル 3:25) などである。詩篇の中にも(例えば、詩篇 110:1-4)、預言書の中にも(イザヤ 52:13-53:12)、贖い主キリストの姿は、徐々に明らかにされている。

## 3. 神は聖書をキリスト教の「正典」として与えた

聖書論において、聖書の正典という問題はとても重要である。この問題を本格的に論じるには、一冊の書物を要する。しかし、被造物管理の神学においては、聖書の正典論に関し、特別な主張をもっているわけではない。従ってここでは、キリスト教界にとって常識的な事柄(従来のパラダイムで受けとめられてきた教理)を、簡潔に述べるに留めておこう。

どの宗教であっても、信仰者が拠って立つところの教典がある。キリスト教ではこれを、基準を意味する「正典 (カノン)」と呼んでいる。聖書の正典とは、教会会議が、聖霊の霊感によって書かれたと認めた文書のことである。 ユダヤ教では、ヘブル語聖書(一部アラム語)のみが正典である。キリスト教は、旧約聖書と新約聖書の両方を正典と告白する。

ユダヤ人教は、神の言葉としての正典の書を「タナク」と呼んでいる。「タナク」とは、「トーラー」、「ナヴィーム」、「ケトゥビーム」の頭文字を取って名づけられた。律法(トーラー)は、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の5巻である。預言者(ナヴィーム)は8巻であるが、前預言者4巻(ヨシュア記、士師記・ルツ記、サムエル記、列王記)と後預言者4巻(イザヤ書、エレミヤ書・哀歌、エゼキエル書、12章預言書)に分かれている。三番目の諸書(ケトゥビーム)は11巻である。真理(エメト)は3巻(詩編、箴言、ヨブ記)、巻物(メギロート)は5巻(雅歌、ルツ記、哀歌、伝道者の書、エステル書)、その他3巻(ダニエル書、エズラ記・ネヘミヤ記、歴代誌)である。

ユダヤ教では、紀元前2世紀頃には、これらの書物を「正典」として受け入れていた。しかし、正式な確認をしたのは、紀元90年頃のヤムニア会議だった。イエスや一世紀半ばの使徒時代のキリスト者は、ユダヤ人の伝統をそのまま引き継いだ。その結果、ユダヤ教の「タナク」を神からの啓示の書物として受けとめた。その上に、キリスト信仰を確立していった。さらに2世紀から4世紀にかけ、キリスト教会は現在の新約聖書27巻を収集し、「正典」とした。その結果、旧約聖書と新約聖書の両方が「正典」になった。

教会が、このように旧新約聖書を「正典」として受けとめたのは、聖霊の特別な働きに基づいていた。聖霊は、 霊感の働きによって聖書を生み出した。聖霊は、それだけでなく、その聖書を教会が「正典」として受けとめるよう 導かれた。教会が聖書を正典として受けとめるためには、この両方の聖霊の働きが必要だった。

カトリックとプロテスタントには、聖書が絶対の権威をもつ「正典」であるとのコンセンサスははじめからあった。ところが、宗教改革時代になると、カトリックとプロテスタントの間に正典の範囲に関する議論が起こった。カトリックのトリエント公会議は、ラテン語のヴルガータに含まれている書物を正典と決定した。その結果、旧約46巻、新約27巻、合計73巻が「正典」になった。プロテスタントは、トリエント公会議が旧約聖書と外典の区別を取り除いてしまったと批判し、旧約39巻と新約27巻の66巻を「正典」とした。カトリックは、聖書は教会の権威によって正典になったと考えた。プロテスタントは、教会は聖書の権威を確認したに過ぎない、と見なした。この微妙な違いが、正典の範囲の相違をもたらした。

日本では、1980年に、カトリックとプロテスタントが協力して、『新共同訳』を出版した。その際、カトリックのみが正典として認める第二正典は、続編として収録された。その結果、続編付きの聖書と、続編が付いていない聖書の二種類が出版された。その続編には、トビト記、ユディト記、エステル記(ギリシャ語)、マカバイ記、知恵の書、シラ書(集会の書)、バルク書、エレミヤの手紙、ダニエル書補遣、エズラ記(ギリシャ語)、エズラ記(ラテン語)、マナセの祈りが収録されている。

新共同訳聖書の巻末には、「旧約聖書続編」の解説があり、これらの書物の内容が紹介されている。福音派のキリスト者は、これらの書物を読む機会はほとんどないだろう。もしカトリックからカリスマまでと標語を掲げ、エキュメニズムを本格的に志向するのなら、少なくとも一度は、じっくりこれら続編を読みとおしておいた方がよい。考えが違うからというだけで近づかないのは、この辺で卒業したいものだ。違う人と話すのは、とても楽しいことである。

## Ⅲ. 聖書の無誤性に関する論争

どのような宗教グループであっても、極端になり、先鋭化する危険性をもっている。プロテスタントの福音主義者も、例外ではなかった。彼らは、「聖書の霊感」を強調し、「聖書は御霊によって十全に霊感されたもので、原典において誤りがない」との旗印を掲げ、福音派の教会の結集を図った。それはすばらしい運動であった。ところが、この「誤りがない」という句の理解をめぐって、20世紀後半の福音派は、大きな論争の渦に巻き込まれることになった。本章では、この問題についてふれておこう。福音派は、もう一つ、聖霊のカリスマ運動にも巻き込まれる。この問題は、別の機会にお話ししよう。

## 1. 福音派内で無誤性論争が始まった

キリスト教は、神の啓示は聖書に表されたと信ずる。従って教会は、その初めから「聖書がどのような書物か」を論じてきた。しかし、聖書論が教理史上の中心テーマになるのは、聖書批評学が起こってからである。19 世紀以前のキリスト教神学においては、聖書論が論議されることはなかった。

この聖書に関する論争は、三回にわたりアメリカを中心に展開された。最初は、1880 年代に、ベンジャミン・ウォーフィールドやチャールズ・ホッヂたちと、ブリッグスやスミスとの間で論争された。二番目の論争は、それから 50 年後の1930 年代に、グレシャム・メーチェンを代表的人物とする根本主義者と、自由主義・近代主義者との間で、繰り広げられた。そしてそれからさらに 40 年後の1970 年から 80 年にかけ、今度は聖書の無誤性論争が展開されたのである。

この三回目の論争は、それまでの二回とは二つの点で異なっていた。一つ目の違いは、前の二つの論争が、歴史的キリスト教の信仰内容を擁護する学者と、それを否定する学者との間で起こった論争だった。ところが三番目は、両方とも福音主義者を自認する学者間の論争だった。つまり、両者とも、聖書の権威、キリストの処女降誕、奇跡、贖罪の死、肉体の復活、再臨などのキリスト教正統派の基本的教理については、同じ信仰に立っていた。

二つ目の違いは、論争の内容に関してである。以前の二つの論争は、「聖書が霊感によって書かれた神のことばかどうか」をめぐっての論争だった。ところが、三番目の論争の中心点は、聖書が神の霊感によって記されたとき、どのような事柄においても誤りから免れていたかどうか、ということにあった。これは、聖書への疑いや批判に対し、正しい聖書観を確立するためには避けられない論争だった。

この福音主義者間の聖書論論争は、1958年にエヴァレット・ハリソンが著した「聖書の現象」、あるいは、翌1959年のエドワード・ロヴレェースによる「無誤性ー歴史的見通し」の論文に、端を発した。両論文とも、聖書に見られる矛盾、対立、解釈上困難なテキストと、霊感の性格(無誤性)との関係を論ずるものだった。以降、これらの聖書箇所を「聖書の現象(phenomena of Scripture)」と呼ぶ習わしになった。

もともとプロテスタントは、カトリックのローマ法王の「無謬性(infallability)」に対抗するため、「聖書の無謬性 (infallability)」を主張してきた。しかし、そのような「無謬性」を表明するだけでは不十分だと考える人々が現われた。彼らは、「聖書は、歴史的・科学的な事柄においても、一切誤りがない」と主張し、「無誤性(inerrancy)」という言葉を使うべきだと主張し始めたのである。

この無誤性論争は、さして間を置かず、日本にも飛び火するところとなった。そして日本の全福音派の教会と神学校を巻き込むことになった。それは、日本の福音派がアメリカとは異なる歴史をたどっていたからである。

第二次世界大戦後、戦前から存在した一部の福音主義の教会は、日本キリスト教団を離脱した。また、アメリカをはじめヨーロッパ各国のプロテスタントの各教派は、多くの宣教師を日本に派遣し、母国と関係の深いブランチ教会を形成した。この二つのそれぞれのグループは、プロテスタント宣教100周年を記念して、1959年に「日本プロテスタント聖書信仰同盟」を結成した。その時の結集の合言葉は、「聖書は誤りのない神の言葉」だった。日本の福音派の教会は、この「聖書信仰」を旗印に、60-70年の学園紛争を乗り越え、教会・教派の形成に励んだ。

そのような日本の福音派の教会の中で、1970年代から80年にかけ、アメリカで起こった聖書の無誤性論争が

繰り広げられることになったのである。福音派の神学校の多くは、その設立当初からアメリカの神学校と深く結びついていた。加えて、神学校の教師たちも、アメリカ留学の経験者が多かった。従って、アメリカの教会(神学校)が風邪をひくという状態にあった。

新会堂の3階、階段を上りきった正面に本棚がある。その本棚に、「ティンダル聖書注解シリーズ」の註解書が置かれている。いのちのことば社が、創立55周年を記念し、2004年から日本語訳を出版してきた。この4月には、全48巻の翻訳が完成した。日本の福音派の神学校では、このシリーズは教科書的な位置を占めることになろう。大変うれしく思っている。

しかし、30 年前には、このような状況を予測できなかった。当時私は、日本プロテスタント聖書信仰同盟(日本福音同盟の前身。JPC と略す)の機関誌「聖書信仰」の編集委員をしていた。その立場で日本のキリスト教界(カトリックからカリスマまで)を見ると、日本の福音派は、従来の聖書解釈と信仰理解から脱却しない限り、大変な遅れを取り、取り返しのつかないことになるだろう、と感じていた。そこで、「聖書信仰」誌に、「聖書の無誤性をめぐって」という小論文を 11 回にわたって掲載した。その誌上で、このティンダル聖書注解シリーズを紹介しつつ、福音派は健全な聖書批評学を受け入れながら大きく発展していくであろう、との希望的観測を述べた。

しかし、この記事は、思いがけない反発を招いた。当時は「聖書の無誤性に関するシカゴ声明」が発表された (1978 年) 直後でもあり、無誤性を強力に主張するグループから厳しい批判を受けることになった。JPC 理事会は、問題を鎮静化させるため、83 年の総会(於天城山荘)において、5 時間以上に及ぶ「無誤性に関わる神学論争」 の場を設けた。その結果、最終的には、私と機関誌の編集長だった村瀬俊夫氏とが引責辞任をして、幕引きが行われた。

歴史は、いろいろな経緯をたどる。だが、必ずより良い方向に(あるいは、真理に)近づいていく、私自身はそう信じてきた。神の国の民の歩みも、その点は変わらない。このティンダル聖書注解シリーズが一巻ずつ翻訳出版される度に、心の中で喝采の拍手を送り続けてきた。時代の流れは、それが真理に近づいていく限り、誰も留めることはできない。そんな思いを深めてくれる出版事業だった。

だが本当は、この程度の書物の出版で満足してはならない。日本の福音派にもたくさんの若き聖書学者たちが出てきている。そうであれば、翻訳ものに頼らず、聖書信仰に立ちながら日本人による日本語の聖書註解書シリーズを出版する責任がある。そんなふうに思い、先ずはサンプルとして、マタイの福音書の註解書を出版した(全三巻、2004年)。その後若き学徒たちと執筆の交渉をしてきたが、個人の力ではどうにもならず、その夢は頓挫してしまった。残念ながら、未だ、日本の福音派は、聖書全巻の註解書をシリーズで出すほどの力はなかった。今しばらくは、翻訳もので我慢しなければならない。

# 2. 「聖書の現象」とは何か

ここで、論争のきっかけになり、最初に提起された「聖書の現象」という問題がどのようなものなのか、説明する必要があろう。それを理解するため、「聖書の現象」ではなく、教会史の初めから分かっており、コンセンサスがあった事柄について、あらかじめ話しておくのがよいだろう。

①聖書記者が用いている常識的・現象的表現は、「聖書の現象」ではない。例えば、月が「小さいほうの光る物」 (創 1:16)と言われている。あるいは、「日は上り、日は沈み」(伝道 1:5)と叙述されている。このような表現は、日常言語であり、間違いとは見なさない。

②概数、誇張法、詩的・象徴的・比喩的表現などは、「聖書の現象」とは考えない。例えば、創世記 15 章 13 節の「400年」は、「430年」の概数である(出 12:40)。マルコは、エルサレムの「全住民」がバプテスマのヨハネの所に集まってきた(マルコ 1:5)と述べている。パウロは、福音が「世界中で、実を結び広がり続けている」(コロサイ 1:6)と記している。このような表現は誇張法である。「天の水門」(創 7:11)とか、「天を張り延ばし」(ヨブ 9:8)などは詩的表現である。これらは、間違いとは言わない。

③聖書記者たちは、常に同じ基準を採用したわけではない。1 キュビトの長さは出エジプト記 27 章 1 節や歴代

誌第二4章1節とエゼキエル書とでは違う(エゼ 40:5、43:13)。ある歴史書では、王の統治開始年を1年としている。ところが、翌年を1年とする歴史書もある。

④文法的に変則的な用法もある。例えば、黙示録のギリシャ語はヘブル語の影響を受けており、標準的なギリシャ語文法から見れば変則的である。また、綴り字の相違は、名前その他にしばしば見られる。例えば、イエスの十字架上での神に対する呼びかけは、「エリ」とも(マタイ 27:46)、「エロイ」とも(マルコ 15:34)報じられている。名前などの起源に対する聖書の説明は、しばしば音声に基づいている。それは、今日の言語学的研究から見るとおかしい場合が少なくない。そこでは言葉遊びがなされているのであって、間違いとまでは言えない(例えば、創11:9の「バベル」など)。

⑤出来事は、必ずしも年代順に記されてはいない。このことは、四つの福音書を比較するとよく分かる。それに、著者によって記述の視点は全く異なっている。歴史書においては、出来事が要約されたり、断片的に伝えられたり、編集されているのは、ごく普通のことである。歴代誌は、列王記と同じ時代の歴史を扱っているが、神殿礼拝にフォーカスをあて、かなり違った歴史を描写している。

⑥新約聖書は、旧約聖書を忠実にギリシャ語に訳出して引用する場合もある。しかし、七十人訳ギリシャ語聖書をそのまま引用したり、自由に要約しながら訳出しているようなケースもある。そのような自由な引用方法は、当時の誰もがしていた方法だった。

以上のような問題は、神が聖書記者に委ねられた範囲内のことだった。従って、これらのことを「聖書の現象」と見なす必要はない。では、「聖書の現象」とは、どのようなことを言うのか。細かな例を挙げればきりがない。ここでは代表的なものだけを紹介しておこう。

②聖書の歴史的記録が聖書外の資料と合わないケースがある。代表的なものは、ペカが 20 年間統治したこと (II 列 15:27)、アッシリヤのセナケリブ王がユダを侵略したのがヒゼキヤ王の 13 年に起こったという記述(II 列 18:13)である。イスラエルの民の出エジプトの年代は、考古学上の証拠に照らすと、150 年ほどずれる。

③聖書の記述が科学と矛盾する、という問題がある。ヨシュア記 10 章 12-13 節において、太陽と月が丸一日動かなかったという記録は、科学的に考えるとあり得ない。宇宙のビッグバンの出来事が 138 億年前に起こったこと、地球は 46 億年前に形成されたことなど、現代科学が解明している宇宙像は、旧約聖書に見られる世界像と異なっている。これらの事柄を「聖書の現象」という言葉に含めるのがふさわしいかどうか、私には分からない。少なくとも、この種の問題があることは、指摘しておく必要があろう。

④福音書間に見られる相違もまた、よく指摘される。例えば、マルコの福音書では、弟子は伝道旅行の際杖を持っていくように言われている(6:8)。ところが、他の共観福音書では杖を持っていかないように言われている(マタイ10:10、ルカ9:3)。主イエスによっていやされた悪霊につかれた人は、マタイでは2人(8:28)なのに、他では1人である(マルコ5:2、ルカ8:27)。マタイによれば、主イエスがエリコを出ていくときに2人の盲人はいやされた(20:29-30)。ところがルカによれば、主イエスがエリコに近づいたとき1人の盲人がいやされた(18:35-43)。同じ出来事が、マルコによれば、いやしが起こったのは主イエスがエリコを出たときだが(マタイに一致)、いやされた盲人は1人(ルカに一致)だった(10:46-52)。このような福音書間の相違は、ペテロが主イエスを否んだときにわとりが鳴いた回数や、イエスの復活の朝、イエスの墓に現れた天使の数などにも見られる。

⑤マルコの福音書 1 章 2 節はマラキ 3 章 1 節の引用であるが、預言者イザヤの書物にあるかのような書き方をしている。マタイの福音書 27 章 9-10 節は、ゼカリヤ書 11 章 12-13 節から引用しているにもかかわらず、預言者

エレミヤの言葉に帰している。

⑥共観福音書とヨハネの福音書間には、多くの違いが見られる。共感福音書では、エルサレムの神殿の潔めはキリストの公生涯の最後になされているのに、ヨハネは公生涯の最初に起こったこととして描いている。共観福音書によれば、最後の晩餐は「種なしパンの祝いの第一日」で(マタイ26:17、マルコ14:12、ルカ22:7)、金曜日の夕食になる。ところが、ヨハネの福音書は、「過ぎ越しの備え日」としており(13:1、18:28、19:14 など参照)、木曜日の夕食になる。

⑦使徒の働きの中で矛盾と見なされる例がいくつかある。主イエスを裏切ったユダの最後に関して、使徒の働きは「まっさかさまに落ち、からだは真 2 つに裂け、はらわたが全部飛び出してしまった」(1:18)と報じているが、マタイは「首をつった」(27:5)と記している。ステパノは、アブラハムがカランを出てカナンの地に入ったのは父テラの死後だったと語った(使徒 7:4)。しかし、創世記より計算すると、それはアブラハムが 135 才以降の時になってしまう(創世 11:26 と 32)。それでは創世記 12 章 4 節で「75 才」と言われているのと合わない。使徒 7 章 16 節でステパノはヤコブがシケムの墓に葬られたように述べているが、ヤコブはマクペラに葬られたので(創世 50:13)、ヨセフの間違いと思われる(ヨシ 24:32)。また、その墓はアブラハムが購入したようにステパノは述べているが、実際にはヤコブが購入したものだった(創世 33:19)。

⑧新約聖書の手紙の中にも、矛盾を指摘されている個所がいくつかある。パウロは、アブラハムの契約からモーセの律法までの期間は 430 年と述べている(ガラテヤ 3:16)が、この年数はイスラエルのエジプト滞在期間である(出 12:40)。実際には族長時代を加えねばならないので 600 年位になる。ユダの手紙では、外典のエノク書からの引用を、「アダムから7代目のエノク」(14)のことばとして引用している。ヘブル人への手紙は、詩篇 40 篇 5-8 節のギリシャ語訳を引用している。それは「耳を開いてくださいました」を拡大解釈して、「体を造ってくださいました」と、ヘブル語本文とはかなり異なった訳をしている。手紙の著者は、この訳文をさらに大胆にキリストの受肉に適用して読んでいる。

むろん、まだまだたくさんの問題を指摘できる。しかし、無誤性論争の問題を理解するためには、以上で十分であろう。これらの問題は、「聖書は誤りがない」と告白するなら、必ず回答を求められる。では、無誤性論争に関わっている学者は、どのような答えを用意しているのか。次に、この問題を取り上げよう。

#### 3. 無誤性論争に対して5つの立場がある

では、聖書の霊感を信ずる福音主義者は、この「聖書の現象」に対してどのような立場をとったのか。大きく分けると、五つの立場がある。ちょっと難しい議論になるが、ついて来ていただきたい。

第一は、「聖書の現象」を無視して、無誤性を主張する立場である。その典型的な例として、ベンジャミン・ウォーフィールド(1887年から1921年にかけプリンストン大学の校長だった)をあげることができよう。彼は、「我々は、申し立てられた聖書の現象を聖書の無誤性の教理に調和させるよう義務づけられてはいない。もし無理強いの釈義や人為的な釈義でなければ調和させられないとすれば、不調和のまま残される方が良い」と述べている。

ウォーフィールドは、聖書の無誤性の教理を聖書自体の証言から導き出す。そして、この教理は「聖書の現象」 に照らされ、理論的には、変更されうる可能性を認める。しかし、その場合、それらの聖書の箇所はただ調和が困難という程度ではなく、明白に霊感の教理と相容れない内容でなければならない、しかも、無誤性を証詞する証拠全体よりも質、量共にまさるものでなければならない、と主張する。そして、「大部分は取るに足らないもの」、「単に外見上のもの」、「真に重要なものは驚くほど少ない」と断定した。彼は、「聖書の現象」に対しては具体的な解答を与えようとしなかった。

福音主義の聖書観形成において、ウォーフィールドが果たした役割は極めて大きかった。実際、無誤性論争は、ウォーフィールドの立場をどう解釈し、あるいはどう乗り越えるか、という形で展開された。ウォーフィールドは、聖書の証言に基づいて演繹的に聖書の権威を確立し、それを無誤性と結びつけた。彼は、聖書の権威と無誤性を切り離すことを拒否した。

だがウォーフィールドは、二つの点で後代に問題を残した。その一つは、たとえ潜在的であれ、無誤性の教理

が否定される可能性を認めたことである。これは、彼の主知主義的神学方法論を示すものである。はたしてこのような考えは、教会の伝統的立場といってよいものだろうか。もう一つは、ウォーフィールドは、「聖書の現象」や聖書の人間的要素から生じる問題には、具体的に答えようとしなかったことである。それはそれで、一つの立場ではあり得る。しかし、それを問題にする人々を満足させることはできない。

第二は、すべての「聖書の現象」は調和が可能である、という立場である。この立場に立つ人は、もし聖書の中にたとえ一つでも本当に誤りがあるなら、聖書を神によって霊感された権威ある書と見なすわけにはいかない、と公言する。フラシス・シェーファー、ハロルド・リンゼル、グリーソン・アーチャーなどが、その代表的な学者である。彼らは、指摘されている「聖書の現象」の一つ一つに、真摯な姿勢で答えようと努力した。

彼らが提供した解決法の中には、健全なものもある。しかし、極端に走り、無理な説明も目立った。例えばリンゼルは、ペテロが主イエスを否んだ回数を、福音書を調和しようとするあまり、3回ずつ2度、合計6回だった、と結論付けてしまった。

アーチャーは、サムエル記・列王記と歴代誌との間の数の違いについて、原典が転写され、写本がつくられる過程で生じたもので、原典では一致していた、と主張する。また、ステパノの説教の中に見られる難題に対しては、次のように答える。アブラハムが父の死後カランを出た(使徒 7:4)とは、父テラの年令が 135 才以上の時にアブラハムが生まれた、と考えればよい。創世記 11 章 26 節においてアブラハムが最初に出てくるのは、長男だからではない。他の兄弟にまさって重要だったので、筆頭に置かれた。シケムの墓がアブラハムによって購入された(使徒 7:16)のは、創世記には記されてはいないが、もともと実際に起こったことであり、聖霊はステパノにそのように示された。ということは、創世記 33 章 19 節は、実際にはアブラハムが購入したものをヤコブが再購入した、という意味になる。ユダ 14 節に対しても、現在の創世記には記されていないが、文字どおり神がエノクに啓示された言葉だった、と説明する。

この立場の最大の貢献は、矛盾・対立と見なされている聖書箇所を簡単に誤りと見なさないため、多くの努力を 傾注したことである。数字の違いをいつでも写本の伝達過程に帰することは賢明ではない。だが、実際にその可 能性はあり得る。しかし、この立場の説明には、無理なものも多い。無誤性を前提に合理的に説明しすぎて、首を かしげたくなる解釈も散見される。聖書に敬意を払い、弁護したい一心からであることは認めても、結果として多く の人々を聖書の権威から遠ざけてしまう場合も少なくない。

第三は、「聖書の現象」を認め、無誤性の内容を再吟味しようという立場である。ここでは 3 人の学者の見解を紹介しておこう。まず、エヴァレット・ハリソンである。彼によれば、聖書自体は無誤性の教理を明白に述べていない。それは、聖書を敬う御言葉の学徒たちにより、主イエスの旧約聖書に対する態度から演繹的論理によって導出した教理に他ならない。もし無誤性の教理が演繹的に引き出されたものであれば、「聖書の現象」の一つつは帰納的方法によってチェックされねばならない。それらを正しく解釈することによって、無誤性が実際には何を意味しているのかを明らかにする必要がある。無誤性の教理は聖書解釈の問題と不可分だと主張したのである。

ハリソンは、「聖書の現象」に対する第二の立場の説明は極端に陥っており、無誤性を弁護するにはふさわしくない、と考えている。そして、(1)聖書が書かれた時代の文化的状況を考慮すること、(2)多様な描写は真理の統一性をさまたげるものではないこと、(3)そのテキストが言おうとする意図をくんで判断することの3つに配慮して「聖書の現象」を正しく解釈するよう提唱する。それでもなお、解決不能な場合は、さらに充分な証拠(資料)が整うまで忍耐をもって待つべきだと、主張する。

ダニエル・フラーもまた、無誤性の教理は「聖書の現象」によってチェックされるべきだ、と考える。彼は、神は、 啓示を意図したわけではない出来事においては、最初の読者の思考に順応された、と述べている。例えば、ステ パノの説教に見られる難題については、次のような説明をする。

アブラハムが父テラの死後カランを出立した(使徒 7:4)とのステパノの言明は、当時の人々の一般的な考えだった(フィロン『アブラハムの移住』参照)。確かにその時ステパノは聖霊に満たされていた(7:55)が、だからといって、聖霊は、ステパノの聴衆が間違っていたことを、ステパノを通して訂正しようとしたわけではなかった。もし、聖霊がそのような訂正をしたなら、ステパノの説教を聞いていたサンヘドリンの議員たちとのコミュニケーションは成り立たず、ステパノが真に語りたかったことは伝わらなかっただろう。

エドワード・カーネルもまた、「聖書の現象」のあるものが解決不能の場合、正統派の主張する無誤性の教理を破棄するのではなく、そこに含まれている概念を訂正すべきだと主張した。歴代誌の数がサムエル、列王記の数と合わないことをめぐって、カーネルは、次のような説明をする。

歴代誌の著者は、手もとにあった多くの歴史的資料を利用してイスラエル史を編纂した。その時使用した資料の中には、もともとの資料より500年以上も経たものもあった。歴史的資料の伝達過程においては、普通、さまざまの脱落、変更、付加などが生じる。聖霊の霊感は、それら伝達された資料の中に混入した誤りの一つ一つを指摘し、直させることまではしなかった。無誤性の教理は、「不完全な資料を正確に写す」との理解でよいのではないかと考えたのである。カーネルは、このような考えに確信があったわけではなく、一つの可能性として提案した。

この第三の立場は、「聖書の現象」を無理なく説明する道を模索した点を評価したい。私自身は、ハリソンやフラーの説明には共感を覚える。しかし、カーネルの提案にはついていけない。もし、誤った資料をそのまま使用しても、無誤性には反しないというのであれば、聖書の大半は何らかの資料が用いられているのだから、結局のところ、聖書の大部分には誤りがあり得ることになる。これでは、無誤性は実体のないものになってしまう。

第四の立場は、「聖書の現象」が指摘される以上、無誤性の教理は放棄すべきだという立場である。代表的な学者として、デューイー・ビーグルをあげることができよう。彼は、無誤性の教理を守るには、「聖書の現象」を考慮しなければならないと考え、無誤性に反すると思われるテキストを詳細に検討する。その結果、誤りとか矛盾と指摘されている多くの箇所は確かに皮相的なものである。だが、解決困難な箇所も少なくない、との結論に達した。ビーグルは、聖書の霊感を否定したわけではない。ただ、「聖書の現象」の事実を認め、無誤性の教理を聖書的見解とすることは放棄した。

私自身は、ビーグルの立場は行き過ぎだと思っている。確かに、解決困難な「聖書の現象」は存在する。しかし、調和が困難であることと、証明された誤りとは区別した方がよい。ビーグルが指摘する「聖書の現象」の多くは、人間が持つ制限性という原理を適用するなら、誤りと見なさないですむ。現在我々が手にし得る科学とか歴史情報とは、一致しないことはたくさんある。といっても、それらを誤りだと見なす必要はない。神が言おうとすること以外の点を取り上げ、間違いであるとかないというのは、行き過ぎである。両者は同じレベルで論じられるものではない。無誤性の教理から「聖書の現象」を無視すべきではない。と同時に、「聖書の現象」から無誤性を否定する誤りを犯してはならない。

五番目の最後は、無誤性の主張の背後に横たわる神学的前提と方法論を拒否し、無誤性を実質的に無視する立場である。その代表者として、ヘリット・コーネリス・ベルクーワーをあげることができよう。ベルクーワーの神学は、(1) 聖書の絶対的権威を主張する時期から、(2) 聖書の贖罪的内容を強調する段階、(3) 聖書の実存的目的(スコープ)に焦点をあてる段階へと発展したと言われる(ベルクーワー自身は、(1)から(2)への発展を否定しないが、(2)から(3)に移ったことは認めていない)。ここでは、(2)または(3)の段階におけるベルクーワーの見解を紹介する。

ベルクーワーによれば、いつの時代であっても教会の信仰告白は、聖書が神的要素と人間的要素の両面をもつことを告白してきた。しかし、実際に人間的側面に目をとめるようになったのは、18世紀末に起こった歴史的批評的研究の結果である。ところが、歴史的批評的聖書研究は、神的要素を否定し、人間的要素のみをえぐり出すようになった。根本主義者たちは、そのような批評学を拒否し、再び、聖書の人間的要素を軽視する道を選んでしまった。その結果、神的側面のみを強調し、聖書の権威を弁護するため、聖書のドケティズム的(化現論的)理解に陥ってしまった。

聖書の人間的要素は、決して偶発的、付随的なものではない。我々の全関心を集中させるべき重要なものである。何故なら、神の啓示は時間と歴史を超えた出来事ではなく、まさに、その真只中で与えられたからである。神は聖書記者を機械としてではなく、生ける器として用いた。つまり、一定の場所、時間、状況の中に生きる人をとおし、当時の思考方法、概念、習慣などを用いて啓示された。従って、神のことばを聴くためには、書かれた時代の文化的脈絡や言語の意図を考慮せねばならない。

無誤性という用語は、聖書記者がその時代に生きた器として用いられた事実を軽視させてしまう。あるいは聖書の証言的内容より、書かれた形式の部分に目を向けさせてしまう。科学及び歴史の領域においても誤りがないと弁護する人々は、真剣な動機からしていることを認めるが、最終的にはそれは聖書に対する敬意を育てるより、傷つけてしまうことになる。

ベルクーワーが、聖書の人間的要素を充分に認め、聖書の内容とスコープとの関連で聖書の権威を擁護し、その根拠を知的弁証ではなく、聖霊の内的証明に求めた点は、大いに評価できる。確かに、福音派の無誤性理解は聖書のメッセージとスコープから離れ、形式を重視することだけが 1 人歩きしてきた観がある。人間的要素を無視し、客観的真理性を強調しすぎるきらいがある。両方が等しく大切にされねばならないというベルクーワーの主張には、私自身も納得している。

最後に、ベルクーワーの延長線上にある、ジャック・ロジャースの見解を紹介して終ろう。

ロジャースによれば、聖書の権威を確立するにあたり、福音主義者の間に二つの違った立場がある。一つは、理性を信仰の上に置き、(アリストテレス的帰納法に基づいて)特殊から一般原則を導出しようとするグループである。彼らは、もし聖書の一か所にでも、矛盾とか(科学的、歴史的事項に)誤りがあるとすれば、聖書の権威はなくなってしまう、と考える。今日、無誤性を強力に主張する学者は、このような論理をもつ人たちである。彼らは、スコラ神学、プロテスタント=スコラ主義、アレクサンダー、ホッヂ、ウォーフィールドなどの旧プリンストン学派の流れをくむ人たちで、聖書を聖書批評学から守ることを最大の使命としている。

もう一つは、信仰を理性の上に置き、(プラトン的演繹法に基づいて)ある公理から一般原則を導出しようとするグループである。彼らは、聖書は神の啓示であるゆえ、神の権威をもつとの信仰告白に立つ。一世紀の大部分の弁証家、オリゲネス、アウグスチヌス、ルター及びカルヴァンなどの宗教改革者、ウェストミンスター信仰告白の提唱者、英国のジェームス・オア、オランダのヘルマン・バフィンク、アブラハム・カイパー、ベルクーワーなどは皆、この立場だった。「聖書の現象」は、神の救いに関する啓示が人間の限定された言語と思考という不完全な形態においてもたらされた結果、生じたものである。従って、聖書の権威は、あらゆる領域において主張されるべきものではない。しかもそれは、人間理性の弁証によってではなく、聖霊の内的証明によって確立される、と考えた。

このように歴代のキリスト教学者を二つに分けて論ずることは、信仰(神学を含む)の体質の傾向性を大雑把に表している、とは言えるかもしれない。しかし、一つの問題意識を視点にして、それ程単純に彼らの信仰を二分化できるようには思えない。実際には、18世紀までの教会史は、聖書の権威の性質と範囲がどのようなものだったかという点については、意識してこなかった。意識されなかったものを二分化することには、無理がある。

従って、ロジャースがしたように、無誤性の主張者もまた、自分たちの主張と合致するところを探し出し、18 世紀までの教会史を自分たちの味方にすることができる。この種の論争においては、自分と同じ意見や人物を重視するだけでは、説得力はない。違った考えをもつ人々の意見に真摯に耳を傾け、出された一つ一つの反論に誠実に論破することが肝要である。

## 5. 無誤性ではなく、より的確な言葉を求めて

教会は長い間、聖書の権威を主張するために「無謬性(infallibility)」という言葉を使ってきた。ところが、その言葉では不十分だと考える福音派の一部の人々は、無誤性(inerrancy)という言葉を使うべきだと言い始めた。1960年前後のことである。すると、「聖書の現象」という問題が指摘され、無誤性という言葉を使うことの是非が論じられるようになった。その結果、福音派のある人々は、聖書の霊感と権威を認め、「無謬性(infallibility)」を告白するが、無誤性(inerrancy)という用語の使用には、躊躇するようになった。この傾向は、今後ますます増大していくことになろう。その理由としては、以下のようなことがあげられる。

- ①この用語は、聖書の証言から直接導き出することはできない。
- ②この用語は、聖書全体の目的や意図から目をそらさせ、記述の正確性に目をとめさせてしまう。
- ③この用語は、素朴な合理的聖書解釈と結びつき、現代の聖書学を否定する態度と結びついている。
- ④この用語は、原典と結びつけて論じられ、翻訳聖書の有効性や価値を弱めてしまう。
- ⑤この用語は、歴史的記録や神学的・論理的教えには有効でも、感情に直接訴えることばには使いにくい。
- ⑥この用語は、福音主義者を分断する論争の精神と結びつき、異端尋問的なニュアンスと結びついている。
- ⑦この用語は、多くの但し書きをつけねばならないので、論議を不正直なものにしてしまう。

無誤性という言葉には、上記のような問題がある。それゆえ、使うことをためらう人々が現われたとしても、当然である。しかし一方では、この言葉を使わないと、ドミノ理論的に、聖書の権威が崩されていくのでないかと危機感をもつ人々もいる。そのような人たちは、いろいろ問題はあるが、「無誤性」という言葉を使い続けることが大切だと主張する。

シカゴ声明は、無謬性は「誤って導いたり、導かれたりすることがない性質」であり、無誤性は「あらゆる虚偽や

誤ちを免れている性質」として、「無謬性と無誤性は区別してもよいが分離することはできない」と定義し、無誤性という用語を使い続けることを主張している。

しかし、違った意見もある。語源的には、不可謬性のラテン語 infallibitas は「欺かない」あるいは「欺かれない」の意味であり、他方、無誤性の inerrantia は、「道徳、霊的なことがらなどすべての種類の誤りから免れている」の意味だと考える人たちもいる。さらに、「無誤性」を歴史や科学などを含めた全領域において誤りがないという意味に、「無謬性」を信仰と生活、あるいは、啓示的領域においてのみ誤りがない、と区別する人たちもいる。

無誤性(inerrancy)と無謬性(infallibility)を区別し、無謬性は OK だが、無誤性は NO という福音派の学者は、かなり増えている。また、無謬性(infallibility)は誤解されやすいので、「不可謬性」という訳語をあてた方がよい、と主張する学者も増えている。「不可謬性」と訳せば、神は誤ることができないというニュアンスが強くなり、より信仰告白的な要素が強くなる。無誤性という用語には、どうしても書かれた形式に目を留めさせてしまう傾向があり、誤りがないことを証明しなければならなくなる。不可謬性は、聖書のメッセージに耳を傾けさせる利点をもっている。

さらにまた、ある学者たちは、聖書の権威を強調するため、より積極的な表現として「信頼できる(trustworthy)」、「確実である(reliability)」、「真理である(truthfulness)」、「欺かない(indeceivability)」という言葉を提唱している。アメリカのキリスト改革派教会の研究委員会レポートは、信頼できること(trustworthiness)は無謬性(infallibility)の同義語だと主張している。

「信頼できる」、「確実である」、「真理である」という用語は、「無誤性」より積極的な内容を伝えている。聖書の権威を主張するには、はるかに印象が好い。聖書もまた、そのような表現を数多く用いている(詩 119:43、86、138、142、151、160、170、ヨハネ 17:17、 I テモ 1:15、 II テモ 2:11、15、テト 1:9 等)。聖書の霊感の性格を規定する用語としては、否定的なイメージを発信してしまう「無誤性」より、肯定的なメッセージを発信する言葉の方がよりよいことは論を待たない。

# Ⅳ. 聖書の正しい読み方

この講演は「聖書の正しい理解を求めて」というテーマで話している。サブタイトルを、「聖書が神の言葉であるとはどういう意味か」とさせていただいた。一章では、キリスト者の信仰の歩みの中で聖書がどのような位置を占めるのがよいのか、という問題を考えた。二章では、聖書は聖霊の霊感によって著され、権威ある神のみ言葉であることを学んだ。そして三章では、神の権威をもつ聖書には、誤りがないのかという問題に迫った。さて、いよいよ最終章である。この四章では、神の言葉である聖書をどのように読んだらよいのか、という問題を扱いたい。

私には、大きな痛みがある。聖書が神のみ言葉として、敬意が払われていないことである。聖書を自分勝手に解釈し、自分に都合よく利用しているクリスチャンが、なんと多いことか。聖書を研究しながら、単に知的な遊戯をしている人々が少なくない。否、もっと悲しいことがある、フーポン信者の存在である。日曜の朝、教会に行く前に聖書を探す。大騒ぎの末やっと見つけ、フーと息を吹きかけ、ポンと叩いてほこりを落とす。そしてあわてて礼拝に駆け込む。そんな話をある所でしたら、私はフーポン信者ではありません、アイフォンで読んでいますから、と言われた。礼拝には聖書を持っていきません、スクリーンに出ますから、と言った人もいる。私の冗談も、完全に時代遅れになっていることを知った。

冗談はともかく、聖書に親しんでいただきたい。神は、聖霊の霊感によって聖書を書かせた。そして、その聖霊は今、聖書をとおしてキリスト者に語っている。聖書以外のものをとおして神が語られることはあるのか、それは私には分からない。だが、聖書をとおし、神は今も語り続けておられる。そのことは確かである。そのすばらしい経験を味わっていただきたい。どれだけ聖書論を論じても、聖書によって生かされ、聖書によって歩んでいるのでなければ、その学びは本当に空しい。

#### 1. 聖書は正しく解釈されねばならない

解釈の問題は、どのような文書の場合でも厄介である。聖書も例外ではない。聖書は神の霊によって記された。 従って、絶対的権威を帯びている。しかし、その記述においては、相対的な人間が用いられた。従って、読む人 の解釈作業が求められる。聖書は、神の御霊による助け、信仰の体験、そして贖われた理性に基づいて解釈され るとき、神の意図された意味が正しく把握される。しかも、どのような解釈であれ、それは絶対的なものではない。 解釈する人が相対的なのだから。聖書の絶対性と解釈の相対性、この両者を認めるところから始めるのがよい。

聖書の解釈とは、第一義的には聖書記者の意図を正しく汲み取ることにある。しかし、聖書の場合は、最終的には、聖書記者の言いたいことを知るために聖書を読んでいるわけではない。記者に霊感を与えて聖書を書かせた、その聖書の神が言わんとしていることを聴くために聖書を読むのだ。

聖書は、正しく解釈されなければならない。あたりまえのことである。問題は、どうすれば正しい解釈ができるのか、ということにある。以下、六つの点を挙げておく。

まず、旧約であれ新約であれ、できる限り聖書記者のことをよく知ることである。記者のことが何も分からなくても、書物の言いたいことは分かる。それが普通である。だが、記者のことが分かると、記者が述べていることにより親しみを覚え、分かりやすくなる。神は、記者を選び、記者のもつ性質、特質、能力、経験、立場、信仰、職業など、その人らしさのすべてを用いて聖書を書かせた。もし著者が資料を使っている場合には、その資料に関する情報も集めるとよい。

二番目に、聖書の記者たちが書物を書いたときの読者のことを知ることである。記者はそれぞれ、ある人々を念頭に置いて聖書をまとめたはずである。彼ら読者が理解できる言語で、彼らが継承してきた文化的遺産の中で、彼らにとってピッタリくる表現技法を用いて記したはずである。それらは、時代によって、場所によって、置かれた状況によって、あるいは扱われているテーマによって異なるはずである。最初の読者になったつもりで、彼らの思考様式の中に自らを置くと、今まで気づかなかったことが見えてくる。

今日のキリスト者は、現代人がもつ歴史認識や科学的知識、宗教的・文化的な意識を、聖書解釈に持ち込み 過ぎる。あるいは、教会史上の人物の解釈に言及し過ぎるきらいがある。あるいは、現代的な例えや話での解説 が多すぎる。むろん、説教や講演をする場合には、やむを得ない。だが、聖書が本来言おうとすることを把握する には、そういうものは一切不要である。聖書の世界に飛び込むことである。

三番目に、聖書をより正確に、より豊かに解釈するには、聖書の言語を知らなければならない。旧約聖書はイスラエルの民に対して書かれた。使われた言語は、ヘブル語(一部アラム語)である。ところがほとんどのキリスト者は、ヘブル語が読めるわけではないから、日本語訳を読む。できれば、いくつかの翻訳された聖書を比較しながら読むと、言語のもつニュアンスに近づくことができる。辞書や辞典類、註解書なども参考にするとよい。

例えば、ヘブル語の「ヘセド」という単語は、「民の不誠実さを超え、永遠に貫かれている神の契約の愛」を指す。 ところが日本人は、聖書の神との宗教体験を味わってこなかったので、この種の愛を知らない。従って、それに対 応する日本語はない。参考図書で補う以外にない。

四番目に、著者や読者が生きていた文化を知らねばならない。言葉を理解することは簡単ではない。なぜなら、その背後にある文化を理解せねばならないからである。だが、文化を理解することは、さらに難しい。聖書の文化は、イスラエルの文化である。それは、古代中近東(シュメール、アッカド、ウガリット、アッシリヤ、バビロニヤ)やエジプトなど、広い文化圏で育まれた文化である。それは、現代の日本文化とは似ても似つかないものである。

例えば、サラは「非常に美しい」と言われている(創世記 12:14)。この箇所を読む度に、神学校のクラスを思い出す。学生たちは、「美しい」という言葉は 65 歳の女性にでも使われるだろうかと、大真面目に議論していた。65 歳でも美しい人はたくさんいるとか、神を信じる人はいつまでも若々しい、などという意見が飛び交っていた。ヘブル語の「トーブ(美しい)」は、必ずしも容姿のことを言っているわけではない。富裕で高貴な人を指すということで、一件落着ということになった。ただその時、言葉はその時代によって、ずいぶん意味が違うことを学んだ。

我々は、感情は心にあると感じている。ところが古代イスラエルでは、感情は内臓に宿っていると考えられていた。だから、直訳すると違和感の生じるケースも多々ある。結婚という概念も、古代中近東の世界と、現代の日本社会とは、大きな違いがある。同じ日本であっても、昔と今ではずいぶん違う。もし現代の日本人の感覚で聖書を読むと、聖書の世界を知るというより、聖書に自分の考えを読み込みながら読む、ということになる。

五番目に、文学類型(ジャンル)という問題を踏まえて、聖書解釈に取り組まねばならない。聖書が文書という形を取っている限り、何らかの文学的なジャンルの中で記されている。旧約聖書であれば、歴史、詩歌、格言、法律、賛美、説教、恋愛歌、預言、祭儀文書、典礼文書、系図、契約文と、いろいろである。歴史と一口に言っても、列王記と歴代誌の書き方はずいぶん違う。モーセが、創世記と出エジプト記の両方を書いたとしても、ずいぶん違っ

た性質の文書になる。創世記は伝えられた資料を基にしてまとめたものであるが、出エジプト記は、実体験をもとに、日記やメモなどの資料に基づいて書いたものである。新約聖書であれば、福音書があり、使徒の働きのような歴史書がある。さまざまな手紙があり、黙示文学的な書物もある。

すべての文書は、文学類型を考慮して解釈せねばならない。言葉の意味やニュアンスは、文学類型によって違う。同じ言葉が使われたとしても、散文体で書かれた叙述文と、詩文体で書かれた詩や格言とでは異なる。律法の文章と詩の文章を同一視することはできない。詩や格言、脚本などの中に歴史の正確な表現を求めるような愚かなことはしない。預言書と歴史書を同一視することもできない。黙示文学を字義どおりに解釈することは、間違った歴史観を形成することになる。

六番目に、聖書全体の啓示の流れを踏まえて読まねばならない。神の啓示は、斬進的である。つまり、御心は一度にすべてが示されたのではなく、徐々に徐々に開示された。新約の光で旧約聖書を読むことは、とても大切なことである。旧約聖書のメシヤの到来の預言は、新約聖書において成就している。神の解放のわざは、出エジプト、バビロン解放、キリストの救いへと発展している。律法は福音への養育係である。アブラハムの子孫はユダヤ人ではなく、教会である。旧約のイスラエルはキリストの神の国のひな型である。山上の説教でイエスは、旧約聖書の倫理を更新している。

高校生時代、スコーフィールドの注釈つき聖書を使って、Hi-BA のスタッフよりディスペンセーショナルな聖書解釈を学んだ。聖書はすべて文字どおりに解釈されなければならない。宇宙の創造は紀元前 4,004 年であり、千年王国前再臨説が正しい。人類に対する神の取り扱い方法は、歴史の流れの中で違っている。それは、堕落以前、堕落以降からノアまで、ノアからアブラハムまで、アブラハムからモーセまで、モーセからイエスまで、イエスからイエスの再臨の時まで、千年王国時代の七つの時代に分けられる。旧約聖書の預言はすべて文字どおりに成就する。いまだ実現していない預言は、千年王国時代にすべて成就する、こんな学びだった。

皆さんも、この種の聖書理解をどこかでお聞きになったのではないかと思う。最近は、これほど極端な字義どおりの解釈は少なくなった。だが、福音派の聖書解釈はこのグループの影響を深く受けている。何でもかんでも文字どおりというのは、さすがにおかしい。だが、聖書が書かれた時代の読者を意識し、その文化的な枠組みを受け入れ、聖書を文字どおりに解釈することは基本的に正しい。すべてを文字どおりに解釈して認知的不協和が起こったら、その聖書箇所を神学的に考察し直し、不協和を解消する方向で解釈するのが一番良い。

七番目に、聖霊の働きの下で、デボーショナルに聖書を読むことこそ重要だ、ということである。聖書の本当の読み方は、ここにある。しかし、この点に入る前に、聖書解釈において大切な二つのことにふれておきたい。一つは、聖書時代の文化圏を意識して読むことである。もう一つは聖書批評学をどう考えるかということである。被造物管理の神学に立って聖書を読むということは、この二つを踏まえてデボーショナルに読むことである。

#### 2. 聖書時代の文化圏を意識して読む

聖書は、神が選ばれた記者をとおし、特定の時代の、特定の場所の、特定の人々に対して(to)啓示された神の言葉である。しかしその啓示は、いつの時代であれ、どこに住む人であれ、すべての人に向かって(for)語りかけている神の言葉である。従って、直接の対象として書かれたわけではない読者は、神が意図されたことを読み取るために、聖書が書かれたときの文化的背景を知らねばならない。

古代の文化的背景を理解するには、その当時の文献を読まねばならない。文献が古代の文化の窓となるからである。19世紀以前は、聖書の歴史的背景を明らかにする文献は、ほとんど手にすることはできなかった。しかし、過去百年の学問的成果には驚くべきものがある。現在では、誰でもが、これらの文明の文献を自由に読むことができる。ありがたい時代である。

古代メソポタミアの文明は、紀元前 5000 年頃にはかなり栄えていた。以来、シュメール、アッカド、ウガリット、アッシリヤ、バビロンと、いろいろな都市国家を中心に、文明は栄えた。その古代中近東の文明は、古代エジプトの文明とは多くの点で異なっていた。神の民イスラエルの定住地となったカナン地方には、古代中近東の一角を占めていたが、これらの文明とは一味違った特色をもっていた。

新約聖書の時代になると、はるかにインターナショナルな世界に発展していた。イエス時代のパレスチナ社会と、パウロが活躍するギリシャ・ローマ世界とは、その文化的様相は相当異なっていた。一般的な言い方をすれば、新約時代の歴史資料は、旧約時代に比べ、はるかに豊富で、役立つものが多い。そこから、文化的背景を読み取ることができるようになったため、新約聖書の理解は、旧約聖書よりはるかに進んだものになっている。扱う期間が短いということもあり、最近では学者間で対立している事項は、ほとんどなくなってきていると言ってもよい。

聖書は、旧約聖書であれ新約聖書であれ、まず書かれた時代の文化圏に生きる人々に読まれる目的で書かれた。彼らの文化や宗教的な世界から抜け出て、聖書の神の世界に生きるようにと招いているのが聖書である。 聖書は、そのような目的で啓示された。とすれば、聖書記者は、当時の文化に生きる人々にとって有効なコミュニケーターだったはずである。神の啓示は、書かれた時代の言語や文化をとおしてもたらされた。と同時に、その文化や宗教から脱却させる目的で与えられた。この二重性を踏まえて聖書を読むなら、神の意図されたメッセージが、より豊かに響いてくるはずである。

では、どのような共通事項があり、どのような点からの脱却を求めているのか。そのことを知るには、一次資料そのものを読むのがよい。新約聖書に関していえば、ユダヤ教のタルムード、ヨセフス、フィロン、ギリシャ教父などの資料が役立つ。旧約聖書では、古代中近東(シュメール、アッカド、ウガリット、バビロニヤなど)および古代エジプトの文献に近づくことである。

今から 50 年ほど前は、日本語で読める資料はごくわずかだった。関連言語を学ばない限り、手も足も出なかった(英語であれば、かなり翻訳されていたが)。でも今はいい時代になった。およその意味をつかむという程度であれば、日本語でもかなり多くの参考文献が手に入る。私の手元には、以下のような書物がある。いずれも、ごく最近、インターネットで簡単に購入したものばかりである。先入観や偏見をもたず、古代中近東の人々が何を考え、どんな宗教的状況の中で生きていたのかを考えてみるとよい。

岸本通夫著他『古代オリエント』(河出書房新社、1989年)

吉川守編『NHK大英博物館 I メソポタミア・文明の誕生』(日本放送出版協会、1990年)

M・ローフ著、松谷敏雄監訳『古代メソポタミア』(朝倉書店、1994年)

月本昭男訳『ギルガメシュ叙事詩』(岩波書店、1996年)

矢島文夫訳『ギルガメシュ叙事詩』(筑摩書房、1998年)

P・アイゼレ著、片岡哲史訳『バビロニア』(アリアドネ企画、1998年)

大貫良夫著他『人類の起源と古代オリエント』(中央公論社、1998年)

J・ポテロ著、松島英子訳『メソポタミア─文学・理性・神々』(法政大学出版局、1998年)

前川哲也著他『歴史学の現在―古代オリエント』(山川出版社、2000年)

松島英子著『メソポタミアの神像』(角川叢書、2001年)

中田一郎訳『ハンムラビ法典』(リトン、2002年)

日本オリエント学会編『古代オリエント事典』(岩波書店、2004年)

小林登志子著『シュメル―人類最古の文明』(中公新書、2005年)

小山茂樹著『中東がわかる古代オリエントの物語』(NHK出版、2006年)

中田一郎著『メソポタミア文明入門』(岩波書店、2007年)

ジャン・ポッテロ著、松本健監修『バビロニア われらの文明の始まり』(創元社、2007年)

岡田明子、小林登志子著『シュメル神話の世界』(中公新書、2008年)

青木健著『古代オリエントの宗教』(講談社、2012年)

もし英語が読めるなら、インターネットでさまざまな情報を手にすることができる。例えば、古代シュメールの文献であれば、The Electronic Text Corpus of Sumerian Luterature (<a href="http://etcsl.orinst.ox.ac.uk/">http://etcsl.orinst.ox.ac.uk/</a>) のホームページを訪ねれば、最新の情報を手にすることができる。

これらの古代中近東の文献には、それぞれが伝えたいメッセージが記されている。それを読み取ることはさほど難しくはない。我々は、専門家になるわけではない。だから、どの書物でもよい。一冊か二冊を図書館から借り、気楽に読んでいただきたい。もしあなたがキリスト者であるなら、それが聖書とはいかにかけ離れたメッセージを発信しているかを知って、驚くに違いない。本当にそのとおりなのだ。にもかかわらず、何となく似ているところも発見するだろう。そういう読み比べをとおし、聖書が伝えようとするメッセージがより鮮明になってくる。それこそが、聖書

記者が同時代の衣をまとわせながら、同胞の民に伝えようとした神のみ心だったのである。

キリスト者はときどき、現代的なセンスで聖書を読むことにより、聖書時代の人々にとっては全く意識されなかった問題をつくり出してしまうことがある。創世記 1 章を現代科学や歴史の観点から読んでしまうのは、その典型的な実例といえよう。そのような間違いを避けるには、普段から、聖書時代の人々の生活や文化風土、宗教的環境やさまざまな伝承にふれておくのが一番である。ここで、古代中近東の文献をとおし、神の民イスラエルを取り囲んでいた文化圏を、ちょっとだけ紹介しておこう。

例えば、紀元前1200年ごろのバビロニヤの創造詩エヌマ・エリシュ(マルドゥク神のこと)である。この文書は、バビロニヤのアキツ神殿における新年祭で毎年読まれたものである。この創造物語では、まず神々が創造され、その神々の中に戦いが生じる。その結果、マルドゥク神が反抗する神々を破って宇宙を統括する。造られた神々は、年に一度の神殿における新年祭で、この世界のさまざまな領域の支配を分担する。

ここには、聖書の世界に関連するヒントがいくつかある。七日間による創造、統治領域の分担、世界は深く暗いやみで水のようなものから始まったこと、大空によって三つの世界に分けられていること(天の世界、地上、地下の世界)などである。このような共通事項は、聖書と古代文献の間に依存関係が認められるというほど、大きなものではない。同時代の人々であれば、誰でもが常識的にそう考えていただろうと思える程度の類似である。

古代メソポタミアの文献ではいずれも、まず神々の誕生が問題にされた。その神々は、戦いを経て序列が形成され、その結果、世界に見られるさまざまな機能を担当していく。古代中近東の最古の都市の一つエリドゥ市からの文書では、エンギ神が主神を演じている。宗教的に中心都市ニップル市の神殿からの文書では、エンリル神が重要な役割を果たしている。

また、水が最初に存在し、そこから神々が誕生するという話も、いろいろな文献が伝えている。それらの文献によれば、雨が降ってくると天の水を留めていたものの一部が開門され、どこかで水が湧き出てくると水門が開かれた、と考えられた。世界のさまざまな現象の背後には、それを操作している神々がいると信じられていたのである。彼らにとっては、世界の現象より、その現象を司っている神々の方が重要だった。その神々の誕生と世界支配の役割分担、それこそ古代中近東の創造物語の核心だった。

ウガリットの文献についても、同じようなことが言える。メソポタミア地方の西方、イスラエル北方のレヴァントから出土した、出エジプトの頃の粘土板がある。この神話は、宇宙論を直接論じたものではないが、当時の世界観をよく示している。そこでは、バアルは雨の神で、肥沃をもたらす神だった。バアル神は海の神ヤムとの戦いで勝利を治め、ヤムの統治を海に限定させた。バアル神はこの地の支配者になり、パンテオンの主神エルに王宮の建設を願い出て、かなえられた。バアル神には、三人の娘がいた。その三人の神々それぞれに、三つの世界を治めさせた。最初の娘ピッドレイ神には光の世界を、二番目の娘タレイ神には空の水の世界を、三番目の娘アルセイ神には地と野菜、それから生き物と人間の世界を治めさせた。これは、創世記1章の一日目の「光」、二日目の「雨」、三日目の「地」に対応している。興味深い。

では、エジプトの文献ではどうか。

最近20年ぐらいの間に、古代中近東の文献と共にエジプトの文献と創世記1章の世界創造の記述との類似性についての研究が進んでいる。ちょっとしたリバイバルブームの感さえある。エジプトの文書では、世界は深く、暗い底なしの淵から創造される。しかも、神アムンの息がそのやみの淵を覆っている。このような記述は、創世記1章2節の「神の霊」を思い出させる。太陽神を重視するエジプトでは、やみは重要な位置を占めていた。そのエジプトにおいても、光は太陽より先に造られている。創世記1章の記述と同じである。

いくつかの類似性を指摘し、エジプトの創世神話と創世記 1 章の創造記事との間に依存関係があったと推測する学者もいる。しかし、直接の依存関係を認めるほど、類似性は高くない。むしろ、創世記 1 章をエジプトの文化圏の文脈で読むと、聖書が伝えたいことが鮮明になってくる。エジプトでは、神々の誕生物語が中心であるが、聖書は、唯一の神が世界のすべてを創造した、というメッセージを強調している。

エジプトやメソポタミアの文献において共通しているのは、世界を造る神々が世界と共に創造されていくという話である。そこでは、「区別する」ことや「名をつける」ことが重要だった。創造とは、すべてのものに名前を付けることでもあった。ところが聖書は、神をこの世界の外に置いている。そしてその神が、すべてを創造したと教えている。

そのメッセージこそ、古代中近東やエジプトの人々が受け取らねばならないメッセージだった。

我々は、最初の聖書の読者の環境をよく理解し、彼らがどのように読んだかを踏まえる必要がある。メソポタミアからの並行的な資料を合わせて読むと、創世記1章を理解しやすいことがたくさんある。メソポタミアの文献には、想像力に富んだシンボル的な表現がふんだんに出てくるが、当時の人々は皆、実際に起きた出来事として読んだはずである。そういう文化的な背景に生きる人々が、創世記1章の読者でもあったことを忘れてはならない。

我々が日常生活で体験している世界は、古代中近東の人々のそれとさほど違わない。毎日の生活では、ビッグバンやアインシュタインの相対性理論は出てこない。ニュートンや、ガリレオの世界でさえない。地球は平らで、天動説的な感覚で生きていて、何の不便も感じない。人間は、いつの時代の人も、ごく普通のセンスで生活している。これを常識的実在論とでも呼ぼうか。常識的現象論でもよい。そんな言葉があるかどうか分からないが、なければ、つくって考えたらよい。

聖書は、我々現代人を意識して書かれたものではない。著者が念頭に置いていた読者とは、彼と同時代の人々だった。著者は、彼らが分かるように書いたのである。それは、常識的な実在論であり、常識的な現象論の世界だった。

私は、先の二回の創世記 1 章に関する講演で、次のように述べた。一日目は、光によって神の働きが見え、昼と夜の区別ができるようになった。これによって人は、時間の概念や神の活動を理解するようになった。二日目には大空が用意された。これで人間にとって大切な天候の準備ができた。三日目には、地上に食物の準備が整った。こうして、人間生存にふさわしい環境は着々と整えられていった。四日目以降は、天体、空の鳥と海の魚、そして動物や人間を登場させている。このようなフレームと、すべての流れを導かれたのは、イスラエルと安息日の契約を結ばれた唯一の神である。このようなメッセージこそ、創世記 1 章が伝えたかったものだった、と。

古代中近東の文化圏に生きていたイスラエルの民は、彼らの思考レベルで、この創世記 1 章のメッセージを受け取った。しかし神は、あらゆる時代に生きる神の民に、この神のメッセージを伝えようと願っている。それぞれの時代に生きる神の民は、それぞれ皆、自分の文化的な背景の中で生きている。ということは、どのような聖書箇所であっても、自分の文化的な衣を着ながら、書かれた時代の衣をまとった神のみ声を聞かざるを得ない、ということである。「ユダヤ人にはユダヤ人のように、ギリシャ人にはギリシャ人のように」( I コリント 9:19-23 参照) なって、聖書に向かうことが求められているのである。

#### 3. 聖書批評学を考慮して読む

もう一つの問題に進もう。皆さんは、聖書批評学という言葉をお聞きになったことがあるだろうか。たぶん、はじめて耳にする方も多いのではないかと思う。また、たとえ聞いたことがあっても、中身までは知らない、という方がほとんどだろう。福音派の聖書研究書、説教集、霊的な読み物を読んでいる限り、この種の問題にふれることは、まずない。そういう学問は、不信仰な人々のすることだと、長い間思われてきたからである。

この学問は、18 世紀も後半、聖書はイスラエル民族の神体験から生み出されたものだと考える人たちによって始められた。彼らは、神や奇跡、超自然的なものを一切排除し、理性で割り切れる合理的なもののみを真理と考えた。その結果、旧約聖書や新約聖書の福音書ががどのような資料を基にして今日のような信仰に形成されたのかというプロセスの解明から始まった。従って、20 世紀以前の聖書批評学は、「資料批評」の学問と見なされた。

20 世紀になると、批評学は、そのような資料を生み出した共同体の生活様式(学者の間では、これを「生活の座(Sitz im Leben)」と呼んでいる)に目をとめるようになった。その共同体が生み出す文書の様式が衆目され、「様式史批評」と呼ばれるようになった。例えば、イエスがガリラヤ湖の嵐を鎮めたという記録(マルコ 6:45-52)がある。批評学者は、この記録が実際に起こったかどうかを問題にしない。こういうキリストのストーリーを生み出した教会の信仰こそが重要だと考えた。この記録では、舟は教会を表し、風はこの世からの迫害を意味した。イエスは、迫害の真ん中にある教会に「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と語りかけた。この出来事を生み出した共同体の信仰こそ重要なのだ、と説明されるようになった。

20 世紀も後半になると、この「様式史批評」はさらに「編集史批評」へと発展した。例えば、マタイの福音書の編集者マタイは、どのような意図や見通しをもって福音書を編集したのかという点に、関心が集まったのである。当

時、マタイの神学とか、ルカの神学などという言葉が流行った。各書物の編集者の意図や神学を探ろうとする動き は、福音書に始まったが、またたく間に旧約各書にまで及んだ。

聖書批評学は、編集史をもって完成したかに見えた。だが、80年代に入ると、英文学の世界の学者たちから、 聖書を物語的に(narative)読む方法が提唱され始めた。その読み方は、90年代には聖書批評学を専門とする学 者たちの間で脚光を浴びるようになった。それまで彼らは、①聖書を救済史的に理解する、②聖書を神の御業を 証言しているものとして読む、③聖書全体を正典的に解釈する、という三つの重要な問題を論じていた。そのよう な問題意識が、文学書の分析方法論に融合され、統合されるようになったのである。つまり、「編集史批評」が「物 語批評」として集大成していくのである。つまり、聖書を歴史書と読むより、神がご自身の贖いの御業を物語的に 書かれた書物と、捉えるようになったのである。

福音派の学者たちは、資料批評から様式史批評に至るまでは、聖書批評学に懐疑的だった。しかし、編集史批評から物語批評に移行するにつれ、積極的に評価し、関わるようになっていく。むろん、批評学の成果は、玉石混交であり、どのような結論であっても、コンセンサスがあるとはいえない。評価もいろいろ分かれる。判断基準もあいまいだし、仮説の上に仮説を立てて論じていることも少なくない。循環論法に陥っているケースも目立つ。これらのことを踏まえた上で、現代の聖書批評学が到達している「聖書各書の緒論的な問題(資料批評)に関する結論」を紹介しておく必要があろう。福音派のキリスト者であっても、聖書を「神の物語」として読むことに対し、知らぬ、存ぜぬを通すわけにはいかなくなっているからである。

聖書批評学は、モーセ五書の資料分析に始まった。19 世紀初頭までは、モーセが創世記から申命記までのすべてを書いた、と信じられていた。しかし、ドイツのユリウス・ヴェルハウゼン(1844~1918 年)は、そのような考えに疑問を抱き、モーセ五書が現在の形態になるまでには、いろいろな資料が存在し、編集過程があったと考えた。その結果、現代の批評学では、五書については次のように考えるのが一般的になっている。

モーセ五書は、四つの資料から成り立っている。J資料は「ヤハウエ」の神名を使っている。それは、南ユダにおいて、王国分裂時代(前 922 年から 722 年の間)に記された。同じ頃、北イスラエルでは、「エロヒーム」という神名を使った E 資料がつくられた。E資料は、J資料と同じ出来事をカバーしている。だが、神がモーセにヤハウエという名前を知らせる前(出エジプト 3:15、6:3)は、誰もヤハウエを知らなかった、そういう前提で書いている。

前 722 年以降、この二つの資料をまとめてイスラエル史を書いた人が現われた。その人のことをJ資料とE資料の編集者Rという。このJ資料とE資料の歴史とは違うイスラエルの歴史を、エルサレムの祭司P(Priest)が書いた。これをP資料という。P資料の話は、J資料およびE資料と重なるところがあった。ただし、神の名前が出てくるところでは、E資料に同意していた。

最後の資料はD(Deuteronomy)である。この資料には、申命記的な歴史の書物(申命記、ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記)が含まれていた。このD資料には、J資料とかE資料と同時代、あるいはそれより古い資料も含まれていた。最終的には、ユダのヨシュア王の時代(前622年ごろまで)に、一つの書物にまとめられた。その後、もう少し長いものに改定され、前587年のエルサレム陥落ぐらいまでが含まれるものに拡大された。

その後、これらのすべての資料を編集する人が現われた。

歴史書に関しては、既に述べた D 資料に加え、ルツ記が 5 世紀ごろに加えられた。歴代誌は神殿礼拝の観点から書かれたイスラエル史で、6 世紀頃のものと考えられている。

ョブ記は、アブラハム時代に生きたョブという人物をモデルにした対話劇の脚本で、6 世紀後半につくられたと考えられている。 詩篇は、神殿礼拝における賛美を中心に、最終的には 5 世紀頃まとめられた。 箴言、 伝道者の書、雅歌などは知恵文学と言われ、捕囚から解放されてからの文書と考えられている。

イザヤ書は、語られている預言の歴史的な背景が違うとして、1-39 章までと(前 8 世紀)、40-55 章(前 540 年頃)、56-66 章(前 500 年前後)までの三つに分けられる。ダニエル書の2世紀頃の詳細な歴史描写は預言とは考えにくいとして、2 世紀ごろの著作とされている。

新約聖書について言えば、共観福音書は、マルコの福音書が最初で 60 年前後に書かれた。次にマタイの福音書は、そのマルコの福音書に M という資料を合わせて、編集された。ルカの福音書も同様に、マルコの福音書に L という資料を合わせて、編集された。年代は両方とも、エルサレム神殿が崩壊した 70 年直後だろう。ヨハネの

福音書は100年ごろの著作で、著者は使徒ヨハネではない。

エペソ人への手紙やコロサイ人への手紙については、パウロの著作性は疑われ、パウロより少し後の時代のものとされる。テモテやテトスへの手紙など牧会書簡は、背景となっている教会の姿から、一世紀終わりから二世紀前半のものとされる。ヘブル人への手紙はパウロのものではなく、80年頃に記された。ヤコブの手紙、ペテロの手紙、ヨハネの手紙などは、一世紀終わり頃から二世紀初めの手紙であろう。これらは皆、使徒の名前がつけられているが、それは使徒の権威で公刊されたという意味であって、直筆ではない、とされる。ヨハネの黙示録は、一世紀の終わりの著作であろうが、使徒ヨハネが著者ではない。

このような聖書批評学に対し、福音派に属するキリスト者はどのように考えたらよいのか。五つのことを述べて おきたいと思う。

第一に、批評学者の研究、問題解決の仮説を批判的に検討すべきである。これまで福音派は、前提が間違っていれば、方法論や結論も間違っていると断定してきた。この判断には、ある種の真理がある。学問方法論(特に聖書学のような分野では)は、その前提に大きく左右される。奇跡を信じない人にとっては、出エジプト記の出来事のほとんどは史実ではないことになる。預言を信じない批評学者にとっては、ダニエル書が紀元前2世紀以前に書かれた可能性は、初めからない。聖書の神を信じない限り、バビロン捕囚も、そこからの解放も、単なる歴史の出来事に過ぎない。神の民イスラエルの歴史観は、すべてが幻想に過ぎない。

しかし、そういう前提に基づくとしても、批評学のすべてが間違っている、真理ではない、と断罪すべきではない。 信仰的立場からは見落としてしまうことで、学問的にものを考えるときに気づくことはたくさんある。それらは、キリスト者が誠意をもって考えるべき課題である。

第二に、聖書批評学が提起している問題を正しく認識することである。批評学はもともと、聖書の啓示的側面を無視し、聖書は古代の他の文献と基本的に変わらない、そういう前提に立って始まった。従って、合理的精神と科学的研究方法ですべてを割り切った。その結果、キリスト信仰に、教会の教理に、キリスト者の神学に大きな破壊的作業を及ぼした。

そういう側面が確かにある。しかし、批評学は聖書の成り立ちをできる限り正確に理解したいという思いから出発している。聖書は、天から降って来たわけではなく、神によって記者が用いられ、記された。そういう人間の側面は確かに存在した。批評学が問題にしていることは、キリスト者にとっても取り組まねばならない事柄であって、聞くべきたくさんの事柄が含まれていた。キリスト者は、彼らの問題提起を真剣に受けとめず、悪魔のささやきと無視することもできる。もしそうするなら、我々は、知的にものを考える人々への宣教の道を閉ざすことになる。そしてさらに、若き福音派の有能な学徒たちをキリスト信仰から遠ざけてしまうであろう。

第三に、批評学者たちが提起している課題に対し、聖書信仰という神学的ドグマから判断すべき問題かどうかを、慎重に見極めねばらない。キリストの処女降誕を初代教会の創作とする批評学や、キリストの奇跡を合理的に「生活の座」によって説明してしまうのは、いただけない。キリストの復活の史実性を疑うのも論外である。神の特別介入や奇跡などは最初からあり得ないとする立場を容認することはできない。それらは、キリスト者の信仰告白の内容であり、宣教の実質であって、信仰者にとって拠って立っているところである。

しかし、五書の著者がモーセかどうかは、別の問題である。新約聖書の言及を著者問題への解答に用いる従来の福音派の姿勢には、大きな違和感を覚える。主イエスがモーセについて言及されたとき、今日論じられている著者問題への解答を含めていたとは、到底考えられない。それは信仰の問題ではなく、知的学問に対するセンスの問題である。むろん、聖書信仰から逸脱することではないし、主イエスの権威を弱めるわけでもない。

四番目に、キリスト者の中には、批評学的方法論と成果が大きく変わってきたことに不信や批判を口にする人がいる。確かに、批評学は資料批評ー様式史批評ー編集史批評―物語批評へと発展してきた。変わったと言えば、変わったと言える。しかし、批評学は学問である。信仰ではない。従って、不変でないのは当たり前である。あてにならないと即断すべきものではない。批評学はあくまでも学問である。変化しているとは進歩していることである。特に最近の聖書学は、考古学や古代中近東の文献との比較研究によって、穏健かつ建徳的になりつつある。加えて、編集史から物語批評に軸足を移している点では、聖書信仰者が貢献できる部分は、以前にもまして大きくなっている。

最後に、福音派は、聖書信仰に立つ聖書学を構築し、それを広く世に公表する責任がある。これまで我々は、

「聖書の批評学にどう対処すべきか」というサイドから問題を考察してきた。しかし、そのような問題意識では、不充分かつ消極的に過ぎる。これでは、福音派の聖書学は聖書批評学の十年か二十年後を追いかけるだけとなる。 そして福音派の信仰と矛盾しない部分だけをつまみ喰いし、利用するだけに終わってしまう。

聖書は人間をとおして与えられた神の啓示の書である。「人間をとおして」という点では、聖書信仰者は聖書批評学者と土俵―言うまでもなく全く同じではないが―を共にする。しかし、聖書はそれ以上の書物である。神が御自身の御旨を啓示された書である。我々は神の啓示という事実を視座に入れるとき、初めて聖書をトータルに把握し得る、と確信する。その意味で、聖書信仰者は、聖書を物語的に読むという「物語批評」に対しては、特別大きな貢献をすることができると、私自身は確信している(この点は、私の『マタイの福音書註解(上、中、下)』を読んでいただければお分かりいただけると思う)。神の恵みによって、我々キリスト者はこの「聖書信仰」の立場に導びかれた。とすれば、この立場に立つ聖書学を実際に構築し、この世に証詞することは、我々の責務である。

## おわりに(本講演のまとめ)

聖書は、この世界に二冊とない特別な本である。聖霊をとおし、神が全人類にお与えになった書物である。神は、テモテへの手紙第二3章15-17節において、聖書を書いた目的を明らかにしている。この聖句は、「聖書の霊感」の項でふれたが、ここでもう一度、そのテキストを読み直してみよう。

聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。(Ⅱテモテ 3:15-1 7)

福音派は、19世紀から 20世紀にかけ、この聖句の重要性に注目し、聖書の霊感論を展開した。「神のことば」のすばらしさは、詩篇 119 篇をはじめ、イザヤ書 40-55 章などいろいろな個所で説き明かされている。しかし、聖書に関して論じるのに、この聖書箇所に勝るものはない。このテキストに基づき、聖書の霊感と権威とを確立したことは、全キリスト教界に果たした最大の貢献だった。

ただし、福音派によるこのテキストの用い方には、二つの致命的な欠陥があった。一つは、この聖句が何も述べていないことを付け加えたことにある。もう一つは、この聖句が明確に教えていることを大切に扱わなかった点である。付け加えたのは「誤りがない」という言葉で、それによって不毛な無誤性論争を生み出してしまった(これについては、三章の「無誤性論争」の項でふれた)。ここに福音派の悲劇があった。

もう一つの福音派の間違いは、聖書が記された目的を無視して聖書の霊感と権威を論じたことにある。このテキストは、聖書には二つの目的があったことを明らかにしている。一つは「キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせる」ことであり、もう一つは「神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となる」ためである。前者はキリスト者になることに関わっており、後者はキリスト者の生き方に関わっている。福音派は、すばらしい聖句に注目しながら、この二つの目的をきちんと押さえた「健全な聖書論」を展開できなかった。

はっきり言わせていただこう。まず、第一の目的の「キリスト・イエスに対する信仰による救い」に関してである。全キリスト教界は、聖書がキリストの救いをもたらす目的で記されたことを理解してきた。この点はとてもよかった。しかし問題は、その救いの中身である。キリストの救いを「イエスを信じるなら、死んでも天国に行くことができる」という、矮小化した理解に留まってしまった。「キリストの救い」によって、永遠のいのちが既に今の世においてキリスト者の内に始まり、日々の歩みがこのいのちに導かれていることを強調してこなかったのである。それだけではない。この永遠のいのちに生かされていることと聖霊の内住とは同義であること、それが神の家族の一員のしるしであり、そこにエキュメニズムの根拠があり、神の国の実現のすべてがそこにかかっていることなどは、今のキリスト教界では完全に無視されてしまっている。このような「キリストの救い」理解は、どう考えても「欠陥福音」と言わねばならない。

聖書が著わされたもう一つの目的は、「神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となる」ためである。この第二の目的についても、全キリスト教界は矮小化して理解してきた。「神の人」と「すべての良い働き」が何を意味しているのかについて、真剣に考えることをしてこなかったのである。

「神の人」とは、神に属する人、神が用いたもう人、あるいは神に仕える人のことである。文脈から言えば、キリストの救いにあずかった人であり、キリスト者のことである。ところが、「神の人」を「神に対して働く人」と解釈し、教役者を念頭に置くことが多い。そのように限定する必要は全くない。

さらに、「良い働き」を「宣教のわざ」と考える人がほとんどである。最近は、ホーリスティックな福音理解が叫ばれるようになった。すると、この「良い働き」にキリスト者の社会的責任を含めて解釈する人も出てくることだろう。だが、それでも不十分である。それは、「良い働き」という言葉に、「すべての」という形容句がついている。従って、宣教とか社会的責任などに限定すべきではない。

聖書が書かれた二つ目の目的を、教役者が福音宣教や社会的な責任を果たすために「十分に整えられた者となる」と解釈したなら、誰でも、それはどこかがおかしい、と申し立てるだろう。そんなふうに聖書の目的を理解している人はいないはずである。ここでいう「すべての良い働き」は、神がキリスト者に委ねられた被造物の管理責任を指していると考えない限り、この句の十分な理解には到達しない。しかり、聖書は、キリスト者が被造物管理の責任にふさわしく、十分に整えられた者となるために書かれた、ということになる。

では、それは、キリスト者の実際生活の中で、どのように実現していくのか。このことに対しはっきりイメージできないと、この聖句は実質的に意味のないものとなる。そこで、現代のキリスト者にとっては、毎朝のデボーションにおいて、聖書をとおして神からの御声を聞くことに、この聖句を理解する鍵があることを強く訴えたい。

キリスト者にとって、聖書を読む機会はいろいろある。毎週の礼拝において、聖書からのすばらしいメッセージを聴いているだろう。教会で行われる聖書研究会や祈り会で、深く聖書を学んでいる方も多い。キリスト者の仲間と、ディスカッション形式で聖書を学ぶと、他の人の考えや信仰にふれ、聖書の豊かさを実感できる。自分一人で聖書研究の時をもてる人は幸いだ。時間をかけて、一つの書物を通読したり、教理やあるテーマについて聖書が説き明かしていることを聖書全体から学ぶことは、とてもすばらしい。

しかし、聖書の最もすばらしい読み方は、デボーションにおいて、聖霊の導きをいただきながら読むことにある。この講演を終わるに当たり、このことを確認していただきたいと思う。

私は高校 1 年の時にクリスチャンになった。その頃、高校生伝道(Hi-BA)のスタッフから、「no Bible no breakfast (聖書を読まずして朝食を取るなかれ、の意)」という言葉を聞いた。それ以来、毎朝目が覚めたら直ぐ聖書を開く習慣が身についた。大学時代には、KGK (キリスト者学生会)の主事から、「静思の時」の持ち方を教えていただいた。このデボーションが、私の信仰の歩みの原点になっている。

朝の目覚めの瞬間は、一日のスタートで、最もすばらしい時である。私は、このような習慣を身につけさせてくださった神に、今でも心から感謝している。だが、本当のことを言うと、デボーションの必要性を実感するようになったのは、被造物管理の神学に生きるようになってからである。この神学にパラダイムシフトしたとき、デボーションなしのキリスト者生活など、あり得ないことが分かった。「キリストとの共同相続人」(ローマ 8:17)として、あるいは「王であり、祭司」として歩むとは、どのようにしたら具体的に実現できるのか。被造物管理の神学に圧倒されて以来、このことは私にとって最重要課題となった。もしその具体的な姿を提示できなければ、被造物管理の神学は、絵に描いた餅にすぎない。起こっては消え、起こっては消えていった、過去の流行の神学の一つで終わるだろう。否、その流行にも乗ることができず、何の話題にもならない一過性の神学ということになるだろう。

皆さんに、もう一度考えていただきたいことがある。キリスト者とは、この世界においていかなる位置に置かれているのか、ということを。

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、**王である祭司**、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。(Iペテロ2:9)

イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、また、私たちを**王国とし**、ご自分の父である神のために**祭司として**くださった方である。(黙示録 1:5-6)

あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、 私たちの神のために、この人々を**王国とし、祭司と**されました。彼らは地上を治めるのです。(黙示録 5:9-10) キリスト者とは、この世界の王なる支配者として仕え、神にとりなす祭司として立てられた。この職務こそ、被造物 管理の内実である。その責務を果たすためには、毎朝のデボーションが不可欠である。否、デボーションそのものが、最大の職務なのだ。被造物管理の神学は、デボーションの中で実現していくと言っても、過言ではない。

では、そのデボーション(devotion)とは何か。語源は「devote(ささげる)」で、神に自らをささげることである。キリスト者の間では、この言葉を「朝の祈りの時間」を指すものとして、特別な意味で使っている。被造物管理の責任を果たすためには、このデボーションに鍵がある。

ここで、私の毎朝のデボーションの方法を紹介させていただこう。以下の方法は、聖霊の導きをいただきながら、 ごく自然にしていることに過ぎない。特別なものではない。これからも聖霊は、私にふさわしいものに変えてくださ ると信じている。

- ①朝目が覚めたらまず、神が新しい日を備えてくださったことを感謝する。神は今日も、私たちのために、新しい日を創造してくださったのだ。「この日は主が造られた」とか、「頌栄 539 番」などを自由に賛美する。
- ②次に、聖霊なる神が、今朝も聖書をとおして神の御心を教え、今日の歩みに必要な指示や励ましを与えてくださるように祈る。大抵は、主の祈りを加える。中でも、「御国を来たらせたまえ。御心が天になるごとく、地にもなさせたまえ」の部分には、力が入る。
- ③その日に読もうと決めた聖書箇所をゆっくり読む(大抵は一つのパラグラフ)。その箇所で、聖書記者が読者に何を伝えようと意図したのかを考えながら、一語一語ゆっくり読む。(聖書箇所は、10 年ほどかかって聖書全体を網羅するようにと考えている。しかし、レビ記などは拾い読みをした。聖書の各書物を順番に読んでいるわけではない。福音書から預言書に飛び、そこから箴言に、という具合である。今は黙示録を読んでいる。聖霊の導きを大切にし、あまり先まで決めないようにしている。
- ④聖霊の語りかけを求めながら祈りつつ、意味がよく分からないところは、二度、三度と繰り返して読んでいる。 内に住みたもう聖霊なる神ご自身が、私にとっての教師である。読んだことの中で、一つの句でもよい。テーマでもよい。聖霊が語ってくださるまま、自分の信仰の歩みを振り返りながら、黙想の時をもつ。反省もあれば、悔い改めもある。感謝もあれば、献身もある。神との自由な交わりの、楽しい時である。
- ⑤その後、一日のスケジュールのために祈る。お会いする予定の人のため、果たさなければならない仕事を 思いつくまま自由に祈る。気になっていることや、思い出したこともそのまま神の前にもち出す。祈りの中で、 自分の責任範囲を超えているとか、もう少しようすを見てからにしようなどと、自分の言動が変えられてしまうこ とが多くある。神との協働管理をしているという実感に満たされることが多い。
- ⑥自分が牧会に関わっているグループのメンバーのために祈る。誰のために祈るかは、聖霊の導きを仰ぎながら、自然に任せている。以前は、祈りのリストを使って順番に祈っていた。だが最近は、聖霊に導かれるままを大切にしている。結果として、沈黙の時間が多くなり、御霊の働きを感じることが多くなる。
- ⑦最後に、思い出した御言葉を告白する。マタイの福音書 28 章 18 節、ローマ人への手紙 8 章 28 節、コリント人への手紙第一 10 章 31 節、テサロニケ人への手紙第一 5 章 15-17 節、箴言 3 章 5-6 節などが多い。しかし、聖霊が思いもかけないみ言葉を思い出させてくださる。そういう経験には、神の導きを感じる。

大事なことは形ではない。形は必要だが、とらわれることはない。皆さんも、ご自分の状況に合わせ、いろいろ 試行錯誤しながら、ご自分に合ったやり方を見出していくとよい。

一年365日は、当たり前のこととして存在するわけではない。神は、今日という新しい日を、一日一日と備えてくださっているのだ。確かにそれは、自然界の法則によって生じている。だが、その背後に神の御意思があるので、その法則も存在する。この新しい日も、神は王として全世界を治めておられる。しかもその統治のみわざに、我々キリスト者を共同統治者として招いてくださった。キリスト者は、まさに、「王」であり、「祭司」なのだ。その神からの職務を、朝のデボーションのときに確認する。そして、新たに聖霊に満たされ、この世界に自分の務めを果たすために派遣される。

復活されたイエスは、次のような言葉を弟子たちに語られた。今日のキリスト者にも、同じ言葉を毎朝語りかけ、 私たちを世に派遣しているのではないだろうか。

「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」(ヨハネ 20:20-21)

アーメン